
Pravitas World——《異常世界》——

月草

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Pravitas World——《異常世界》——

【Nコード】

N8448Y

【作者名】

月草

【あらすじ】

現在この世界は不安定な状態にある。世界を変えうる存在『^{アルター}改^ア変者』と世界を修復しうる存在『^{リバイス}修正者』。この世界の裏側では二つの存在が改変と修正を繰り返していた。彼らは『^{ブラウイタス}異常』という名の能力を使い、それぞれの望む世界のために戦う。改変と修正、果たしてこの世界の行く末は――

silver編（序章、終章を含め全六章構成）は完結まで毎日更新中！（12/19完結予定） 現在クライマックス突入です！

前書き

本作品をこれから読んでくださる方々、読んでくださった方々、ありがとうございます。

はじめまして、月草です。『つきくさ』と訓読みで言います。『げっそう』と、イカミたいな音読みではありませんのであしからず。

本作は、初めて書いた作品です。なので、文章の不備、誤字、等々があるかもしれませんが、書き続けることで直していく所存であります。それについてのアドバイスや感想などは喜んで受けますので、ぜひお願いします。

この作品で取り扱う『異常』^{ブラギタス}というものについてですが、他作品でもあるような魔法、超能力、といったものと同じようなものです。ただ、『異常』とはどういうことなのか。この作品の世界では少し違ったものであると感じてくれるとうれしいです。

ルビのついていない『異常』という単語については普通に『いじよう』と読みます。

まだ構想段階ですが、おそらく長編になると思います。完結に至れるよう努力しますので、初心者ですがお付き合いをお願いします。

s i l v e r 編 あらすじ・登場人物（前書き）

本作のヒロイン、ルネの挿絵を付けてみました。他のキャラは検討中。

silver編 あらすじ・登場人物

あらすじ

夢も目標もない。頑張りたいことも特にない。空虚な日々を送ってきた少年——白上しろがみ 彩人あやとは今もその日々を送っていた。そしてこれからもそうやって生きていくつもりだった。そんな生き方をしていたから彼は何も得なかった。彼の人生は『白色』だった。

しかし、『銀色』の少女との出会いを経ることで何かが変わり始めた。そして彩人はこの世界の『異常』ブラウイタスの存在を知ることになる。その彼が望む世界とは——

> i 3 6 6 0 3 — 4 5 8 7 <

登場人物

白上しろがみ 彩人あやと

新代荘『〇〇四』号室の住人。帆布南高校はんぶ一年生。

ルネ

何者かに追われている少女。

異常……『結合』ネクサス・転換系コンバート・B等級ランク

常磐ときわ 幸祐しんすけ

新代荘『〇〇三』号室の住人。帆布南高校一年生。

新代にいしろ 若葉わかば

新代荘『〇〇二』号室の住人。帆布南高校一年生。

新代にいしろ 藍あい

新代荘『〇〇一』号室の住人。家主。

波瀬はぜ 乃樹のき

彩人のクラスメイト。愛称は『ノツキー』。

雨夜あまや

彩人のクラスメイト。愛称は『雨ちゃんあめ』。彩人のことを『彩とん』と呼ぶ。

炎の男

ルネを追っている謎の男。
ブラウィタス マインド ランク
異常……精神系・D等級

木賊こくそく

????

world

この世界は正常ではない。

ブラウイタス

『異常』がところどころに存在している。

でもほとんどの人々はそれに気付くことはできない。気付いているのは一部の者達だけ。

俺もその一人だった。

だった、というのはもちろん過去の話。

これが俺の運命だったのかもしれない。

ブラウイタス

一度でも『異常』と接触してしまえば、それは知ってしまったという事。知ってしまった以上『異常』に溢れた世界からは抜け出すことができない。

中にはただ夢でも見ていたんじゃないか、といった風に見過ごすことができる者も居るかもしれない。けどそう簡単に見逃すことはできない。

ブラウイタス

世界が正常な部分で生きている人々が『異常』と交わってしまうのは、大部分がもう知らぬ間に関わってしまったているのにまだそれに気付いていない人々。

俺はその中に含まれた。

元からそちら側の世界に関わる運命だった。最初から。

一度だけ。

たった一度で自分のいる世界から違う世界へと変貌してしまう。

俺の場合は高校一年生の冬、雪が舞い散る銀世界で起こった。

それは俺を、俺の世界を変えてくれた彼女との出会いでもあった。この出来事さえなければ俺はまだ普通に世界の裏事情なんかには首を突っ込むことにはならなかったのかもしれない。

でも、俺はこちらの道を選んでしまった。

後戻りはできない。

後悔は無い。

この時の判断は間違っていたはずだ。そう信じなければならぬ。

俺の世界はここから変わってゆく。

いや、それは俺が知らないだけで、もしかしたらもつと前から始まっていたのかもしれない。『前』の俺だったらもしかしたら……。

だが『今』の俺にとってはこれが全ての始まり。

この物語は異常な世界へと誘われる転機の物語であると同時に、これからの物語を彩っていく上での最初の色となる。

銀色。

それは一面の雪の世界のように美しい彼女を連想させる色。

対して白色とは無の色。空虚で。夢くて。何の鮮やかさもない。

一見銀色とは似通っているようにも見えるが、一点において違いがある。

それは輝きがあるかないか。

一度は全てのものを失い、リセットされた白色の少年はその輝きに満ちた少女に魅せられる。そして彼女はその美しい銀色で彼の白いキャンバスを彩る。

これは白色の少年と銀色の少女の物語。

序章 銀色の少女

雪の降る夜、一人の少女は雪を撒き散らし、美しく舞う。

彼女の指先がなぞったところからは、氷が顕現する。その氷は羽衣のように彼女に纏わせることで美しさをいつそう際立たせる。

少女が纏った氷の羽衣は、周囲からの攻撃を防ぎ、彼女の身を守る。

「繋げ」

その言葉はとても短く、そして単純であるにもかかわらず、根本を的確に捉えた意味のある言葉を成している。

空中をなぞっていた少女の指が、今度は雪が厚く層となって積もっている地面をこれまたなぞるように優しく触れさせる。雪の柔らかさのように。

美しい。

だが、バラは美しくも棘を持っているように、氷も同じものを持っている。

氷は連山を次々と作っていく。

少女が指先を雪の上に触れさせたところから、周囲の柔らかかった雪を巻き込んでそれは作られる。氷の連山は彼女の前方へ扇形に広がりながら伸びる。

「皆、避ける！」

連山が伸びるその先には、彼女の美しさに遠く及ばない有象無象が広がっていた。その中の一人が、仲間の者に警告を発する。

だが、その連山の襲撃に数人が巻き込まれ、そのものたちの体を跳ね飛ばす。またあるものは凍結に巻き込まれ足を取られた者もいる。

「攻撃の手を休めるな！ すぐに体勢を立て直せ！ 標的へ一斉に

ターゲット

総攻撃をしかける！」

まだ動ける者達が全員で少女を取り囲む。そして彼らの攻撃が始まる。

ある者は手から光を放つとそれが光線となつて一直線に少女を狙う。またある者は手から炎を生み出し、それは生み出した者の言う事を聞くかのように、少女へ襲い掛かっていく。

集中攻撃を放たれた少女はというと、その場で体勢を低くして指先を積もった雪に触れるように一回転する。

一回転は円形を描き、連山をその円どおりに連山を広げていき、彼女を中心として氷の花を咲かせる。氷の花びらは羽衣と同様に身を護る役割を果たす。

四方八方からの攻撃は全て見事に花びらによって阻まれ、少女には届かない。

「くそつ！ やはり『ブラヴィタス異常』では標的には届かない！ 捕獲するなどもつてのほかだ！」

「ならば、次は俺たちが行く！ 『アメント』で弱体化させて――

――」
有象無象が次の攻撃を開始するより先に、少女の反撃が始まっていた。

少女はまた同じように一回転して、先ほどのものに付加させるように氷の花を咲かせる。二つの花びらはやがて一つとなって規模を増して有象無象を蹴散らしていく。

残っていた敵も、地面と彼らの体とを一緒にして凍結させることで身動きを取れなくして、無力化させた。

そうしてようやくこの場が静まりに帰る。

「はあはあ……」

白い息が、煙が煙突から出るかのごとく、口元から出では空気中に馴染んで消えて行く。

少女は息を切らしている。

「くつ……」

突然に頭の中をズキンとした衝撃が走ったので、手が頭を押さえようとせざるを得ない。だが、痛みは一瞬で、抑えたときには引いてしまった後だ。

しかし、まだクラクラ感が消えない。

限界が近い、少女はそう予期する。

「早く……逃げないと……」

彼女は何者かに追われている。

これで三度目の襲撃だった。黒服に身を包んだ者達——男も女もいる。その者達が自分を捕まえようと必死になっている。理由はわからない。

三回の襲撃のどれもこうして、『異常』な力を使って退けてきた。普通では考えられないことを起こすことのできる力。まさしく『異常』なものだ。

狙われている。とにかく逃げなければならない。

だから彼女は雪の降る夜の中で逃げ惑う。

しかし、これの終わりがいつ来るかなど全くわからない。終わりなどあるのだろうか？

それでも、逃げる。逃げ続ける。

「……またなの？」

少女の前にまた黒服の者達が現れる。さっきの者達の仲間だと断定できる。彼らの目を見ればわかることだった。同じく獲物を狙う目だ。

今度の人数は少ない。見たところ七人。しかし、もしかしたらまだどこかに隠れているということも考えられる。

その中の一人は通信機を耳に当てた。

「リーダー。標的^{ターゲット}を確認。今すぐ応援の要請を」

すぐに襲いかかってこようとはしない。通信機で話し続けている。

「はい、そうです。追い込みました。廃棄済みの工場です。もう逃げ場はないと考えられます。わかりました。リーダーの到着まで時間を保ちましょう」

通信を切る。それは襲撃開始の準備ができたということだ。

少女は警戒を強める。いつかかつてきても対応できるように構えをとる。

「もう抵抗しても無駄だ。ターゲット 標的。お前の逃げ場はもうこれで途絶えた。なるべく大人しくしてもらえると助かるな」

通信をしていた者が少女に向かって話しかける。大人しく降参しろと言っているのだ。

けれども、そんなものすんなりと受け入れられるはずがない。

「断る……」

「そろそろ限界なのだろう？」

少女がたじろぐ。

見透かされていた。

「コンバート ブラヴィタス アルター 転換系の異常を持つ改変者だろ？ 俺の装備系とは違って、コンバート ペリフェラル 転換系には何かしらの転換の元とする素材があるはずだ。だからB等級であってもそう長くは使い続けられまい」

「……」

たとえ限界が近くても少女は力を使う。攻撃してこないならば先手で抑えればいいことだけだ。

少女は手を地について、連山を生み出し先制する。

「どうやらまだ足掻くようだな……。おい！ お前ら！ リーダーたちが来るまで持ちこたえさせるぞ！」

了解、と他の者達が返事をする。

四度目の襲撃が始まる。

「防衛組はアメントを展開！ その間に俺たちで標的の無力化を行う！」

防衛組。

どの人も黒服を着ているため区別がつかないが、その防衛組と呼ばれた彼らは持っている等身大ほどの盾を横一列に並べる。

「！」

盾に向かう氷の連山は、そのまま防ぎきれないぐらいの勢いで迫っていた。だが、盾に近づいていくにつれて勢いは失くし、やがて停止。

盾に直接触れたわけでもないのに。

それは見えない何かによって、連山を作り出している氷の凍結そのものを、妨害しているようだった。

「行くぞ！」

防衛以外の者達が氷の連山を避けて、右と左を迂回しながら接近してくる。

少女は慌てて、攻撃パターンを全方位型に変える。一回転。そして先端が鋭くなった氷の造形物を花のように。

右方からはバチバチ、と音がする。電撃。放電しながら敵の一人がかかってきていた。電撃は迫ってくる氷と衝突。氷の再生と電撃の粉碎が拮抗する。

対して左方からは槍をもった男が迫り来る。先ほどの通信役を担い、また司令塔をしている者だ。

少女が『異常』な力を使っているのと同様、もちろんただの槍ではなかった。鋼の色をした先端が赤みを帯びる。そして氷に突き刺さると、突如、水蒸気が発生した。

「……っ！」

少女はその氷に囲まれた中心から飛び避ける。間一髪だった。その場には槍が氷を突き破って伸びてきていた。

「避けたか……」

槍を携えた男は避けられたからといって攻撃の手を止めない。再び赤みを帯びて輝く槍の切っ先が少女を狙う。

少女の方は後方へと追いやられていく。

彼らの思う壺だった。

「今だ捕獲しろ！」

彼女が逃げた先には、敵の仲間が待機していた。
罨。

「あつ！」

少女は、刺股さすまたを構える二人によって両側から捕らえられる。その刺股は、一般的なものとはまた違って、二つそろって効果を発揮する。股の部分は簡単には碎かれないうように木の幹のように太く、それらの先端はジョイントになっていて二つ合わさるとロックがかかる方式。

両腕と胴を共に封じられた彼女は動きが取れない。

だが彼女には異常な能力がある。それを使えば簡単に抜け出せるはずだった。

「どう……して……？　なんで『結合』ネクスが発動しないの？」

使えなかった。なぜか彼女はその力までもが封じられていた。

槍を持つ男がゆっくりと近づいてくる。

「なんだ……俺たちだけでも捕獲できてしまったか。まあいい。どうだ？　力が使えないだろう。なにせ、ただの捕獲道具ではない。それはアmendを纏っている。アmendとは『異常』フライウィタスを弱体化させる存在。そしてアmendの力が強ければ発動そのものをできなくさせることができる」

少女の目の前に立った槍を持つ男は、無理やり彼女の顎を上げさせる。

「んっ……」

「俺が本当に槍で刺そうとするわけがないだろう。この仕事は殺すことじゃない。捕獲することだ。標的ターゲットを殺してしまうわけにはいかない。さあ、このまま大人しくしててもらおう——」

男が急に少女から離れる。

危険を察したからに他ならない。

「結合！」
ネクサス

少女がそう叫ぶと、異変が起こったのは足元だった。彼女の足元から凍結が始まっていく。それからの展開は言うまでもない。

刺股で取り押さえていた二人組みはあっけなく凍結に巻き込まれる。彼女の周りでは空から舞い降りる雪が全て雹へと変化した。それらはさらなる凍結への材料となる。

「アメンドを跳ね除けた?! なんとという力だ……。全員この場から離れる! 巻き込まれるぞ!」

槍の男は叫ぶが、防衛組の行動が鈍った。防衛組はその名の通り防御をしてこそ意味がある、それなのに防御より回避を優先させられたのだ。

その一瞬の迷いが彼らの陣形を完全に崩す。それを襲うのは氷。それは今までとは桁違いの力。少女の周囲、全てのものを吹き飛ばし、氷漬けにさせる。

最後まで残っていたのは、槍を持つ男だけだった。それ以外の六名は戦闘不能。

「熱発生でなんとか凌いだのはいいものの……。くそ……。まだこんな力が使えるのか……」

男は地面に型膝を突いた体勢で言った。今戦えるのは自分一人になっ
てしまっているが、笑みを浮かべる。

ここにいない仲間の到着がそろそろだからだ。それに彼女はもう戦う力を失った様子だったからでもある。

少女の膝が崩れ、その場に座り込む。

(だめ……。逃げないと……)
だが。

「ボルドー!」

遠くで槍の男の名を叫ぶ声がある。

「あいつらようやく来たか。ふん、これで終わりだ。あとは標的^{ターゲット}が捕まるだけか」

敵の仲間の到着。

逃げようにも彼らがいるこの控除の敷地は高い塀と、有刺鉄線で囲まれているため逃げられない。

（あれを使えばもう本当に枯渇してしまうかもしれない……。次で最後だとしたら……。会いたい。最後はもう一度あの人と――）

少女は決断する。殺されないかもしれない。しかし、敵の具体的な目的が判明していない以上逃げるしかない。

ある少年とまた会えると思ってここまで来たのだ。それなのに知らぬ者達の襲撃を受けるという結果に至っている。

このまま、捕まってしまうたら願いは叶わない。だから、彼女は力を使う。

（この力を使った後にもう『今』の自分ではいられないかもしれない。でも、会いたいから、お願いあと少し、少しだけまだ『今』の自分でいられますように）

そしてより大きな代償を払わなければならない力を解き放つ。

「我、欠片を繋ぐ者なり！ この指の先に示すは離れし存在！ 今ここに絆を繋ぎて一つと成せ！ ネクサス 結合！」

銀世界をさらに濃い色へと変える光が、少女から放たれこの場を包み込んでいく。

「まだ何かを起こすつもりか！」

「ボルドー！ なんなのこれは！」

光の中でボルドーと彼らのリーダーが言葉を交わす。光が眩しすぎて、お互いの姿は見るできない。

そして、光が収まるとそこには――

「なん……だと……」

少女の姿は無かった。

彼らは驚きを隠しきれず口を開けていたが、リーダーは冷静のままだった。

「うるたえるな！ 標的はあの状態ならば、この地域からは逃げられないわ！ 今すぐ搜索を再開する！ 他の狩獵者^{ハンター}に先を取られるな！」

一章（１） 新代荘

新代荘。
にいしろやう

形は直方体。屋根はグリーン、外壁はベージュ色の塗装がされたコンクリート壁。というのはこの新代荘が建つてばかりの頃の事である。現在はそれから約二十年が経ってしまい、屋根も壁も色褪せている。住戸は全部で六つ。各住戸には八畳の部屋とトイレ、流し台、風呂が付いている。基本床はフローリングなのだが、中には畳の部屋もある。一階と二階に三部屋ずつ分かれており、それぞれの階の外に廊下がある。二階に上がるには、建物の横に設置された二階の廊下に繋がる階段を使えばよい。

周辺の土地利用は住宅がほとんどではあるが、他に荒地や田、畑、雑木林など。

交通の便があまりよろしくなくて、新築というわけでもないのですが、おすすめの物件とは言えないだろう。

だがここに住もうと思っても、それは不可能である。

ここは貸間としては使われていないのだ。

現在は家主を除いて三人の高校生が住んでいる。

ただし、居候。

彼らは六住戸ある中でそれぞれ一部屋ずつ使用している。

住居人の状況はこうだ。

この新代荘を道路に面している方から見て、一階の右端『〇〇一号室』は家主——新代にいしろ藍あいの部屋である。他住居人は、一階の中央『〇〇二号室』に新代にいしろ若葉わかば、一階の左端『〇〇三』号室に常磐とこね幸祐こうすけ、二階の右端『〇〇四号室』に白上しらかみ彩人あやこ、となっている。ちなみに階段は右側——『〇〇一号室』と『〇〇四号室』の付近にある。

午後八時。

新代荘の全員が『〇〇一号室』（新代藍の部屋）玄関に集合して

いた。

藍以外の三人とも玄関に立ち止まったままで部屋に上がらず靴をまだ履いている。

玄関はそれほど広くない。三人も居るとなると、とても窮屈だ。しかし、三人はそこから動かなかった。それにはちゃんとした理由がある。

新代荘では各住戸にキッチンはあるが、食事は藍の部屋で取ることが習慣になっている。調理は藍の担当。これはもう何年も続いていることだ。

朝食は毎日七時と決まっており、その時に藍がその日の夕食の間帯を皆に知らせておくという仕組み。またメニューを知らせることもしばしば。

稀に若葉と幸祐（彩人は部活動に参加していないため除く）は高校の部活で帰りが遅くなることがあるので、そういう場合はあらかじめ朝の時点で伝えておく。

今日の朝、晩御飯は鍋をやらうと伝えられていた。

そして予定通り彩人、若葉、幸祐の三人は藍の部屋を訪れた。

今日は鍋。

そう。鍋のはずだった……。

「ごめんね、鍋作れないわ」

この日はあらかじめ晩御飯が鍋であると伝えられていた。鍋は新代荘でちよつとりツチなメニューであり、三人は朝からずっと楽しみに夕食の時間が訪れるのを期待して待っていた。

だがこの一言が彼らの期待をぶち壊しにした。

期待をぶち壊しにした張本人——新代藍。背丈は女性の中でも高い方だろう。すらっとした体型でスタイルも悪くない。光が当たると青黒く見えるさらさらとした黒髪を後ろで紐を使って結んでいる。すっぴん（今日は午前中に鍋の材料の買出しのために化粧をしたが、午後からは化粧を落としている）であるのにも関わらず男性が目を引くこともある。ぴちぴちの二十代はとうに終えたというの

に、年齢に比べて若々しい。

また新代荘の家主であり、新代荘において子供三人の母親的な役割を担っている。

藍は両手を合わせてお腹を空かしている高校生たちに謝る。

他三名は哑然としていた。

「あのー、もう一回言ってほしいんだけど……？」

呆けたような口調をするのは白上彩人。髪の毛を染めているわけではない。が、生まれつきの茶色っぽい髪の色をしている。どこかしゃきつとしておらず、ふわふわというか、だらけているというかなのような、そんな雰囲気を出している。一言で表せば、だらしない。聞き間違えたかと藍に再確認する。

「だーからー、作れないの」

藍はもう一度、現在の状況を端的に告げる。

「ええっと……じゃあ鍋……というか晩御飯はどうなるのよ？」

藍を問い詰めるように言ったのは新代若葉。やや丸顔気味でいてほがらかさがあり、笑顔の可愛いショートヘアの女の子。高校では水泳部に所属している。

「まあ無理ね」

バツサリと若葉の言葉を切り捨てる。

「無理って……じゃあ今日の晩御飯は何になるの？」

若葉は代わりとなる他のメニューを訊いてみる。

「だからー、無理なの」

藍の言葉が段々とあきれ口調になってきた。

「まさか……。何も作れないってこと?!」

「その通りよ」

藍は期待を裏切られたあげく、空腹の三人を前にしてさらりと告げる。

「そんなぁ……お母さん」

若葉は希望の途切れと空腹でうなだれてしまった。

ここで未だに冷静に状況を見ていたもう一人の住人が中指で眼鏡

を鼻の上に持ち上げて話し出す。

「他の物が作れないというか……カップ麺とか買い置きは？」

冷静な口調で話すのは常磐幸祐。彩人とは正反对で見た目からしてすっかりしていそうで、頭もよさげに見える。見た目だけでなく、彼はその見た目通りの人物だ。高校では陸上部に所属し、勉強の上に運動もできると、彩人とは正反对である。

幸祐はいたって動じていないようで、別の策を探すために尋ねる。
「おお、その手がある」

彩人は内心で、ここはしっかりしてこういう時に頼りになる幸祐に任せるべきだと判断して、深く会話に割り込まないようにして言葉を繋げるだけだ。

「カップ麺は買い置きして……あるわね……」

そのような藍が希望の光に満ちた言葉を言った途端に、うなだれていた若葉がぱつと顔を上げる。

幸祐と彩人は胸を撫で下ろす。

「でも作れないわよ」

「……は？」

三人は同時にポカンとした顔になった。

（なんでカップ麺が作れないんだ？）

冷静さを保っていた幸祐でさえ驚いているようだった。

「そ、そう！ 材料はあるのよー」

右こぶしを左の手のひらに、ポン、とたたき藍が開き直った調子で言う。

「えっ！ 材料あるの？」

予想外だ、といったように彩人が応答する。

彩人だけでなく他の二人ともてつきり材料を買い忘れていたから鍋は作れないのだらうと思っていたの だが、どうやらそれが原因ではないらしい。

「……え？ ……というか藍さん？」

ここで幸祐が良い点を突く。

「なんで作れないんだ？」

幸祐が根本的な原因について尋ねる。

「それはですねー。ははは」

藍が笑って誤魔化そうとする。

「誤魔化さない」

幸祐はそれを許さない。

藍がむむっ、と眉間にしわを寄せる。

「それはそのー……」

言い出しにくそうにして顔を背けていたが、幸祐に詰め寄られてはどうしようもない。

「とうとう話す時が来てしまったのね……」

藍は真剣な趣を醸し出す。

「今まで隠し続けていた主人公の秘密をとうとう暴露するみたいな言い方はやめて」

そして藍は彼らに白状。

「お湯を沸かせないのだから当たり前だわね。おわかり？」

三人とも再びポカンとしていた。

幸祐が一度深呼吸をしてから続けた。

「えーと……、なぜ？」

「まあガスが止まっているのよ」

「まさかガス管が？」

「いえ、この冬の影響で凍ったとかではないわ。そうね……言い方が悪かったかしら。ガスがとまっている、ではなくて、ガスが止められた、ね」

「……止められた？」

「ガス代払ってなかったから止められちゃったの。ほらこの紙」

そう言っつてズボンのポケットから取り出した紙を三人の前に掲示する。

そこにはガスの差し止めのことがしっかりと書かれていた。

つまり今日一日中ガスを使うことができない、ということの意味

する。

「藍さんのせいかな！」

「ごめんねっ」

ねっ、と藍は可愛らしく言っただけなのだろうが、他三名にとってそれはただの挑発みたいなようなもので彼らの怒りを買っただけだった。

さしもの冷静沈着な幸祐も藍の態度に少し怒りを感じてきているようで、肩がプルプルと震えている。幸祐の頭で、プツンと何かが切れる音がして、ただならぬ気配が体を包み込む。

（あ、切れるかも）

幸祐が怒りを他人に見せることはめったにあることではない。そんな幸祐は藍にはよく怒りを見せる。今までに何度とか藍の挑発的な態度に踊らされてきている。幸祐が藍と言いつつ場合幸祐には勝ち目はないだろう。幸祐は藍をそれだけ苦手としている。

しかし幸祐も軽く挑発に惑わされないように、こみ上げる怒りを無理やり押さえ込んだ。

（おお、押さえ込んだか）

彩人はそんな風に幸祐に感心していた。

幸祐がふうー、と息を吐く。

あきれてしまったようで難しい顔になる。

とうとう黙りこくってしまった。

幸祐はこのまま藍と話を続けるといつかは絶対に取り乱してしまうと思うて一時退却する。

選手後退、常磐幸祐に代わりまして白上彩人。

「で、どうなの？これから。もしかして今日の夕食は断食？！」

彩人は幸祐の様子を見かねて代わりに言う。

このまま食わずじまいで今日を終えられない。

「責任はちゃんと取ってくれよ！。なんとかして」

しかし返事は……。

「まあ彩人も大胆ね。責任なんて。そういうことを言う年ごろなの

かしら」

藍は幸祐と話していた時と全く態度を変えず、反省の色が見えない。

彩人はこの手の挑発には引っかけからずただ、この人は相変わらず面倒くさい人だ、と思ったのだが口には出さないようにしている。

「まあ……そう……ね。ふーむ」

藍は目を閉じて考えた。

「あつ……。あつた」

「……おお!」「」

彼らはどうせありはしないと既に試合放棄のように諦めていたのが、答えは彼らの考えとは反していたので歓声をあげる。

藍の返事を聞いて、唸っていた幸祐の肩がピクツと動き、若葉と彩人も目を見開いて藍を凝視した。

「しばし待たれよ」

藍はそう言うて部屋の押入れの前へと向かう。

他三名は靴を脱ぎその後を追う。

辿り着いた先は押入れの前。

各部屋に一つずつある収納スペースだ。

そして襖を開けて押入れの中をガサガサと漁りだし、中の物を取り出していく。

押入れの中から色々な物が次々と湧いて出てくる。

わんさか、わんさか。

まるで温泉を掘り当てた時噴水みたいに出てくるお湯のようだ。

一体押入れにどれだけの物を詰め込んでいるんだ、という意見で

三人は一致しているだろう。

若葉がその一つを取り上げる。

「何これ……美容薬品」

それを見た幸祐も一つを取り上げる。

「こっちはダイエット関連だ」

彼らが手に取った以外にも湧き出てきた物はダイエット器具や美

容食品が多くを占めていた。

新事実だった。藍が三人に秘密にしていたことを暴露。

「藍さん。こんな物必要？」

彩人は美容薬品を持ちながら、押入れの下段に上半身を突っ込み四つん這い状態の藍に尋ねた。

すると藍がニヨキニヨキと後ろに下がってきて、彩人の方を見る。

「どういうことかしら？」

「いや、藍さんって綺麗な方じゃないかと思うし……。」

藍は高校生の彼らの倍はすでにある年齢にして、見た目は二十代と判断してしまいそうな若さである。

「だからこういう物は使う必要がないかなーって……」

「うれしいこと言ってくれるじゃない。でもね、それを保つにはやはり頼らざるを得ないの。わかる？ 最近はまたお肉が付いてきちゃったみたいだしねー」

お腹辺りのお肉を摘んで悲しげな顔をする。

「家でぐうたらしているからじゃ……」

「あ？ なんか言った？ 若葉」

「言ってない！ 言ってない！ ごめんなさい！ 何も言ってません！」

もう何か失礼な発言をしたということを白状していることがまるわかりであった。

「……まあいいわ。で、さっき彩人、うれしいこと言ってくれなかった？ 綺麗だって。でもね、それを保つにはやはり頼らざるを得ないの。わかる？ 最近はまたお肉が付いてきちゃったみたいだしねー」

「そうですか……」

「いいこと言ったお礼に美顔スマイルを差し上げよう」

そう言って藍は彩人に向かってはにかんでみせる。

(……)

彩人は目を逸らした。決して面と向かったために恥ずかしくなっ

たわけではない。彼は呆れ顔だ。

「そこ。そつぽ向かない」

（何もうれしいことはありやしない。お礼だったらもう、こうちよつといいもの欲しいよな。今欲しい物つて言ったら特に……。）」

「やつぱりお小遣いってもらえませんかねー」

彩人は手をこねこねしながら駄目もとで頼んでみる。

彼らはお小遣を貰っていない、いや貰えないという表現の方が正しいだろう。新代荘の家計は少しも裕福ではない。現にガスが止められてしまっている。しかしこれは悪魔でも藍のミスが原因である。そのことを考慮しなくとも新代荘では藍が一人で彩人、若葉、幸祐の三人分の食費、はたまた学費までも支払っていることから察しが付く。これらの莫大な費用は全て貯蓄をすり減らしながら賄ってきた。つまり数年前までは莫大な貯蓄があったことになる。現在の藍の仕事はパートタイムのアルバイトだ。それほど給料が高いわけもなく、生活費として消えてゆく。

「彩人？ この世には不可能なことだってあるのよ。そしてこれが当てはまってしまうの。だからいい加減に諦めなさい。叶わぬ幻想は抱くものではないわ」

思っていた通りの返答だった。

「そうそうお小遣いちょうだい」

お小遣いというワードに引かれて若葉が話に乗っかる。

「さっき言ったことを聞いてなかったの？ そんな余裕はないわ」

「じゃあこれらはどういうことよ！」

ビシッ、と若葉が床一面に置かれた藍の私物を指差す。

「それは………」

藍は一瞬戸惑い。

「生活費よ！」

「どこがよ！ どう見たって嗜好品じゃない！」

「うっ………」

藍が押され気味で一步後ずさりする。このようなことは滅多にな

い。

「金が欲しかったら働きなさい」

「高校はバイト禁止なの!」

「つまり学校はバイトをしないで学業または部活動に熱心に勤めよと。どっかの誰かさんは勤めていないけど。すなわちあなた達には必要ないってことね」

「けちっ!」

藍は口笛を吹いている。

それに異議があつた彩人だが。

「でも藍さん、お……うつ!」

「それ以上言わない」

(いやまだ何も言つてないだろ!)

藍は彩人が話し出した途端に手が既に動いていた。

彩人は口ごもる。言葉が詰まっているのは藍の右手が口をわしづかみに押さえているからだ。

「ふんっ。何を言つたつて無駄よ」

(目つきが怖い!)

「わかった?」

藍はさっきの目つきと一変。笑顔だ。ただし、その笑みも恐ろしさがあつた。

彩人は首を縦に振る。

「よろしい」

藍は手を放して彩人を解放する。

(口止めだ……)

彩人はこれ以上の発言は身の危険がありそうなので、黙りこくる。藍は少しも意思を曲げなかった。

高校生には欲しいものだってたくさんあるだろう。学校の友達とどこかへ遊びに行きたいだろう。

しかし、実質、彼らはあまり文句を言える立場ではないのだ。彼らはあくまでも居候だから……。

「で、何か見つかった？」

何を言っても藍には利かないと分かっていた幸祐が話を本題に戻す。

冷静さを取り戻したようだ。

「ああそうだったわね。一応見つかったことには見つかったわ」

藍は再び押入れに潜り、探し物を中から取り出してきた。

「これよ」

藍が両手で抱えだしてきたもの――カセットコンロだった。

そのカセットコンロはけっこう古いもので周りの塗装が剥げており、実際に使ったことがあったかどうかも定かであった。

「こういう物があつたとは……。これでキッチンのガスコンロの代用ができるな」

幸祐も一安心といった感じた。

「さあさっそく作ろう」

「ようやく飯かー」

「もうお腹ペコペコー」

そのまま彼らは部屋の中央に置かれた丸机に向かい腰を下ろす。
が。

「そついうわけにもいかないのよねー」

いい流れだったはずが、藍の言葉がせき止める。

「まだ何か？」

彼らはいい加減呆れていて、聞き返す言葉も適当になってきている。

その原因は藍自身にもあると言える。というか藍の言動にあると言ってもいい。

彼らの空腹は頂点に達しようとしていたため、頭には早く夕食にありつきたいという思考しかなかった。

「またもや同じ壁に阻まれた」

藍は困ったなー、と繭を纏めながら言った。

「まさか……」

最初に理解したのは幸祐だった。彩人と若葉は「何？　どういうこと？」ときよろきよろ幸祐と藍に目を移していた。

「無いのか……」

幸祐の言葉で取り残されていた二人もようやく理解する。

「その通り……」

室内の空気が重くなっていく。

「『ガス』が」

「それはどういう……」

「だからガスボンベが無いってことだよ。ガスボンベが無ければ力セットコンロが使えるわけが無いだろう？」

「そんな……」

「マジかよ……」

若葉はテーブルにうつ伏せになり、彩人は椅子に大きくもたれかかる。

「もういやー、お腹すいたー」

子供が母親に駄々をこねる時のように若葉が手足をジタバタさせる、が、エネルギー不足の為にすぐ力尽きてしまう。

「あなた達！　諦めたくはないわよね？」

「どうせできないじゃない！」

「まあ、どうにかする」

「どうやって？」

「……何とか」

さしもの藍も責任を感じているらしかった。先ほどのふざけた態度を改めて、やや真剣みになっている。

「そうねー何とかなると言えばなんとかかな……かな。それには一

人の尊い犠牲が必要になってしまっけど」

「どういこと？」

「それは――」

■ □ ■ □ ■

彩人は一度自分の部屋に戻り、ニット帽、マフラー、ジャケットのアイテムに、三枚着――一番下はシャツ、中間はスウェット、一番外側には黒のダウンジャケット――という完全装備身になり、右手に傘を持って藍の部屋に再び来ていた。

そして玄関で靴紐を縛りなおしている時に。

「頑張つてね。彩人……」

ハンカチで涙を拭う仕草をし、肩が震えている藍より（涙は流してはいない。そのかわりに笑いを堪えている）。

「いつてらっしやい」

かわいいそうに、と若葉より。

「達者でな」

頑張つてこいよ、と幸祐より。

「……」

対する彩人は無言で立ち上がる。

「ああ、これお金ね」

さっきまで涙を拭う振りをしていた藍は手に持っていたものを彩人に差し出す。

そのまま、彩人は藍が手に持っていた物を手渡された。

彩人はドアノブに手を掛ける。

「くそう……なんで俺が……。じゃあ……行つてきます……」

その時の彩人の顔は実に悲しそうだった。

さあ扉の向こうは銀世界だ。

一章（２） 『今』の彼にとっての出会い

辺りは静寂に包まれている。

新代荘周辺は一戸建ての家が何軒か立地し、周囲には田んぼや畑もある。よって新代荘近辺ではそれらが何本もの細い道を網目状に作っている。

彩人はその網目を縫うように右へ曲がり、左へ曲がりを繰り返しながら進んでいく。

「はああ」

ため息混じりに白い息が出る。

（何で俺がこんなことを……。くそ……。藍さんめ……）

藍は解決案があると言い切った。

それは次のようなものである。

ガスコンロが押入れから発掘された後、ガスがないと期待を打ち砕くこととなった。

要するにガスボンベを買ってこい、ということだ。

ああついでにこのメモに追加の材料書いてあるからこれも買ってきてね、と藍から伝言もあり、他にも追加でお使いを頼まれていた。（あの時勝っていればこんな事にはならなかったんだが……）

誰がこのお使いをするかを決めるのは、やはり最も公平である『はず』のじゃんけんであった。

結果はパーの人が一人、他三名がチョキ。すなわちパーの一人負けである。しかもこのじゃんけんは一度もあいこにならずに、一回で決着が着いた。

（一人負けってなんだよ）

彩人は不満が大ありだった。

（昨日だってゴミ出しのじゃんけんで一人負けしたし、その前だって……。もしかして、俺が何を出すのかを読まれているとでもいうのか……。一人負けの確率ってどれだけだっけ……。ああもう考え

ても無駄だ！ 数学は苦手なんだよ。まあとりあえずかなり低いのはわかる。それなのに連敗なんて読まれているとするしか言い訳がつかないじゃないか……）」

彩人は基本、面倒くさがり屋だ。お使いなど「めんどくせー」の一言で打ち返すはずなのだが、藍には簡単には逆らわない。いや、逆らえない。

（今回の場合はふざけている。なんなんだこれは。普通のお使いだったらこんなにも今、俺は苦しんでいないはずだ）

こんな悪条件が無ければの話だが。

「寒い……」

小声で呟いた。

体はガクガクと震えている。

ザク……ザク……。

聞こえるのはその音しかない。それほど静かだ。

「どんだけ降ってんだよ……」

雪は傘にどんどん降り積もって重量を増していく。そして傘が重くなってくるたびに傾けて雪を落とす。

「今年は異常じゃねえか？」

彩人は今この状況に至ったことに対する蟠りわたかまを、それを晴らす対象が見当たらないがために、つい何かに原因を押し付けようとしてしまう。

だが確かに彩人の言うことにも一理あると言ってもいいだろう。

悪条件の一つ。

二月十二日。

寒気さむけきわまる如月。

まさに冬。

つい三日前から分厚い雪雲が色見いろみ全体の空を覆っていて、天に青空を拝めることは出来ず、ただそこには灰色の空があるだけだった。色見とは、新代荘のある帆布地区はんぷに他の七つの地区も含め、全八区から構成される地域のことを指す。色見では例年雪は多少降るが、

今年の冬、特にこの時期は稀に見る大雪になると一月頃からテレビの天気予報でよく言っていた。

その予報は的中し、色見は銀世界と化している。

今日も雪は止む事なく朝からずっと降っており、どんどん積雪して町を白く満遍なく塗りつぶしていく。

しかも夕方から風が強くなっており、昼間で穏やかに降っていた雪は気分を悪くしたかのように表情を変えてしまつて吹雪になってしまっている。

彩人が目指す目的地はちょうど風上にあたり、強い冷気を纏った風は正面から襲う。

それを傘で防ぐように歩き続けているが、傘は上半身全体を守れるか守れないかの瀬戸際で、足には容赦なく吹雪が襲う。
凜とした冬の空気が彩人を苦しめる。

彩人は傘をやや前に傾けて吹雪を防ぎながら歩く。

ザク……ザク……。

降り積もったまだやわらかい雪が音を立てる。一歩一歩進むたびに足が埋まるため歩きづらい。
息を吐くたびに白い息が出る。

「寒い……」

彩人はこの銀世界に放り出されたのだった。

これが藍の言っていた『尊い犠牲』というものだった。

そしてもう一つの悪条件。

時間帯である。

ただいまの時刻は午後八時すぎ。

ただでさえ冬で日照時間が少ない上に、この時間帯ではいっそう気温が下がり、気温は氷点下に達していそうだ。

また、新代荘の最も近くにある（徒歩十分）スーパーマーケット『イトヤスシ』は、とくに閉店時間を迎えてしまっている。だから、彼の行き先はコンビニ（徒歩二十五分）へ変えざるを得なかった。

往復五十分。

それがこの極寒の中にいなければいけない時間である。

そこに新代荘の立地条件の悪さがにじみ出ていると言えよう。

（ショートカットすれば十五分で着けるか）

新代荘の周辺は細い路地が網目のようになっている。その中でも電灯がある所無い所とあつて、この時間だと電灯がない道は光がないに等しい。ただ中には民家から漏れるわずかな光が照らしている所や、機械だがどこか寂しいようにも見える自動販売機が闇の中にポツンと立っている所もあるが。

それを考えても普通は電灯のある道を行くのだが、その道を選ぶとどうしても遠回りになってしまう。往復一時間以上はその場合を考えた時の所要時間だ。電灯のない道を行けば四十分までに短縮できる。

だが彩人はさらなるルートを知っている。

実際、新代荘からコンビニまで直線距離で考えるとそれほど遠くはないのだ。コンビニと新代荘の間には荒地や田、畑、とくに雑木林などが障害物となっている。そのためそういったものを避けるために迂回して行つたときの所要時間が、先ほどの往復五十分ということになる。

しかし、必ずしも迂回する必要はない。道がないというわけではないからだ。ただし、その道は暗かったり、土手道だったり、しっかりとした整備が行き届いていない道だったりする。

それらをつまいこと利用すると大幅な時間短縮ができる。先に挙げたデメリットもちろんある。

それらの道を入々は好んで通ろうとは思わないだろう。まして知っている人もわずかしきないかも知れない。だから整備が疎かになる。

知る者は少ししかいないという道を、彩人は知っていた。

なぜ知っているのかと言うと、『彩人は暇人だから』という解答が最もしっくりくる。

彩人はよくフラリとあてもなく出かけることがしょっちゅうある（それを散歩として彩人は趣味と主張する）のだ。

高校生だったらゲームセンターとかに行けばいいじゃないかと思うかもしれないが、彼はお小遣いを貰っていないのでただだらふらするしかない。行けるとしたら本屋で、立ち読みをするしかない。

それが習慣になつて暇だから色々な場所へと赴くうちに新代荘周辺の土地は大方記憶してしまっている。

そのように空虚に消費されていく時間の源は彩人が高校の部活動に参加していないなどから出てくる。

彩人は単に言えば面倒くさがりや。

何かを積極的にやることもほとんどない。

ダラダラ、ゴロゴロと日々を過ごす。

それは充実した生活とは言えないと思うだろう。

だが彩人はそれでいいと思っている。

平和で楽に暮らしていれば何も困ることはない。

だから彩人はそんな風に生きる人なのだ。

「こつちか」

彩人は車一台の横幅より少し大きい道路から、ぼろぼろの廃屋や小屋の間の暗い細い道へ入っていく。その細道は車が通れるほどの道幅はない。この道をまっすぐ行くと雑木林にぶち当たる。

「懐中電灯つと」

ジャケットのポケットから懐中電灯を取り出す。

これがないと今から行こうとしている道は歩けない。なにせこれから明かり一つない真っ暗な道を通るのだから。

この辺りに民家は立っていない。

右手には傘、左手には懐中電灯。

どんどん進んでいくとやがて雑木林にぶつかる。

雑木林は人が通れるように道が一本あり、今歩いてきた方向とコンビニのある通りの方を繋いでいる。一応コンクリート舗装がしてあつてガタガタ道ではないので足を踏み崩すこともない。

この道への入り口はどこへ繋がっているかを予測できないため、人は通ろうとしない。彩人以外にこの道を知っていて利用する人はいないかもしれない。

「不気味だな」

ここはさっきの住宅地の静けさとは違って、風に揺られた木々が互いに擦れ合う音、それにしたがい葉に降り積もった雪が落ちる音がある。

その音が恐怖を煽る。

住宅地を歩いていたら時よりも少し歩く速度が上がっていた。雪が歩くのを妨げているにもかかわらず。

五分足らずで雑木林を抜け出した。

雑木林の出口も入り口と同じように民家はない、だがもう少し進むと民家は建ち並んでいる。

民家が建っているがこの道にまだ電灯はない。

だから彩人はまだ懐中電灯で行く先を照らし続ける。

懐中電灯の明かりともう一つ、この道には自動販売機の明かりがある。

この時間帯車道は電灯の付いた電柱が等間隔に連なっている。しかし路地裏は電灯がなく自動販売機のライトだけが照らしていた。

「何かこう……人がいないところにある自動販売機って……」

まるで孤独を感じているかのよう――

などという機械に自分と同じ何かを感じてしまった彩人はその自動販売機に横を通り過ぎる。

彩人にも暗く細い道は孤独感を感じさせる。

細道の遠くの先は明るくなっている。それはこの道をまっすぐ行くと車道に出るからだ。

（そういえばガスボンベってコンビニで見かけたことあったか？

売ってなかったら……とんだ無駄足になるな。まあ……あるだろう。そうじゃないと俺は恵まれない！）

そんなことを考えているとようやく、ちゃんと白線の引いてある

二車線道路に出た。

この時間でも車は数台走っている。さすがに車道であるので、街灯から放たれるオレンジ色の光が道路全体を照らしている。

（よっしゃあ！ さあ目的地は目の前だ！）

彩人はやる気を高める、が……。

「はあつくしよっんっ！」

鼻を嚙った。



コンビニの店員の「ありがとうございましたー」という挨拶を聞いて店内を出る。

店から出た瞬間、着込んでいるのに服の隙間を縫うように冷気が入り込んできた。

「うつ……」

体が急に固まる。

「はああ」

ため息は空気中で白い息となりしだいに消える。

「萎える」

店内の空間がどれほど冷気からの回避エリアとなっていたかと思わせられる。

彩人は行きに味わった凍てつく町をまた歩かなければならない。

そう思うと帰る気力が削がれる。

コンビニでつい長居したくなって店内を無駄にグルグルと回っていた。店内の暖房は格別の癒しだった。だから先ほどまでの苦闘を忘れかけていたのかもしれない。しかも暖かい所から急に寒い所に出たので冷気がいつそう冷たく感じていた。

あまりの寒さに体を動かす気が湧かなかったが、店の前でいつまでもぐずぐずしているより歩いたほうが体を温められると思い歩き始める。

（この仕事の報酬ぐらいあってもいいよな）

彩人は上着のポケットからコンビ二で買った缶入りのコーンスープを取り出す。藍はご褒美の分までお金を渡したわけではないが、頼まれたものを買ってもお金が余るとわかった彼は勝手に商品を追加した。もちろんこれは新代荘の皆には秘密である。

すぐに呑んで缶を空にしてしまうのはもったいないので、手を温めるために吞まずにとっておく。

（新代荘に着くまでに吞んじゃえばれないし）

幸いなことで、行きよりかは雪の降りが弱まり、風も止んでいた。傘を差さなくてもある程度大丈夫そうである。

だから彩人は差しているよりかは畳んでしまった方が楽なので傘を閉じる。

また行きと同じ細道へと入っていく。

もちろん帰りも同じ裏道を使って時間を短縮する。

「それにしてもよかったな！。注文の品は全品購入完了。売ってないというオチがなくてよかったあ」

彩人は右手に買った物が入っている袋を持ちながら歩み進む。

「帰ったら飯の前に風呂入ろうかな」

彩人はかなり着込んだつもりだったが、さすがに長時間この寒さの中にいたので、体は完全に冷え切っていた。

ちなみにこの時の彩人は気付いていないことだが、ガスが止められているので風呂には入れない、というのはこれから数時間後の出来事である。

暗い道にぼつんと立っている自動販売機が見えてきた。

相変わらずのしんとした中に立っている。

（さぞかし寒いことだよな。お前にしかわからないよな……。あいっらにはわからんだろうな俺の辛さは！）

彩人は自動販売機に語りかけていた。

「なにやってんだ……。俺……」

急にむなしさが沸き立ってきた。

家を出る前はもう八時を回っていたので人の影はない——と彼は思っていたのだが。

ザク……。ザク……。

「ん？」

自分の足音。彩人はそれとは別に、前方から雪を踏む音が聞こえたような気がした。

彩人は一度立ち止まって耳を済ませてみる。

ザク……。

かなり小さい音がする。

やはり彩人の前方に誰かが歩いているようだ。

ザク……。

道は街灯が無いので自動販売機が立っている所以外は真っ暗であり、誰かが歩いている様子は視覚ではわからない。

（へえー。俺と同じようにこの極寒の中を出歩いている人がいるんだな。あの三人はどうせ俺の苦労なんてわからないだろうが、あの人なら分かち合えそうな気がするな）

彩人はその人と同じ境遇にいたので共感できると考えていた。

今度は機械ではなくちゃんと人だ。

（しかもこんな時間に。多分もうすぐ九時になるんじゃないか？

足音からすると一人みたいだな。暗い夜道は危な——）

そんな時、ある事が頭を過ぎった。

（あつそういえば……）

彩人は学校の事を思い出していた。

この前学校で『不審者が出没しているので注意してください。できるだけ一人で下校しないで二人以上で帰りましょう』という連絡を聞いていた。

（まさかね……。ないない）

そんなことはないと考えを変えようとするが、取り除くことのできない不安がそれを妨げる。

（懐中電灯で照らしてみるか……。いや下手に怪しまれると嫌だな……

…)

しばらく立ち止まって耳を澄ましていたが、足音は鳴り続く。どうやらこちらに向かつて歩いていっているようだ。

それがわかると不安がさらに募った。

(でも狙われるのって、あれだろ、女子高生とかだよな。そうとうせ痴漢目的のとかだろ。大丈夫だな、ああ大丈夫なはずだ。ちょっと考えすぎだな)

彩人は歩き始めた。

(別に気にすることもない。普通にやり過ごせばいいんだ。いかな凝り固まった考えは)

ザク……ザク……。

ザク……。

二つの足音は近づいていく。

相手のほうはだいぶ歩くテンポが遅いようだ
雪を踏む音が次の一歩までの間がかなり長い。

ザク……。

ザク……ザク……。

自動販売機が近づいてきた。反対方向から歩いてくる人もすぐ近くまで来ているようだ。

彩人はとうとう自動販売機の前を通る。

相手を通るのと同じだった。

二人は自動販売機の前ですれ違う。

彩人は横目で自分の右側を通った人を見る。

(そう何の問題も――)

「な――」

彩人は目を見開いて、声を失ってしまった。

彼は自分の目を疑う。

神秘的なものが目に映った、そう脳の中で処理される。
銀色。

そうそれは雪に劣らないくらいの輝きを放つ。

彩人は目を離すことが出来なかった。

見とれた。この世の美しいものを見たときのように。

だからそれが傾いて倒れ始めているというのに、最初は銀色に輝いたものがなんであるかが理解できなかった。

だが彩人の体は本能的にもう動いていた。助けないと、と体が判断したようだった。

彼はもうすでにすれ違っていたため体を一八〇度回転させる。

その時にはその人は重力にだけ引き寄せられるように地面へと。

（くっ……間に合わない！）

そう判断して、受け止めるためには雪の積もった地を蹴って地面と水平に飛ぶしかなかった。

右腕を目一杯伸ばしてそれを掴んだ。

そのまま空中でその人の正面に入り込み抱きかかえる。

空中キャッチ。

彩人はその下敷きとなって一緒に地へ倒れる。

バサッ、と雪に埋もれ、積もった雪はその衝撃で舞い上がる。

「ふう………」

地は雪で覆われてクッションみたいに柔らかく、白銀色のそれと彩人を雪が同時に包み込む。
痛みはない。

彩人は体を起こすのと一緒にキャッチしたのも両腕で抱えて起こす。

「――！」

その後だった。彩人が本当に驚いたのは。

銀に輝いたもの、それは――少女。

その少女は、まるで雪に溶け込むことができそうだった。

先ほどの通りすがりに横目でみたもの。

銀。

彩人は改めて見てもまたそう思った。

美しい白^{はくせき}皙。彼女の長い銀髪は自動販売機のライトを反射して輝

いている。見たところ彩人より少し年齢は若く、背丈は小さい。色白な四肢。その体はほっそりと、またとても軽かった。

「――！」

だが見とれていたのは一時的だった。

他の重要な事がそれを遮ったからだ。

「おい！ 大丈夫か！」

彩人は彼女に叫んだ。

それは何故か。

銀の少女は衰弱しきっていたからだ。

少女は呼吸しているようだが、手足はピクリとも動かない。

彩人が手袋を外して、少女の頬に触れる。

「冷たい……」

彩人の手はこの寒さで冷え切っていたが、それでも彼女の肌の方が冷たい。

生きてはいるが、彼女からは暖かさ――人の温もりがほとんど感じられない。

そのような事など少女の姿を見れば一目でわかる。

彼女の服装はどう考えてもおかしかった。彼女の着ている服――

服というよりは、汚れてボロボロとなった布切れのようなものが一枚、少女を纏っているだけだった。生地は薄く、寒さを防ぐことなどではしない。

ましてこの寒さだ。体は直に冷えるに決まっている。

「こいつ、どういう頭してやがるんだ！」

彩人にはこんな格好で外に出るなど信じられなかった。

彼は新代荘を出る前に各種防寒アイテムに三枚着という完全装備でこの白銀の世界に赴いているのだから。

「そうだコーンスープ」

コーンスープで少しでも温められればと彼女の頬にあて、それから手に握らせる。さらに着ていた中で一番暖かいダウンジャケットを少女に着せ、その自身の身につけていたマフラーも手袋もつけ、

とにかく体を温めさせてあげられればなんでもよかった。

（この子……なんでこんなところに……）

彩人は少女の頭や肩に降り積もった雪を払ってあげる。

彼が歩いていたのは人影のない裏道だ。

辺りは民家が無いわけではないが、少女がこのような時間、このような場所で、しかも一人で出歩いているなど考えられない。

「これじゃあ、まさに不審者の標的じゃないか」

いくつかの不可解な点。

一つ目はこのようなまるで自分から寒さに殺されてしまいそうな格好。

二つ目は少女がこんな時間に出歩いていること。

三つ目はこの少女自体――

「何者なんだ……」

銀色の少女。

「外国人なのか……？　こんな人、今まで見たことがない……。この町の人じゃないのか……」

少女はいまだ目を覚まそうとしない。

「とりあえずどうにかしないと。このままだと絶対に危ない」

その少女を放っておく事などできない。

彩人はそう思って、少女を背中に乗せ、少女を抱えるために後ろにまわした手でビニール袋を掴む。傘は少女を抱える両腕に乗せた。

「ひかたはいからはあ」

彩人は懐中電灯を口に銜える。

「はいひゅうへんほうははたへはふはった」

懐中電灯が小型で助かった、と言ったのである。

彩人はやるべきことをする。

「はあ。へんひょふりよふらー」

絶対に助けるからな、そう心に決めて彩人は全速力で走り出した。

一章（3） 暖房の効いた部屋で

カチッ……。

カチッ……。

カチッ……。

カチッ……。

ゴーン！

「遅い！」

九時を知らせる。

机に顎をついた若葉^{わかば}が氣力を無くしながらも声を張り上げる。

藍^{あい}、幸祐^{きゆうけ}、若葉の三人は丸机を囲って座っていた。

「まあ仕方ないんじゃない？ この時間だとあそこのスーパーは閉まっているだろうし」

あのスーパーとは新代荘から最も近くにあり、藍が常連さんとなっているスーパーマーケット『イトヤスシ』の事である。

「あのスーパーの名前って変だよな」

と、幸祐が藍だけに語りかける。

「あれって、ほら、古語でしょ？ 訳すと『とても安い』だよな。

まあ古語は変って言えば変だけど」

「そうねー」

藍も幸祐だけに向けて返事を返す。

「あえて、ああしたってことも……」

「かもねー」

藍は爪切りに集中しているためそっけない返事しかない。

「ねえ？」

と、若葉。まだ机に顎をついている。

「ん？ どうした？」

幸祐が疑問で返す。

「何かさっきからさりげなくスルーされてる気がするんだけど……」

「……」
「ああ。ちなみに『いとやすし』は訳すと『たいそう簡単』『たいそう安らか』とかいう意味だぞ。値段が『安い』とかの意味はない。その辺に面白みがあると言ったのだが……。」

幸祐はそれ以上言うのは止めた。だからあえて藍だけに話していた。

「へえー……。ま、まああたしも知っていたのよ。ちょっとボケただけ」

「若葉。あんたちゃんと勉強してる？ 来週は学年末テストでしょ？ ああ幸祐、ゴミ箱取ってー」

藍が爪を切り終えた。

「藍さん……ゴミ箱そっち側にあるから藍さんの方が近い」

「だって、お腹がすいて力が出ない」

「全部藍さんのせいだけだね」

「ああ、ちなみにあそこのスーパーは『いとやすし』さんが経営してる」

「そうなん……って、さっきから話をごちゃごちゃにし——

——」

「で、どうなの？ 若葉？」

藍は幸祐の言葉から逃れるように再び若葉に話を振る。

「え？（チツ。うまく逃れたと思ったのに！）」

「前回の後期中間テストだけ？ テストの点数がひどかったわ、全く。せめて一桁はやめなさい」

「なぜそれを？！」

若葉の顎がとうとう机から離れた。

「あなたの部屋にある机の上から右から二つ目の本棚の美術の教科書の間の——」

「もういい……わかった……」

「あらそう？」

彩人、幸祐、若葉はそれぞれ自分の部屋の鍵を持っているが、新

代荘では藍がマスターキーを持っている。

「やっぱりプライバシーの問題とかがあると思うからさ。マスターキーの使用はやめようよ。ね？ そうしない？」

「それはできないわよ。洗濯物取りに行かないといけないし」

新代荘の唯一の洗濯機は藍の部屋にある。高校生三人が学校へ行っている間に藍がそれぞれの部屋から洗濯物を回収してきて、まとめて洗うのである。

「むう……………」

「洗濯しなくてもいいなら別にいいけど」

「わかった……………。そうそう鍵といえばさ。キーホルダーなん——

——」

「で、勉強してるの？」

「くっ（またもかつ！）」

「話を逸らしたところでどうにもならないわよ……………」

「部活頑張ってるよ」

若葉は水泳部に所属している。今は冬なので、部活動はほとんどランニングや筋トレなどの基礎体力作りが秋からずっと続いている。「そんなことわかってるわよ。今はこの場にいな^{てい}体たらく坊やとは違うから。勉強も大事にしなさいってこと。来年はあんた達も三年生になるんだから。大学行くなってことなら無理してでもお金をだすわ。それくらいのことはしてあげる」

藍は一旦話を止め少し考える。

「いや、するわ…………… たぶん」

「た、『たぶん』が付くのね……………。わかった。勉強、少しは頑張ります……………」

「一生懸命がんばりなさい」

若葉は答えを返さない。

藍がギロリと目を若葉に向ける。

「わかりました……………」

「わかればよろしい」

「……幸祐には何も言わないの？」

さつきから会話に入っていない幸祐はというと畳の上に寝転がっていた。

「呼んだ？」

幸祐がむくつと上半身を起こす。

「幸祐に言う必要があると思う？」

「……」

若葉は口を紡いでしまった。

「えーと何の話？」

幸祐は状況が掴めていない。

「あなたは心配無用ということよ」

「まあいいか。彩人は？」

「まだよ」

「そうか……」

「もう空腹の峠を越えちゃうー」

若葉がパタンと倒れる。

「そういえば勉強って言葉で思い出したけど……」

「あれ幸祐聞いてたの？」

若葉がさつきまでの幸祐に代わり寝転がって言う。

「いやそうじゃないけど。寝てはいないけど、ただ寝転がってぼんやりとはしてた。それで勉強って言葉が何回も聞こえたから」

「ふーん」

と、若葉。

「それより幸祐。何か言いかけようとしていたんじゃないの？」

「そうだった。学校で先生が言っていたんだけど、最近、不審者が出るって」

「ああ言ってた言ってた」

「若葉、気をつけなさいよ。女の子は特に危険だから」

「その事なんだけどそういう不審者じゃないらしい」

「どういう事？」

「ええと……なんか、俺もどこで聞いたかは忘れたけど……放火魔
って言っていたような？」

「なんで疑問……こつちが訊いてるんだよー」

「いや確信無いからさ……あ、ああっ！」

幸祐が突然に大声を上げる。藍と若葉は手で耳を押さえる。

「急に一体なんなの？」

「炎で思い出した！　なんでこんな単純なことを忘れてたんだ……。
鍋を食べる以外の選択肢があつたはずなのに。藍さん？　炊飯器。
使えるよ、ね？」

「……過去のことよ」

「その開き直りは止めたら？　無駄だと思うよ、お母さん」

ここで三人は心の中で同じことを思っていた。しかし誰もそのこ
とを口には出さなかった。あまりにもこの場にいない少年を不憫に
思ったために。

一章（４） この世界の異常との遭遇

「はあ……はあ………」

白い息が出ては消える。

新代荘での他三名の会話を聞くことができなかった彩人は、この極寒の中でのお使いに伴う苦勞が必要なかったことなど知る由もない。そんな彼は雑木林に入っていた。

（さすがに女の子を背負って走るのは疲れる……俺も幸祐や若葉みたいに部活動に一生懸命勤しんでいればそんなにつかれないのかなあ）

初めの勢いは何処へ。今は走りから早歩きに変わっていた。

彩人は中学時代から帰宅部の道を貫き通しているので、運動をあまりせず、体力も筋力も幸祐には遠く及ばないし、女子である若葉にまでも負けることだろう。

（バイトできたらいいんだが……）

彩人たちが通っている帆布高校——新代荘から徒歩で通える距離（所要時間三十分）にあり、公立高校なので、経費がいろいろと浮くということに通うことになった——は原則、学生のアルバイト行為を禁止している。だが彩人は一年生の時に一度秘密裏にアルバイトをしていたことがある。その時には学校側には知られることなく続けていたのだが、藍の目からは逃れることはできなかった。彩人は藍からこつ酷くお説教を受けてしまった。それからは彩人だけでなく、若葉と幸祐もそのようなことは口に出さないようにしている。

（いくら貧乏だからってな……でも新代荘の、いや俺たちの現状を踏まえたと言えないのは理解している。理解しているつもりだ……。なのに……なのにだ！あの化粧品やは何だ！ずるい………というかひどい！俺たちには大した娯楽は与えられないのに！帰ったらまたとことん愚痴を言ってる）

それにこのお使いの報酬もない。ただ苦しむだけの罰ゲームみたいなものだ。

走るペースがやや落ちてきているが、雑木林の中間辺りまでやって来た。

（まだ半分ぐらいか……。もっとささつと行けるかと思ったのに……）

後ろの少女はまだ起きる様子はない。

（本当に大丈夫なんだろうか？）

と、その時。

「ん……」

耳のすぐ近くで声がした。

そんな近距離で声を出すことができるのは彩人に背負われている少女だけだ。

「起きたのか！」

彩人は目に留まった横に倒れた丸太に少女を座らせてあげる。そして大丈夫か、と声をかけコーンスープの缶を開けてそっと彼女の前に差し出す。

「飲みなよ。暖まるから」

少女はおぼろげな目をしながら缶に両手をのばしてゆっくり掴み、口にそっと運ぶ。すすつと音を立て、少しだけ飲む。

「もういいのか？」

一度缶に口を付けて話したきり動きが止まってしまった。眠いのだろうか。視線は下を向いたままではうつつとしている。

彩人が彼女の目の前で手を振ると、ようやく顔を上げた。

「だれ？」

少女は口を開いた。

「俺？ 俺の名前は彩人だ。フルネームだと『白上彩人』って言うんだけど」

「あ……、や、と」

「ああ、そうだが」

「あ、や……と」

少女はぼうつとしたまま『あやと』という言葉は何度も復唱し続け、だんだんとはっきりとした発音になってくる。

（一体、俺の名前を何回呼ぶのだろうか……）

彼女がその名をはっきりと言えるまで、彩人は彼女を見つめ続ける。

「あやと」

彼女はようやくちゃんと言い終えることができた。そして自分の呟き続けている言葉に突然はつとしたように顔をあげた。

「本当に……あやと……なの？」

彩人が聞いていた呟きはいつしか確認に変わっていた。

（どういうことだ？ これじゃまるでこの子は俺を知っているような）

「ああ、確かに俺は彩人だが……もしかして前にも会ったこと――

」

彼の言葉は途中で遮られた。それは不意に彼の視界の端に今まで無かったものが映ったからであった。彩人の右方数メートル先、ゆらつとした不気味な光が――

ふいに彩人の視線はそちらへ。

その方向を見た途端、目が大きく見開かれる。

光が眼前に迫っていた。そして迫りきった末に衝撃を生む。

「ぐあっ！」

気付いた時には体は吹き飛ばされ、雪の上に突っ伏していた。空気は氷点下にまで冷やされているというのに彩人は背中に熱を感じた。

（なんだ……。なにが……。どうなったんだ……）

思考を張り巡らそうとしても突然のことに頭が追いつかない。

（くそ……寒さのせいで頭がおかしくでもなったのか？ そうだ。さっきの、あの子はどこへ行った？）

雪が積もり氷上のように冷たい地面を這いつくばったまま顔を上

げる。

暗闇の中の転がっている懐中電灯が少女を照らしていた。彼女は彩人の前方にうずくまる様にして雪の覆った地面の上に寝そべっている。

（なんだったんださっきのは……とにかくあの子を起こしに行かないと）

起き上がって慌てて駆け寄ろうとする。

だが、それを妨げる一声。

「ちよっと待ってもらおうか」

（え？）

彩人は足を止めた。

（誰だ……？）

背後からずぶとい男の声。

彩人はその声に反応して瞬時に後ろを振り向いた。そうして彼はようやく気が付く。

「なんだよ、これ……」

彼の振り返った側は明るくなっていた。

ここは民家も近くにない雑木林の真ん中だ。もちろん電灯も立っていない。だから彩人は懐中電灯を使っていた。だがそれとは別に明かりがある。その光は懐中電灯よりも広範囲を照らしていた。橙色の光がゆらゆらと。

炎がその場を照らしていた。

その明るくなった方向から雪を踏みつける音がする。誰かが彩人たちに向かつて近づいてきていることは明らかだった。

だがまだ男の姿は見えない。

懐中電灯は少し離れたところに転がっているため、自分の手元にはなく相手を照らすこともできない。

「だ、誰だ……」

彩人は恐る恐る闇の中に尋ねる。しかし答えは返ってこない。
「誰だって聞いているんだ！」

彼の声は震えを押さえようともしやられなかった。

二回目の質問でようやく答えが返ってくる。

「ふん。そうか。見えていないなら好都合。一般人に危害を加えるつもりはない。言う事を聞けばな」

足音が止まった。炎が彩人の前に確かにいる何者かの姿が浮かびあがる。しかし照らされているのは腰あたりまでで、顔はまだ闇の中で確認できない。

炎。

（そうだ。不審者ってそういえば放火魔とか何とか。まさかこいつが学校で言っていた……。本当に現れるなんて……）

彩人は放火魔もことを思い出したが、男の目的は放火ではなかった。彼の目的は他にある。

「それを置いてここから立ち去れ」

（それ？）

男は『それ』と言った。だが彩人には男の言った『それ』が何を指しているのかわからなかった。

彩人が理解できないという様子を見かねた男がもう一言添える。

「おまえの向こう側に転がっている『それ』だ、『それ』」

後ろを振り返ってもそこにあるのは、彩人の所持品かお使いで買ってきた商品が散乱しているだけ。元々雑木林に何があるわけでもなく、それら以外に男の指す『それ』など見当たらない。

（まさか……）

だがそれら以外にある。いや、いる。

そこには少女が一人。

（まさか……この子のことだっていうのか？）

だがそれ以外に考えられない。

（なんだ？ 少女誘拐？ 放火魔？）

「それ……、それ？」

彩人はさつき男の言った言葉をもう一度思い出していた。

（あの娘のことを『それ』と呼んだ……？ それに『転がっている』だって？）

声の主はまるでこの少女を人ではなく物のように扱っているようだった。この男の目的は彩人にはさっぱりわからなくとも、絶対に渡してはいけないということだけはわかる。

（ひどい……。とにかく何だか危険だ。どうにかして早くこの子を連れて逃げよう……。一気に連れて逃げれば何とかなるか）

彩人はゆっくりと気付かれないように足を反対方向に回したのだが……。

「おい！」

男の声が背後から呼び止めることによって、彩人の動きを静止させる。

「聞こえなかったか？ 小僧。もう一度言っ」

（あつちからは俺の姿が見えているのか……）

彩人は凍ったように動けない。

「その少女を置いて行け」

先ほどよりも強く、相手を従わせるように、彩人に命令した。

（置いていく。この子を……）

彩人は少女に目を移す。

そして手がガタガタと震えていることに気がつく。

（なに？ 俺は一体どういう状況に巻き込まれているんだ？）

頭の中で警告音が鳴り響く。どうしたらよいかわからず次の行動へと移れない。

「遅い、さっさとどけ。でないと消すぞ」

彩人の行動が遅いことに苛立ちを覚えた男はさらに脅しを掛ける。

（消す……だって？ 殺す……ってことか？ あいつは凶器でも持っているのか？）

もし凶器、たとえばナイフを振りかざされたとして彩人は身を守るものはない。

（傘……）

彩人の足元には傘が一本落ちていた。行きは差していたが、帰りは少女を抱えるため使っていなかった物だ。

（こんなので抵抗できるのか？）

「そうだな。仕方ない、とりあえず見せておこうか」

男の言葉とともに直後、暗闇の中に突如新たな明かりが浮かぶ。それは橙色にゆらゆらと。

（あれは俺が吹き飛ばされた時に見た……）

男の顔が浮かび上がった。けれどその男はサングラスをしていて顔を隠している。まるで正体を明かさないようにするために。

しかし問題はそこではない。

彩人の目はいつぱいに見開かれていた。

（あいつ……どうやって火をつけやがった……。いやそうじゃない。どうなってるやがる……あれは―――！）

彩人の視線はその男の左手に向いていた。

その左手は異様だった。異常、だった。

「化け……物……」

彩人は気付いていなかったが、それを見た率直な感想が口からこぼれていた。

「ああ……」

男の方も自身の左手に目を向ける。

「ははは。そうだな」

男は自分の手に火が灯っているというのに何の変哲もないような目で見ている。

「お前達から見れば化け物かもな。どうだ？ おもしろいだろ？」

彩人は言葉を返すことができない。

（何なんだ……あれは？ 絶対におかしいだろ！）

「ビビッちまったか？ それはすまなかったな。さっきのはコイツをおまえの足元に放ったんだ。雪が融けるのは……まあ当たり前か。次はおまえの本体を狙う。だからただでは済まないぞ。もしかした

ら灰なら残るかもしれないな。一般人に知られたからには抹殺する。口封じってやつだな」

ははは、と含み笑いをしながら一方的に語りかける。その時でも男の左手は異様さを保ったままだ。

男の左手——彩人が化け物と称したその左手から火が上がっていた。闇の中で不気味に煌く。いびつな光景。にわかには信じがたい火が上がっている、もしくは燃えているといった表現のほうがぴったり合うかもしれない。だが手が焼けているわけではない。男は火の暑さもどちらにしてもこの事態が異常なことには変わりはない。（逃げなくちゃ……そうだ早く逃げないと……。俺は何をこんなところで立ちすくんでいるんだ！）

とにかく逃げることに、それが最優先事項。

（早く逃げないと殺される！）

彩人は慌てて帰る方向——皆の待つ新代荘——へ走り出そうとするのが、すぐに止まってしまふ。踏み出した右足だけが前に出ている。

（！）

彩人の前には少女が横たわっている。

（くそ……）

彩人はこの状況をとても恐れていた。夢ではないかとも思っている。早く逃げなければ確実にただでは済まない。声の主は少女を置いていけば危害は加えないと言った。少女をまたいででも逃げる事に専念すれば命は助かる。

（死にたくない……）

帰ったら待つてくれている人がいる。彼らはお腹を空かせて待っている。彼らは今自分がこんな状況に置かれているなんて微塵（みじん）も考えちゃいないだろう。自分は平和な日常が、ただ何事もなく過ごせばそれだけでよかった。だからこんな状況は不幸以外の何物でもない。明日は月曜日だ。明日から新しい一週間が始まる。普通に学校にだって行く。だから自分が死ぬなんて考えられない。ただ日々

を送っていた自分が。

彩人の頭の中でそのようなことがぐるぐると回る。

死にたくない、それは紛れもなく本心だ。

色々な事がぐるぐると。

（それでも）

これから出す決断は彩人にとってよいものになるかどうかかわからない。

それでも。

（置いていけるわけがないじゃないか……）

この状況で女の子を一人置いて逃げるなどということは、彩人にはできなかった。

だが、しかし。

（だけど……だからって俺に何ができるって言うんだ）

相手は化け物だ。手から火を出すなどただの人間ではない。

（奴には俺が見えている。いや、あの懐中電灯さえ消せれば……奴からは見えなくなるかもしれない。あれさえ消せたら逃げられるかもしれない）

もちろん少女を連れて。

「ま……待ってください……いや、ください……。わかった。俺は今すぐここを立ち去る。だから命だけは助けてください」

必死に救いを求めながら、彩人は男の出方に気を配りながらゆっくりと歩き出す。

「そうだな、まあ大目に見てやろう」

男からの返事に彩人は一先ず安心する。

（よし、このまま懐中電灯を拾い上げてあの子を……）

懐中電灯を拾い上げようと手を伸ばした時、熱風が横を遮った。

「熱っ……」

とつさに庇った腕をどけると空けた空間があった。

もちろんさつきまではこんな風になっていなかったはずだ。

そこには木々が何本も立っていて――

今やそこからは煙が立ち上り、積もっていた雪は忽然と姿を消し、残ったのは黒く焦げ炭と化した木々、残り火がところどころにあり、その光景を見えるように照らす。

「あ……あ……ああ……あ……ああ……」

「嘘を付くとは悪い奴だ。俺を見くびりすぎだ。全く、お前の行動などお見通しだよ。所詮、ガキの考えることだ。まあおもしろいから見逃してみただけだな」

再び男の手に炎が灯る。

「これでお前の置かれている状況ははっきりとしたか？お前にはもう助かる余地はない」

彩人はもう絶体絶命だった。唯一の逃げる手段——命の助かる手段は自分の手でつぶしてしまった。

「火葬^{かそう}つて、この国もやっていただろう？　ちょうどいいな」

彩人はどんどんパニック状態になっていく。

「骨は残る程度の火力にしといてやるさ。あ、でも痕跡は残したらまずいか」

男の言葉は彩人の耳に入っていないかった。それどころではなかった。今の彩人にはもう何を言っても聞こえない。

「跡形もなく消す。それと後ろのそれはたぶん大丈夫だ。お前だけを消す。それは大事な回収物だからな。それまで消し飛ばしたら、俺が今こうして何のために働いているのかわからなくなる」

彩人はもう終わりだと思った。

（俺って何してたっけ？　俺は藍さんにお使いを頼まれ、コンビニ行って、それで帰ってきてるとこだった……よな？　どこからおかしくなったんだろう……。この子と会ってからか？　俺はただこの子を助けようとしただけだ。そしたらいきなり化け物みたいなのが現れて……それで……）

「悪いな、小僧」

口先だけの男の言葉に同情の念。そして男は最後の言葉を彩人に告げる。

「灰になれ」

男は彩人に向かって火を宿した手を振りかざした。

膝は制御できなくなった機械のようにガタガタと震え、避けようとする事すらできなかった。膝についてただ炎が迫り来る方を向いているだけだった。

橙色の光が彩人の視界を埋め尽くす。白い雪と黒い闇を染めるように。そして夜の銀世界は橙色へと塗り替えられていく。

一章（5） 彼の答え

（俺……死ぬのか？）

そう思った彩人は目をつぶった。恐怖から目を逸らしたくて。もう助かりようがない。

だが、いつになっても炎の熱は感じられなかった。

（あれ？ 少しも熱くねえ……。むしろ普通に寒いままじゃねえか……。さっきの雪の中を歩いてる時と変わらない。ははっ、もう死後の世界だったりして……。それが死体になって俺自身が冷たくなっただか……）

「防いだだどつ?!」

声が聞こえた。

彩人のものではない。

（何だ？）

驚いた声を上げたのは、炎を手で操る芸当を見せ付けた化け物のような男だった。

彩人はそっと目を開ける。開けることができた。それはつまり。

「生きてる……。俺……生きてるのか？」

（なんで？）

その答えは目の前の光景を見ればわかった。

炎は彩人を襲ってきていた。確かに。

だが。

「どうなっているんだ……」

炎は何か見えな壁のようなものでせき止められているように見える。

そして。

その炎が阻まれている——見えない壁の前に一人。

「……」

そこに立っているのは男ではない、ましてや彩人のはずもない。
この場にいたもう一人の人物。

「さっきの……さっきの子なのか……」

そう、そこに立っていたのは銀の少女。

長い銀色の髪を揺らしている。

少女は見えない壁に手を当てている、否、かざしているとも言える体勢だった。

「あんなに弱っていたのに……」

彩人の言ったとおり少女は衰弱していた。目を覚ましてもずっとおぼろげな目をしていて意識がはつきりしていなかったというのに。「ふんっ、まだ動けたとはな……。それは予想の範囲外だ。さすがはB等級^{ランク}だな。よくもその状態でも俺のD等級^{ランク}の攻撃を防ぐことができる。万全の状態だったら俺は返り討ちにあつて、瞬殺されていただろうな」

（なんだ？ 等級^{ランク}？）

男の言葉には、その世界に生きる者にしか理解することができない言葉が含まれているようであった。

「ねえ……？」

少女の声だった。小さく、とても弱々しい消え入りそうな声で少女は言った。

彩人は耳を立ててどうにかその声を聞き取る。

「な、なんだ？」

少女の口から出た一言は端的だった。けれどもそれは彩人の胸を強く締め付けた。

その言葉は。

「逃げて……」

（そんな……）

彩人は信じられなかった。確かに彩人にはこの状況をどうすることもできない。しかし、少女の先ほどの容体、消えそうな声、それ

らが少女だつて深刻な状況だということを彩人にわからせる。
助ける側と助けられる側がいつの間にか入れ替わっていた。
それは一瞬で。

「君は……君はどうするつもりなんだ！」

一瞬で助けられる側に移つてしまった彩人はとても無力だった。
ただその異常な光景を見ていることしかできない。

「わからない……私は……いつまでもこうしていられる……わけじや……ない。だから早く。早くしないと……この壁が……もう……」

壁、という言葉に疑問を感じた彩人は目を凝らして見えない壁を見た。いや、完全に見えないわけではなかった。かすかにその場で炎よる光がぼやけて見える。

（溶けている？ あれは氷なのか？）

透明な壁は水滴のようなものがたくさん付いていて、それがたらたらと垂れていく。まさしく氷の造形物。だがそれはしだいに氷壁が徐々に薄くなつていく表れだった。

「鬱陶しいぞあー！」

男が叫ぶと彼の怒りに焚きつけられてかのように火力を増す。
それにしたがって壁が融ける速さは早まる。

「彩人！ 早く逃げて！」

少女が彩人に告げる。かなり焦っている調子だ。

（……砕ける！）

彩人は直感で悟り少女に飛び掛かる。

壁が碎かれるのはその数秒後だった。炎が壁を突き抜ける。

（避けられるか？！）

壁を突き破った炎は次々と雪を食らい尽くしていく。そして彩人と少女がさつきまで居たところは雪もなにもなくなる。

彩人は少女の体と一緒に道の脇にある。

「だ、大丈夫か……」

彩人は少女に覆いかぶさるような体勢で尋ねる。

「うう……」

「よかった……生きてる……」

さっきの炎によって懐中電灯はお陀仏になってしまった。そのためさっきより暗くはなったが残り火が代わりに照らしている。

二人は何とか炎から逃れることができた。

だがそれで終わりではない。

「せっかくの逃げる機会だったのにな、小僧。それを自分で無駄に
してしまうとは。もうお前が灰になるまでの時間は少ない。だから
少し与太話でも混ぜて生きる時間を延ばしてやろう。小僧、お前は
さっき俺のことを『化け物』と呼んだな？」

「……それがどうした」

「それも同じだ」

男は少女を指差す。

「この子も同じ……」

「そうだ。同じだ。この世界の異常。『異常』を。見ただろ？」

ブラウイタス

それがさっき氷の壁を作って俺の炎を防いだのを。だからそれもお
前の言う『化け物』だ。まあ正確には『化け物』ではなく『アルター改変者』
なのだがな。それを踏まえた上でお前はそれをどう思う？」

「……どう……思うだと？」

「危険だとは思わないか？」

根本的なことは男と少女は変わらない。どちらも同じ。普通では
ない。異常だ。

「でも……」

彩人は唾を一飲み。

「この子は……違う」

「なぜ？」

「それは……」

彩人は返す言葉に困ってしまう。

「違わなくはない。同じ存在だよ、それは」

「……」

「所詮俺たちの生きる世界はお前達、一般人とは違う。じゃあそれ

はその中に入るか？ 入らないだろう。常識、法則、そんなものから外れたそれも俺たちの世界にしか入ることしかできない。お前はそれをどうするつもりだ？ お前達の世界で生きていくことなどできはしない」

「俺は……」

「情けをくれてやる。もう一度だけお前に選択肢をやろう、最後のだ。お前の命を守るか、それを守るか、お前はどちらを選ぶ？」

「俺は……」

彩人に与えられた最後のチャンス。男は少女を素直に渡せば命をとるまでのことはしない。少女を引き渡したら、醜く情けない姿を晒しながら逃げることになる。男の目的はわからずとも、そうすれば一人の少女を自分の身代わりにしたことだ。

だがこの機会を逃せばこの場で死ぬ。

（俺はやっぱ死にたくない）

真っ白な人生を送ってきたにも関わらず、これからもそのような空虚な日々を続けたいと思っているのだ。生きたいと思っているのだ。理由もなく。何も得ることはできないわかっていながら。

死にたくない。

生きたい。

だが。

これは彩人自身も本当にわからないことだった。誰かが彼に囁いているようだった。そして彩人自身もその囁きの選択は正しいと思えてしまう。

この選択で、もし違うほうを選んでいればこれからもずっと変わらない日々を送っていたのかもしれないのに。だがこの時の彼には初めから選択肢などなかったのかもしれない。『前』の彼でなくとも、八年前の『あの時』から答えはもう決まっていたのだとしたら。『俺はやっぱりこの子を守る』

それが彩人の出した答えだ。この答えが彼に『変化』をもたらす。（俺はこの子を守らなければならない。そんな気がする。そんな気

がするんだ！)

彩人はこの少女にはなぜか懐かしさを感じていた。だがそのようなことはあるはずが無いと改める。

「そうか……」

言葉とともに炎が出現。

「残念だ。お前達の世界とこつも触れ合ってしまったのだな。だいぶ回り道をしてしまったようだ。さっきのお前が言った言葉を忘れるな。それがどういう答えかちゃん理解したつもりで答えたはずだからな。もう容赦はしない」

男は無防備な二人に近づいていく。

「早く逃げるぞ」

彩人が少女の手を引っ張って立ち上がらせるために、手をつかんだその時。

(なんだこれ?!)

頭か体か、何かがダイレクトに流れ込むような異様な感覚が彩人を包んだ。

「次は先程みたいにうまくいかないぞ？ もうそれは力を使えないだろうからな。これで本当に最後……」

男は異変に気付く。表情が真剣な顔つきになる。

警戒しろ。

彼の直感がそう告げた。

「なんなのかわからんが……さつさと片付けた方がよさそうだ」

男の手に炎が灯る。今度の炎は今までの物とは形状が異なる。ただ手から燃え広がっている炎は徐々に細長くなっていく。最終的には矢のような形になる。今、炎を普通に放つたら少女までも巻き込んでしまうと思い、彩人だけを仕留めるにはこの形状が最も有効的だと判断した。

「はっ！」

男は炎の矢を彩人目掛けて解き放つ。炎の矢は一直線に彩人へ向かう。

少女の手を掴んでから微動だにしていなかった。体が固まっている。

矢が彩人に突き刺さりそうになる瞬間。

[illegible]

男が炎を放った時に橙色の光が夜の闇を満たしたように、今度は

男は白い光の眩しさに怯む。

「何をした！」

視界ももちろん真っ暗だ。

「はあ……はあ……」

（俺、今、なにを？）

片手で頭を抑え、焦点も合わないまま地面を見ていた。

彩人と少女はまだ同じ場所にいる。無傷だ。

消えたのは彩人ではなく、炎の矢の方だった。

「これは……」

辺りは一変していた。

さっきまで焼かれて何もなかったはずの場所の地面が一面凍っていた。そこだけではない。彩人と少女を中心に辺り一体が凍りついていた。木々までも。

「小僧、何をした！」

男は彩人に尋ねるが、当の本人である彩人にも状況は掴めていない。

フラヴィタスターゲット

「いやこの異常は標的のもので間違いない。まだそれに余力が残っていたというのか？ いや、だがもう限界だったはずだ」

男は彩人の方を睨む。

「まさか……この小僧がやったというのか？」

そんなことはあるはずがない、と首を振る。

「いや確かにこの氷はあれの力だ……。やはりまだこれほどの力を残していたということか……。侮れんな。B等級^{ランク}はだてじゃない、ということか」

この時、男は気付いていなかった。

凍っているのは地面や木々だけではないことを。

「これは……体が動かないだ！」

炎を灯している右手から離れた部位は凍っていて身動きがとれなかった。

（どうしたんだ？ もしかして動けないのか？）

その男の様子を見た彩人は、これは二度とないチャンスだと思った。

二人と男の距離はまだ五メートルはある。

（今のうちに逃げるしかない！）

彩人は少女を再び抱える。

（あれは……）

二人がいる所に生えている木の脇に、コンビニで買った商品が入った袋が落ちていた。

（そうか！ あれを使えば）

彩人はそれも拾い上げて走り出した。

「くそっ！ おい、待ちやがれ！ 小僧！ こうなったら標的ターゲットに多少の火傷ができて仕方がないな。まとめてだ！ まとめて焼いてやる」

男は悪あがきで最初に使った火炎攻撃を今度は二人に向ける。

「そんな……！」

彩人は首だけ回し後方から迫る炎を見る。足は常に動かし続ける。

（このままだと食らっちゃう！）

少女を背負っていて、ただでさえ両手が塞がっているから、避ける余裕もない。

しかし炎は見えない壁に防がれる。

彩人は少女の方に目を移す。

「ありがとよ。助かった」

と、囁く。

少女はずっとぐったりしたままで反応はない。男の言つとおり、もう残りの力も少ないようだった。

「甘いなあ！ この距離でも俺の炎は届くぞ！」

留めだ、と言わんばかりの大声で男は叫んで今までで一番大きい炎を出現させる。

（このくらいか……）

彩人は立ち止まり少女を下ろす。

「ああ、そうだな」

そう。この距離なら。

彩人の目的は男と一定の距離をとることだった。

「この距離なら俺たちには被害はないよなっ！」

レジ袋に手をつ突っ込んで中身の一つを掴み取る。これは少女のよ

うに氷壁を作って防御のできない、ただの高校生でも可能な悪あがき。掴み取ったそれを思いつき男の方に向かって投げつけた。それは闇の中へ姿を消す。

男は一回り大きい炎を放射する。

「消えるおおおおおおお！」

「消えるのはお前のほうだ！」

二人の叫びが交錯した直後——爆発が起きた。

静けさの満ちた夜に爆音が響き渡り、爆風が雪を舞い散らす。

「うつ……」

彩人はすぐに少女の体を腕の中に収める。

必死で爆風から少女を庇う。

爆風に耐え切れなくなつた体が後方へと吹き飛ばされるが、今度は少女を手放すまいとしつかり抱えたままだ。そのまま雪の上につ伏せに倒れ、爆風が治まるまで少女を庇い続ける。

やがて爆風は止む。

雪の夜は静けさを取り戻した。

彩人は想像以上の結果になり完全にびびっていた。

（予想以上だ……）

彼は自分では気付いてはいなかったが冷や汗がたらたらと出ていた。心臓をバクバクさせながら爆発のあつた方を見る。

「……やったか？」

作戦が成功しても油断せず、彩人は警戒を解かない。爆発の起こつた方向をしばらく見続けていた。

「……」

男が追ってくる様子はない。

「ふう」

彩人は全身の力を抜いた。

「はは、はは……」

彩人は起こったことをただ笑うことしか出来なかった。

「これにこんなにも威力があるなんてな……」

レジ袋から男に向かって投げたものと同じ商品を手に取る。

彼の手にあるのはそう——ガスボンベ。

それが男に向かって彩人が投げたものだった。

辺りが暗かったおかげで、男はそれを確認することができなかったのが幸いして、そうとも知らず男はそれに向かって炎を放った。

結果、火がガスボンベに引火。

そして、ガス爆発。

藍に買ってこいと頼まれたものが彩人の命を守るための強力な武器となったことは事実だ。

「……俺はとんでもないことをしてしまったたんじゃないか？」
とにかく必死だったので自分の行為がどれほど危険だったのかをあとあとになってわかった。

これは『絶対にまねしてはいけません』の項目に完璧に当てはまってしまうが、まあ結果オーライ。

彩人はそうまとめた。命がある。少女を守りきった。それでいいじゃないか、と。

ようやく気を落ち着かせるようになってきた。

「一体なんだったんだ……」

彩人に起こった出来事。それはたかだか数分の出来事だった。だがそれはあまりにも衝撃的だった。銀髪の少女との遭遇。その直後、自分は何者かに突然襲われ、少女を渡せと責められた。さらにはその男は手から火を生み出すなどという人間離れしたことをやってのける。その火は何度とも彩人を狙って襲い掛かってきた。

（俺、生きている、よな……）

彩人は今でもこの出来事を信じられなかった。

だが、これでもう安心。

脅威は去った、はずだった。

「よくも……よくもやってくれたなああああああ！」

怒り狂った叫び声さえ無ければ。

一章(6) 最後の言葉

彩人の安心は一瞬で恐怖に変わる。

「殺す……殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す！ 」

男はゆっくりとした足取りで彩人たちに近寄ってくる。

「灰にしてやる！ 何の形をとどめることなくただ灰となれ！」

男が右手を天に高く突き上げて、その腕が炎の渦を巻く。次々と生み出される炎の渦は手の先へ昇り集約されていく。集約された後、炎は球体を形成。まるでコロナを纏^{まと}う太陽のようだ。

（なんだよあれ……）

火炎球は大きさを増し続け、それを掲げる男の体よりも大きくなる。

これに当たつてしまえば本当にただ灰となるか、灰さえ無くなつてしまふのではないかとも思えてならない。

彩人にはどうすることもできない。

防ぐことも。逃げることも。

ここで少女に助けを求めたとしても、無理だろう。氷壁で防ごうとしても一瞬にして打ち砕かれてしまうのがおちだ。

窮地。

本当の絶体絶命。

終わり。

「図に乗るなよ、世界の『バグ』が」

三回の銃声。その音がした直後。

「がはっ」

男は口から血を吐き出した。

三発の弾丸に撃ちぬかれた彼は火炎球のコントロールを失う。制

御されなくなつた。火炎球は球体を保つことができず、無数の火の粉となつて散らばる。

彩人は少女に預けていたダウンジャケットをとつさに掴んで頭から被り、少女の上にかぶさるように彼女を庇^{かば}う。

「くそ……。てめえら『OASP』の連中……か」

「これより改変者^{アルター}の削除を行います」

乱入者の一人が言う。

彼らは全部で三人。二人は黒服に身を包みいかにも怪しげな人物で、残りの一人は装飾品だらけのチャラついた格好をしており他の二人と比べて若い。二十歳ぐらいに見える。

（助かった？）

彼らが男の動きを止めてくれたおかげで火炎球は防がれたが、彼らはそれを防ぐために拳銃を用いた。そのようなことをするならば一般人であるわけがない。

敵か、味方か。

まだ安心はできなかった。

「待て『T2』、部外者と思われる二名を確認」

「『T1』了解。どうされますか？ 木賊^{とくさ}さん」

木賊。

そう呼ばれたこの集団のリーダーらしき人物は薄気味悪い笑みを浮かべてブレスレットやネックレスをちらちらと鳴らしながら、どうしようか、と顎に手をあて考える。

そして彼の口から解き放たれたのは。

「殺^やっちゃえ」

「了解しました」

（なに！）

黒服の一人が拳銃を持ち近づいてくる。

「殺されてたまるか！」

そう叫んだのは炎を操っていた男だ。

炎を灯した手で黒服の男の顔面をわしづかみにする。

「があああっ」

炎で顔面を焼かれうめき声を上げる。

彩人たちに向かつていた黒服の人もそちらを向く。

「へえ、頑張るねー」

木賊は少し離れたところからこの現場を見物しているようだった。仲間がやられているのに、楽しんでるようにさえ見える。

「貴様らまで邪魔しやがってええええ！」

今度は男の周囲で渦を巻く。

もう一人の黒服は腕を組んで防御体制。男の攻撃は今はず彩人たちに向けられていなかった。

「彩人……」

「き、君！」

少女はまた目を覚ましていた。まっすぐ彩人の顔を見つめている。「今からルネが彩人を守るから」

「ルネ？　それが君の名前？　……っていつか守るってどういうこと?!」

ルネと名乗ったその少女はその場に立ち上がる。

彩人には今から彼女がしようとしていることがなんとなくわかった。彼女が使う特別な力でこの場を鎮めようとしている。残りの力がわずかだというのに。それには対価があるにも関わらず。

ルネは言う。

「いい彩人？　たぶん『今』の彩人にはわからないと思うからさ、ルネが変なこと言っているように聞こえると思うけど聞いてくれたらうれしい……」

「え？」

「また巻き込んだじゃって、ごめん。たぶんルネも次に目が覚めたら『今』のルネではなくなると思うから。もし、また危ないことがあっても大丈夫だよ。だって彩人には『世界を変える力』がある。だから諦めちゃ駄目だよ」

「それはどういう……って、ルネ待って！」

彩人の言葉を待たずにルネは前へ踏み出した。ふらつきながらも前へ。彩人から離れていくように前へと。

「彩人。最後にまた会えてよかった」

ルネは最後に彩人の方を振り返り――初めて笑顔を見せた。だがそれはどこか悲しげで。

次の瞬間。

とても綺麗な銀色の光がその場をを包み込んでゆく。

銀色の光が彩人の視界を覆う。

「チッ、あいつも改変者^{アルター}だったか！ 『T1』『T2』引き上げだ

！」

これから起こることの危険性をいち早く察知できたのは新たな乱入者のうちの一人、木賊だった。部下二人に退却を命じる。

（眩しい……）

彩人はあまりの眩しさに目を開けることができない。この光の中で何が巻き起こっているのかまったくわからない。

やがて光は収束を初め、また元の暗闇へ。先ほど火炎球による火の粉が無数に飛び散って周囲の木々に燃え移っていたはずなのに、今は蠟燭^{ろうそく}のように軽く枝などに火が灯っているだけだった。

光が消えた時には全てが終わっていた。

炎を操る男も、新たに乱入してきた謎の三人組も姿はなくなっている。

この場に残されたのは彩人を除いて一人だけ。

「ルネ！」

その場所に残されたのは銀色の髪の少女。彼女の体力尽きたように倒れた体の上に天から粉雪が舞い降りる。彼女と似たその雪は彼女の体を溶け込ませて、このままでは彼女を覆い隠してまいそうだった。

彩人は急いで少女の元に駆け寄った。そして抱きかかえる。

「大丈夫か！　おい！」

声をかけても少女は目を覚まさない。あの光は間違いなく彼女が氷を出現させたように、何か特別な力を使つて引き起こしたのは明らかだ。おそらく余力を全て使い果たしたのだろう、と彩人は思う。

（とにかく早く連れ帰ろう！）

彩人はルネを背負い新代荘へ急いだ。

一章（7） 週末の終末

新代荘に着く頃には午後九時半を過ぎていた。

「藍さん！」

彩人は少女をおんぶして両手が塞がっているため、ドアを開けることができず、部屋の中にいる人に開けてもらおうと、藍を呼ぶ。

「藍さん、開けて！」

扉の向こうでバタバタと足音が鳴る。足音が止んだ後、ガチャツ、と扉の反対側で鍵を開ける音が。

「うっさいわよ！ ご近所の事も——」

「藍さん！」

何よ、と藍の声がして扉が内側から開く。

「早くこの子を！」

藍は彩人の背に目を落とすルネを見る。

「——！ なぜここに……」

「この子、すごい弱ってて。俺が帰ってくる途中で倒れていて……、って藍さん聞いてますか？」

藍は少女を見るなり、驚きの表情を崩さず、そのままずっと少女の方を見続けていた。彩人の話は耳に通っておらず、それより別の事が重要な事態だといったかのようなのである。

「どうかしたのー？ 早くご飯ー。もう峠を過ぎちゃったよ」

部屋の奥から、食事はまだかー、早くしろー、と若葉の待ちわびたという言葉が飛んでくる。

「あ、あそうね……。急いで部屋へ……」

彩人は藍の後を着いて行く。室内は外とは比べ物にならないほど暖かい。

だがこれで安心だ。ここまで来れば、ルネも温まることもできるし、炎の男や黒服の男たちのような者は襲ってこないだろう。

（これでもう安心――）

「不審者が現れたわ！」

「はあ?!」

彩人が口を開ける。

「なんだって?!」

若葉と幸祐が驚きの声を上げる。彩人も心の中で同じ事を叫んでいた。

（まさか、藍さんはさっきの出来事の事を知っているのか?!）

「彩人がとうとう少女誘拐を犯したわ！」

「はあ?!」

またも彩人の口が開く。

藍は相変わらずであつた。

彩人はその様子を見てさっきの違和感など気に留めなくなった。

そのようなことよりもっと重要なことはいえ――

（なんで俺が不審者扱いされるの?!）

何だと、と彩人と藍が丸机の置かれた部屋に入るより先に若葉と幸祐が飛び出してきた。

「え、なにこの子！ え、えっとこの子……外国人？」

「そうとしか言えないだろう……」

若葉と幸祐の二人は少女の綺麗な銀髪に戸惑っていた。

「それより早くこの子をなんとかしてあげて……」

彩人は新代荘に帰ったらすぐさま藍たちが行動してくれるだろうと思っていたのだが。

（扉を開けた時から何故か迅速にほいほいといかないんだ。今はそんなことをしている場合じゃない）

と、不満が溜まっていた。

「若葉は部屋に布団を敷いて、できるだけたくさんの毛布とか用意して」

「あ、うんわかった」

「彩人、その子を」

「あ、はい……」

彩人が藍に少女を託すと、藍は部屋に入っていく。

「藍さん、俺は何かやることありますか」

役割の与えられていない幸祐が協力を志願する。

「そうね、とりあえず彩人を取り押さえとして」

「だから何で?!」

困った様子で幸祐が彩人に近づく。

「……だそうだ」

「だそうだって……おい! マジでやんのかよ!」

「いやー、そう言われちゃったから……」

「言われちゃったからって……」

ちなみに今の彩人の状況説明をすると、腕をとられ、顎は床につき、がっしりと幸祐に取り押さえられている。

彩人は暴れたが逃れることはできないと悟り、おとなしくなる。

それを見計らって、彩人よりさらに状況が理解できていない幸祐が気になっていることを聞く。

「ところで、あの子、どうしたんだよ?」

「あの子は……」

言葉を詰まらせる。

(あんな事があったなんて話せるわけがないからな……)

「あの子は道で倒れてたんだよ……。それで俺が助けてここまで運んできた」

間違ったことは言っていない。

彩人が少女と最初に出会ったのは狭い路地だったし、助けたのは事実だ。

「そうか、色々大変だったな」

「ああ……」

頭を、あの男、あの黒服たち、そして最後にあの少女の事が過ぎ

る。

「大変だったよ」

その言葉はより重かった。

「なあ、幸祐？」

なんだ？ と、幸祐が聞きかえす。

「そろそろ放していただけないでしょうか？」

「ふむ」

彩人の腕を背中に回してしっかり固定していた幸祐の手が放れる。
（こいつ、見た目と沿わずに案外、力強いんだよな。まあ部活で鍛えているんだから当たり前か）

彩人は立ち上がって部屋に向かいルネの様子を見に行く。

「容態は？」

ルネは布団の中でぐっすり眠っているようだった。

「そうね。やっぱり体がとても冷え切っていたわ。とりあえずこのまま暖かくして安静にして置きましょう」

「この子の髪、綺麗だね」

若葉がポツリと呟いた。

彩人は今こうして改めてみてもそのルネは綺麗だと思った。最初に会った時、気を失っていた時の彼女の顔はつらそうな顔をしていた。しかし、今は苦しみから解放されて安らかに眠る姫のようだ。

彩人はその様子を見てほっと胸を撫で下ろす。

「さっ、この子はたぶんもう大丈夫でしょうから、私たちは食事よ、食事」

藍がぱちんと手を叩いて、空気を切り替える。

「そうじゃん！ 晩御飯まだじゃん！」

「もう空腹の山をとくに通り過ぎた……けど、やっぱり空腹に変わらない」

「つーか俺、めっちゃ寒い」

ガタガタと彩人の体が高速振動する。

「俺、先に風呂入りたい……」

その言葉が皆の忘れていたことを思い出させる。

「そういえば、風呂も駄目だったわね……」

「……今日どうするの？」

「明日までには何とかしておくから今日のところは我慢して」

「母さん、この借りはきつちり返してもらっからね……」

若葉の怨念おんねんに満ちた視線が藍を突き刺す。

「……さあ、鍋作るわよー！」

「聞いてないな……」

その後、四人で鍋を作って食べた。

彩人は鍋のおかげで何とか体を温めて持ち直すことに成功。

四人で鍋をつついていている間にルネのことについて炎の男や黒服のことは避けて説明を終えておいた。

ごちそうさまでした、と四人で手を合わせて食事を終える。ルネが起きた時の為に鍋の具は少し残してある。

「じゃあ今日はこれでお開きね」

四人とも丸机から立ち上がる。

「じゃあ、おやすみー」

「おやすみ」

若葉と幸祐が各自、自分の部屋へと戻っていった。

「彩人、あなたも自分の部屋に戻りなさい」

「ああ……うん」

彩人は少女の事が気になって、まだ彼女が寝ているそばにしゃがんでいた。

「ルネのことは、後は私に任せなさい。明日は学校でしょう？」

「わかった……」

渋々、彩人も自室へ戻ることにした。

彩人は自室に入るなり朝からたたんでいなかった敷布団に寝転がる。

「夢じゃないもん……」

今日の出来事を振り返っていた。

（お前達とは違う世界）

男の言っていた言葉を思い出す。

（あの子はこれからどうなるんだろう。俺たちみたいに新代荘で暮らすのかな）

彩人が新代荘に初めて来た時の事。

あの時の俺はどうだったっけ、と思い出そうとしてみるがいまいち思い出せなくて断念する。

（あの子は……俺たちの世界では……生きていくことはできないの
だろうか……）

そのまま眠りへ落ちていった。

一章（８） 週末の延長

ここは『〇〇一号室』、新代藍の部屋。

藍は少女が寝ている横で座っていた。もう彩人たちが帰ってか
らずっとこうしている。今頃彼らはもうおそらく皆眠っているだろ
う。

「やっぱり……この子なのね」

藍はその少女の名前を独り呟く。誰に語りかけるわけでもなく、
いや自分自身に語りかけているのかもしれない。

「また……私たちはあの世界に戻らなければいけないのかもしれない
いわね……。もう二度と関わらない。もうあの子達を巻き込まない
私が守ってみせる。そう心に決めたともしりだったのにね……」

独り言は続く。

「この子が高んどこなところにいるのか確かめなくちゃいけない
わ。もし奴らがこの町にまた……。また狙いに来ているのだとした
ら……。いや、それは不自然すぎる。この子が一人でいるってことは
ありえないわよね……」

藍はルネの頬に優しく手でなでる。

「二度と関わらないって決めたけど……」

藍は立ち上がって電話の前に行って受話器を取る。

「やっぱり気が進まないわね……」

受話器を取ったものの電話番号を押そうとしない。

（あー、もう！ あいつに掛けるのか！）
頭を掻く。

「これはあの子達のため！」

決心して電話のボタンを押していく。その電話番号にはもう何年
も掛けていない。昔の知人であり、それ以上に仲間であった者の元
へと電話を掛ける。

ブルルルル、と五回ぐらい鳴って、もしかしたら出ないのではな

いかと、期待してしまっただ、期待はすぐに打ち切られる。

『もしもし?』

男の声。懐かしい声だ。

『久しぶりね……』

藍は気乗りしない調子で語りかけた。

名乗ってもいないのに電話の相手はすぐに理解したらしく、

『ああ久しぶりだね』

と、返事は藍と相反して明るく、うれしさを隠しきれていないのが軽やかな調子だった。

『どうしたんだい突然? もう二度と掛けてこないと思っていたのに。まあ一応こちらの電話番号は変えておかなかったのは正解だったね。変えてたら君はこうして僕に掛けることはできなかったんだからね』

『ええ、二度と掛けるつもりは無かったわ。あなたの声も二度と聞きたくなかった』

『ひどいなー。どうだい最近。子守で忙しいかな?』

『あの子達はもう高校生よ』

藍はそつけなく答える。

『ほう、たくましくなったもんだな』

『それより……』

『君は今でも昔みたいに綺麗な』

電話の相手は久しぶりに藍の声を聞いたので心が浮いているようだった。

『いいかしら?』

『はいはい。せっかくの何年かぶりだっていうのに』

『八年』

『あの子の時が最後か、なんて言っただけ、白上彩人、君?』

『本当、あなたは鬱陶しくて憎たらしいわ』

『そうさ。間違っただよ。で。』

電話の相手は一拍おく。

『何があつた？』

先ほどまでの浮かれたトーンも話し方もどこかへ消え去ってしまったかのように、真面目になる。電話越しにぴりぴりとした空気が伝わる。

藍は本当にこいつに話していいものかと躊躇う。昔からどこか食えないところのある男だった。迷っているうちに電話の相手のほうから話を振ってきた。

『ヒンター来訪者のことかな？』

藍はその言葉を聞いて背筋に寒気さむけが走る。

（勘の鋭いやつめ）

相手は大方、こちらの話そうとしてることを読んでいるようなので、包み隠しても無駄だと判断した。

「ええ、そうよ。『あの時』の続きが始まるかもしれないわ」

二章（１） 異常は何処へ

「朝か……学校……面倒くさ……」

一週間の始まりの朝に出た第一声。

彩人^{あやと}は学校をサボりたい気は山々なのだが、そのようなことをしたら後々（藍）が恐ろしいのでそれは許されない。

起きようとして肩までかかっていた掛け布団をばさつとどけた途端に、冷気は容赦なく忍び寄ってきた。

「寒い……」

再び掛け布団を手を取って被り丸くなる。

部屋には暖房器具として電気ストーブが一台ある。これが唯一の暖房器具だ。後は厚着するとか毛布を肩にかけるとかで毎年冬を乗り越える。新代荘の他の面子も例外ではなく、皆このように今年の冬も過ごしている。

電気ストーブのスイッチを入れたまま寝るのは何かしら危険があるといけない（電気代の軽減もある）ので睡眠時は使用禁止というのが新代荘の規則の一つにある。

そのため朝になれば室内は完全に冷気でいっぱいに満たされて、冷蔵庫のようだ。

今日も寒いのだろう、とカーテンの閉まっている窓の方を布団の中に窺いながら見ていた。

このまま布団のぬくもりに包まれているところから、冷気を遮断するベールを取り払ったら、温度差の影響を多大に受けてしまう。

だから彩人は掛け布団を体に巻きながら立ち上がりカーテンを開けに向かう。

カーテンを開けてもぽかぽかとした朝の日差しはやはり拝むことはできなかった。

「今日も晴れないなー」

本日の空に青色なし。

本日も、だ。

灰色に少し薄みがかった感じである。雪は幸いにも降っていない。先週から色見市上空にある雪雲は少しずつ変化していたようだ。何日かすれば、お日様も顔を出すであろう。

外の様子を確認した彩人は時計を見る。時間にあまり余裕は無さそうだった。

藍の部屋へ朝食をとりに行かなければならないので、布団を外して着替えを終えた後、藍の部屋に向かう。

「おはようございまーす。ううつ……寒いっ」

新代荘の各部屋はそれぞれ別の住戸となっている。そのため部屋の移動は必ず一度は外に出なくては行えない。

外の寒気は室内の冷氣に劣ることなく、よりいっそう強烈なものだった。

「遅かったわね。遅刻しても知らないわよ」

彩人が起きてくるのが遅かったので味噌汁が冷めてしまったのを藍は台所で温め直していた。彼はまだちゃんと開かない目をこすり、ふらつきながら丸机のある部屋の奥へと歩いていく。

「あ……」

机の横に布団が敷かれている。

そこには眠っている銀髪白皙の少女。

今、彼女は若葉の服を着ている。

（そう……だったな……）

彼女を見たことで昨日の出来事が脳裏に蘇る。

夢ではなかったのだと。

それは実際にあったこと。

日常ではない——非日常。

それは一夜のことであり、朝はいつも通り。彩人が望んでいる日常である。

藍がお盆の上に朝食を乗せて運んできた。味噌の香りが伝わってくる。

「ルネは、あれからどうですか？」

第一に藍に尋ねておきたいことだった。彩人はそう尋ねつつ、ルネの顔が見える位置に座る。

藍はお盆の上の朝食を丸机の上に並べ終える。

「あなた達が自分の部屋に帰った後に一度目を覚ましたわ」

「本当ですか?!」

今の彩人にとっては何よりの吉報だった。

(あの状態からよくがんばったな)

彩人はルネの方を見て微笑む。

「ほらその子を見てにやけている場合じゃないでしょう?」

「にやけてないっ!」

「さっさと学校行きなさい」

「今日学校、あるの? 昨日あれだけ雪降ってて」

「なに馬鹿な事を言っているの? 幸祐も若葉も部活の朝練習で六時くらいにはもう出て行ったのよ。あんたも見習いなさい」

部屋の隅にある箒^{たんす}笥の上に置かれた時計は七時を三十分を過ぎていた。

彩人は学校の事などはどうでもいいから彼女のことを色々と聞きたかった。

「この子が起きた時どう?」

「起きたのはあなたたちが部屋に帰った後、そうね……十二時は過ぎていたわね。様子は……ぼーっとしてた」

「ぼーっと、って……」

それは彩人を少し不安にさせるような発言だった。

「とりあえず何か食べさせた方がいいと思ったから、鍋の残りもちやんと食べさせたわ。まあその後すぐ 寝ちゃったけど」

「なにか言ってた?」

「とくに何も。聞く暇もなかったし」

「そう……」

(まだ本調子じゃないのかな?)

藍の口元が少し上がる。

「なに？ やっぱりその気があるわけ？」

くすくす、と藍が微笑を浮かべる。

「そういうわけじゃないって！」

「ふふ、まあいいわ。そんなことよりさっさと食べちゃって。洗い物するから」

彩人は朝食を口の中へ急いで掻き込んで、ささっと済ませ学校へ行く支度する。

「じゃあ、ルネをお願い」

「はいはい、任せておきなさい。いつてらっしゃい」

藍はしつしと追い払う仕草で、ルネを気にしてばかりいてぐずぐずしている彩人を新代荘から追い出す。

そして追い出された彩人は気乗りせずに登校している。

昨日嫌と言うほど夕方まで降り続けていた雪は道路に積もっている。道の真ん中は車が通ったりして積もった雪が削り取られ、タイヤ痕が残っている。道の脇にある水路の近くはそのままの状態だった。

（ルネ、大丈夫でよかった……）

想像の世界だけで起こるような出来事が終わった後、ルネの体は昨日、氷のように冷たかった。本当に命が危険だったかもしれない。彩人は新代荘を出る前に彼女の手を優しく握ってみた。その時にはちゃんと人の温かさが伝わってきた。そのおかげで不安は一先ず消え去った。

彩人たちが通っている高校——帆布南高校はごく普通の公立高校だ。一応進学校ではあるがレベルの高い大学を目指せとまでは、勉強に力を入れているという気は感じられない。彩人にとってはとても過ごしやすい環境であった。

学校までの道のりは新代荘から北東に向かって徒歩二十五分。昨日行ったコンビニといい、どこかへ行こうとするとどうしても時間がかってしまう。さらに交通機関が通っているわけでもない

ので徒歩で移動するしかない。自転車さえあればそんな苦労はないのだろうが、生憎新代荘にはそのようなものを揃える経済的余裕はない。

住宅が建ち並ぶ道を抜けると橋の手前までやってきた。

学校へ行く途中に川が陸地を隔てているので、橋を渡らなければならぬ。この橋を渡ると新代荘周辺のような築五十、六十年といった古い家屋に比べて築二十年未満の比較的新しい住宅街がある。道路も白線できっちり分けられている二車線の車道になる。

川は彩人が歩いてきた道の周りの田のように凍ってはいない。滔々と流れる水はいかにも触っただけで手がその冷たさで痛くなりそうだった。

橋からは家々が建っているところより高い土地になっており、普段は違うのだがどの建物も白い屋根だった。

橋を渡り終わると新代荘が建てられた地域より新しい住宅街に差し掛かる。その中を進んでいくと店も見かけるようになってくる。ランドセルを背負った子供たちが集団で登校しているのも見かける。

「ガキだなー」

三人の小学生が雪球を作って投げ合っていた。

対して大人たちは雪かきで大変そうだ。家の駐車場や車の上に乗った雪をせっせと下ろしている。その駐車場の傍らには、一メートルはあるだろうか、雪だるまが作ってある。

「そっかいや今年はまだ作ってなかったか」

数日降り続けた雪は降っていた期間と同じくらい溶けるまでは時間がかかりそうなのでまだまだ間に合う。

空はまだ青空を見せる様子はない。空一面に灰色の膜が覆っている。

そんな晴れない空を見ても仕方がない、というよりは、彩人はルネと名乗った少女のことばかりを気にして歩き続けていた。

「何者なのだろう……」

帰ったら聞いてみるか、とまだ登校している途中だと言うのに、早く学校が終わりと思いつけている矢先のことだった。

「彩人おおおおおおおおおお」

唐突に大声で自分の名前を呼ぶ声。

「？」

彩人は呼ばれた方を振り向いた。

「ぐはっ！」

彩人は振り向いた瞬間、顔面に痛みと冷たさが染み渡る。

何だよ、と心の中で愚痴を言いながら顔についた雪を払う。

「ほれ、どうしたそんな暗い顔して！ もう一発いくぞ！」

目を開けると自分目掛けて雪球が飛んできていた。

「おっと」

それを横飛びして避ける。

路面は凍っていてとても滑りやすくなっていた。

「しまっ……！」

彩人は足を滑らせて完全にバランスを失い、不覚にも転倒。

「くっそう……」

人がよく通る歩道を歩いていたのでふわふわな雪は積もっておらず、クッションのように働いてくれなかった。

「ふん、どうだ」

尻をさすりながら地べたに座っている彩人を、腕を組み俯瞰している人物は、雪球を片手に持っていた。

先ほどの無邪気な小学生たちではない。彩人と同じ制服を着た高校生だ。

「ノツキー、てめえ何しやがる……」

彩人に呼ばれたノツキーと称された高校生男子はニヤニヤと笑みを浮かべている。

「いやあ、なんか彩人がぼーっとして歩いてるからな、ついぶつけたくなっちゃった」

本名、波瀬^{はせ}乃樹。

彩人と同じく南帆布高等学校に通う生徒で彩人のクラスメイトでもある。彩人とは中学校の時から付き合いで、今彩人が歩いている住宅街に住んでいる。やんちゃな小学生のような面影を感じさせられるが彩人よりは少し背が高い。

「顔面ヒットしたんだぞ！」

「それはすまなかつたな」

棒読みで誤る。これは昨日、藍に同じようなことをやられたばかりだ。

「覚悟しろっ！」

彩人はひそかに後ろで作っていた雪球を乃樹に向かって投げつける。

だが。

「フツ、甘いな」

乃樹は一步後ろに下がり、悠々と雪球を避ける。雪球は何も無いところへ飛んで行く。そしてその場に彩人を置いて学校の方へ歩き出した。

「逃げるのか！」

「仕返しをしたければ追いついてみる」

乃樹は尻を叩き彩人を挑発する。

彩人が立ち上がると同時に乃樹も走り出した。

「待てや！ このやろう！」

雪球二個分の雪を確保して、作りながら走る。その間も乃樹は逃げ続ける。

右手にある雪球を投げつけた。

前方を走っている乃樹はそれを避けて先ほどの彩人と同様、滑つて転倒。彩人はそれを見逃さず、顔面目掛けてもう一方の雪球をぶつける。もちろん顔面目掛けて。

目には目を齒には齒を、である。

そういうことで、これにて仕返し完了。

しかしその後も乃樹が再び攻撃し出したので、彩人も反撃し、と

いう小学生たちと同じことを数分間続けていた。

二人とも体を動かしたため、体は温まっていた。度を超して汗ま
で掻いてしまっているが。

今は二人の同意で休戦状態になり、普通に大人しく、高校生らし
く登校している。

「あ、そういえばさ……」

乃樹が先に話を切り出した。走り回っていたせいで息が切れてし
まっている。

「なんだよ……」

「噂で聞いたんだが昨日、火事があったの知ってるか？」

「……」

彩人は瞬時にわかった。

知っている。

知っていて当然だ。何せその事件の関係者なのだから。

「へ、へえ……」

「でさあ、その火事がさあ、あの向こうの方の雑木林で起こったらし
いんよ。それが結構でかくてさ、雑 木林にぽっかりと空いた木
々も何も無い場所がでちまつたらしい」

乃樹はそう言っただけで昨日彩人がコンビ二へ行く途中に通った方向を
指差す。

ドンピシャだった。

「けっこう近いんだな……」

「例の放火の件じゃないかって言われてる。そんな人がめったに立
ち寄らない場所で炎が出るわけがないだろう？ だから放火だろう
ってさ、恐いよな」。例の不審者と同一人物なのかね」

「さ、さあ……」

彩人は知らないふりをし続ける。自分が関わっているなどとうて
い言えないからである。

（そんな放火なんていう軽いもんじゃないぞ？ ただの放火魔じゃ
ないからな。手から炎出しよった。あんな奴は人間じゃな……いや、

これはいいや」

「捕まるといいよな、犯人。意外と大事みたいで警察も色々と動いてるらしい。火を放っただけじゃなくて、その火事では爆発もあったみたいなんだよ」

爆発。

彩人の肩がびくつ、と敏感に反応する。

「爆発物まで持ち歩いてるとか、放火魔から爆弾魔にランクアップだぞ」

乃樹は噂話を続ける。

彩人は心配していた。

（え……何かこれやばい？ 爆発物って俺があの時投げたガスボンベのことじゃないか？ もしそうだったとしたら、その爆弾魔って俺になっちゃうじゃねえか！ いや……でも、よく考える、俺。炎を使っていたのはあの男のほうだったし、もとはといえばあちら側に問題があるわけであって……俺に責任はない。そう自己防衛だ！俺は悪くない。警察に捕まることなんて……あるはずが……）

「おい、彩人大丈夫か？ 顔色が悪いぞ？」

彩人がずつとうつむいて一言もしゃべらないので、乃樹が心配になって、ひよつとしたら体調が悪いのか、などと思っていた。

「ご、ごめんなさい！ それだけは勘弁してくださいっ！」

彩人は乃樹に土下座ポーズをとっていた。さらに両手を差し出していた。

「お前……どうした？」

乃樹はそのような彩人の姿を見て一歩後ずさりしていた。

（え？）

ようやく彩人の頭が状況に追いついた。

「うおおおおお！ 俺なにしてたんだあああ！」

「彩人、どこだ、どこが悪いんだ？ 頭か？ そうか頭なんだな？」

よし俺が一発、お前が正気に戻ることを祈って拳を叩き込む！
戻ってこい彩人おおお！」

「正気だ！ あほが！」

乃樹が拳を振ろうとしたところへ彩人のカウンターが炸裂。
カウンターは腹部へ。

「ぐっはっ」

乃樹が腹を押さえて蹲る。

「く……よかった……正気のように……だ……な……」

「あ、ごめん……」

彩人は正直、ここまで強く力を入れたつもりはなかったのだが運悪くいい具合（この場合は悪い具合の方が正しい）に決まってしまうたらしかった。

まだ学校に辿り着いてはいなかったが、学校のある方角から予鈴が聞こえてきた。

予鈴の五分後に鳴る本鈴に間に合わなければ遅刻となる。

現状、乃樹が負傷中。

いつもなら構わず置いていくのだが、今回は自分に原因があると思っただけは止めにした。

彩人は乃樹に肩を貸して、二人は学校へ行った。
もちろん二人とも遅刻だった。



その日の授業は教室移動の必要のないものばかりが集まっていたため、朝来てから席を一度も離れていない。

彩人の席は窓側、教室の後ろから二番目に位置している。

そこからはグラウンドが見え、体育の授業で寒い中、上は体操着一枚、下は膝までの丈のズボンといった格好で生徒たちが走っていた。

彩人は、数学教師がチョーク片手に黒板を数式で埋め尽くしている最中、ぼんやりと窓の外を見続ける。

決してグラウンドを走っている女子を見ているわけではない。

「なあなあ、雨ちゃん」

彩人の後ろの席に座る乃樹が先生に気付かれないようにひっそりと隣の席に座る雨夜（あまや『あめ雨ちゃん』という愛称は乃樹が命名）に話しかける。

「ん？ どうしたノツキー」

雨夜は小首をかしげながら乃樹と同様に小声で聞き返す。

「どう思う？」

乃樹はこれこれと、ずっと窓を見続けている彩人を指差す。

「？」

雨夜の首がさらに右へ傾く。彼女の最大の特徴であるといえる、末端をゴムで縛られた長いサイドテールが床についてしまいそうなほどだ。

雨夜は彩人の方を見る。

「駄目だねー、彩とん、体育の授業をしている女の子に気を取られるなんて」

「いやそうじゃなくってさ」

「？」

またサイドテールが地面に付きそうになる。

「今日なんか、様子がおかしくねえ？」

「ああ、確かにそんな感じするねえ」

「朝っぱらから何か暗いつていうか……考え事してる感じだった」
「そうだね……」

ふむふむ、と顎に手を当て考える。

「最近、彩とんの周囲で変化は？」

「変わったことか……んー、いつも通りでぐーたらしてるなー。あ
っ！」

乃樹が大声を出してしまった。

「しー」

雨夜が人差し指を立てる。

「チョークを持つ手を止めた数学教師が「どうかしたか？」とやか

ましいという意味をこめた上で言ってきたのを、乃樹は「消しゴムを落しました」と言ってやり過ごす。

「で、変化って？」

「先週の金曜日のことなんだけど、これがな……」

「なにになに？」

「掃除を真面目にやってたんだよ、こいつ。すごくね？」

雨夜の目が半目になる。

「なーんだ……」

「あれ？　そういうことじゃないのか？」

「ノツキーは鈍感だなー、もう。そうじゃなくってさ、あれはズバリ」

「ズバリ？」

「恋、だね」

探偵っぽく決めようとした風に言う。得意げな顔で白い歯がチラリと見え、Vの字に開かれた親指と人差し指が顎に当てられている。

「さいですか……」

今度は乃樹が半目になる。

「春の到来だ！」

うんうん、と納得したように雨夜は頷く。

「それは……あるのかねー。こんな窓の外みたいに冬真っ盛りだと思っけどなー。一緒に住んでる若葉ちゃんも幸祐の方に気があるんだろっし」

乃樹は中学時代から彩人の周りで好きな人とかの噂が全く立っていなかったのを思い出す。

「あの二人付き合ってるのか、付き合っていないのか未だにはつきりしないよね、まったく。というかその話は置いておいてー、あれ？　あまりその気はしない？　私は恋わずらいで間違いないと思ったんだけどなー。窓の外を見ながら、『寒々しい景色だなー』とかで自分の気持ちとのギャップ差に落ち込んでいるんだよ。ギャップ萌え！」

「いや、ギャップ萌えって意味わかんないし」

「彩とんは多分心の中で『フッ、そうか……どうやら俺の方が来るのが少しばかり早かったよう、だな。恨むなら気温を上げようとせず雪ばかり降らせる天にしな（キラッ）。』とか、そんなふうに思っちゃってるんだよー」

「そんな彩人……きもいな」

「うん……ま、まあノリと言っやつだよ。実際にそんなことを言う彩とんを見たら、爆笑か白けるかのどっちかだよ」

彩人の様子がいつもと違うことに乃樹と雨夜は、様々な想像を膨らませて二人で盛り上がった。その会話をしているうちに刻々と時間は過ぎてゆき、授業終了のチャイムになる。学級長が起立の号令をかけて礼をした後、彩人は着席せずにそのまま、二人のほうを向き。

「勝手な想像すんな」

「あはは、聞こえてましたか……」

乃樹と雨夜はぺこりと小さく頭を下げる。

彩人は教室の外へと出て行こうとする。

「彩人！ どこ行くんだよ！」

乃樹が立ち去る彩人の後姿に尋ねる。

彩人は、トイレだよ、と言って出て行った。

「聞かれちゃってたねー」

あはは、と困った表情の雨夜が乃樹の隣に立つ。

「やつぱり、何かあるな」

「ちよつくら探りいれてみますか？」

内密の企てをする二人であった

二章（２） 白色と銀色は似ている？

彩人はトイレには行かず学校の外庭——木製テーブル、チェアなどが設置されていたりする——に出てきていた。

午前中の授業はこれで終わり。

今は昼休みだ。

普段なら昼食時は教室ではなく外で食べるという生徒もたくさんいるのだが、芝生は一面雪が降り積もったままで寒い中わざわざ暖房のついている教室から出てくる生徒はいない。昼食のためではないが、グラウンドで雪合戦を始める生徒がいる。

「帰っちゃおうかな……」

彩人は午後の授業をサボってしまおうかと思いついていた。

（どうせ授業なんて耳に入らないしな……）

いつもは午後の授業を受けるのが面倒くさいからサボりたいと思うことが多いのだが、今日はいつもと違う感じだった。サボりたいから、というよりは早く新代荘に帰りたい。そればかり朝から思い続けていたのだった。

「でもな……」

こんなにも早く帰ってしまったら新代荘にいる藍に面倒なことをさせられるに決まっていた。

「どうした彩人？　こんなところで」

ふと、後ろから声をかけられる。

「幸祐か」

「窓から見えたから出てきてみた」

「俺は何もしてねえよ」

「帰るなよ」

ギクツ、と肩が動く。

「ルネっていう子は藍さんに任せておけよ」

俺たち、とは若葉のことだろう。

幸祐には何から何までも彩人が思っていることがわかりきっているようだった。

「部活ないんだから俺たちより早く帰れるだろう？」

「……」

「ほら、中に戻るぞ」

すたすたと幸祐は昇降口の方へ歩いていく。

幸祐は彩人を引き止めるためだけに外へ出てきたようだ。

「はあ、仕方ないか……」

彩人はそう一言呟き学校の方へ踵を返す。

（今帰っても起きているとは限らないもん……）

彩人が教室に帰ると、雨夜と乃樹がひそひそと話をしていた。それを横目で一瞥して通り過ぎ、自分の席に着いてまだ食べていなかった藍お手製弁当を食べた。

午後の授業は一応黒板の前に立つ先生の話をもくくしながら聞いていた。

とても長く感じた午後の授業が全て終了し放課後になる。

部活動に参加していない彩人は教室から出てまっすぐ昇降口へ向かう。その足取りは速かった。いつもならば東にある新代荘とは逆の学校より西の方にふらりとぶらつくのだが、今日はどこにも立ち寄ることなく一直線に新代荘へと帰った。

鞆を持ったまま自分の部屋に向かわずに藍の部屋のドアをあける。

「そんな急がなくてもいいのに……」

藍は鞆を自分の部屋に置いて来ないで部屋に真っ先に入ってきた彩人を見て呟く。そして彩人の目を見て「いいわよ。上がりなさい」と彩人を招き入れた。

「ルネなら今ちようど起きたところよ」

それを聞き、彩人は今すぐにでも走って朝に彼女が寝ていた部屋へ行きたかったが、廊下は一人しか通れない幅で、前方には藍がいるので小股のはや歩きになっていた。

二人は廊下から部屋に出る。

彩人は見た。

ルネはそこにいた。眠ってはいない。二人が入ってくる方向をじつと見ていた。その目は透き通った、淡く、そして澄んだ青い瞳。まるでガラス細工のビー玉のようである。

彩人はその目に吸い込まれそうになった。

今までは眠っていて瞼の裏に隠れていて見えなかった。昨晚、彩人を助けてくれた時も暗くてよく見ることはできなかった。

彩人はその目に見惚れて言葉を発することができなかった。

「このアホみたいな顔をした子がさっき話した白上彩人」

藍はすでに彩人たちの紹介をしていた。

「えっと初めまして……じゃないか。昨日はもう会ってるから……。覚えてる……かな？　昨日俺は君が道端で倒れているのを見つけたんだ、け、ど……」

ルネの綺麗な双眸はまっすぐ彩人の目を見ている。ただ見ているだけ。何も話そうとしない。何を考えているのかわからない。感情があるのかもわからない。ガラスなのは彼女の瞳だけではなかった。彼女そのものがガラスの『結晶』のような。

神秘的、不思議、不気味、一体どれが正しいのかわからない。

「藍さん……」

「ずっとこの様子よ……」

藍は彩人の言いたいことを察して、昨日もこのようにただ無言だった、と続けた。

彩人は藍が朝に言っていた「何も言っていなかった」「ぼーっとしたようすだった」という言葉の意味をここにきて理解した。

（昨日と様子が変わらないか？）

最後に見せたあの笑顔はもう見せてくれないような気がした。

「この子、あなたに任せてもいいかしら……？」

藍が唐突に何の脈絡かわかっていない彩人に頼んだ。

「え……それは……どういう？」

「私はちよつと出かけてくるわ。この部屋にいてくれて構わないか

ら。ごめんね、力に慣れなくて」

藍は、彼女と一番近い位置に立っているのはあなたよ、と肩を叩いて彩人の横から立ち去ってしまった。

「……」

「……」

部屋に残された二人。藍が出て行くときのドアの閉まる音が沈黙の部屋に響く。

彼女は彩人から目を離し、ぼーっと虚空を見つめ始めた。

（俺が一番近い位置に立っているってどういうことだ？ 藍さんは俺にどうしろっていうんだ……）

沈黙を破るために、とりあえず無難な質問をから始める。

「ルネ？ 大丈夫？」

返事は無い。

しばらくルネの様子を見てみると彼女の方から口を開いた。

「——い」

「ごめん、もう一回言ってくれる？」

ルネはとても小さな声でボソリとしか言わなかったので、うまく聞き取ることができなかった。

彼女はもう一度言う。

「……わからない」

と。

「わからないって……」

わからない、その言葉の意味が彩人にはわからない。

だが、わかる。彼女の声が怯えているということは。

「なあ？ わからないっていうのは、どういうことなんだ？ よければ教えてくれないか？ ルネ」

藍はルネの体調は良くなったと言っていた。しかし彼女の様子があまりにも弱々しく、これ以上怯えさせないように優しく尋ねる。

ルネは再び黙ってしまった。

（怯えるのも無理もないか。この子はずっと眠っていたんだ。起き

たら自分の知らない人がそばにいて、さらに今いる場所も全く知らない。周りは知らないことだらけなんだからな……)

「無理はしなくてもいいよ。話したくないなら話さなくてもいいからさ」

だが彩人は心の中で思っていることと正反対のことを口に出している。

彼の本心では本当は真相を知りたがっていた。

わからないのはルネだけではない。彩人もであった。

昨夜、自身の遭遇した事件。

手から炎を出現させて見せたあの男は一体何者か。なぜあの男はこの少女を狙っていたのか。男が出した炎とルネが作った氷の壁、そして後から乱入してきた謎の三人組。これらの超常現象はどうしたら説明がつくのか。

今日学校でもずつと気になって仕方がなかった。もし首を突っ込んでしまったら男の言っていたあちら側の世界に入り込んでしまう。入り込んでしまったらどうなるか。そんなことわかるはずがない。ただ良いことがあるなんてことは一度たりとも思わなかった。何せ命を狙われたのだから。子供同士のおふざけや喧嘩とはわけが違う。だから関わってはいけないと思い、それら全てを忘れてしまおうと一度は決めた。けれどもそれはどうしても忘れることができず、昨夜の出来事は脳裏にしっかりと焼き付けられてしまっていた。

(この子はあちら側の世界にいるのか……。なにが一番近いに立っている、だ。俺はこの子のために何もできないじゃないか……)

彩人は自分の無力さに嫌気が差し、ルネも今はそつとしておいた方がいいのかもしれないと思って、もう自分の部屋に戻ろうと思い立った時。

「ルネ……」

ようやくルネは勇気を振り絞り他者に告げた。彼女は掛け布団を両方の手で強く握っていた。

「ん？」

「ルネって――」

「――なに？」

なに？

その問いが何を意図するのか……。

「ルネ。それはどうい――」

（待てよ……）

彩人は思考を巡らせる。

この反応は知っている。彩人もかつて自分の名前を呼ばれて同じ反応をしたことがある。

（そうだ……これは――）

「記憶……喪失……」

「おい……ルネ？ お前の名前はルネだ。そして俺の名前は彩人だ。わかるか？」

「わたしの……名前……」

彩人の予想は残念なことに当たっていた。

「なんで……どうして……」

昨日の今日で自分の名前さえ忘れてしまった。彼にはその理由が全くわからない。

だが紛れも無い事実。

「わからない……わからないよ……」

ルネは首を振って彩人のほうを見る。その目は救いを求めている目だ。

彼女の雪のように白く綺麗な手が彩人の服の裾を掴む。

「あなたは誰？ わたしを知っているの？」

彼女は混乱している。

「ねえ？」

彼女は問うことをやめない。

「ねえ……何か答えてよ……」

雪が溶け出すように目元に涙が溜まっていく。
それを見て彩人はようやく気付いた。

（違うだろう。俺が混乱していてどうする！）

そして藍がここを出て行く前に言った言葉を思い出す。

（そうか……）

「それで藍さんは俺にこの子を……」

記憶を失くした少女は助けを求めている。

記憶が無いという恐怖から。

そして彼女を理解し救うことができるのは同じ境遇を味わったことのある人物。

藍さんはそう思って俺にこの娘を任せたんだ、と彩人は思った。

「俺は……君を知っている……」

「ほん……とう？」

「ああ、少しだけだが」

彼女と会ったのは昨日が初めてであるが、彩人はルネを一先ず安心させることが重要だと考えた。そしてルネが落ち着き始めたところで話を進めることにする。

「君がどのくらい覚えているか教えてくれないか？　少しでもいい断片でも。何か覚えていることはないかな？」

彼女に残された記憶を探る。何かあればそれは彼女自身が記憶を取り戻すきっかけになるかもしれないからだ。

「……覚えていること？」

（思い出させてやりたい）

「そうだ。何でもいい。たとえば……『風景』とか『人物』とか自分のことじゃないものでも何でもいいから！」

（ルネに俺と同じ苦しみは味わって欲しくない）

「え、えっ……と」

ルネが言葉を詰まらせる。

彩人は必死になってしまっていたので気がつかなかった。彼の手は少女の華奢な肩をしっかりと掴んでいた。そして顔も目と鼻の先に……。

「ご、ごめん！」

咄嗟に彼女から手を放す。

（しまった……）

彩人は、恐がらせてしまったか、と内心不安だらけ。ここからどうつなげればいいのか困ってしまう。手が宙を漂う。

「……。ちよつとだけ覚えてる……」

「ほ。本当か？！」

ルネが返事を返してくれたことと、覚えていることがあるという、二つのことで彩人は安心すると同時にとうれしさが表情ににじみ出る。

「どんななの？」

「暗かった」

「暗かった？」

ルネは頷く。

「暗かった。でも、明るくて……暖かった」

「暖かった？」

「どういふことなのかはよくわからないの。でも黒か白しか無いところだった。なぜか、その時のことを思い出すと心が落ち着くような気がする。暖かい。」

「白と黒。暖かい、か……」

（白……白い物。暗くて……）

彩人は一つ思い当たることがあり、立ち上がる。彼が立ち上がるとルネも見上げる形で彼を目で追う。

（もしかして……）

向かう先は窓。そしてカーテンを開けてルネにそれを見せる。

「白い物っていうのは『これ』のことじゃないか？」

冬なので五時ぐらいでもちようどいいだろう。

そこには闇の中に白い粉が降り、そして積もっていた。

「そう……かもしれない」

ルネの反応を確認し終えて、彩人はカーテンを閉めて彼女の傍にまた座り込む。

（おそらく、これは昨日のことではないだろうか？ できればそれ以前のことも何か覚えているといいのだが）

「そう、か。じゃあ他に。それより前のことは覚えていないか？」

ルネは考え込む。

必死に何かを思い出そうとしているのだろうか表情は曇ってしまった。

「よく思い出せない……」

彩人は自分と出会う以前のことを聞き出そうと思ったのだが、思うようにはいかせてくれなかった。

（昨夜以前の記憶が全部消え去っているのか……）

それはかなりの障害だった。

彩人が彼女と出会ったのは昨日だ。これでは、彼女がどこからきたのか、何者なのかさえわからない。

（聞くべきなのだろうか……）

知ってしまったえば自分も今いる側の世界から離れてしまうかも知れない。でも、彼女のことがかかるなら、何かの手がかりが手に入るなら。

（俺は聞くべきだ）

踏み込んではいけないような一線を彼は跨ぐと決心した。

「なあ？」

「炎と氷、覚えているか？」

彩人が尋ねたのはあの男とおそらくルネもいる、あちら側の世界のことだった。異常。普通では考えられないような、まさに存在するはずがない空想の中だけの、小説の中とかに出てくる魔法のよう

な力。

「炎？ 氷？」

「見た憶えは無いか？」

ルネからよい反応は得られなかった。

「そうか……」

彩人にとって衝撃的だったあの光景ならばルネも覚えているのではないか、という期待に託してみたのだがこれも失敗。

（まだだ……）

だが彼はまだ諦めない。

（あの魔法のような力は必ず『ルネ』という人が何者なのかということ を明らかにする手がかりであることは間違いないはずだ）

「俺は今から昨日の夜あったことを全て話す。だからなにか思い出 すことがあったら言ってくれ」

「うん……、あ、でもその前に一ついい？」

ルネは優しく問いかけた。

「さっき言っていた『ルネ』というのは……わたしの名前だったよね？」

「あ、ああそうだよ」

それは彩人がルネという人物について知っている唯一、確信性の もてることだった。

「君が自分でそう名乗っていたから間違いない……と思うよ？」

「じゃあ、これから私のことを『ルネ』って呼んで」

「え？」

ルネは、だつて、と言い。

「私のことをその名前で呼ばないようにしていたでしょ？」

彩人はルネに心を見透かされた気がした。

「私が『ルネ』だとしても、その名前で呼ばれたところで私にはその 実感がないから……。えつと……『あーと』だったっけ？ あな たはそれを気遣ってくれたんじゃないの？」

「あ……うん。まあそんな感じだ……。つと。ところで『あーと』っ

てなんのこと？」

「あなたの名前」

「『彩人』ですが……」

「ご、ごめん！」

「おお……！ 気にしないでいいって」

彩人はルネとの間の壁が溶けていくのを感じる。

美しくも、氷のように冷たく、ガラスの置物のようだったルネは、今はもうそのようなことを思わせなくなっていた。

「さて……」

彩人は昨夜の一抹を語る。

「初めに謝っておかなければいけないんだけど……さっき俺はルネを知っているって言ったけど実は、出会ったのは昨日の夜なんだ。変に期待させてしまっていたら、ごめん。」

「……いいよ。続けて」

「ありがとう。俺が細道を歩いている時、ルネをはじめて見た時だ。ルネは雪が降っている寒い中を一人で歩いていて、俺とすれ違った時に突然倒れそうになった。そのところを俺が受け止めたというのが、最初だな。その時、俺は声を掛けたけど君は返事を返すこともできない状態だった」

炎を操った男が焼き付けたかのように、脳裏に鮮明に残されているあの出来事を、フィルムを再生していくがごとく思い出していく。「俺はルネを新代荘、えつと……今いるこの場所に連れて来ようとしたんだ」

「……ルネを助けてくれた？」

「ま、まあそうなる……かな？」

「ありがとう」

ルネが笑顔を見せる。今までずっと悲しげな目をしていたのが全て飛んだわけではないが、それでも今までの表情より断然良い表情となっている。

「ど、どう……いたしまして」

彩人はその笑顔を見てうれしさとともに恥ずかしさを感じ、目を少し逸らし指で頬を搔いてしまう。

「さ、さあ続けよう」

（この先はあの男と遭遇したところだ。もう迷ったりはしない）

「俺がルネを負ぶって走っている途中で一度目を覚ましたんだ。だけれどその時のことなんだけど……君のことを狙っている人が現れた」

ルネの表情が曇る。だがこれも彩人も覚悟していたことだ。少々不安にさせたとしても、やはり何かを思い出させてやりたい気持ちが上回った。話すとちゃんと一度決断したことなのだから曲げるわけにはいかない。

「恐いかもしれないけど、お願いだ。聞いてくれ」

彩人は、これで少しは恐怖が弱まれば、とルネの手を握る。頼れるものがいれば安心感を与えることができる。彼女の小さな手も彩人の手を握り返す。安心感にかわる肌のぬくもりが伝わる。

「その男の目的はおそらくルネを捕まえることだったと思う。目的とか、捕まえた後どうするかはわからないけど」

ルネの手が彩人の手を強く握る。

「これは馬鹿馬鹿しいことだと思うかもしれないけど、ここで訊きたいことがある。ルネは魔法みたいな不思議な力は使えるのか？」

「ま、ほ、う？」

（駄目か……）

「ルネを追っていた男について話そう。男はその魔法みたいな不思議な力を使っただ。炎を何も無い手から生み出して、それを自在に操ることができた。信じられないかもしれないけど事実なんだ。

男はその炎を使って俺たちを襲ってきた」

「炎……」

「でもその男だけじゃない。ルネも同じような力を使っていた」

「ルネが？」

「ルネは氷を操っていた。君にもその男と同じように何か不思議な力を使えるらしい」

「氷……。ルネはそんなの知らない。できないよ。怖い……」
手の締め付けがまた強くなる。

「でもその力のおかげで俺は助かった」
「え？」

男が彩人に炎を振りかざした時、普通なら絶対に焼き殺されていただろう。彼がこうしてここにいるのもルネが不思議な力を使って氷壁で守ってくれたおかげだ。

「ルネがその力を使ってくれなかった俺は今頃灰になっていただろうな。だから覚えてないと思うけど、ルネは俺の命の恩人だよ」

ルネの顔がやや驚きに満ちた後、うれしげな顔になりかけたその

時

「うつ……！」

彼女の手が彩人の手から離れ彼女の頭に当てられる。

「大丈夫か?!」

「大丈夫……少し頭が……。何か思い出しそうだったのに……」

「無理に思い出そうとしちゃ駄目だ」

急なことで彩人も戸惑う。

「もう一度横になった方がいいかな？」

「大丈夫だから……続けて……」

でも、と彩人が言うのをルネは押しとどめる。

「……わかった」

次は男が言っていたことについてだ。

「ここらへんは俺もよくわからないんだけど。あの男は世界の異常とか、自分とルネのことをたしか改変者^{アルター}って言ってた……。何か思い当たることないかな？」

ルネの頭はなかなか縦に頷かない。

彩人はかたつぱしから手当たり次第に手がかりを探ってみたが、良い結果は得られなかった。

「そうか……」

「ごめんね……手伝ってくれてるのに何も思い出さなくて……」
「いいや。誤るのは俺の方だ。結局、俺はルネのためにはなにもできなくて……」

彩人は奥歯をかみ締める。

「ううん」

ルネは自分を責め立てる彩人に責任は無いと、彩人の言う事を否定する。

「いいの……。ありがとう。だって、彩人はルネを助けてくれた。それはルネが感謝することだよ？」

「俺は君を助けることはできていない」

（ただあの時、俺がルネに助けられただけなんだ！）

彩人の膝の上に置いたこぶしに力が入る。

「どうして？　なんでそんなに必死になってくれるの？　ルネと彩人は会ったばかりなんですよ？」

ルネには自分にここまで世話をやく理由に見当がつかなかった。

「君が俺と似ているからだよ」

彼はそう答えた。

「同じ？」

「ああ……。俺も八年前に記憶を無くした。そしてルネと同じようにそれ以前のことは思い出すことができない。名前もね。でも今の名前は記憶を無くす以前と合っているらしい。俺が目覚めた時には藍さんがいて、名前を覚えてくれた……」

この話を知っているのは新代荘の藍、幸祐、若葉、それと乃樹や雨夜ぐらいの親しい友人くらいである。

彩人の目は現在ではなく過去を見ていた。八年前の記憶を無くしたときの自分。その時の境遇と似たルネを見てどのようなだったか、思い出すことができた。

「その時、俺も恐かった」

当時の感情がこみ上げてくる。

「そう……だったんだ……」

ぐうー。

腹の虫が鳴る音。

その出所はルネのお腹だった。

「ふっ、お腹空いたか？」

「うん……」

ルネは掛け布団で顔を隠して小さくなる。

「藍さん遅いなー」

時計の短針の先は六に向けられていた。まどの外も彩人が新代荘に帰った時よりもずいぶん暗くなっている。

「ごめん、藍さんが帰ってくるまでもうちょっと待って」

「ありがとう……」

「？」

「あなたのおかげで恐なくなった気がする。ずっと記憶を無くしたままのあなたに比べたら私は……このくらいでへこたれていたら駄目だね」

ルネの顔には幾度か笑みがこぼれるようになってきた。彼女の透き通った声ももう震えていない。

「君は――」

ガチャリ、とドアの開く音がした。

「帰ってきたかな？」

ドアから部屋に続く通路の方を見る。

「どう？」

と、廊下の方から藍の声が彩人の耳に届く。

藍は買い物袋を両手に持って現れ、部屋に居た二人の様子を見ると「うまくいったようね」と小声で呟いた。

「元気になったルネちゃん？」

「あ、えっと……昨日はごめんなさい」

「いいの、いいの。私の名前は新代藍。藍って呼んでくれて構わないわ」

「藍。昨日はありがとう」

（どういうことだ？）

謎のルネと藍のやり取りを見つめる彩人。

「鍋のことよ」

「ああ、それが」

彼は残しておいた鍋をルネが食べたと言っていたのを思い出して納得した。

その時ルネが立ち上がった。

「もう起き上がって大丈夫なの？」

「うん、もう大丈夫」

そう言い、彩人と藍の横を通り過ぎる。

「どうしたの？」

「ルネのために二人ともありがとう」

ルネは二人と反対の方向——玄関の方向へ足を進める。

「お、おい、ルネ！どこ行くんだよ？」

「もう私は行かなくちゃ。これ以上迷惑かけられないし」

「どうしてだよ」

「え？」

「行くあてがあるのか？」

口を閉じたままのルネ。記憶を失くした彼女が行くあてなどどこにも無かった。

「それは……」

なにか言おうとしても返答が見つからない。

その様子を見た彩人はとるまでもない確認をとった。

「藍さん、いいですよね？」

「もちろん」

彩人と藍は確認する内容を話す必要なく伝え合う。

ルネは何のことかさっぱりわからず、二人の顔を交互に見る。

「？」

「ルネ、行くあてが無いんだろう？」

「……」

「無いのよね」

「……うん」

「だったら――」

新代荘は、藍が彩人、若葉、幸祐の面倒を見るためにあるようなものだ。彼らはそれぞれの事情を抱えている。ここではそのような四人が集まって家族のように暮らしてきた。

そして今、もう一人、事情を抱えた者がここにいる。
ルネ。

記憶を無くし行き場を無くした少女。

彼女も彩人たちと変わらない。

だから。

「ここに残らないか？」

受け入れる。

彼らのような者達のためにある。それが新代荘の役割。

「でも……」

「別に迷惑なんかじゃないさ。むしろ家族が一人増えるようなものだよ」

「家族……」

「そう、俺とか、まだ帰ってきてはいないけど幸祐と若葉も。俺たちは居候さ。藍さんにもう何年もお世話になっている」

「そうよー。あんた達を育てるの大変だったんだから。今更、もう一人増えたところで苦労はしないわよ」

「だからさ、行く当てもないのにどっか行っちゃうぐらいならここ

に残って欲しい。記憶が戻るまでもいいから」

「いい……の？」

「もちろん」

「ええ」

本人が望むのなら断る必要は彼らには決して無い。

ルネは踵^{きびす}を返し――向かった先は。

「じゃ、じゃあ……よろしく……」

ルネはそう言い残し布団を頭から被ってしまった。

彩人と藍は互いに見合わせ、同じ表情を作る。

「相当、恥ずかしがり屋さんなのかもしれないわね。そうね……部屋は彩人、あんたの隣の部屋をこの恥ずかしがり屋さんの部屋にしましょう」

彩人は「二階に俺が一人ぼっちになることがなくなった！」と一人で内心、今まで密かに感じていた孤独感からの解消に喜ぶ。

だがそれよりもこの新代荘の皆にとって喜ばしいこと。

新しい家族の一員。

二月十三日、新代荘に新しい住人が加わった。

二章（3）　〇〇五号室

六時過ぎ、幸祐こうすけと若葉わかばが部活を終えて帰宅した。

「よろしくねー、ルネちゃん」

「う、うん……」

若葉は「かわいいー」とか「髪さらさらー、きれい」などと叫びながらルネを抱きしめたりしていじくり回していた。

対する若葉にいいようにされてしまっているルネの方は激しいスキンシップにどう答えていいものかと困り果てていた。

「俺は幸祐だ。よろしく」

幸祐はルネがその状態のまま自己紹介をし、彼女は目の前で虫が飛び交うのを首を動かして避けるように、若葉を避けて幸祐の姿を見ようとする。

「よ、よろ……しく」

「若葉よ、いい加減にしてやれ」

若葉はいつまでもルネをいじくるのを止めそうにないので、その光景を横で見ていた彩人あやとがルネから若葉を引き剥がして止めに入る。これで残っていた新代荘にいしろそうの住人の自己紹介も終え、夕食に。

「安心しなさい！ 今日ちゃんとガスが点けられるわよ！」

藍あいは昨日の約束をすっかり守り、今日はガスが使えるようになっていた。

「もう！ 今日学校で汗臭くないか、すごい気になってたんだから！」

ガスが使えなかったために昨日は風呂を沸かす事ができなかった。近くに銭湯があるわけでもなく、だからと言って何もせずそのままというのも気が引ける。そういうわけで昨日は、まずタオルを濡らし、電気ストーブの前で十分に温めてから、それで体を拭く、という対処をした。

それで彼らの納得がいくわけがなく、まだ藍を許していない。

「はいはい、その話はもう終わり。夕飯にするわよ」

「今日の夕飯は？」

と、幸祐。

「カップ麺よ。しょうゆ、塩、とんこつ、他にも色々あるわ。焼きそばもあるわよ」

「藍さん、これを買に行ってたんだ……」

藍が夕方に出かけて行ったわけを理解する彩人。

「そうよ、見て、ケース買い」

藍が同じカップ麺がいくつも入ったダンボールの一つを持ち上げる。床には違う種類のカップ麺のダンボールが積んである。

「せっかくルネちゃんが新代荘の新しい一員になったのに、どうして最初の食事がカップ麺なの！ もっと、ぱつと豪華な夕飯にしないとルネちゃんが可愛そうじゃない！」

「そうは言ってもねえ……昨日、鍋だったでしょ？」

「だからって今日は記念日だよ！」

若葉がブーイングを藍にぶつけている。

「じゃあ若葉がどうにかしなさい。錬金術で金でも作ってみなさい。残念ながら今、新代荘には余裕が無いの！」

「ごめんね、ルネちゃん。うちのお母さんがケチで」

「よくわからないけど……そんなに気を使わなくても……」

状況に流されるままのルネ。

「歓迎会は終末にできるようにしてみるから。今週いっぱい夕食はこれで乗り越えましょう！ カップ麺うーく！」

「待って、藍さん？ まさか一週間、ずっとカップ麺？！」

幸祐が「マジで？」という顔をしている。

「……」

「カップ麺？」

「さあ、みんな選ぶわよー」

藍が全種類のカップ麺を丸机に並べていく。

「本当に一週間これで過ごすのか……」

「あたしたち食べ盛りな高校生なんですけど……」

「木曜にあたりから気持ち悪くなって食べれなくなりそうだし、それぞれ嫌な顔しながらカップ麺を選んでいく。」

「そんなにおいしくないの？」

三人の様子を見たルネが眉を顰めて尋ねる。

「まあ、おいしくないわけじゃないんだけどな。カップ麺は初めてか？」

「カップめん……」

「初めてらしいぞ」

幸祐がルネの反応から推測する。

彩人は、彼女が記憶無くしてしまったからだろうかと思いついたが、彼女の容姿を見ると本当に初めてかもしれないと思うのだった。
(外国人っぽいもんな)

各々お好みのカップ麺を手にとってから一つの丸机を五人で囲んで座り、ガスが使えることで沸かせるようになったお湯をカップ麺に注ぎしばし待つ。

「そうか、記憶喪失か……」

彩人はルネが記憶喪失でほとんど何も覚えていないことを幸祐と若葉にも話した。それは彼が二人にも知ってもらっておいた方がよいだろうという判断からだった。

「困ったことがあったら言ってね、ルネちゃん。力になってあげるから！」

「俺たち家族みたいなもんだかたな、気兼ねなく接して構わないぞ」
幸祐も若葉もルネを当たり前のごとく新代荘に招き入れる。

「ほらな？　ちゃんと受け入れてくれるだろ？」

「うん……」

時計を見ていた藍が「そろそろかしらね」と言っただのでルネを交えた初めての夕食へとかかる。

「ルネ？　ご飯を食べる前にはこうして手を合わせて『いただきます』と言って、食べ終わりに『ごちそうさま』って言うのよ」

「いただきます?」

「そうよ。では、食べるとしましょうか」
彼らは、せーの、で合わせて。

いただきます。

と。

「どう? カップ麺はおいしい?」

ルネはしょうゆ味のラーメンを食べていた。他の四人の真似をしようとして麺をすすって食べようとするが、苦戦していた。ちなみに箸が使えなかったので、フォークで食べている。

「ん……」

「うーん、いまいち、かな? お口に合わなかったみたいね……。こつち食べてみる?」

藍が食べていたのはさっぱり系の塩ラーメンであった。買ってあるカップ麺のラーメンの中でも一番くどさを控えたものだ。藍はそれをルネに差し出す。

ルネは若葉に教えられたパスタを食べる時のように麺をフォークに絡ませる食べ方で口に運ぶ。

「こつちのほう食べやすい……」

「ルネは薄味の方が好みっぽいな」

「となると一週間くらいじゃないか?」

カップ麺は基本、油分が多くてくどいため、ルネにとってカップ麺での生活は厳しいであろうと推測された。

「考えておくわ。ルネ、さっき食べていたのが食べにくかったら交換してもいいのよ」

「でも……」

「遠慮なんていらないの」

「お願いします……」

「それでいいの。だって私たちはもう家族なんだから」

藍が当たり前だと、そのように言った。
家族。

ルネにとってとても安心感を与えてくる言葉だった。
ただ。

家族がどういふものかという知識はある。しかし、いったい自分の本当の家族はどのようなのだろうか？

ルネにはそれが――わからない。



夕食を終えて、彩人とルネは新代荘二階、『〇〇五号室』に来ていた。

「いやー、すっからかんだなー」

彩人は部屋の中を見渡す。

部屋を照らす電球が天井に、布団が部屋の中央にあるだけだった。今まで使われていたのは『〇〇一号室』『〇〇二号室』『〇〇三号室』『〇〇四号室』の四部屋だけ。よってこの部屋は何年間も放置状態にあった。しかし、埃だらけでというわけではなかった。

（藍さんが掃除してくれたのか……）

「ルネもこっちこいよ」

何をしていいのかわからないルネは部屋の前で立ち止まっていた。それを手招きする。

「えつと、なにから説明したものか……」

彩人とルネがこの部屋に居るのは他でもない。ルネがこれから使用する事となる部屋の事についてだ。

藍曰く「あんたも同じ二階なんだからこの子が慣れるまで面倒を見て上げなさい」とのことだった。

（ルネって一体どこの人なんだろうか？ 外見からして完全に俺たちとは違う人種だよな）

髪は雪のような銀髪。白い肌。そして透き通った青い瞳。そのど

れもが、彩人や彼以外の新代荘の人々とは全く似ていない。

（でも）

何故か日本語ぺらぺら。

「なんでかなー」

ルネの話す言葉はとても流暢である。日本語を話すことのできる海外の人は単語と単語の間を置きながら「ワタシ、ニホンゴ、スコシ、ハナセル」といったようにガチガチとした日本語になっってしまうが、ルネのものはそれとは違う。流暢でないカタコトな日本語に對して違和感があることが普通であるはずなのに、彼女の場合、流暢過ぎることに対して違和感があるほどだ。

（ルネはカップ麺のことを知らなかったな……。庶民の味を知らないどつかのお嬢様だったりして。あ、そもそもカップ麺がこの国にもあるわけじゃいか）

「まあ、全部教えるか」

彩人は壁に設置された部屋の電気を操作するスイッチの傍に移動する。

ルネの視線は彩人の動きに合わせて壁の方向に動く。

「これ何かわかるか？」

スイッチを指差しながら尋ねるが、ルネは小首をかしげる。

（んー。知らないみたいだな……）

「これはこの部屋の電気のスイッチだ」

「すいっち？」

まだ不振そうな目で彩人の指差す物を見ている。

（スイッチもわからないのか……。まさか、記憶喪失で忘れてしまったのか？）

彩人はしばし考え込む。

自分の体験のことであって少しは記憶喪失の知識があつた。

記憶喪失。正確には健忘と呼ばれる記憶障害の一部になるのだが、様々な種類がある。

彩人の場合は全生活史健忘というのに当てはまる。それは発症以

前の自分に関する記憶を失くしてしまった状態を指す。

またルネの記憶喪失についてはいつ記憶を失くしたかを決定付けることができないが、彩人にはこれと同様だろう、と考えられた。

自身に関する記憶といっても、知識として蓄えられた記憶は含まれない。

そのため何もかもを忘れているわけではなく、言葉の意味、知識としての記憶はそのまま残されていた。もし全てを忘れてしまったら、それはまだ世界を知らない無知な赤子のようなものである。

（ルネは『スイッチ』が存在しない環境に居たってことだろうか。一体どんなところにいたんだ、この女の子は。まあ、ぼちぼち思い出していつてくれればいいことなのだが）

「これは、『スイッチ』と言ってな、この部屋の電気を操作するものだ。ところで電気はわかるか？ この上で明るく光っているこれのエネルギー源みたいなものだが……」

彩人は途中で言葉を断つ。

初めてのものをみて不思議そうに『スイッチ』の方を見ていたルネの目が、今は彩人を睨みつけていたからだ。

「ど、どうした……」

「——にしているの？」

「え？」

「バカにしているの？」

ルネの知識には電気というものはあったようだ。

「いや、バカにしているっていうか……」

彩人は困惑する。

（さすがに電気は知っていたか。これは失礼なことをした）
だが、それよりも。

（ルネも怒ったりするんだな）

数間前の美しいガラスの置物のようだった彼女は、もうすっかり普通の女の子として感情をあらわにしている。彩人には前の彼女が嘘のように感じられた。

「彩人はいくらわたしの知らない物ばかりだからってルネをバカにしすぎてない？　いくらルネに記憶が無いからって、それくらいのこととは知ってるよ」

唇を尖らせてすねた様にそっぽを向く。

「そ、そうか。それは悪かった」

彩人は「ルネはどこから来た人かわからないし」とか言い訳はできなかった。ルネはもう開き直ってしまったように話してはいるが、それが本心とは限らない。新代荘の他の皆に迷惑をかけまいと振舞っているかもしれない。話しの流れがそちらの方向に流れないように、彩人はなるべくルネの記憶を失くす前のことについてはむやみに探らないようにする。それは彩人なりの彼女に対しての気遣いであつた。

（しかし、ますますわからなくなってきたな……）

ルネの記憶を取り戻すための協力は大変な道になりそうだと彩人は頭を悩ませる。

「ま、いつか。この『スイッチ』を押して切り替えると部屋を明るくしている明かりが消える。まあこんな感じに――」

ルネは「消える？」と一度確認を取りたかったのだが彩人が先にスイッチをオフへと切り替えてしまった。

明るかった部屋が一瞬にして、真っ暗になって何も見えなくなる。

「ひゃあっ！」

ルネが、明るかった部屋が急に真っ暗になってしまったことに驚いてしまい、突如短い悲鳴を上げた。それとともに、ドカンと何かが壁にぶつかった音がした。

部屋が真っ暗なので何が起こったのかわからない。

「おい！　どうした！」

彩人は慌てて電気を点けると、ルネは仰向けになっていた。

「おい、大丈夫か！」

そして倒れている彼女を急いで起こしにかかる。

「う……」

「大丈夫か！ 起きろ！」

ルネが電気を消したことで壁にぶつかって、その衝撃で倒れたということを考えるより先に、『彼女がまた倒れてしまった』ことに驚き焦っていた。

彩人が必死で肩をゆする。

パチツと目を開けたルネは「きゃっ！」と今度は明るくなっていることに驚き、勢いよく彩人の体にしがみついた。

「うわっ！」

しかしそれはルネの渾身の頭突きとなったことによって彩人の体が背後に床に叩きつけられる。

「痛っ！」

「うう……」

（何か柔らかいものがっ！）

ルネは強く目をつぶった顔を思いつきり彩人の体に押し付けるとともに、彼女の別の部位も当たって――

ルネは彩人の体にしがみついているが傍から見れば抱きついているように見える。彼女の体温が彩人に直接伝わっていく。

綺麗な銀色の髪が彩人の鼻をくすぐり、鼻がむずむずしたことで彩人は我に返る。

「ル、ルネ、あた、当たって、る！」

彩人は言葉が途切れ途切れにしながらも高鳴る心拍を押さえようとす。

ルネは「ううー」と言いながらまだ彩人にしがみ付いている。

「ああ……しばらくこのままでも……」

（い、いや、だめだ！）

彩人は胸の心底から込みあがってくる欲求を必死で追い払いながら、ルネの体もろとも起きる。

「だ、大丈夫か？」

そつとルネに声をかける。

（なんだろう、すごく残念な気持ちが……）

と、一人心の中で後悔の念に取り憑かれるのだった。

「びっくり……した」

ルネの水晶のような青みがかった瞳には雫が溜まっていた。

「ごめん……まさか抱き————えつと、いや、その……突進してくるまで驚くとは思わなかった」

「だき？ あれ……ルネさっきなにを……」

「えつと、わかった……かな？ あれでこの部屋が暗くなったら明るくするんだけど……」

それに頷いて答えたルネは顔をあげない。

「ルネ？」

彩人は俯いたままのルネを不思議に思い、前髪で隠れた彼女の表情を覗こうすると、彼女は彩人に自分の顔を覗かれる前に彼のいる反対の方向に座っている状態から体を回転させてすぐに立ち上がった。

「な、なんでもにやいつ！」

（あ、噛んだ……）

「なんでもないからね！ その……さっきのは……その……。もういい！ 彩人のバカ！」

「バカ?!」

ルネが目を見開き口を開きながら彩人と目を合わすのを避ける。

（まあバカとは……否定はできないとしても納得しないな。驚いてしまったことに恥ずかしがってるのかな？）

「気にするなって、いきなりのことだったんだから」

「あ、うん……」

「知らないことが起こったら誰でも驚くって」

「？」

ルネを見あげていた彩人も立ち上がる。

（やわかったな……。でも、やっぱり、小さかったような……）

彩人がそう思った瞬間、殺気を感じた。ルネの顔を見るとむっとしていた。

「彩人？」

「……はい」

「なにか失礼なこと思わなかった？」

「……。いえ、なにも」

「そう」

彩人の緊張の糸が切れる。

「で、他には？」

「ん？ ああ、わかった。そうだな……」

それから彩人は布団の敷き方、水道の使い方、窓の開け閉めまでこまめに教えていく。そのたびに彩人はルネの不思議そうな目を見ることとなった。

「こっちの扉がトイレで、こっちがお風呂な」

部屋の方の解説は終わらせてその他の場所の解説に入っていた。そこでルネから困った質問が出てしまう。

「これはなに？」

「この扉が体を洗うのと、あっちの扉が便所だ」

二つの扉のうち手前にはまず洗面所があつてさらに扉を一枚はさんで風呂場があるという構造になっている。

二人で風呂場まで入る。

「これは浴槽、って見ればわかるよな」

「じゃあこれは？」

ルネが指差したのは蛇口のところについている水栓である。

「ああこれな。三つ付いているから間違えないように気をつけて欲しいんだけど、この赤いラインの入っているのを回すとお湯が出て青いラインの入っているのを回すと冷水が出る。そして最後にこのレバーは蛇口で出すかシャワーで出すかを決める」

三つも操作する部分が付いているのでルネには使うのに困りそうだな、と彩人は思う。

「これを回せばいいんだね？」

ルネがお湯の方の水栓を回そうと手を掛け――。

「ちよつと待った！」

経験があるのではないだろうか。わざとでもなく蛇口を回したときに、それがその蛇口にとつての『回しすぎ』となって、勢いよく水が予想を上回って噴出してきたことが。

「？」

彩人がルネの動作を止めにかかったので彼女は後ろを降り向いたが、水栓はすでに開けられていた。

ルネの頭上に容赦なくシャワーからお湯が降り注ぐ。

「え？ ええ！」

頭からルネが濡れていく。

「早く栓を閉めないと！」

あたふたしているルネが水栓を閉めるのを待っていられず、彩人が代わりに閉めに行こうと蛇口の傍にいるルネに近づいたその時。

「しまっ――」

バナナの皮を踏んだときに起こるお決まりと同様に、見事に彩人の右足が濡れた床の上でスリップ。左足で必死にバランスを保とうとするも上半身は既に後ろへ反り、両手が天を仰ぐ。

「彩人！」

彩人が倒れそうになるところでルネが天を仰ぐ彼の右腕をキャッチ。

しかし。ここで彩人の方もルネの腕を掴み返したのがいけなかった。もし彼が彼女の腕を掴んでいなければ、彼女の方が彼の腕をいつでも放すことができたのに。

ルネのほっそりとした外見からもわかるように彼女の体重は軽く、そのため彩人の体を支えられるわけも無く。

「ひゃ！」

彩人に引つ張られるようにしてルネも一緒にバランスを崩す。

「やつほー、様子見に来たよー」

そこでこの『〇〇五号室』の扉が開いた。「どう？ 終わった？」と若葉と幸祐がこの部屋に入ってきたのだった。
（待て！ このままだと嫌な予感しかないぞ！）
彩人の思いはバランスを崩してしまった体の動きを止めることはできない。

ドゴン、と風呂場で音がする。

若葉と幸祐の二人はもちろんその音がした風呂場へと向かうのは必然的だった。

「なに？ 風呂場？」

「っばいな」

そして「来るな！」と彩人が叫んだときには時既に遅し。

風呂場の入り口に立った男女二人は風呂場にいる男女二人を見た。入り口に立つ二人——若葉と幸祐は硬直していた。

風呂場にいる男女二人——彩人とルネとはといえば、彩人が風呂場に大の字で仰向けとなり、その上にルネの体乗る。そこへ、水栓が閉められない限りお湯が出続けるシャワーから永遠とお湯を雨のように降らせていた。

当然のことながら、彼らは二人とも全身ずぶ濡れである。

「彩人」

若葉の声が通常時よりも低い。

殺気に満ち溢れている。

「やつちゃったか……」

幸祐はこれから起こるであろう惨劇から目を逸らすように手で目を覆い隠す。そして静かに部屋から出て行った。

「待て！ 誤解！ 誤解だ！ 誤解です！」

仰向けに倒れている彩人からは若葉を見上げる形になる。

「ルネちゃん大丈夫？」

「いたたたた……。あれ？ 若葉？」

ルネがようやく若葉がいることに気付く。

「うわっ！ びしょびしょ……」

そして、全身が濡れていることも。

「ん？」

さらには、下を見ることで。

「あ、彩人？！」

下敷きにいる人がいることも。

「ルネちゃんはもうそのままシャワー浴びちゃって。で、その間に――」

にこつ、と笑顔をつくる若葉。

「ちよつとこつちに来ようか、彩人くん？」

彼女の言うままに彩人は風呂場から連れだされ（部屋を濡らさない程度に水滴を拭いて、しかし服は水分を吸ったままで）、ルネはそのままシャワーを浴びた。

その間、部屋で彩人と若葉は二人で――以下略。

それが終わって彩人は自室に強制帰還させられた。

そして現在、彩人は自分の部屋にいる。

「あつはははは」

幸祐もそこに居た。一連の話を聞き爆笑中。

「笑いごとじゃねえよ。なんであんなに俺がどうこう制裁を受けなければいけないんだよ……。あれは事故だって」

彩人は『〇〇五号室』から若葉に蹴り飛ばされて追い出された。

外は冬の夜であり、もちろん寒さに満ち溢れていた。それに濡れたままの格好、と追加効果が。

「まあ、大変だったねー。でも絶対に内心で喜んでいただろう？ ウハウハだっただろう」

「……い、いやそんなこは！」

彩人はすぐに否定できなかった。

「しかしなあ……。昨日出会った、というか実質今日会ったとも言える女の子に、もう……。そんな……。このまま大人の階段へと足をかけて……。」

「殴っていいか」

「暴力はだめだぞ。少女誘拐犯」

幸祐はやれやれ、と素振りをする。

「だからルネは俺が連れ去ってきたわけじゃねええええ！」

二章（４） 変わり始めている？

翌日。二月十三日、火曜日。

昨日は色々とごたごたしていたこともあり、彩人あやとはよく寝ることができた。

しかし、少し風邪を引いたような気がする。やはり、濡れたままの格好で外へ追い出されたのが一番に体に響いたのだろう。

今日もいつものように『〇〇一号室』へ。幸祐こうすけと若葉わかばは朝から部活で、彩人だけが取り残されていた。

そして、いつもの、日常的な、変わらぬ新代荘にいしろそう『〇〇一号室』は。「ちよっ……なにやってんの？」
少し違っていた。

今までは幸祐と若葉が先に学校へ行ってしまうて藍あいしか残っていなかった新代荘には今はもう一人いる。

エプロン姿で。

「なにつてそんなの……」

右手に杓子、左手に味噌汁を入れるお椀を携えた藍が当たり前のように。

「ルネに料理を教えているの」

藍の隣には、エプロンを装着したルネがしゃもじを左手に握っていた。エプロンはデフォルメされたうさぎの顔が至る所についている。なんとも幼げで可愛らしいデザインだ。主に若葉が『ごく希』に使うものだった。

希、というのは普段から全く料理をしない彩人と幸祐の男二人を除いてしまうと、若葉しか使う人がいないのだが、その肝心の若葉は料理が大の苦手であり、陰ながらキッチンの隅のフックに掛けられたままになっていたからであった。

ルネは手についたご飯をぺろりと取り除き、おはよう、と彩人に話しかける。

彩人は、ルネが昨日の今日で新代荘に予想以上に馴染みすぎることには驚いた。

「おはよう。で、なんでまた料理？」

「やつちやいけないことでも？」

「いや無いけども」

彩人と藍の会話にやや不安を感じるルネ。

「なにか……おかしい？」

エプロンをつまんで眉をまゆ顰ひそめて言う。

「いや、変じゃない……よ」

絵柄はいかにも幼稚園児が着ていそうなものだが。

「よかったわね」

藍がルネに言うとな彼女は小さく頷いた。

「ほらさつさと学校へ行きなさい」

彩人はルネによそつてもらったご飯（味噌汁は普段どおり藍がよそつた）を食べて新代荘を後にする。

今日も雪は降っていない。しかし、晴れてもいない。
上空。

灰色一色。

そのため昨日と積雪量は増えることも無ければ、減ることもない。
聞きなれてしまった雪を踏みしめる音を聞きながら足を進める。

ところが彩人はとくに何もあるわけでも無い場所で立ち止まった。

「何してる。その二人」

彩人は後ろを振り返り先ほどからこそそと後ろをついて来ている人たちにむかって言う。

彼らはばれていないつもりだったのだろうか、電信柱に身を潜みながらついて来ていたが長いサイドテールが丸見えだった。

頭かくして尻隠さず。

この場合、尻ではなく特徴的な尾が出ているが。

「もう、ばれたじゃんかー」

「いや、俺のせいじゃないって。雨ちゃんのその尾っぱのせいだっ

て」

「なにをー！ 私のトレードマークを侮辱するとは何事か？！」

とかぶつぶつ言い合いながら出てきたのは『ノッキー』こと乃樹^{のき}と『雨ちゃん』こと雨夜^{あまや}だった。

「昨日から変だぞ。なにをこそそそとしてるんだ？」

「それはこっちの台詞だ！」

乃樹と雨夜の声がぴったりと重なった。

「？」

意味がわからない、と彩人。

「おい、とぼけるなよ、彩人」

「そうだぞ、彩とん」

二人はずんずんと彩人に迫ってくる。

「なにがあった？ 女か、女なのか？！」

「彩とん、白状しないとねー、さもなくば二対一の一方的かつ白旗を揚げたとしても私たちが気の済むまで終わらない雪合戦がはじまるよ？」

「ひでえ！ というか女って何のことだよ？」

「ノッキー戦闘準備」

ラジャー、と言って乃樹が雪球を作り出す。

「白々しい奴よのう。」

「女って……」

女。

女。

女。

（いや俺は彼女なんていませんよ、まったく）

「何があった！ 男なら正直に話せ、彩人」

「『何があったか』って？」

（ああ。ルネのことか。いや、でもルネのことはまだ知らないんじ

や……)

「相手は誰だ？」

「まさか大人の階段上っちゃったとか言わないよね?!」

「幸祐と同じこと言うんじゃないええ!」

幸祐と同じ思考回路でも持っているのか、とふと思ったがそれは無いと思う。

(雨ちゃんは幸祐みたいに頭がよくない。いや、むしろ馬鹿だ)

「今、バカって思わなかった？」

(読まれた?!)

彩人はこのところ藍には見透かされ、さらにはルネにも見透かされ、しまいには雨夜までと、気持ちが表情にそのまま出ているのかと疑いを抱く。

「どうやら、その言動からして間違いないようだな。そうか俺は悲しい、とても悲しい。なんで、なんで俺にも彼女が……」

乃樹が独り言を始めてしまった。

「まあ、そう落ち込むなよ、ノッキー」

雨夜が慰めに入る。

「雨夜、俺と……」

「ごめんっさい!」

腰をぴったり直角に前方へ折って頭を下げ、それとともに彼女の頭から生えている長い尾が乃樹を叩き付けた。雨夜は笑顔で乃樹の言葉を途中で切り捨てる。

彩人はその間に先に行こうとしたのだが、雨夜がそれを易々と見逃すはずが無かった。

「彩とん? 先へ行ってもどうせ学校で会っただから変わらないよ」
「ならサボればいい、というのは彩人のお決まりパターンであるので。」

「サボったら新代荘に遊びに行っちゃおうかなー」

どの道、逃げ場なんてありはしなかった。

結局、彩人は雨夜に捕まる。

の？ 職業は？ 学生？ 学生だったらこの後学校のホームルームの時間に先生が『実は今日、転校生が来ています』なんてことになるフラグなのかこれは？！ だったらクラスの他の連中より転校生のこといろいろ先に情報掴んじゃうもんね！ 好きなものは？ 嫌いなものは？ 食べれないものとかある？ いやー、なにかお祝いをプレゼントしたほうがいいかなー？ 嫌いなものだったりしたら私の高感度最初からが落ちだからねー。 何事も最初が肝心なんだよ！ だからねっ！ なんでも聞き出しちゃうよ！ 耳にたこになるくらい聞きまくっちゃうからねっ！ 覚悟してよ！」

彩人は雨夜の高速連続攻撃にひるんでしまうが、雨夜のほうはいつまでも話し続けることはできないので必ず息継ぎをどこかですることになる。その一瞬の合間に自分の方から割り込まなければ再び第二波に襲われる。

「もう、たこができてもおかしくない！」

彩人はその一瞬を逃すまいと雨夜の言葉を断ち切る。

「え？ そう？」

雨夜には興奮状態になっていた自覚がまったくと言っていいほどない。

一度波に乗ると、何かに妨げられるまでどこまでも突き抜けてしまう性格は彼女の短所だ。

「もう、すごいよ……耳がギンギンする……」

彩人は両手で自分の耳を押さえていた。

今のもう雨夜の言葉の波が止んでいるのに、彩人にはいつまでも耳の中で聞こえてくる気がしていた。

「で、どんな人？ まさか犬とか猫の類じゃないよね？ さらにまさかで宇宙人？！ 魔法使い？！ 超能力者？！」

雨夜が彩人の体をぐらぐらと揺らす。彩人の首が前へ後ろへと倒れるのを何度も繰り返す。

「やめろ……頭がクラクラする……」

雨夜の手が放れることで揺れを加える力は無くなったが、いつま

でも揺れている気に襲われる。

彩人はバランス感覚を徐々に取り戻していく。

(こいつ、あながち間違っていないことを言うのが恐ろしい……)

「早く言わないと、今度は気絶させるよ?」

「恐いことを言うな! 限度を考えろ!」

雨夜だったら本当にやりかねないと彩人は思う。

彼女はまだかまだかと待ちわびている。

「と、その前に一ついいか?」

「もう! 早くしてよ! 昇天させるよ?」

「それもう俺死ぬじゃん! って……そうじゃなくてさ……おい、その空気」

「俺は空気さ……」

ずっと御経おきようを唱えるかのようにぶつぶつと何を言っているのか聞き取れないことを呟いている乃樹が姿を現す。

「とりあえず、戻ってこい」

彩人はそのような状態に陥った乃樹を呼ぶが、乃樹の様子は変わらなかった。

「まあいいや……で新しい住人? 何が聞きたいんだよ?」

彩人は雨夜が「あのね、あのね」と続きを言う前に、「一つずつ言えよ」と付け足しておいた。

「とりあえず、一通りのプロフィールを」

名前、ルネ。性別、女。年齢、不詳(ちょっと年下に見える)。

他の項目も以下同様。

「なんかつつこみどころ満載だよ?!」

だから話しづらかったのに、と彩人はさらに嫌な顔をする。

「俺は一応、本当のことを話したよ……」

彩人の背後から、やっぱり女か、と沈んだトーンの声が聞こえてくる。構うのも面倒なので二人とも気にしようとしなない。

「これは……調査が必要だね。学校には来るの？」

雨夜の質問を聞いた時に彩人は思った。

（そういえば、これからルネはどうするんだ？ 学校通うのか？でも身元も一切わからないのにそれは無理だよ……。じゃあこれからどうする？ というか今どうしてるんだ？ 俺と幸祐と若葉は学校行かなくちゃいけないし、藍さんは仕事あるし……）

雨夜に問われたところからルネが今どうしているのか気になってどうしようもなくなってきた。

「学校には来れないな……たぶん」

「んー、残念。どうしたの、彩とん？」

「俺やつぱ今日、学校休むわ」

「あ、ちよつと！ 今度その子紹介してよ！」

ああはいはい、と言葉を返した彩人は彼女の方を見ずに歩いてきた方向に向かって走りながら彼女に手を振った。

雨夜は追いかけて学校まで強制連行はせず、そのまま見送った。そして彼女は彩人を見送った後、仕方なく傍らにいるそれに語りかける。

「ノツキー……いつまでそうしているの？」

二章（5） 二人で初めての……

彩人は昨日のように藍あいにの部屋『〇〇一号室』に真まっ先に向かったのだが、ドアノブを回すが鍵が掛かっていた。

（自分の部屋にいるのか？）

今度は階段を駆け登り『〇〇五号室』の前に立ってドアをノックしてみる。

「ルネー、いるかー」

するとドアの向こうがわで、ドタドタと音がする。来たな、と彩人が思ったら次は、ドテン、と大きな音がした。

（大丈夫かよ……）

「開けるぞ？」

ドアノブを回しドアを押すのだが。

ガチャン。

「あれ？」

どうして開かないのかと気になって確認してみるとチェーンが掛かっていた。

「入っていいよ」

中からルネの声。

「いや入れないから……」

チェーンのロックはドアの内側からしか開けることができない。

だから彩人は開けてもらうためにルネを呼ぶ。

ルネがドアの元に駆け寄ってきた。

「入らないの？」

「入『れ』ないの」

昨日と同じように、どうして？ と顔で語っている。

「この鍵のことは聞かなかったのか？」

「藍が一人の時は危ないからって、掛けるように言われた」

「うん。で、それでこれはずさないと俺は入れないんだけど……」
「そうなの？ あ、そっかこれも鍵だもんね」

彩人は、このようなことは当たり前のようなことではあると思うが、ルネにとつては常識ではなく悪気はないので責めるようなことはできない。

「そうだ。ルネも部屋を出る時はずさなかったのか？」

「はずしたよ？」

これまた当然のように答える。

「……」

（なぜ？ もしかしてこの子、天然？）

彩人は頭を悩ませる。

「だって、彩人は開けられると思ったもん……」

（俺はそんなテクニシャンなスキルは会得していない！）

「……まあ、とりあえずはずしてくれ」

カチャ、とチェーンのはずれる音とともにドアが開くようになる。ルネの服装が朝と変わっている。彩人には見覚えがあった。

朝は寝間着として使っていた若葉の服の上にうさぎエプロンという組み合わせだったのだ。しかし、今は、上はフード付きの白い上着を着てチャックを上の方まで上げている。下は紺色のジャージ。

これまたルネの着ている服は若葉の服であった。若葉より背が低いため服のサイズが合っていないくて袖が余ってしまっている。

「やつぱり帰って来たんだね」

ルネが彩人の帰宅を予期していたかのような口ぶりをする。

「やつぱり？」

「藍が言ってたよ。後、帰ってきたらこれを渡すように、って」

言うままに、彩人は紙切れを渡される。

恐るべし新代藍の予言。彩人が今日学校をサボって新代荘に戻ってくることで見越していた。

そしてその紙に書いてあったとおりに彩人はルネを連れて町へ出た。



午前九時。

今頃、皆は学校で勤しんで勉学に励んでいることだろうな、と思いつながら彩人は目的地に向かっていった。

彼の隣ではルネがフードを被り、顔を隠すように下を向いて歩いていた。

（まあ、ルネは目立つちまうだろうから）

彼女は銀髪をはじめ、白い雪のような容姿をしている。

それは彩人たちが住む町の住人とは、全く別の世界に住む人のように見える。

そのためルネは周りの人から浮き彫りになって目立ってしまうのだった。

（ルネが人見知りで恥ずかしがりやだったとは……）

彩人から見た彼女の印象は、誰とでもすぐに打ち解けることができる女の子、であった。

ルネが新代荘にやってきてすぐに藍、幸祐、若葉の三人とも初めて会ったというのにただ一日で打ち解けて、さらに朝の馴染みっぷりと、そのように思うのであった。

（俺たちが特別だったのかなあ）

たまたまルネにとって俺たちは接しやすかった、ということだろうかと考えた。

平日ということもあり町を歩く人はそれほど多くは無かった。それでも歩いていれば何人かの人とはすれ違う。その度にルネはフードを手で下に引っ張り深く被る。

彼女が下を向いて歩いているので、たまに対向から来る人にぶつかっていきそうになる。だから彩人はその際、ルネを誘導して自分

の方へ寄せて避けていた。

（これじゃあ一人でまともにも外を出歩けないんじゃないか？）

藍はこれらのことを予想していた。

だからわざわざ、ルネに大きな目のフード付きの服を着させていたのだった。それと彩人が受け取った紙にも気をつけるようにと書き添えがあった。

ルネがこうまでして出かけるのにはちゃんとした理由がある。

藍からの伝言によると、ルネの身の回りに必要なものを揃えろ、と。買うもののメニューは一覧にしてしっかりと書いてあった。

メニューの中は主に衣類。

いつまでも若葉の服を借り続けるというわけにもいかないからだ。（サイズ合っていないしな……）

だから彼らの目的地は服屋もテナントとしてとりこんでいる総合スーパーマーケット。そこならば服以外の買わなければならないものも揃えることができる。

「彩人お……」

フードの中から聞こえるわなわなした声。

「なんだ？」

「まだ着かないの？」

一刻も早く通りから抜け出したいようだった。

「たぶん店の中に入っても変わらないと思うぞ？」

そうこうしているうちに目的地に到着。

店内は（ルネにとって）幸運にも客はそれほど多くは無かった。

平日の上、この時間帯というのに要因があるのかもしれない。

「どれがいい？」

「わからない……」

彩人にもルネにどんな服が似合うとなどわからない。

「試着してみるとか」

「しちゃう？」

「一度着てみるってことだ。それでどの服がいいか選んで欲しいだ

が……って、おーい」

ルネはいつの間にか店内の隅に移動していた。手招きして、付いて来させる。

「……。別のところも見てみるか」

ポケットからメモ用紙を取り出す。

「えーと、部屋着を少なくとも二着、寝間着も二着、あとは——
——んんっ?!」

彩人は買うものリストを上から順に見て行って、とある欄に目が止まる。

ルネは自分の服を一着も持っていないというわけで、つまり、もちろん含まれていた。

外から見えない服以外のもの。
そう。

(下着っ!)

男のロマン。

「ルネちよつといいかな? って、あれ?」

いつの間にかまたルネが隣から消えている。右左と店内を見回すと店の奥の方、彩人が見える位置にルネが立っていた。

隅によっているルネを手招きすると、とぼと歩いてきた。

「どうしてまたあんなところにいたんだ?」

「だって……」

彩人の視線を追ってみると彼らとは別の客。つまり、ルネは他の客が店内を巡らない位置まで移動したということだ。彩人は、極度の人見知り体質によるものと察する。

「まあいいや。で、本題はこっち。さすがに下着は自分で選んで欲しいのだが……」

大声では言うことができないので、彩人はルネの耳元で控えめに囁いた。

「へえいや?!」

「いやいや『へえいや?!』じゃないって」

「だって……彩人がいきなり下着なんて言い出すから」

まるで自分が変態扱いされているようではないか、と彩人は思う。彼は否定する。断じて変態ではない、と。

「ルネの服を買いに来たんだろう？」

「そうなの？」

「藍さんに聞いてないのか？」

「彩人に紙を渡してつて頼まれたから。そしたら渡された後に『出かけるぞー。支度しろー』っていうんだもん」

今はそのようなことより重要なのは彩人にとってはどの服を買えばいいのか、という課題である。

用が済んだと思ったのかルネはすたすたとまた店の隅へと移動し、彩人のほうを見ていた。

なので仕方なく、今は一人で店内を物色している。

彩人は陳列している女性用服を目の前にして悪戦苦闘していた。

（藍さんはどうして俺にこういうことを任せようとするんだろうか……）

同じ女の子である若葉に任せればいいのではないか、と考える。

「どうかされましたか？」

店の女性店員が気を利かせて彩人に話しかけてきてくれた。

「え、まあ」

彩人はこういう受け答えはあまり得意ではない。

「プレゼントですか？」

店員は、彩人が一人で女性服コーナーにいたので勘違いされてしまった。

「えっと……あの……あそこにいる子の服を探しているんですけど」
彩人は店内の片隅にいる一人の少女を指差して事情をその人に伝えると。

「彼女さんへのプレゼントですよね」

「か、彼女?!」

あまりに唐突に言われてしまったので声をあげてしまった。

「す、すみません。失礼しました」

勘違いに気付いた店員が慌てて彩人に向けて頭を下げつつ謝罪するのを、彩人は「いいですよ、いいですよ」と言って頭を上げさせる。

「お探しのものはなんでしょうか？」

「えっと……」

彩人は藍から渡された紙に目を落とす。

「部屋着、寝間着、出かける時の服、あと……下着も……ですね」

「では、あちらの方の服のサイズはわかりますか？」

（しまったな……。ルネの服のサイズぐらい測っておくべきだったな……。背丈すらわからないや）

と、またも困っている様子を見て店員が気遣いをする。

「ちよつと、あちらの方をお呼びしてもよろしいでしょうか？」

「あ、はい。ルネー」

ルネは先ほどからずっと同じ場所に立って店内を見渡していた。呼ばれた彼女は彩人のほうに視線を戻すと、手招きされていることに気付き行こうとするのだが。

「っ！」

彩人の横に立っている店員に気付くと、石像のように体が硬直して動作を完全停止。

ルネは呼ばれたからには行かなくてはならないと思いつつも、足の裏が床に張り付いたように歩むことができない。

「すみません、ちよつと極度の人見知りの子で……」

「そう……ですか」

店員を困らせてしまって申し訳ない、という気持ちでいっぱいになる。ただでさえ受け答えは苦手だと言うのに、さらに厄介な事態を作ってしまったている。

「そうですね……」

店員はまじまじとルネを見る。二人の距離は約三メートル。

続けること五秒。

「おおよそのサイズならわかりました」

「ええ?!」

彩人は店員の顔を見る。

「あくまでもおおよそになってしまふのですがね」

「そんなことわかるんですか?」

「ちよつとした特技ですね。センチ単位——部位にもよりまずけど身長や胸囲、胴囲ぐらいなら」

「すごいですね……」

本気で感心してしまっている彩人は、これならルネが他人に近づかなければいけないことも無いだろうと思った。

「でもちゃんと測ることをおススメします」

「いえいえ、全然いいですよ」

「では少々お待ちください」

店員はそれだけ言って店内を回りだした。そして二十秒ほどで彩人のもとに戻ってくる。

「これは……」

彼の目の前には店員が持ってきた大量の服（その他もろもろ）が掛かっているハンガーラック。

「とりあえずこちらにお客様のサイズに合うものを揃えてみました」

「これ全部ですか?!」

「はい。どうぞよろしかったらこの中から選んで試着されてみてはどうですか?」

「あ、ありがとうございます!」

そうして店員は店の奥へ去っていった。

（これ全部ルネのサイズ用なのか? すげえ……。メジャーもなにも使っていない。プロだ。あもしくは勇者だ）

ともかくもあのような店員がいたことは何より助けとなって、彼はお礼とそれに加えて敬意を払った。

彩人はルネに気を使い、店の奥の方に設置された試着室を選んで、一緒に移動する。ここは店内でも死角になり人目を避けることができ

るので彼女も落ち着いている。

「とりあえず、ひとつ着てみるよ」

「うん」

ルネは店員が揃えてくれた服の中から上下一つずつ手にとって試着室に入る。

しかし入ったことはいいものの、なかなか次の行動に移らなかった。

「どうした？ 着ないのか？」

「わかった……彩人あっち向いて……」

「お、おう」

言われるがままに彩人は背を向ける。

（ん？ 何で後ろ向かなきゃいけないんだ？ まあ気にすることもないか）

カサカサ、と。

背後から服が肌と擦れている音。

つい耳がその音を聞き取ろうと傾いてしまう。

後ろで女の子がお着替え中。

（いかんいかん！ 想像しちゃだめだ！）

彩人はじっとしているのがつらくなってくる。

「なあ、まだ――」

だから待つていられなくなつて彩人は何気なく後ろを振り返つた。この時に彼は『まだか？』とルネに対して聞こうと思ったただだ。

他意など無かつた。

そう、ただ自然に。

自然に振り返っただけなのだ。

やましさのかけらも無い。

絶対に。

だって、カーテンが開いているなんて考えるわけがないじゃないか、着替え中に。

以上、彩人の弁解。

「——か、ああ……」

彼の目が留まる。

思考も止まる。

体の動きも止まる。

「？」

それに気付いたルネも同じく静止してしまった。

まるで時間が一瞬止まったようだった。

そして再び時間が動き出す。

まず二人は目を合わせる。

次に顔が夕焼けのように真っ赤になっていく。

最後にお互いの口が開いていき——

「あ、あ、ひつ、あ、ああ」

言葉にならない高い声がルネの口からこぼれる。

その言葉にならないものが、しっかりとした声となったらどうなるのだろうか？

「ま、まま待て！ 落ち着け！」

ここは公共の場であつて。

確かに客が少ないとは言つても。

やっぱり他人はいるのであつて。

「ここでそれは駄目ええええええええええ！」

彩人の願いは無残に散り去り、店内に一人の少女の甲高い叫び声が響き渡ったのだつた。

■ □ ■ □ ■

帰り道。

往路とは違った点が一つ。

彩人とルネの間に妙な距離がある。

「はあ……」

彩人はこれほどまでに無い深い深いそれは奈落の底に落ちるよう
に深いため息をつく。

原因は店での事件。

彼が待ち遠しくなつて振り返ったそこには、砂糖でもまぶしたか
のような白く美しい上半身。下半身も 同様に白い肌が見えていた
のだが、もう一つに白い布がその肌を包むように存在していた。

つまり、上半身は裸で下半身は下着一枚という姿のルネが、ちょ
うど試着した服を着ようとしている最中だった。

もちろんのこと彩人は、その後ルネは叫び声をあげたせいで、サ
イズを当てる特技を持った店員に事情を必死で説明する羽目となり、
拳句の上、超絶ビンタをルネに食らわされることとなった。

ルネは着替える前に「あっちを向いて」と言った。

その言葉の本当の意味を理解することができなかった彩人は迂闊
だった。

彼女は自分たちとは知識や常識に少し違ったところがある。それ
は彼女と出会って昨日までの二日間だけでも十分にわかったはずで
ある。

ルネは試着室の使い方を知らなかったのだ。そこにあるカーテン
を閉めればいい、という彩人たちにとっての常識は彼女には通用し
なかった。

「な、なあ？」

先を歩くルネに声をかけてみる。

が、彼女の後姿からは返事が返ってこない。

「……」

そのことがあつた後、服はすっかり購入。その時まではルネも渋
々ながら服選びに付き合っていた。

だが、選んだ服をレジに通してからと言えば、ずっとこのような感

じである。

「はあ……」

またため息をつく。

もう何回しただろうか、彩人には数える気も無い。

「ごめんって！ あれは事故だって！ とりあえずなにか言葉を返してくれよー。ルネええ！」

「彩人のバカ」

昨日も色々とあったが今回は「彩人が原因」という形になった。

だけれども、それでも平和だった。

新しくルネが加わった日常。

これはこれでいいのかもしれない。

新代荘はこれからこんな風に賑やかになっていく。

彩人は心の中でそう思った。

それは本当に平穏な日常。

日曜日の出来事なんか無かったことに思えるくらいに。

二章（5） 二人で初めての……（後書き）

silver編、折り返し地点まで来ました！ 二章はこれで終了。
次からは、三章入ります！ ここから彩人たちの日常がまた崩れ始
める。追記：そのうち挿絵が入る……かも？

三章（1） 平穩は続くのか

「だーかーらー」

帆布南高校、一年三組の教室にて。

「今日学校が終わったら会わせてやるからさー」

彩人は休み時間のたびに自分の机の前に立ちはだかる雨夜にあまや向けて投げかける。ちなみにこの時、乃樹のきは話に加わろうとしなかった。雨夜が呼んでも「彩人の裏切り者おおおお」と返されて机に伏せてしまった。

だが雨夜は違う。しつこい。食いつきがはげしい。

「いい加減つきまとうのをやめてもらえませんか？」
あきれていた。

これは今日に始まったことではない。

厳密に言つと月曜日からだ。

「本当だね？」

頭をすばやく振れば自分の背丈の半分もあるうサイドテールで周囲の人々に横殴り攻撃を叩き込みそうだ。雨夜が、彩人の机をどんと叩く。

「今日こそは会わせてもらうからね！」

「はいはい……」

「ルネちゃんかー」

半分夢の世界と入り込んでしまった雨夜を見て、彩人はよりいっそう呆れてしまう。

（本当にこいつをルネに会わせて大丈夫だろうか……）

彩人は火曜日、学校をサボっている。

その決断に至ったのは雨夜と乃樹の二人と一緒に登校している最中のことで、彼は新代荘に引き返す際に、雨夜に学校側に欠席することを伝えておいて欲しいと頼み、雨夜はそれに対して今度ルネに会わせるように半ば命令のように交換条件を出した。彩人はその時、

一刻も早く帰りたいだったので、雨夜には適当に返事をしていた。

彩人はそのことなど気にも留めていなかったが、雨夜は違った。翌日、彩人が学校へ行くなりそのことをすぐに持ち出してきた。

（いや、絶対に会わせないほうがいい）

断言できる。

彩人は出会って一週間も経っていないルネの性格を考えたら、当たり前なことだ。

彼女が一体どれほど人見知りの人物であるか。

出かけた後のルネの機嫌を損なわせた件については、謝ってどうにか許してもらい、解決することができた。

続いて雨夜の性格を考える。

猪突猛進。

有り余る甲斐性。

天真爛漫。

（三つ目はまあいいとして、俺は二つ目に苦しめられ、一つ目が絶対にルネにとって問題になるな）

雨夜が興味津々でルネを質問攻めにし、彼女が怯えるという構図が頭に浮かぶ。

逃げてしまうのではないか、とも思ってもおかしくなくらいだった。

（完全に相性、最悪だろ。ただ一方的にルネがな）

ルネは目を覚ました初日、若葉のスキンシップに困惑していた。

もちろん若葉のスキンシップも度を超えていると言えようが、雨夜はさらにその上に行く。

（若葉に対して初日は戸惑ってたけど、二日目からは案外普通に接していた。無意識のうちに気を許す人と許さない人を分けているのか？ さて、雨夜はどっちに入るだろうか……。

そうは言ってもやはり彩人はルネに雨夜を合わせる気になれない。だから雨夜とルネを対面させたくないがために水曜日は断った。その結果、雨夜からお叱りを買ひ、いつまでもしつこくついてく

るという困ったことになってしまった。

昨日は何とか断り続けて、一日を乗り越えることに成功したのだが。

今日も学校へ来た途端、同じく雨夜ハリケーンに巻き込まれた。そしてとうとう彩人が先に折れてしまった。

（この粘り強さは恐ろしい）

ちなみに今日の授業は午前中で終わり。

本来はいつも通り授業が午後以降も続くのだが緊急のことであつた。

朝のホームルームで担任教師は「急に会議が入ったため本日の授業は午前で終了する」とクラスの面々に伝えた。

教室の中で「あの火事が関係してるんじゃない？」という声がどこからか聞こえてきて、彩人はルネが加わった日常に浸り薄れかけていたあの夜の出来事を思い出しそうになり、一度振り切った。

彩人は二度と会いたくも無いと思っていたのだが、逆にそれは残された最後の手がかりとなるととれるのである。

ルネを追ってきた男、それと後から現れた謎の三人組。彼らならルネが何者なのか知っているのではないか？

ルネの記憶の手がかりはあれから一向に見つかる気配も無い。

四日が経った。

あのような経験はその時で一度きりで終わらせたかった。

今ですら夢じゃないかと思ってしまう。しかし、ルネがいるというところがそれは現実だと物語っている。

目を逸らしたい。

あれは悪夢であつて欲しい。

だから日常だけを見る。

（あれから一度も現れていない。もう現れないのだろうか？ できればそうであつて欲しい……）

「あ、や、と、ん！　おーい」

彩人の眼前で肌色が動いていた。あまりに近すぎたので顔を離し、ピントを合わせる。雨夜が手を振っていた。

「ああ、すまん。なにか言ったか？」

彩人は思考を断ち、雨夜にふたたび意識を向ける。

「右手だして」

「はい」

雨夜は素早く小指を彩人の小指に絡ませる。彩人は反射的に逃れようとしたのだが、ロックされたように小指がはずれない。

「ゆーびきーり」

定番の歌を唱え始める。

「うーそつーいたら――」

抵抗が無駄だとわかり、されるがままになる。

「一ヶ月あたしのパシリ」

「な？！」

「指切った！」

雨夜は勢いよく彩人と絡めた指を振って放す。

「ちよつと待て！　どっかおかしくなかった？！」

「そう？」

「パシリって言葉が聞こえた気がするんだけど……」

「気にしない気にしない。彩とんが約束を守ればいいんだよ。それだけのことじゃん？」

雨夜はいつも以上に元気が溢れていてずっと笑顔である。

（まあそうなんだけどさ……。いつか……嵌められそうな気がして
恐いんだよ……）

「前もって言うておくけど、くれぐれも大人しく、な？」

「りょーかい、です」

「できれば、いつそのこと一度も口をあけて欲しくない」

「それじゃあ、しゃべれないじゃん！」

「その方が助かるな。ルネはあなたさまのような気兼ねなく人と接

するということができませんので、あしからず」

「わかってるよ、もう！ しつこい！」

（どっちがだ……）

ここで最後の授業の始まりを告げるチャイムが教室内に鳴り、各生徒が自分の席に向かっていく。

「はあ」

彩人は窓の方を見てため息をつく。

（ルネはどんな反応するのかな……）

だがこの時彼は、帰ったときにはルネが新代荘にいないなど考えもしていなかった。

三章（２） 忍び寄る影

「うー」

誰にも聞かれないように小声で唸る。^{うな}

ルネは一度来た三階建ての総合スーパーマーケットの目の前までたどり着いていた。厳密に言えば、その店の入り口に面した通りの反対側に立っている電信柱に身を隠している。周りから見れば完全にフードで顔を隠した不審者である。

ここを目指して出かけたので目的地には着いたものの、何かをしにきたわけでもなくこれからの行動をどうしようかと迷っていた。

もうここに留まって五分以上経過している。

その間、通りすぎていく人々が不振な目を向けていたが、ルネはその意図を全くわからないまま見られることによってただびくびくと怯えていた。

幸いルネは背が低く、またすらつとした細身の体型だったので、顔を隠していても子供だとわかる。通報されて警察官がやってくるという事態は起こっていない。これが太った中高年の体型をしていた場合はすぐにでも警察官にすっ飛んで来て声をかけられていただろうが。

さすがに店内にまで入っていく勇氣は無かった。

（と、とりあえず、ルネも頑張った……と思う。これなら今度は一緒に歩くことぐらいならできそう）

ルネは人見知りを少しでも克服しようとしていた。これを克服しない限り新代荘から気兼ねなく出ることができない。

そう思った彼女は意を決し、一人で外に出てみることにしたのだった。

だが外出してみて、結果はこうである。

（藍が帰ってくるまでに帰らないといけないし、うん、もう帰ろう）
ルネが電信柱から姿を出した。

「ちょっといいかしら？」

「ひゃっ」

いきなり背後から肩に手を置かれたことによって飛びのこうとする。

「いつ！」

電信柱に頭を打ちつけてしまった。ルネは打った部分を押さえてその場にしゃがみ込んだ。ガンガンと頭の中で響、ジンジンと頭皮に痛みが走る。

「だ、だいじょうぶ？」

ルネは涙目で見上げる。女性に話しかけられていた。スタイルのいい色香の漂う金髪女性だ。金髪は肩の長さまでありウェーブがかっている。

「うん……」

手を差し伸べられる。

彼女は一旦躊躇したがその手を取って立ち上がる。

「ありがとう」

小鳥のような口からとても小さい声で言う。

金髪の女性はお礼を言われるとやさしく微笑み、「どういたしまして」と返す。

「あら？ あなた、綺麗な髪をしているわね」

ここまで近づくとフードからルネの髪が出ているのがわかる。

金髪の女性も綺麗な髪をしているが、ルネのものは対照的な銀色の美しさである。

「あなたも……です」

「そう？ ありがとう」

ルネは優しそうな人だとわかると心が落ち着いてきた。だが何か引つかかるものがどこかにあるような気がしていた。体がぞわぞわするようない……。

「でも、そこまで驚かれるとさすがにこっちも驚くわよ……。ところであなたはここで何をしていたの？」

「えっと……」

何をしていたか、と問われてもルネには答えようが無い。彼女は何もできなくて帰ろうとしていたのだから。

「まあいいわ。ねえ？　少しお話しないかしら？」

ルネは見知らぬ人にいきなり声をかけられるとは一度たりとも考えていなかったため、心の準備ができていなかった。目が泳ぐ。口がパクパクする。

「もしかして用事があったかしら？」

「い、いえ、帰ろうとしてたところで……」

そこで金髪の女性は目を細める。

「帰る……」

ルネは彼女の朗らかとした雰囲気が一瞬で冷たくなったのを感じる。それに恐怖心が少し湧いてしまった。

しかし冷たい雰囲気は冬の冷氣に変わって溶け込み、すぐに違和感は消える。

「今すぐじゃないといけないかしら？　問題無いようなら、ちょっとだけ付き合って欲しいんだけど……大丈夫かな？」

「え、えっと」

ルネは躊躇う。

（この人知らない……から、藍は知らない人には関わったらいけない、って言った）

「す、すみません！」

走り去ろうとしたルネの腕をその女性は掴み取った。

（?!）

「あ、あの……ルネ、帰らないと」

だが金髪の女性は都合よく引き下がってはくれなかった。

「ねえ？」

「は、はい」

女性の雰囲気は再び、冬の寒気と同じように冷たくなる。

「どこへ帰るの？」

「え」

「帰る場所があるの？」

「あの……」

「どうやらどこかのお人よしにでも拾ってもらったのかしら？　まあいいわ。そういうことにしておきましょう」

状況がつかめない。

恐い。

早く帰りたい。

だがルネの腕は金髪の女性に掴まれたままである。

「^{アルター}改変者であり、しかもその中でもこちら側の世界にいたというのに、あなたにこの普通の世界に居場所があるって言うつもり？」

なんだろうか、とルネは思う。言葉が難しくてわかりにくかった。ただ、何かこの人は――

「ルネを知っているの？」

訊いてみた。

まるで自分とは初対面ではないように思えたから。

「どうということなの？」

金髪女性は不審な表情を作る。

「ルネは記憶がないの……だから昔のことが思い出せないの」

「それは記憶喪失でことでもいいのかしら？」

「そう……」

そこで金髪女性は手を放した。彼女はルネに対して同情――

――はしていなかった。ただルネにも気付かれないように薄っすらと笑みを浮かべていた。

金髪の女性のほうが手を離れたのでルネは逃げられるようになったのだが、自身を知っているような口ぶりの彼女からすぐには離れられなかった。

「じゃあ、お話ししましょう。ここでは寒くてなんだから、その喫茶店にでも入って」

「知っているの？」

ルネはもういちど確認を取る。

「ええ」

ルネは思う。

記憶を失くす前の自分を知っている人がいた。そのことをどう捕らえて良いのかわからない。喜ぶことなのか。だが、このまま帰るのはもったいない。

彼女はもう網にかかってしまっていた。

「さあ、中に入りましょうか。そして教えてあげるわ。あなたが何者であるかを――」

三章（3） 雪の中に溶け込んで

「あれ？」

彩人は『〇〇五号室』のドアを回す。しかし、鍵が掛かっているため開かない。

「どうした、彩人？」

今は雨夜と乃樹も一緒に新代荘にやってきていた。彼らが新代荘を訪れたのは、今年は初めてだ。

「鍵が掛かってる……」

「彩とん？ 約束を忘れたわけじゃないよね？」

雨夜が指きり、指きりと復唱する。

「わかってるって。藍さんがよく戸締りには注意しろって言うたからな。だぶん、ルネはそれを守ってきちんと戸締りしてるんだ。おーい」

強くノックしてみる。だが、部屋の中で物音一つしない。

「乃樹ちよつと藍さんの部屋の方見てきてくれないか」

「おう」

乃樹は藍の部屋『〇〇一号室』は一階にあるので階段を駆け下りていく。彩人は自室の鍵穴に鍵を差し込む。

「そこは彩人の部屋だね？」

「ああ。もしかしたら寝ているのかもしれないからな。ちよつと壁際で確認を」

新代荘にベランダでも付いていればそこから部屋の中を除けるのだが、と彩人は考える。

部屋に入っていった彩人は壁際に耳を当てる。

「おかしいな……」

本当に人の存在感がしない。

「彩とん…… 覚悟はできているのかな？」

「待った待った！ 別にこの部屋に居るとは限らないんだ。ルネは

新代荘の家事を任されてるから藍さんの部屋の鍵も持つてるんだ。
だからここに居ないとしたら、藍^{あい}さんの部屋にいる」

彩人は昨日、ルネが起こした『洗濯機泡ぶくぶく事件』のことを
思い出す。

（今日もそんなことになってはいないよな……）

悲劇的な光景を頭に浮かべながら彩人は二階から一階に階段を伝
って降り、『〇〇一号室』の前まで来る。雨夜もそれ続く。

「乃樹どうだった？」

「おい、鍵開いてたぞ。どんだけ無用心なんだ」
肝心なことはそこではない。

「ルネはいたか？」

「いや。誰もいないぞ。ただ、ほれこれ」

乃樹が彩人と雨夜の前に見せた手に持ったそれは新代荘のマスタ
ーキーだった。

マスターキーを放置するとは本当にどれだけ無用心なんだ、と彩
人も思う。部屋が荒らされていないか心配になって一応確認はして、
問題が無いことがわかったら鍵をかけておいた。

ただこれでルネの部屋の鍵を開けることができる。

「ルネの部屋に行くか」

彩人の胸の中で不安という感情が渦をまく。まさか、そんなこと
は無いだろう、と無意識のうちに思考を望まない方向に向けないよ
うにしていた。

「ルネちゃん、どんな子かなー。可愛いかなー」

乃樹の言葉を聞いて、彩人はやや苛立ちを感じつつルネの部屋の
鍵を開ける。そしてゆっくりとドアノブに手を伸ばす。

「ルネいるかー？」

彩人は廊下を通っていき、ルネがいるはずの部屋を見る。

いない。

「いない、のか……」

その部屋は掃除された後だった。彼女の部屋だけでなく彩人たち

の部屋もそうなのだが、もうすでに一通りの家事を終えてしまっていることが見てわかる。

（どこに行ったんだ？）

彼にはルネの行くあてが思い浮かばない。

「おい、彩人。そのルネって子はいないのか？」

後から部屋に入ってきた乃樹が後ろから尋ねる。

「ああ……」

どうしてルネがここに居ないのかわからない。藍は仕事に出て今もおそらく仕事中。若葉と幸祐は、彩人たち三人は学校が終わってから急いで帰ってきたので、先に帰っているとも考えにくい。

（一人で出かけたのか？ でも、なんで……）

ルネは極度の人見知り。それに記憶喪失の彼女が新代荘の周辺のことなど知っているはずがない。

彩人は、出かけるはずがない、と主張する。

それは先日。

「お前は一人で外に出るのはやめとけよ」

「ん？」

「ルネが一人で外出なんてしたら、人とすれ違ったびに叫び声あげそうだなんな」

「ひどーい」

「しまいには迷子になって帰って来れなくなったりしたら、もう最悪だよな」

「彩人のバカ！」

と、いったようなやり取りを交わしていた。

「さあ約束を……って彩とん？　どうかしたの？」

いつもどおりに彩人がリアクションを取らない様子なので、雨夜が少々気まじめになってしまう。

（一人で出かけるなって言っただんだ）

「ああ！ おかしい！」

怒鳴ったように言うので雨夜も乃樹も驚いた。
不安の渦が徐々に大きくなっていく。

彩人は忘れようとしていた、目を逸らそうとしていたその事実から、もう正面に認め向き合うしかなかった。

実に嫌な予想だ。

ルネがただ一人で出かけたならばまだいい。

だが、そこへ『奴ら』が関わっていた場合どうなる？

「彩人」

雨夜が平常心を失いつつある彩人のもとにやってくる。

いつもの周囲を明るくする効果を持つ楽観的な表情は薄れ、まれにしか見せない真剣な眼をしていた。

「かなり心が乱れているみたいだけど、そんなに大変なことなの？
ここにルネって子がいないということとは」

「ああ」

彩人は確信がないにしても頷いた。

そう。

（ルネが誰かと接触したと決まったわけじゃない）

必死で頭の中を整理していく。

（でも用心にこしたことは無い）

ルネを今見つけ出さないと気が済みそうに無いと判断した彩人は
決断する。

「ごめん二人とも。今日は帰ってくれと助かる」

「彩人？」

彼は二人の顔を交互に見る。

「俺は今からルネを捜しに行ってくる」

「なら手伝うよ。乃樹も手伝うよね？」

雨夜が即座に言い返す。

「え、ああ、お困りなら手伝うぞ！」

乃樹も雨夜の考えに同意。

「お前ら……」

「ほら分かったら、さっさとルネちゃんがどういう子なのか教えてよ。何か情報がないと私たちが捜せないじゃん」

一人より三人、ルネを探し出せる効率も三倍になる。

「ありがとよ」

彩人はルネがどこに行つたのかを深く考える。

（やはり一度行ったことが最有力だろうか……。行つた場所は火曜日に出かけた町か、それともう一箇所——あの雑木林か）

「まずルネの容姿について教えておく。ルネは極度人見知りだからおそらく顔をフードで全部覆っていると思う」

火曜日にいざこざがあつたがその時に買った服はフード付だった。出かけるとしたら必然的にそれを選んだと予想できる。

「それじゃあ顔が見えないじゃん」

まったくその通りであるが、ルネはのためにフード付の服を好む。

「でも少しでも見えれば徹底的な特徴がある。」

「それはどんな？」

ルネの特徴。

彩人も初めて会つたときにふいに見とれてしまったそれしかない。

「銀髪。そして青い目をしている」

「外国人かよ！」

「名前からは推測はできていたけどね」

フードで隠れていると言ってもそれさえ確認できればそれはルネと断定してもおかしくない。彩人はこれまでこの帆布という町で同じような容姿をした人物を一度も見たことがなかったからだ。

「でもそれなら私たちでも分かりそうだね。とりあえず会つたら彩人の知り合いって伝えれば大丈夫だよな？」

「まあ……ルネが逃げ出そうとする前に」

「で、どこを捜せばいいんだ？」

町か。雑木林か。

「二人は街の方を見てきてくれ。できたらここから、町にあるあの大型スーパーマーケットまでの道一体を頼む。ルネは道のと真ん中は歩いたりできないと思うから、影になるようなポイントに目を向けてくれ」

「大型スーパーっていうのは、たぶんあれでいいな」

帆布では大型スーパーマーケットは一店舗しか存在していないので雨夜と乃樹にもすぐに伝わる。

「俺は別の場所で見えておきたい場所があるからそっち行く。じゃあ二人とも頼んだ！」

彩人は先に雑木林へと向かった。

「わかったよ」

「了解した」

彩人はあつという間に行ってしまった。走る速度からして十分に焦っていることなど簡単にわかる。

「私たちも行こうか」

「おう」

「彩とん、必死だったね」

雨夜は隣を走る乃樹の方を見ずに語りかける。

「ああ、久しぶりにみるぜ。それだけ心配する事態なのか……それとも彩人がその人のことをそれだけ大事に思っているのか」

「……。——思っているのかもね」

二人は町のほうへ急ぐ。



昼時だというのに気温が上がった感じはしていなかった。むしろ下がっているようにさえ思える。空も灰色が濃くなっていた。

四日ぶりになる。

日曜日にコンビニへ行った時と同じ経路を辿っていく。その経路は両側を建物で囲まれていつも影を作っている細道ばかりなので、

路面は数日たった今でも雪に覆われている。

彼は一度も足を止めることなく十分足らずで雑木林への入り口に到着する。

（ルネはここにいるのか？ いや、頼むここにいてくれ）

彼が最初に取りれる行動は二択だった。

ただ外に出たかった。それはルネの性格から考えて削除する。では、なぜだ？ と、次々に事の発端を考えていくうちに彼が断定した理由。

ルネは自分の記憶を探っている。

彩人にはそれ以外考えられなかった。

「くそ……」

彼は歯噛みして雑木林の奥へと続く一本道を突き進む。

（俺はあれからなにもルネにしてやれていない。なにも思い出しちゃいない。なのに……なのにルネは新代荘に居座って俺たちと普通に暮らしながら、自分からあれ以来記憶のことについては話さなくなった。別にこれから思い出していけばいいよ、だなんて、それでいいのか？ 自分が誰なのかもわからないのに。俺がそれをなんとかしてあげるんじゃないのか？ 俺は恐れていたじゃないのか？ ルネの正体を知ること）

ルネが使っていたあの不思議な力。それを炎使った男と同じもの。つまりは、同類。

もし追求してしまえばあの日のようにまた『非日常』に関わることになるのではないか？

彩人の足は一本道の途中で止められた。

木々で生い茂っていたはずなのにぽっかりと空いた場所。もちろんそれらはあの男の炎によって焼き払われたものだ。

今は立ち入り禁止と書かれたテープが張られている。彩人が来た方と反対側にも同じようにテープが張られている。

普段から使う人などいないように思われる道なのに立ち入りを禁じている。

あの時の出来事はこうして影ながらも『日常』に表れている。
「いない、か」

彩人はテープをくぐり辺りを搜索するが、銀色に輝くものは見られなかった。

（ここいないとしたら町しかない。いや、もしかしたルネトが全くの知らない場所に行っているとしたら……）

それでも町に行ってみるしかなかった。検討もつかないところを手当たり次第搜したところで見つかるとは到底思えなかった。

彼は来た道を戻らずにコンビニのある方面からの道に行く。

この道を進み続けると同じように建物に囲まれた細道になるが、それをさらに進むと自動車も頻繁に通る車道に抜ける。その車道を西に進むと橋が架かっている。こちらからも町に行くことができる。走っても町まで二十分で着くのは難しいだろうが、来た道を戻って新代荘から行くよりかは早く着ける。

もう十二時をまわっていた。

空腹なんて気にしてられない。

やがて彩人は総合スーパーマーケットに着いた。その時には店の外に付いた丸い形をした時計をみると時計の短針と長針は一直線になっていた。彩人はずっと走りっぱなしで体が火照っていたので気温が下がっていつていることに気が付いていなかった。

「雪？」

ここ数日間は雪が降らなかった日が続いていたのに、気温が再び下がったせいか雪雲が活動を再開する。

冷えた空気が汗をかいた体に吹き付けて一気にほてりをなくす。

「この周辺を捜すか……それともすれ違いで新代荘に帰っていると考えられる……どうしたらいい！」

この時間帯は藍が仕事を終えて帰ってくる。

（藍さんだったらルネがないことを知ったらどうするか）

そう考えていると。

「彩とーん！」

聞きなれた声と彩人をその名で呼ぶのはひとりしかいないので、誰かはすぐにわかった。

「どうだった？！」

「ごめん、それらしき人は見つけれなかったよ。まだノツキーが周辺をまだ見回っていると思う」

「そうか……わかった。二人はもういいよ、昼過ぎだし、雪降ってきたし。後は一人でなんとかする」

「でも、この辺りのことを全く知らない人なんですよ？ だったら迷子になって帰れなくなってもおかしくないよ。交番でも尋ねてたらいいんだけど……」

彩人はルネが交番に尋ねるわけがないと思った。

（ルネはたぶん交番を知らないんじゃないか？）

そもそもルネが誰かに自分から話しかけられるとは思えない。

「ノツキーに会ったらもう帰っていいと伝えておいてくれ。俺はこれから新代荘までも道を探して行く。すれ違いになってるかもしれないから」

「あ、彩とん！」

雨夜の返事を待たずに彩人は走り出していた。

町と新代荘の間には住宅街と学校、そして橋があるくらいだ。

（学校って線はあるだろうか？）

思いついた先に直接向かう。何の手がかりもないのだからそうするしかない。

学校や住宅街は町より土地が高い。だからこれより先は緩やかな上り坂がずっと続いていく。彩人は長時間走り続けられるほど体力はない。上り坂は体力の切れた彩人のを苦しめる。

「はあはあ」

白い息が空中に出ては煙のように消えていく。
足が地面にへばりついているような感覚になっていた。

彩人は足を地面から引き剥がして進んでいくがその進む距離は短い。走っているはずだったがいつの間にか歩いていた。

（ルネ……。どこだ……）

学校の校門のところに来てとうとう立ち止まってしまった彩人は手を膝につく。

（これだけ探してもいないんだったらもう帰っているよな……。スートの前に丸まってでもいるよな。勝手にどこにも行ったりしていないよな！）

彩人は顔を上げる。

（？）

雪が降って先が真っ白になっている坂道を見上げる。

よく目を凝らす。

白色の中。

溶け込んでいる。

白色よりやや銀色に近い。

（あれは……）

「ルネ！」

彩人は白色の空間へと叫び、再び重い足を走らせる。進み方は遅かったが不思議とつらは感じられなかった。

銀色の少女は静かに振り返った。

「どこへ……行っていたんだ……？」

彩人の体力はもう限界だ。息切れをしている彼の言葉はところどころ途切れる。

銀色の少女——ルネはそっと彩人に近づく。そしてルネの体は彩人の体の中へと埋められる。

（ルネ……？）

「ごめんね」

「はは……見つかってよかったよ。お前が俺の手の届かないどこかに行っちゃったみたいだった」

「……」

「さ、帰ろう。昼飯、食ってないだろ？俺はもう腹減って倒れそうだわ。あつ、藍さん俺が帰ってくること知らないから俺の分用意してくれてるかな……。用意してなかったら俺に作ってくれよ」

「……うん、わかったよ。帰ろ……」

ルネはその後短い答えしか返さなかった。

三章（４） 彼らの居場所

彩人あやととルネが新代荘にいしろそうに帰った頃には一時を過ぎていた。藍あいも帰ったときにルネがいなことに慌てていた。帰ってくることを信じていた藍は、帰ってきたのがルネだけではいと知って「あんたが連れまわしてたの？」と鋭い眼光をルネの隣に立つ彩人に浴びせた。

藍の部屋に入った彩人とルネはさっそくストーブの前に座り込む。再び冷え込んでしまった帆布町はんぷを歩いて帰ってきた二人の体も当然冷え切っていた。

「あんた達、風邪引いてもおかしくないわよ」

藍が二人分の味噌汁をまず机に運んできた。

「以後気をつけます」

「ごめんなさい」

彩人はどうしてルネが一人で出かけようと思ったのかについて聞くのは、ルネが少し落ち込んでいるようにも見えたので、今は止めておいた。

二人は味噌汁をすすると体の芯から温まった。藍が湯気を立てたご飯を運んでくる。

中をみるとお茶漬けになっていた。

「ルネの昼ごはんはいつもこのメニュー？」

「あんたたちの弁当と同じものだったり、そうね……昨日なんかは別のものを作ってあげたわ。それよりなんであんたがここにいるの？」

「ああ、今日は教師が緊急会議を開くとかで午前中で終わりになったんだよ」

「ふーん」

「幸祐と若葉わかばは……帰ってないところを見ると部活やってんのかね、この天気で」

彩人はそう言って窓の外を見やる。窓の外では、上から無数もの

白い結晶が落ちてきている。

「あの二人は一応、弁当ももたせてあるから大丈夫……って、彩人、あんたも弁当あるじゃない？」

「あれ？ どこやったつけ……そうだ、部屋の前に鞆ごと置いたんだった。うわー、中身めっちゃ冷えてそう」

「それ、あんたの夕飯」

「なんですと?!」

（新代荘には電子レンジなどという人間が生み出した便利な家電はないんだぞ!）

新代荘で料理を温めなおすことができるのはコンロの上だけだ。

そして、彩人の夕食はそれとなった。

「冷たい！ 歯が痛いぐらい冷たい！」

「あはは……彩人、ストーブの前で温めたら？」

今日は味噌ラーメンを選んだ若葉は、手を発泡スチロールでできたカップ麺の器に手を当て温まりながら、彩人に勧める。

「もはや解凍だな」

「彩人、分けようか？」

ルネはカップ麺ではなくご飯と味噌汁を食べている。平日五日間カップ麺というのは脂分の濃いものが苦手な彼女にとっては苦しいので藍が特別に例外扱いとして別のものを用意されていた。

「ルネは優しいわね。でも彩人が悪いのだからその必要はないわよ」

「そうなの？」

「そうそう彩人はあれでもだいじょーぶ」

幸祐は無言で頷いて同意する。

「わかった」

「そこでわかるなよ！ 分けて、恵んでえー」

ルネが加わってさらににぎやかになった夕食のひと時もこれで四回目。

新代荘の皆は楽しかった。彩人はいつまでもこんな時間が続けばいいと願う。

「続くよな……」

「彩人なにか言った？」

「いや、なんでもない」

彩人は弁当箱の具材をひとつ摘んで口の中へ放り込む。

（温めたけどやっぱり一度は冷えたものの味が……）

「ごちそうさまー」

「ごちそうさまでした」

今日も若葉と幸祐は夕食を食べ終わったら自分の部屋に戻っている。

彩人はテレビを見ていた。

「明日も雪かー」

「来週は試験だー」

彩人の言葉二かぶさるように藍が言う。

「……」

「あんたさ、勉強しなさいよ。若葉ですらしてるぐらいなのに。これで一年生の最後の成績がつくんだから、どうなっても知らないわよ？」

「めんどー」

彩人は校内で下から数えてすぐにあるという位置にいる。試験の範囲発表は一週間前から始まっているにもかかわらずほとんど手を付けていない。

（決戦前夜にやればよし。一応、最近は大たい授業はちゃんと聞いているから少しは点数が取れるだろう）

彼は中学の時から身についている方法のままで今回も挑もうとしている。このままではいけないと危惧すべきなのは彩人自身も承知しているが、それでもやる気が起きないので手をつけられない。

「とりあえず、あんたはルネを連れて部屋に戻りなさい」

そのルネは彩人と机をはさんで向かい側に座りながらテレビを見

ている。

最初は、何だこれは！ という表情をしてテレビにかぶりつくような勢いでぺたぺた触っていたが、今はもう大人しく座って見ている。

（テレビでなにを言っているか理解できてんのか？）

彩人は立ち上がってテレビのボタンを消す。その時、ルネが「あー」と声をあげるが彼女を連れて藍の部屋を出る。

外では雪がまだ降っていた。

「こりやまた積もるなー」

もう道路は一面が真っ白だった。

「じゃ、おやすみ」

ルネに手を振って部屋に入ろうとしたところで声をかけられる。

「ん？」

「わたしのことは……もういいよ」

「どうい——」

「ごめん。変なこといつちゃって。じゃあ、おやすみなさい」

彼女は苦笑いして自分の部屋へ早足で入っていった。

（なんだ？）

彩人は部屋に入るとストーブをつけて、お風呂を入れる。彼はお風呂が入るのを待つ間畳んで置いてある布団に飛び込む。このまま寝てしまいたかったがどうにか堪え、お風呂に入ってから布団を敷いてまた正面から飛び込む。

「明日から手がかりを…… っても今日あの場に行ってもなーんにも無かったなー」

（今まであの場所に近寄ることを恐れていた自分はなんだったというのか）

体を返して天井を見る。

（ルネはたぶんその手がかりを探しに出かけた。俺が見つけれないから自分で探しにいったんだ。ん？ でも、なんで学校の前に？ ま、いつか。あの男たち、どこに行っただんだろうか。警察が動い

ているのに見つかったくないなら、ただの高校生の俺なんかに見つかるのかよ……。そもそも見つけたところでどうする？ ルネは何者だって聞くのか？ 会った時点で殺される。あいつらは関係したとして一度は俺を消そうとしたんだからな。奇跡的に俺はこうして日常を過ごしているけれど)

「はあ」

彩人は深いため息をつく。

結局、どうにもならない。

ひよつとしてルネが「もういい」と言ったのはもう気にかかる必要がないってことではないのだろうか？

何かをしてあげたいと思う。

でも無理だ。

彼女もそれをわかってくれた。

(俺はルネに甘えているのか)

彩人は気色ばみ、寝入った。新代荘では皆だいたい十二時を過ぎると床に就く。幸祐が勉強のため、たまに起きていることはあるが。新代荘にはテレビが藍の部屋にしかないため、遅くまでテレビを見ていったことがない。彩人、幸祐、若葉は藍が一人で養ってきため、嗜好品はほとんど与えられなかった。だから自分の部屋に行ったらとくにやることは特に無い。

現時刻、午前二時。

新代荘だけでなく外も音が無くただただ穏やかな夜であった。

室内では時計の秒針がカチカチと一定の間隔で動き、一周するのを繰り返す音だけが微弱に響く。

(?)

彩人は夢を断ち切れ、現へと引き戻される。暗い中、蛍光色素がふと時計を確認。蛍光色素が長針と短針に含まれているため時刻がわかる。

「二時か……」

彩人は目をこすりながら、再び寝付こうとしたのだが、静かなは

ずの新代荘でかすかだが物音がした。

（なんだ？）

誰かまだ起きているのだろうか、という疑問が浮かぶがすぐにそれは無いと思った。彩人は二階に部屋を構えているが、藍、幸祐、若葉の部屋は彼とは違って一階にある。先ほどの物音は床下から聞こえたわけではないのは明らかだった。

強いて言うなら自身の部屋の外——新代荘の二階にある三部屋に面する廊下——から聞こえたような気がした。

（ルネ？）

先週末までは二階は彩人だけが居座る場所だったが、今週新たにルネが加わったことにより二階の住人はもう一人いる。物音の主は彼女かと思うが、夜分遅くにそれはないと彩人は考えを改める。

（ちよつと見てみるか……）

彩人は物音の正体が気になって寝付くことができなかったので布団から這い出て確認しに行こうとする。

「うわ……寒い」

冬の真夜中は凍てつくような寒さだ。フローリングの床は氷面のようだ。

毛編みの靴下を履いてから椅子にかけてあった上着を手に取り着用する。

そして玄関まで忍び足で移動し、恐る恐るドアの覗き穴に右目をあててそこから外の廊下を見る。

玄関の前には人影は無かった。

（だめだな……なんか心配性になっちゃったかねえ……）

とりあえず念入りのためドアを少しだけ開けて廊下を右端から左端まで見渡す。

（はは……誰もいるわけがないじゃないか……）

彩人は安心して首をドアの中へと引っ込めようとしたその時。

「――！」

気付いてしまった。

彼は言葉が出なかった。

背筋が寒くなる。

決して気温が低いからではない。

それは目線が下に行っていないなければ気付かなかった。

「おいおい……」

彩人は暗いので勘違いをしたのかとも思ったが、しゃがんで実際に廊下の床をなでてみたら窪みは確かにそこにあった。

足跡。

今日降っている雪は新代荘の廊下に振り込んで薄っすらと層を形成していた。人がこの上を歩けば必ず足跡ができる。足跡ができないとしたら空を飛ぶ鳥か、宙を浮く幽霊か何かしかありえない。

つまり。

（誰かがここを歩いた……）

彩人が聞いたと言う物音は単なる勘違いなどではなかった。

紛れも無いここを通った誰かが立てた音。

もう一度、首だけ外に出して廊下を確認する。しかし、暗闇の中うごめく物は無い。

「一体誰だ？ なにをしに来た？」

足跡は続いているのだろうか、と彩人の部屋から光が漏れているだけなので廊下をじっくり見ることはできない。

彩人は一旦部屋に戻り、明かりを捜しに行く。

「そうだ、懐中電灯はあの時……」

彼が暗い中歩く時に使う小型の懐中電灯は日曜日にお陀仏となっていました。

なので、非常用に設置された懐中電灯を押入れから手に取り、今度は靴を履いて廊下に出てみる。

懐中電灯を足元に当てる。足跡はやはり続いていた。

続くその先を懐中電灯で少しずつ遠くを照らしながら傾けていくと一つの部屋の前で途切れていた。

「おい嘘だろ……」

彩人は啞然とする。

足跡の終着点——『〇〇五号室』。

紛れも無く、銀色の少女の部屋。

あの時の炎が頭を過ぎる。

（まさか、あいつが……あの男が……）

だがその検討は履き違えていた。

証拠は足跡。彩人の足跡より小さい。

それに加え、足跡の進む方向。足跡は部屋の前から始まっていた。

「ない、そんなことあるわけがないっ！」

ルネが遠ざかっていってしまうような。昼時にルネを探し回っていた時と同じ感情だった。

違う世界。

『日常』から外れた『非日常』。

『正常』ではない『異常』。

全てはその世界にいるあの男の言葉。

彩人は寒さなど気にせず寝間着のままルネの部屋に駆け寄る。

震えた手でドアノブを握る。

ゆっくり。

ゆっくり。

回していく。

やがてドアノブは回転の限界に達してそれ以上周らなくなる。

そして前へ。

ドアはすんなりと開いた。

何にも阻まれること無く。

「おい……ルネ」

部屋の中は外と同じく暗い——人の気配も無いただの空き部屋。一週間前と同じ光景。

「藍さんが戸締りはちゃんとしろって、あれほど言ってたじゃないか……」

彩人は『〇〇五号室』に入っていく。

靴を脱ぐ。

廊下にかかる。

トイレと風呂場を通り過ぎる。

流し台がある。

そして、八畳間へ。

「なあ……聞いているか？ ルネ」

彩人は語りかける。

無人の部屋に向かって。

ごめんね。

彩人が昼にルネをやったのことで見つけ出した時に彼女が言った一言。

あの時の様子は四日間を通して普通じゃなかった。

「なんで……なんで、また、いなくなる！ 一人でどこかへ行こうとするんだ！」

室内は綺麗に整理されていた。布団は畳まれている。その上に同じく綺麗に折りたたまれた掛け布団。それ以外のものは出ていない。床にも何も転がっていない。

「くそっ！」

言葉をはき捨てて彩人は部屋から飛び出す。

足元に注意しながら部屋から出たところで足跡を辿っていく。

まず階段に突き当たる。

滑り落ちる危険を顧みず駆け下りた。

足跡はそこで消えていた。

元から無かったのではない。後から上書きされたのだ。

建物からであれば当然雪が直接降りかかるので、顔に大粒の雪の結晶がいくつも突っ込んでくる。

冷たさがじんと伝わる。

冷たさは痛みに変わる。

「耳、痛いよ……。そんなに近くで大きな声出したら駄目だよ」

「お前のせいだ。でも本当は、俺のせいだ……」

「いいんだよ、もう」

ルネは彼を咎めたりは決してしなかった。あなたには責任は無い、と。

「なあ？ こんなことになってるのはさ、俺がお前にとって何の役にも立てなかったからか？ 俺は同じ境遇のお前をどうにかできるんじゃないかって思った。でも力になれなかった」

彼女は、そんなことはい、と頭を振る。

「じゃあ、どうして？」

「ルネは違うから」

違う？ と尋ねようとする前にルネは彼から体を離し向かい合う。刹那、彼女の手元が光った。

彩人は彼女の手元に明かりを当ててそれを見た。

「それは……」

それは先鋭な嶮山けんざんのような氷の結晶。

光を浴びて反射し煌びやかだった。

彼がそれを見つめていると、それは雲散霧消した。どこへ消えてしまったのかもわからない。

見覚えがある。

最初に出会った日、ルネが彩人を守るために使った力。それと全く同一のものである。その力は彼の身を守った。

しかし。

この世界にとっては紛れも無い『異常』。

「どうして……」

彼女は記憶を失っているはずだった。当然、その日もこともほとんど覚えていないに等しかった。

「言ったとおりだね……普通じゃないって」

彩人とは違う世界にいるルネはそつと微笑む。

（まさか、これが理由だって？）

「ルネがいると皆の迷惑になる」

「そんなこと……」

「恐かった。自分が誰かもわからなくて。でも今はもう恐くない。それはみんなのおかげ。だからもう思い出さなくてもいい」

だから、もう責任はない。

ルネは訴える。

「みんなは優しくかった。藍も、若葉も、幸祐も。ルネが誰なのかもわからないのに。いろいろしてくれた。でも、もうみんなと一緒にられない。こんなルネと一緒にいるべきじゃない」

白色の少年は彼女の言い分をしつかり聞いた。その上で判断を下す。でもどの道選ぶ答えなど最初から決まっていた。

「だから？」

「え？」

「お前はどうかって聞いてんだ。俺たちと一緒に居たいのか？ 居たくないのか？ いたくないんだったら俺はお前を止めない。どうかへ勝手に行けばいい、それはお前が決めることだからな」

「ルネは……」

「俺はお前の気持ちが知りたい」

「いたいよ、みんなと……でも——」

それだけ言うとルネは口をきつくつむぐ。

「だったら帰ってこい！」

「……え？」

「お前がそんなだからって俺は別になんとも無い。気になんかしない。俺はお前に一緒にいて欲しい！ 他の奴らも言ってただろ！ だから何だって言ってたんだよ。言っただろ俺たちは！ もうお前は『家族』だと！ あの場所は俺たち皆の居場所だ！ それ以上でもそれ以下でもない！ お前は絶対に俺たちから離れなきゃいけない規則でもあるってのか？ お前の居場所はここじゃだめなのか？」

ルネは俯いて頭を横に振る。

「それが本心なら、俺はお前を無理やりでも連れて帰る」

彩人は彼女に手を差し伸べる。

「さ、帰ろう」

ルネは動かしかけた手を一瞬止めるが、差し伸べられた手を取った。彩人は彼女の手をしっかりと握る。もう二度と彼女が逃げられないように。

彼女の目に溜まったそれは雪解け水のように美しく流れ出していた。

そして彼らは白雪舞い散る闇夜の中、帰るべき場所へと帰っていく。

三章（5） 嵐の前の静けさ

日々を経ていよいよ金曜日。

休日まで先送りになっていた『ルネ歓迎会』も間近に迫る。

昨日テレビの天気予報ははずれることなく、雪は昨日からずっと強さを弱める気配も見せずしんと振り続けている。

「よっしゃあ！ 今日で今週の学校は終わりだー」

彩人^{あやと}は両手でガッツポーズしながら、ぐんと伸びをする。

一週間の最後を乗り越えれば二日間の休日がやってくることに一人歓喜に浸って浮かれていた。

「何度も言わせないでくれる？ 来週はテストだって」

藍^{あい}の言葉が彩人を一閃する。

ルネが彩人の元に朝食を運んできた。もうお手の物である。今日の彼女は時折笑みがこぼれており、どこかうれしげな雰囲気である。機嫌がいいようだ。

彩人はご飯と味噌汁の二つのお椀を両手にそれぞれ受け取り自分の前に置く。

「一夜にして打ち返してくれよう！」

彩人は味噌汁をすする。実は少しだけやっていたりするのだが彼は話さない。

（少しいい点をとって驚かせてやろう！）

「ま、いいけどね。困るのは全部あんだから。そうだ。なにか取り決めのしない？ 例えば赤点取るたびに私の言う事に絶対服従」

藍が恐ろしいことを言うのを、彩人はそっぽを向いて知らん振りをする。

「彩人」

ルネが窓の方に目を向ける彩人を呼ぶ。

「なに？ おい、まさか、ルネ……お前も俺に同じようなことを言うわけじゃあるまいな？」

おのの
慄く彩人を見てルネは小首をかしげる。

「おや、違うようだな、と思った彩人も同じように小首を傾げる。」

「おいしい？」

味噌汁の具材を箸でつまんで食べている彩人を見て、ルネは味の感想を訊く。

「彩人は缶の序を変に思うが一応おいしいことには間違いは無いのでそのまま、おいしい、と答える。」

するとルネの顔が、ぱあっと明るくなる。

「良かったわね」

「うん！」

「彩人は味噌汁がどうかしたのかと二人のやり取りをわけもわからずに見る。」

「それ、ルネが一人で作ったのよ」

「そう言われて手元のお椀に目を落とす。」

「へえ、そうかルネが、一人で」

「彼はルネが朝食をつくる手伝いをしている様子は毎朝見ていた。」

「しかし、あくまでも手伝いであって食器を並べたり食材を洗ったりなど、ちよつとした手伝いだとはかり思っていた。」

「そうよ、この子、上達早いわねー、うちの子とは比べられないわ」

「藍は照れているのか赤くなった頬のルネの頭をなでる。」

「彼女の方はいいいようになでまわされている。」

「それ若葉が聞いたら泣いちゃうかもよ」

「この先、一家を担うのはこの子になるかもしれないわ。これからも教えて欲しかったら……と言ったものの、財政的余裕ができれば他の食材も買ってくるから、申し訳ないけどその時までちよつと待ってね」

「彩人はこの一週間で食べたものを思い出す。」

「朝食——ほっかほっかこれで冬の寒さなんてへっちゃら、白米ご飯。同じく味噌汁。」

「昼食——弁当の中身はご飯、野菜、焼き魚。以上、肉なし。」

夕食——カップ麺。

「もう一週間、食事が寂しかったな……。まあ、日曜日は鍋だったけど」

「今日でカップ麺ウィークはおしまいだから、来週はちゃんとした夕飯に戻るから安心なさい！」

（それも弁当の中身と大差ないだろうけど）

彩人は朝食を食べ終え、部屋の隅においてあった鞆を手にとって玄関へ行く。

「ほら、傘」

藍が傘を持たずに出て行こうとする彩人を呼び止める。

昨日の朝までずっとこここのところ雪が止んでいたのどつい忘れていきそうになった。

ルネも急いでばたたと玄関に駆けてきた。

彩人はなんだろうかと彼女が来る方向を振り返る。

「あ、彩人！ き、今日、帰ってきたら、で、出かけよ」

「出かける？ ん、わかった」

（ルネが自分から出かけたいなどと言うとは……）

彩人は断る理由なんて無かった。

ルネはそれを聞いて、いつてらっしゃい、と言って彩人が新代荘から出て行くのを見送った。

藍は二人のやり取りを眺め、我が子を見守る母のような視線を送っていた。



「へー、見つかったんだ。良かったね！」

彩人の斜め後ろの席に座る雨夜あまやが安心した表情を浮かべる。

その隣の席に座る乃樹のきも同じ様子だった。

「もしかして、あのあと、ずっと捜してくれていたのか？」

「ちよつとだけな。まあ見つかったならそれでいいじゃんよ」

乃樹が親指を立ててぐいつと彩人の正面に腕を伸ばす。

「すまん。なにか礼をしたほうがいいな」

「彩とん？ そんなもの必要ないよ。あたしたちの仲じゃありませんか」

「ああ、本当にありがとう」

彩人は二人を見て微笑む。

「で」

「で？」

「いつ会えるのかな？ ルネちゃんには」

「そうそう早く会わせてくれよ、彩人」

会える機会を逃してしまった上にその会う人が行方不明という事態と一緒に対処してくれた二人には、彩人はとても感謝していた。

二人は感謝などいいからとりあえず会わせてくれ、と言わんばかりだった。

「ああ、そうだな……」

今日はルネが出かけたいと言っていたことを思い出す。

「今日もきついか……一目見るぐらいなら大丈夫だと思うけど」

「彩とん、今日はなにかご用事？」

「まあ、ちよつと出かける予定が——」

「まさか、ルネちゃんとやらと一緒になのか?! デートでもするつもりなのか?!」

乃樹が大声を出すので教室内がざわめき出す。

視線も三人の席がある教室の角へと集まる。

それに気付いた乃樹が、あはは、と笑いながらぺこぺこ頭を下げると教室は元通りになった。

「で、それで、デートなのか？ ああ、もう彩人が俺と違うところに。帰ってこい彩人おー」

情けない声を漏らす乃樹に対して、彩人は。

「いや、そういうんじゃないよ。ただのお出かけ。ルネの方が出かけたといって言ったからそれで」

「それはもうデートじゃない？」

雨夜がそう言うとな樹がもたえ苦しむ。

（そんなふうに考えていいの？ いやいや、ルネにそんな気は無いんだから）

彩人は心の奥底を引っかかるような変な感じがしたがあまり気に留めなかった。

「だから、そういうことで今日はちょっとパス、かな？ どうする一目だけでも見るか？」

「俺はそのうちでいいよ」

机の上でうつ伏せになった乃樹が手を振りながら言う。

「会いたい……、でも、一目だけ……、やっぱり、会いたい……、でもすぐ帰らなきゃいけない……」

雨夜はぶつぶつと小声で呟いていた。

「どうする？」

「が、我慢する……」

「おお、意外！ すぐにでも会いたいかと思ったのに」

「そんなの当たり前だよ。でも、一目見たらこの衝動は止められない。その代わり、言った時には何倍にもこの衝動は増してるから。」

爆発するかも」

「やめてくれ……」

放課後を知らせるチャイムが学校の敷地内いっばいに響き渡る。

「よっしゃー、終わったー」

「一週間、お疲れさん。」

「おつかれー」

三人は一週間の授業を終えて学校を出る。それから彼らは全員、帰宅部としての活動を遂行したのだった。

彩人は他の二名とは橋を渡る前で別れ、ルネが待っている新代荘へ。

「おい、帰ったぞー」

彩人は自分の部屋に鞆を置いて制服から私服に着替えた後、ルネの部屋のドアをノックする。

すると、ドアがカチャリ、と開いてルネが出てきた。

「おかえり」

「ただいま。ところで、だ。どこへ行きたいんだ？」

「えっ?!」

彩人が訊くとルネはぼかんと口を開けてしまった。

「お、おい……決めてなかったのか？」

「あ、え、えっと、それじゃあ、前と同じとこで……」

彼女からの要望が出たところで二人は町のほうへ歩き出した。

いつものように移動手段は徒歩。

ルネは新代荘で留守番のことを。彩人は学校へ行くことができないルネのために学校のことを。それぞれ話しながら移動するので長い移動時間は暇にならない。

そのまま町に着く。

「着いたが……どうする？」

「え……」

「なにがしたい？」

「……」

ルネは黙ってしまった。

全く目的も予定も決まっていなかったのだった。

(じゃあなんで出かけようと思ったんだよ……)

彩人はそこで、ふと思った。

「そういえば最近散歩してなかったなー。ああ、でも寒いから外に

出ようと思わなかっただけか」

「散歩？」

「ん？ ああ散歩。ただ単になーんにも考えずにふらーとすることだ。冬は寒いからな、あまり外に出たくないんだよ。早く春は来ねえかなー。春が来たらぽかぽかして暖かくて気持ちいぞ」

「ふえー」

感心して聞くルネをよそに心の中で愚痴をこぼす。

（まったく……小遣いぐらくれたら店に入って食い物買ったたりできるんだけど……。一銭もかからない散歩するしかないか。寒いけど）

結局、町案内のような形で二人はふらつくことになった。

「って、ルネは全然寒がつてないな」

彩人は出かけるのに三枚着は常だ。

ルネはというと。

「なあ、今上に何枚着てるんだ？ 厚着しているようには到底見えないんだけど……」

「うーん……」

ルネは自分が着ている服を摘んで打つ側が見えるようにめくってみる。

彩人は肌色が見えたところで視線を近くの店の看板に移す。

「二枚……」

「見なきゃわからなかったのか……。ていうか二枚？！ 今日何度だと思つてんだ！ 1 だぞ？！ やっぱり全然着てないよな。そんなので寒くないのか？」

ルネの格好を見るだけで自分自身も寒くなりそうだった。彼女は少しも震えておらず、寒いというしぐさは全く無い。

「うん」

「すごいな。俺はめちゃくちや寒いぞ？」

ふーん、とルネは鼻を鳴らす。

彩人は色々な物を彼女に教えた。

そのたびに様々な反応をする。

普通だったら誰でも知っているような、常識的で、当たり前なこと。

だがルネにとってはそうではない。何もかもが目新しい、その光景が彼女の水晶玉のような目に映るのだった。

彼らは最後にこの前行った総合スーパーへと訪れる。

不思議な目をガラス越しに展示にされた商品に向けているルネ。

彩人はそれをこっそりと横目で見る。

（こういうことかな？ ルネを外へ連れ出したのは正解だったってことか……）

ルネは彩人が自分を見ていることには気付いていなかった。

「結局ただふらつくだけになってるけど、来てよかったか？」

ルネの透き通った目に彩人が映る。

彼女は上目遣いに彩人の顔を見上げる形で頷いた。それから小さく笑みをこぼす。

彩人は彼女のその様子を見ると、今空を覆っていてもややもやとしている雲が晴れたかのように気分が良くなる。

「どうせ帰っても暇なんだ。もうちょっと他にもたくさん見るか」

「うん！ 見たい！」

「ただし。暗くなる前には帰ろうな」

藍さんのお叱りを受けるから、と人差し指をぴんと立てて言った。

そこへ。

「また会ったな、小僧」

三章（6） 白色の少年

俺は今までただ呆然と生きることしか考えていなかった。記憶を失ったあの時から。

リセット。

当時はまさしくそんな感じだった。

気付いたのは病院のベッドの上。

ここはどこだ。

病院？

だから何で俺がそんなところにいるんだよ。

俺？

あれ？

わからない。

俺は誰だ？

名前。

わからない。

ベッド脇の表札には、白上彩人。

誰？

この表札は確かにこのベッドの表札だ。

そこに寝ているのは紛れも無い——俺自身。

これが俺？

俺は白上彩人なのか？

思い出せない。

俺は誰だ？

わからない。

何も。

全てが思い出せない。

焦った。

混乱した。

わけがわからなかった。

その後、俺は藍さんと会う。

藍さんからは冷静に俺の状況を伝えられた。

記憶喪失。

自分のこと——主に思い出を失った。

そして新代荘へ。

二人の同年代の子と会う。

同年代と言っても記憶に無いから藍さんの情報を頼りにするしかなかったが。

一人は女の子。

新代若葉。

ちよつと可愛いなと思った。

もう一人は男の子。

常磐幸祐。

こつちもこつちでちよつとモテるんじゃないかと思った。

彼らは初対面だというのに気兼ねなく接してきた。

俺は不安だった。

いったい何を信じればいいのか。

信用していいのかこの人たちを。

最初は警戒心があつたがそれも時とともに和らいでいく。

新しい生活。

悪くは無い。

正直、嬉しかった。

あれから八年。

今では家族のようなかけがえの無い存在となった。

そして、新たにもう一人。

ルネ。

銀色の少女。

彼女は俺と同じだった。

でも全てが同じじゃない。

ルネは俺よりすごい。

一瞬だ。

もう彼女は今を受け入れている。

俺は時間が必要だったのに。

新代荘の皆とすぐに慣れて、笑顔も見せて、恐怖から開放されて。

もう俺たちのかけがえの無い家族だ。

ルネがいるとなんだろう？

不思議と心が安らぐと言うか何と言うか……懐かしい？。

自分が変わる。何かを変えられる。そんな気がする。

とにかく俺たちはこれからずっと一緒にいるんだ。

普通に暮らして。

新代荘で皆とわいわいやりながら。

楽しい日々が続けばいい。

……そう、続けばいいのに。

なのに、なぜだ？

どうして俺たちの平穏を邪魔する？

この世界の『異常』は。

三章（7） 狩獵者へハンター 強襲

「また会ったな」

背後からの声は彩人の背中に寒気を走らせる。あやし

その声に聞き覚えがあった。

（嘘……だろ……）

平穩は一時の夢を彩人に与えていた。

だが彼はまだ全てを解決したわけではなかったのである。

「彩人？」

ルネは彩人の顔を一度見て、声をかけた背後に立つ人に目を向ける。彼女はいつものように見知らぬ人を前にして震えていた。

しかし、震えているのは彼女だけではない。

彩人は震えを止めることができないままゆっくりと後ろを振り返る。

男が立っていた。

サングラスを掛けている。

「なんで、なんでこんなところにいるんだよ……」

彩人はその男が今この場所にいることに心の底から憎み、落胆した。

男は不気味な笑みを浮かべる。

「ふんっ、いやあの時、本当に俺も死ぬかと思ったださ。『OASP』の連中まで現れた始末だからな。まあその『ターゲット標的』のおかげで奴らにその場で殺されなかったんだけどな」

彩人は男の声には耳を傾けず周囲を見渡すため目を動かす。

（少ないが人はいる……。だったらこいつは前みたいにあんなことはできないはずだ）

彼はいざとなったら周囲に助けを求めることができるかわかって少し安心する。

「なぜ俺がここにいるか……。その問いの答えは決まっているだろ

う？ 標的の確保」
ターゲット

男がルネの方を見る。

彼女が怯えるのを彩人は自分の後ろに立たせて庇う形になる。しかし、それは庇っているとは到底いえるはずが無い。彩人は無力だ。この男には敵うはずがない。それは当の本人も十分に承知していた。「個人的な行動はしてはいけない規則だがな。そうさ、知られたからには消すこともあるのさ。まあ、どう言っただとしても、本命は俺のただの憂さ晴らしだけだな。だからな——」

彩人はせっかく取り戻した安心を失っていく。とりあえずの安全を確保したはずなのに直感的に危険を感じる。

「お、おい……ここは人が、他の人もいるん——」
「お前を消す！」

突如、熱風が吹き荒れる。

（おい！ 人前では暴れないんじゃないのか?!）

熱風が押し寄せるため目がわずかししか開けられないが、そのわずかな隙間から男の手に炎が燈っているのが確認できる。

店内の火災報知機が甲高い悲鳴を上げ、スプリンクラーが慌しく働きます。

「はっ！ もはや、周りなど関係ない！ まとめて燃やして灰にしちゃえば問題ないッ！」

男が両手腕を振ったことで周囲のテナントに火が移る。衣類などの商品に次々に引火し、火災範囲は広がっていく。

「おい！ なにやってんだ！」

彩人は男のとった行動が信じられなくて思わず叫ぶ。周りからは火事だ、逃げろなどと人々が騒いでいる。

「消してやる。灰も残らずになあ!!」

男は容赦なく彩人に炎を振りかざす。

「あ、彩人！」

ルネが彩人の袖を引っ張る。

彼女のおかげで彩人は「こんなことをしている場合じゃない」と気付かされ、ルネの手を引いて何とか炎を避ける。

彼らが避けたことによって炎を代わりに受けたショーガラスが、パリン、と音を立ててガラス片を撒き散らす。

「うつ……」

ガラス片は彼らを襲う。

しかし、ガラス片は運よく男の片目にも当たり、男は一時ひるんだ。

現在、彩人たちがいるのは幸い一階であり、彩人はルネの手を引いて一直線に出口を目指す。

当たりからは黒煙が立ち上り天井に溜まっていた。

「ルネ！ 鼻と口を押さえてろ！」

彩人はルネの方を確認する暇もない。一目散に逃げなければまたあの男が追ってくるのは明白だった。

（あいつ、こんな人の多いところで……）

店内には煙が充満し、視界を邪魔する。

「くそ！ どこ行きやがった！！ ぶっ殺してやる！！」

男は憤慨し声を荒げると、再び熱風が吹き荒れた。

何から何までも焼き尽くすつもりで男は炎を乱暴に振り回す。まさしく無差別な攻撃。

（出口はまだか！）

煙が目にしみる。目をつぶってしまうのを必死で堪えながら、わずかに明るみのある方を見続ける。

その彩人の努力を裏腹に視界は霞を増していく。

（なんか……ぼーとしてきた……）

どんどん意識が遠のく。「これが一酸化中毒って奴？」などと無駄なことがばんやりと頭に浮かぶ。それでも体は頭の命令を必要としないかのようにただ前へと進む。

彩人は気付いた時には店の外にいた。苦しい中、休みたくてしょ

うがなかったがそれは許されない。

「大丈夫か？」

自分と手の繋がっているルネへと振り向く。

「う、うん……あ、彩人！　そ、それ！」

ルネが目を見開く。

「……ん？　ああ、たいしたことねえよ」

彩人は右手で頬の血を拭う。

ガラス片が飛び散った時に切れた傷。

「そっちは当たらなかったみたいだな。よかった……」

ルネはフードをずっと被っていたのが幸いして直に顔には当たらなかった。さらに冬服であったこともあり露出度が少なかったため手足が傷だらけということもなかった。

「彩人はだ、大丈夫なんかじゃ——」

「それより、早くここから離れるぞ！」

彼女の言葉を遮る。

店の外は大騒ぎだった。消防隊員たちも駆けつけて消火活動および救助活動に取り掛かるうとしている。外からでも黒煙が立ち上っているのは確認でき、爆発音も数回聞こえていた。

彩人は消防隊員に捕まる前に早く退散しようと思った。

（あいつの狙いは完全に俺たちだった。だから奴は意地でも俺たちを追っかけてくるにちがいない！）

彼は消防隊員に怪我の状態やらの尋問をされて足止めをされるわけにはいかず、まして救急車にお世話になるなどしたら奴は病院まで襲撃するんじゃないかと危惧すらした。

繋いだままのルネの手を再び引っぱり、人だかりの中を通り抜けて火災現場からひとまず脱出する。

「とりあえず新代荘に帰るぞ！」

「わかった！」

人々のざわめきが激しいので大声で伝え合う。

町中を二人で駆け抜ける。

彩人は走りながら火事のことを話す人の声が聞いた。雑木林の火事といい、この辺りの人々は多少火事に敏感になっている。

彼はあの火事で他の人には被害が及んでいなければいい、と切実に願う。俺たちに責任はない、と言い逃れはできない。

（あの男が発端とは言え、紛れもなく俺たちが原因だから……）

それでも自分たちの身は守らなければならない。

他の人たちに構っている暇などないのだから。

彩人はもうあの夜の事件は終わったと思い込んでいた。

しかし、今日、あの男は再び自分たちの前に現れた。

それは、つまり、あの男はいつまでも自分たちを狙い続けるということ。

あの男が警察にどうこうできる相手ではないことなど明白だった。（どうすることもできない。でも、今は逃げるしかないんだ）

彩人とルネは走り続ける。

雪降る町を。

逃げ惑う。

『異常』から。

彼らは不可能だとも知らず。

「そこのお二人さん？ ちょっとストップ！」

彩人とルネが車二台ぎりぎりすれ違えるぐらいの幅の通りを走っていた。そこは町から住宅街に入りかけるところにある。彼らは声をかけられたが、前だけ見つめ走り続けていたために気付かなかった。

彼らが一人の金髪の女性とすれ違ったことに。

「チッ……」

金髪の女性は二人に気付かれなかったので深くため息をつき、ジャケットの裏に隠していた金属の塊を取り出し――

鋭く、そして短い音が響いた。

必死で走っていた彩人とルネの足が止まる。

「無視はやめてほしいわねー」

金髪の女性の声。

（今の何の音だ？）

そう思っただ彩人は後ろを振り向く。

今は逃げることに集中するべきなのに彩人は足を止めた。そしてルネも。

それは反射的に体が固まったからだ。

「だ、誰だ？」

彩人の目に映ったのはいたって普通の外国人の女性。確かに珍しいかもしれないが、別にいてもおかしくはないはずだった。彼女の右手にある物を見なければ。

女性は右手にもつそれをまっすぐ二人の方に向けていた。

彩人の顔が冷める。

（あれって…… おもちやだよな？ 本物なわけあるはずが……）

彼女の手に握られたものはまさしく――拳銃。

「そちらの坊やは初めまして、私の名前はミロリー。そしてそちらの子は…… お久しぶりね」

「お久しぶり？」

彩人は女性がその声を掛けた少女――ルネを見た。

彼女は何かを言おうとしているがそれは言葉になっていないように口をばくばくさせている。

「昨日は来てくれると思っていたのに…… 残念ね」

言葉通り残念な表情をするがどこか作り物のような雰囲気がある。

「知り合い…… なのか？」

「ルネを知っていた人…… ルネが『普通』じゃないって教えた人」

「『普通』じゃ…… ない、だと？」

ルネは自分が特別なことができると知っていた。

それを彩人は昨日知った。

彼は気付いていなかった。

（ルネは初め、目を覚ました時には夜に起こった出来事をぼんやりとしか覚えていなかったじゃないか。あの男の炎や氷のことを尋ねた時、ルネはなんて答えた？）

ルネは覚えてはいなかった。

自分がそんなことができるなど知らなかった。

彼女はそれのことについては自分から一言も話さなかった。昨日を除いて。

（思い出したんじゃないかったのか……）

彩人はそれをルネが自分で思い出したものだと思っていた。だから、そのことをルネに伝えた人物が存在したなど一度たりとも考えはしなかったのである。

「その坊やは、その子が普通でないことはわかっているのでしょう？　というより、うちの部下を異常フラウイタスも使わずに逃げ切った『ただ

の』少年は……坊やってことになるわね。恐れ入るわ。とても馬鹿馬鹿しい。でも、おもしろい！　まさか改変者アルターが一般人に遅れをとるとは……坊や、中々やるわね。運がよかっただけでしょうけれど」

ミロリーと名乗った女性は淡々と話しながらも、拳銃の照準を二人からはずすことはなかった。

（俺のことも知っている？！）

「あ、あの……」

やつのことでルネは言葉を発する。

「いいのよ。謝らなくても。私は昨日、寒い中あなたを待っていたけどね」

「お、おい、どういうことだ。さっきから、ルネが『来てくれる』だとか——」

「坊やはその子を受け入れたのね。自分とは生きる世界が違つとわかっていながら」

ミロリーは彩人の質問を隅に置き、自分のペースで話す。

「そつだ。なにが悪い。ルネは俺たちの家族だ！」

「家族、ねえ……」

ミロリーは彩人を見つめる。その目が意味するのは哀れみ。

「私が昨日の夜、その子と呼んだのよ」

「なん、だと……」

昨日、いや日付は周っていたので今日のことになるがルネは夜中に新代荘を一人で抜け出した。誰にも別れを告げずに。それはもう二度と帰ってこないという意味の込められた出て行くという意味だった。

「そう……なのか、ルネ？」

彼女に恐る恐る訊くと、ルネは控えめに頷いた。

「昨日の昼にね、声を掛けておいたの。あなたはこっちの世界でしか生きられない、ってね。平和的にことを済ませようとしたのだけれど……残念だわ」

「それじゃあ……」

この場の恐怖より、ミロリーに対する怒りが上回った。

「それじゃあ全部お前の差し金だったのか！ ルネの様子がおかしかったのも！ 俺たちから離れようとしたのも！」

「違うわ。選択権はその子にあった。その子の決断だったのよ。そう、一応私の元に来る気は少なからずあったの……。でも、坊やが止めた、か」

「どうしてルネを狙う！ お前はあいつの仲間なのか？ ということとはルネが狙いなのか？」

「あいつ……それは誰を指すのかはわからないけど、たぶんそうよ。この周辺に私たち以外の『狩獵者』^{ハンター}はいないはずだから。そして私たちの目的は『標的』^{ターゲット}の捕獲。つまりはその子をつまえるってこと。正解ね」

「なんでそんなことするんだ！」

「それが私たちの仕事だからよ」

「彩人！」

ルネが彩人を叫んだ時にはもうすでに戦いは始まっていた。

銃声が鳴り響く。

その途端、彩人の前に氷の壁が出現しそれを防ぐ。

「ルネ……」

「早く逃げよ」

あの時もそうだった。彩人はルネに守ってもらった。

（くそっ！ 俺にはなにもできなつてのかよ！）

「ふーん、抵抗するのね」

「彩人は傷つけさせない！」

ルネは彩人より前に出て、雪が一面に積もった地面に手を付く。
やがて雪に変化が訪れる。

「これは……ルネがやったのか？」

白い息を出して言いながら彩人は目を見開いた。

ルネの周囲にはダイヤモンドダストが漂い、きらきらと輝いている。

ルネが手をついた地点は凍りつき、それはミロリーの足元まで氷の道のように伸びていた。そしてその氷の道はミロリーをぐるりと取り囲むと天に突き上がった氷の柱と化す。柱は束になることで檻の役割を果たしてミロリーの身動きを封じる。

「やってくれるわね……」

怒りを押し殺したような声が氷の柱で出来た檻の中から漏れる。

ルネはミロリーの方を一瞥するとさっと立ち上がる。

「彩人！ 早く逃げよ！」

「お、おうわかった」

彩人は彼女がしたこと一度肝を抜かれ、反応がやや遅れる。

「そうはさせない」

彩人たちはミロリーの言葉が聞こえて振り向くと、氷の角の腹部分が何かに寸断され、檻は崩壊する。

「そんな……」

彩人にとってルネが氷の檻を出現さしてしまうことを凄いと思ったのに、閉じ込められたミロリーが一瞬で崩壊させたことにお驚きを隠せない。氷の檻を作り出した本人——ルネも彩人と同じ様子

だ。

氷の檻から出てきたミロリーの手には先ほどの拳銃と違ってナイフが握られている。

「どうやって破壊したのかって顔をしているわね、二人とも。その子には力のことを話しただけで、戦いへの転用は教えないようにしたはずなのに……。これは想定外だったわ。私も驚き」

「そのナイフ一本でやったとも言っのか？」

「そうよ」

彩人の問いにあっさり肯定し。先端を切り落とされた氷の角の残骸を一薙ぎ。氷は紙をカッターナイフで裂かれるように何にも問えることなく切断される。

異様な光景。

彩人には氷がただのナイフであんなにも綺麗に切断できるとは全く思えない。

「この世界には様々な種類の^{フラヴィタス}異常が存在するの。その中でも仲間はずれなものがあるのよ。それが私の持つ力。修正者の^{リバイス}持つ力。アメント^{リバイス}」

「修正者だって？」

「例えばその子の力。私も正確には把握していないのだけれど、おそらくは物質の結晶化。どう？　それが常人に成せる技だと思う？　そんな普通では考えられないようなことをやってのける力は紛れもなく『異常』である。そしてそれらはあらゆる法則すら超え、世界をおかしく変えてしまう。ゆえにそれを持つ者を^{アルター}改変者と呼ぶ。あなたが^{アルター}接触しただろう男、炎を使う男も同様。でも私は^{アルター}改変者ではない。改変者と相反するもの、それが修正者^{リバイス}。このおかしくなった世界を修正するための存在。私のこのアメントと呼ぶ力は^{フラヴィタス}異常を消滅させるために存在する。結論をいうと私はその子の力を打ち消して、氷を破壊、否、消したということよ」

あなたに話したところで理解できないでしょうね、とミロリーは付け加える。

（わからないことだらけだ。なんなんだ。この世界は。俺たち一般人の知らないところでは何が起こってるんだ?!）

「言つとくけど、その子に勝ち目は無いと思うわ。想定でB……私でもなんとか対処できるレベルよ。sれにお荷物を連れた状態じゃあ存分に戦えないだろうけど」

「あ、彩人、どうしよう……」

ルネが彩人を頼ろうとしている。

だが彩人は何もできない。彼女やミロリーののような特別な力も使えない。できることは見ているか、逃げるかだけ。戦えるわけがなかった。

（もう、おしまいか……）

ミロリーはナイフを拳銃に持ち替えて容赦なく彩人に向ける。

ルネが庇ってくれなければ彩人は弾丸に打ち抜かれて死んでしまふ。

そう死ぬのだ。

認めたくない。死にたくない。彩人は神様にでも縋^{すが}りたい気分になる。

あの男に襲われた時も同じだった。あの時は運よく生き残った。

ただそれだけ。

そう何度もうまくいくはずがない。

自分がここで殺され。

ルネは連れて行かれる。

そう彩人が絶望した時、人が死ぬかもしれない冷たいこの場をぶち壊すように軽快なメロディーが鳴った。

（な、なんだ?）

音の出所は拳銃を片手に持つ金髪の女性——ミロリー。

ミロリーは拳銃を持った手はそのままでもう片方の手でジャケットのポケットを探る。

そして出てきたのは——携帯電話。

先ほどのメロディーは携帯電話の着信音だった。

思わず気が抜けかけた彩人はすぐに緊張を取り戻す。

ミロリーは彩人とルネをずっと見つめ拳銃を向け続けながら、取り出した携帯電話を耳に当てる。

「私だ」

「なに？　くそっ！　あの役立たずめが……」

「『奴ら』に嗅ぎつけられのはまずい！」

「ああ、わかった。すぐに向かう」

ミロリーは通話をしながらも一切油断せず、彩人たちが逃げる暇を与えない。

銃口を向けられた彼らは動くことができなかった。

ただ緊張を保ちながらミロリーの言葉に耳を傾けるしか許されない。

三十秒以内に通話を終えたミロリーは携帯電話を閉じてもとに戻す。

ターゲット

「目標を前にして見逃すのは屈辱だが、やむ負えないわ。ちょっとこちらで問題が起こってね。よく聞きなさい！　今日の夜、午前零時！　私は、坊やがうちの部下と接触したという雑木林で待っている。ターゲット 標的だけがそこに来れば、坊やの方の命は見逃してあげる。ど

う来るかは君達次第よ。ただし、もし来なければ私たちなりにも派手に動かせてもらうわ。殺しちゃうかも。例えば、あなたたちの言う『家族』っていうのとかね！」

ミロリーは全て言い終えた後に銃弾を放った。最初と同じようにルネがその弾を防いで彩人を守る。

そして、ミロリーは去っていった。

「彩人、だいじょ——」

「おい、ルネ！」

体のバランスを崩した彼女を彩人は支える。

（なんだこれ……）

彩人は頭痛とはまた違う、だが頭、または脳か、自身の体に違和感がしていた。流れ込んでくる。それは一方的に。それは拒もうとせず、むしろ快く受け取っているような。

（確か前にも……）

しかし、そちらを気にしている余裕は無かった。

ルネは頭を押さえて苦しそうに唸り声を上げている。

「大丈夫か！　おい！」

「だ、大丈夫……」

ルネは一人で立とうとする。しかし、まだふらついているので彩人が手助けする。

「ほんとに……ほんとに大丈夫なのか？」

「うん。ちよつと頭が痛かっただけ……」

彩人は彼女に肩を貸す。

（助かった……とは言えない……）

彼はなぜミロリーが急に退散して言ったのかさっぱりわからなかったが理由なんてどうでも良かった。

生きている。

二度も死ぬ状況に追いやられた彩人にとってはそれだけで十分だった。

彩人とルネは新代荘に帰っていく。

途中からはルネが一人でもう歩けると不機嫌そうに言うので、彩人は思うようにさせたが心配で彼女から目が離せない。

（今夜、また、あいつと……）

奴には仲間がいた。同じようにルネを狙う仲間が。

今度会うときは何人いるかわからない。

行かなければ新代荘の他の皆にも迷惑がかかる。

（それはだめだ。皆は絶対に巻き込めない）

藍。幸祐。若葉。どれも彩人にとって大切な人々。かつて自分を救ってくれた皆を守らなければならない。彼はそう思った。

ルネも同じことを思っていた。

そしてお互いに相手が同じことを思っているのもわかっていた。
大切な人たち。

巻き込んではいけない。

守らなければ。

絶対。

絶対に。

絶対に守らなければいけなかった……。

そう。

彼らの願いは、決意はもう無駄となっている。
もう、すでに手遅れだった。

「彩人！ ルネ！ 今すぐ病院へ行くわよ！！」

新代荘の外にいた藍が言った。

三章（7） 狩獵者へハンターへ強襲（後書き）

三章これで終了です。次からシリアス展開の四章に入ります。ぜひ読んでくださると嬉しいです。

12/5本作のヒロイン、ルネのイラストを描きました。挿絵として使おうかと思ってます。お楽しみに。

四章（1） 悲劇の連鎖は止まらない（前書き）

四章に突入です！ シリアス展開に入り、ようやく物語も本番です。一番長い章となりますが、お付き合いをお願いします。

四章（１） 悲劇の連鎖は止まらない

彩人、ルネ、藍の三人がいるのは病院の一室。

だが、もう一人。

新代若葉。

はんぶ

帆布南高校一年生。水泳部所属。好きなものは犬や猫の小さな動物。嫌いなものは昆虫、爬虫類。得意なことは水泳。苦手なことは料理。明るい女の子で学校のクラスでは人気者。そして何より――

――家族思い。

彼女は今眠っている。

清潔感漂う白いベッドの上で。

いくら名前を呼んだところで目を覚まさない。

「若葉……」

ルネが嗚咽を漏らしながら若葉の名前を呼ぶ。もちろん若葉が目を開けることは無い。

彩人は椅子に座って、歪んではつきり見えない若葉の寝顔を見つめていた。

藍は何も話さない。

不運だった。

若葉は今日、部活が無かった。同じく幸祐の方も休みになっていたので、若葉は前日に靴を買いたいと陸上部の彼に頼んでいたのだ。行き先の店は後に火災の起こる総合スーパーマーケットのテナントだった。火災が起これとも知らず仲良くその店で品を眺めていた。

そして火災が起こる。

幸祐の方は軽症で済んだとのこと。

だが若葉の方は重傷だった。事件発生から一度も目を開けていない。

火傷などの外傷もあったがそれよりも問題はそちらにあった。意

識不明のまま救急車で病院へ搬送。

その後、幸祐からの連絡を受けた藍は事件のことを聞く。

三人が病院に駆けつけたときには幸祐の姿は無かった。

時間だけが過ぎる。

午後六時。

冬なので日没が早い。もう外は暗くなっていた。

「あなた達はもう帰りなさい」

長い沈黙を破ったのは藍だった。俯いていた他二人は顔を上げる。

「いや、残る……。それに幸祐はどこへ行ったんだ？」

「幸祐は警察に事情を聞かれているそうよ。あの子も最初は気を失っていて若葉より先に目が覚めたって言っていたわ。若葉をほったらかしにしているなんてことは絶対にならないわ」

「そんなことわかってる」

幸祐は若葉を大切に思っている。そんなこと新代荘の誰しもが知っている。

「ルネ……あなた、もうご飯と味噌汁だったら一人で作れるわよね？ 帰って五人分の夕飯を用意しといてくれない？」

「え……でも……」

ルネが若葉の顔を見る。

「あなたの仕事よ。彩人、あんたも帰りなさい。ここは私一人で大丈夫だから」

「藍さん……」

「行つて」

「……」

「行つて」

もう一度言われ、彩人が藍と目を合わせてから、一度閉じて立ち上がる。

「わかった。いくぞ、ルネ」

「え」

「いいから……」

彩人は彼女の手を引き病室を後にした。

若葉が搬送されたのは帆布区を中心——火災の起きた総合スパーマーケットから西にもう少し行ったところ——に建っている。新しく、設備も充実している方の病院である。

彩人はベージュの外壁の病院を見上げる。彼が見ているのは先ほどまで自分のいた病室のあるところ。辺りは街灯がもう明かりを照らしていなければ暗くて見えなくらいだったので、病室の中からの光で照らされているカーテンしか確認できない。

ルネも彩人が見ている方向を見ていた。

彩人が先に立ち止まっている足を動かして病院に背を向け、ルネの横を通り過ぎる。

「……」

ルネは彩人に声を掛けようと思ったが口からは何も発することができず、わずかに動いた手は彼には届かず宙を掻いただけ。

彩人が一人ですたすたと歩く。

それにルネが後ろから付いて行く。

会話は無かった。

冬の寒さに劣らずと日没後の町は賑やかだった。

帰宅ラッシュで車が眩しいライトを付けながら走っている。向かい側から走ってくる車がそのライトで二人の顔をなできるようにして隣を走り去っていく。

周囲には食べ物の匂いが漂う。主に肉が焼ける匂いが最も強かった。アルコールの匂いもそれとなく感じることができる。

仕事終わりのサラリーマンが談笑でもしながら飲んでいるのだろう。酔っ払った人が何か叫んでいるのも聞こえる。

また他にも若者たちの集団がわいわいと騒いでいたり。

時折、消防車を見かける。巡回して火事が起こっていないかパトロールをしているのだろう。

夜の町は昼よりも明るく見える。おそらくそれは一週間以上に渡って、空をずっと覆いかぶさっている灰色の雲が青空をいつまでも見せようとしないうせいだろう。そのため気温上昇が気温低下をいつまで経つても上回らない。灰色の雲はさらに雪を降らせ、地上の人々に意地悪をしているかのようだ。

彩人は足を止めた。

そこには何台かのパトカーが止まっており、赤いランプが眩い。夜の町が明るいおかげで炭や煤で黒くなったこの場所もどういう惨状かを確認することができる。

総合スーパーマーケット。

昼間までは買い物客で賑っていただろう。しかし、今は物静かなものだ。

まだ冬とはいえど閉店時間にはまだ早い。来店客は一人も居ない。黄色いテープが張られて店内には入れないようになっていたのだから当然だ。

来店客は一人もいないが代わりに全員同じ服を着た人たち。彼らはせつせと働きアリののごとく働き続けている。

「変わり果てたな……」

彩人の口からこぼれ落ちるように出る。

総合スーパーマーケットは駐車場や道路などで他の建物とは接していないので、他の建物はそのような惨状にはなっていないかった。それゆえ、周りからは目だって見える。周りより大きい建物だから、といういつもの理由とは違って。

「最初に出かけた場所だったのに……」

全くと言っていいほど力のこもっていない声。

彩人は聳え立つその三階建ての建物を見上げる。

「さいしょ？」

「ああ、残念だったな……ルネ」

ここは彩人がルネと初めて出かけた場所。ルネにとっても思い出となった場所であった。

はずなのに。

「ここ、どこ？」

「なに言ってんだ？　ここはルネが初めて出かけた場所。その服だつてこの場所で買った。まあ、様変わりやしちまつたけどな……」

「服……ここ……買った……？」

「俺たちがここから離れた後もまだ燃え続けたんだろうな。一応、お前との初めての思い出つて感じがちよつとしていたのに……」

彩人は悲しそうな目をしながら言う。外見でこれならば店内はもっと悲惨なことになっていると思われる。これだと本格的に取り壊しにしてまた建て直すしかない。

「どういうこと？」

「本当に……最悪だよ」

彼はまだ気付かない、彼女の身に起こった問題について。

「わ、わたし……え？　この服……どうして？」

「どうした、ルネ？」

「この服……ルネの……服？」

ルネの様子は明らかにおかしかった。先ほどまで二人とも暗闇のように沈んでいたのに今はそれとはまた違うものだった。困惑している。

「ああ、そうだが。……って、おい、どうしたんだ？」

彩人も急変したルネを見て、沈んだ気持ちから焦りに変わっていき。

ルネは両手を頭に当て抱えこむ。目の焦点が合つておらず動揺しているのが見て取れる。彼女の足が力なく崩れ、地べたにしりもちをつく。

「な……んで？」

その問いは自分自身に対して投げられていた。

「おい！　しっかりしろ！」

彩人は彼女を正気に戻すために肩をゆする。

（若葉のこのショックが大きすぎたのか……。俺だってあんなの

納得いくわけがねえ！)

「さっきのこと……本当？」

わらわらとした声で彩人に尋ねる。

「は？」

ルネとの会話にややずれがあることを彩人はようやく気がつく。

ルネは彼の顔を見続けている。体はひどく震えていた。

「さっき？」

「服のこと……」

「服？　ここで買ったって話か？」

(何で服のことなんかを……)

彼はルネの言う事に場違いさを感じてならない。ちょっと前には何の罪も無い若葉が事件に巻き込まれて、今でも意識不明だというのに。溜まりに溜まったわだかまりをルネにぶつけそうになる。彼が自分の無力さに対する怒り、若葉があのようなことになってしまった怒りなどを弾けさせてしまうほど、ルネの言葉に苛立ちを感じる。

(今はそんなこと話している気分じゃねえんだよ！　こういう時ぐらい空気を読んだらどうなんだ！)

「ああ、そうだ！　俺たちが火曜日にお前の服を買ったためにいっしょにここへ来た！　それがどうした！」

彩人は怒鳴りつけるように言ってしまった。しかし、それは正しくなかったと証明させられる。

「ほん……とう……？」

「——ッ！」

ルネは泣いていた。

彼は迂闊だった。それを見て面食らってしまう。

「わ、悪い……」

地べたに崩れ落ち、また表情も崩れてしまったルネは彩人の足を

掴む。

「なんで？」

「おい、本当にどうしたんだ?!」

ルネは泣き崩れて嗚咽ばかりが漏れる中で、途切れ途切れながらもその口から言葉がつむがれる。

「なんで、ルネは、憶えて……いないの？」

彩人は一瞬、時間が止まったような気がした。一生懸命脳を働かせようとするのに理解が追いつかない。

「い、ま、なんて？」

「思い……出せない、の」

ルネの大きな水晶玉から出た小さな水晶玉が彼女の頬を転がり、雪の上に落ちて溶け込む。

「思い、だせない……だと」

そんな馬鹿な、と彩人は思う、いや、思いたいがルネの様子がそれを真実だと物語ろうとしている。

「う、嘘だ、そんな記憶が……」

「わたし、そんなの、知ら、ない！」

ルネの言葉を嗚咽が分断する。

（どうして……なんで……。ルネは一度すでに記憶を無くしているんだぞ！ それなのにまた、また記憶喪失なんて！ ありえない、ただちよつと忘れただけだ！）

「ただ思い出せないだけなんじゃないのか？ 思い出せ、ルネ！

その日は朝から、俺は学校をサボってお前と一緒に新代荘を出て……それから！」

「彩人が、その日、帰ってきたの、は覚えてる。なのに、その後、なにがあつたの、か少しもわから、ない。真っ白なんだよ」

（なぜだ？ どうして記憶を失った？ 違う、前にもあつたような……いや、前にもあつたはずなんだ！）

「そうだ……」

男との戦闘した時を思い出す。ルネは力を使って彩人の身を守った。その際、ルネと少なからずだが会話を交わした。顔も向け合った。

次の日、彩人がルネと話したときには、男のことも自分が力を使ったことも憶えていなかった。

「……よく考えたらおかしくないか？」

感覚的に彩人が背中に彼女を負っていた時のぬくもりだけを彼女は憶えていた。彼女は衰弱していたとはいえ、意識はある程度あったのではないか？ 彩人を守ろうとしたのだから。彩人が守る対象だとも知っていた。あの男が敵であることも。

単にその場の状況で咄嗟の判断で決めたと言ってしまえば正しいとは言えないが。

しかし、あの衝撃的な光景が記憶に残らない？

彩人は焼き付けられたようにしっかりと憶えている。

（じゃあ、なんで戦闘について全く憶えていない？）

そして今日、ルネはまた記憶を失った。

日曜日と今日の共通点。

彼女は同じ行動、そして彩人は同じ経験をした。

「まさか……」

その二つの日に彩人は襲われた。

では、その二つの日にルネは何をしたのか？

「力を使って……俺を守ろうとした」

時に大きな力には代償が伴う。

それが彼女の場合。

記憶。

「これからは二度とその力を使うな！」

「え？」

「氷を出したその力だ。その力の代償が記憶だったんだ！ だから力を使った後に記憶を無くす！」

「そん、な……」

「いいか？ 確証は無い。これはあくまでも俺の推測に過ぎないかもしれない。でも、二度と力を使わないと約束してくれ！」

ルネは少し躊躇った表情を見せる。

「……わかった」

ルネは新代荘に帰るまで目から流れる雫が落ち続けた。空からは雪が落ちてくる。

彼らは藍の部屋に入り、彼女が藍に任されていた夕食作りは彩人が代わりしてあげた。幸祐は帰ってきていなかった。

ルネはご飯に少しも手をつけようとしないので、彼女の部屋に連れて行って寝かしつかせる。

「落ち着いてからでいいから……飯は食べるよ」

「……」

ルネ彩人と顔を合わせようとせず、何も話そうとしない。

「じゃあ、俺は自分の部屋に戻ってるからな」

彩人はそう言っ、そと部屋から出て行った。そして自分の部屋に戻るなり布団に体を叩き付けた。

苛立ち。

ルネがまた記憶を無くした。

さらなる問題により彩人は追い詰められる。

「くそ、くそ、くそ！」

握りこぶしで布団を殴りつける。

「なんで、なんで、俺は……俺は！」

何もできない。

彩人にとってそれが一番嫌なことだった。

ルネの記憶が取り戻せないのも。

若葉が怪我をしたことも。

襲われた時も。

自分は何もしていない。

ましてやルネが自分を守ったせいで記憶が無くなったのかもしれないのだ。

そしてふとあの始まりの夜でルネが最後に言った言葉を思い出した。

「たぶんルネも次に目が覚めたら『今』のルネではなくなると思うから」

彩人には最初はその意味が全くわからなかった。いままで気にも留めていなかった。それは間違いだった。その言葉の意味に早く気付いていれば、もしかしたらルネが記憶を失くさずに済んだかもしれないのだ。

（あの時、ルネは知っていたのか?! こうなることを!）
そして他にも。

「それと、彩人には世界を変える力がある。だから諦めちゃ駄目だよ」

俺にできること、と考える。

（そんなの……違う）

無力。

そう、彩人は無力だ。

「俺にできることはないのか?! あの時だってルネがいなきゃ、今頃もう死んでいた! 代わりにルネの記憶が無くなったっていうのに!」

隣の部屋ではルネが寝ている。

それに気がついて唇を噛み、自身を黙らせる。

時計の音だけがカチカチと音を立てる。

(時計……?)

九時二十分。

「あ、ああ、あああ!」

十二時まで残り三時間を切っていた。

良い言い方をすれば、待ち合わせ。

悪い言い方をすれば、取引。

ミロリーが提示した条件。

ルネを渡せ。

もし、渡さなかったら派手に行動を起こす。

若葉は意識不明になった。

じゃあ、彼らが強行的になって出たらどうなる?

新代荘の皆は?

そんなの決まっている。

殺される。

容赦なく。

ルネは連れて行かれる。

ミロリーが出したもう一つの条件。

ルネを大人しく渡せば、新代荘の皆は……否、一人を除いて助かる。

できるわけがない。

彼女を見捨てることなど、できるはずが――



「あと五分……」

ミロリーは腕時計のライトを付けて時間を見る。

彼女は数日前に火災が起こった雑木林の中で、黒い煤になっていた表面の木に体の体重を預けながら日付が変わるのを待っていた。十二時が取引の時間だった。

「さて、目標ターゲットが来るか……それとも、坊やが来るか……」

気温はもちろん低い。氷点下に達していてもおかしくないくらい寒く、じっとしていると体温をすぐにもっていかれそうになる。

「まったく」

言葉をため息混じりに吐き捨てる。ため息は寒気に冷やされて水蒸気ができ白くなるが、真っ暗な雑木林の中では確認できない。

腕時計のライト機能（こちらの機能は白色電球が使われ明るさが強い）でしか辺りを照らせないため、ポケットからライターを取り出して、根本が焼けて倒れてしまった樹木の上に落とした。

それから灯油を入れた小ビンもそこに投入する。すると、たちまちその樹木を炎が包み込む。炎が暗闇を照らす。

「私らしくも無いことをしているわね……」

請け負った仕事は絶対に成功させなければならない。

それは何年も心に決めてさまざまな汚れた仕事をしてきたつもりだった。今回の仕事は標的の捕獲。これから、その仕事を全うしようとしているわけだが、今の自分に呆れていた。

「今回の私はどうかしているわ」

これは趣味ではない。仕事だ。いつもどおりだったら、すぐさまターゲットにでも標的の確保。もし妨害が入ったら障害を排除する。

今回はそれが全くこなせていない。

一回目に標的ターゲットに接触した時点で周囲に、標的ターゲットと関わりを持ったと思われる人はいなかった。確かに町中で人はそれなりにいたが、そのような障害はどうとでもない。それ相応の処置をとれば周囲の目など気にすることは無かった。でもそうしなかった。

二度目の接触。その時には標的ターゲットの知人が一人。どうみてもただの少年でしかなかった。何か戦闘に長けていたというわけでもない。集中力にかけた少年で一瞬のうちにふところに飛び込めそうなほどだった。

「あと三分」

それでも少年は自身の部下の一人と接触し、標的を連れて逃走に

成功している。まだまだ新米のがさつな男だったが、それでもD等級シグアルターの改変者である彼から逃走できたのは中々のものだと感じてしまふ。

たいていの一般人だったら腰を抜かすか、パニック状態になってもおかしくないというのに、ターゲット標的を連れて逃げると自分には信じられない決断に至ったのだから、その少年には恐れ入る。

そのような珍しく、さらに面白くもあるその少年に、無意識のうちに手を抜いていたのかも知れない。

「次は何を見せてくれるのかしら」
くすくす、と笑う。

あの少年には『何か』がある。長年の勘がそう告げている。

「そろそろ、あっちも始まっている頃ね」

ミロリーが自分たちの隠れ拠点にしていた根城を頭に浮かべる。

今、彼女は一人だ。

他のメンバーはここにはいない。彼女が根城にしている場所に残るように命令をくだしたからだ。

この仕事は自分単体でも遂行できるものだから一人でこの場所にいるという理由ではない。彼らには重要な仕事を与えていた。

「ごくろうね、囃さん達」

ミロリーは今頃、自分の根城が襲撃を受けていると予想する。依頼主からは詳しいことを訊くことはできなかったが、知らないところでも色々な組織、人々が動いているのはとつくの前から気づいている。その中には仲間とは呼べないが同じ、依頼を受けた狩獵者ハンターも含まれる。そして、もちろん敵対勢力も。

ターゲット標的にファーストコンタクトをとってから一週間が経とうとしている。敵対勢力の妨害が本格的に入るのも時間の問題だった。

ミロリーの予想ではおそらく今夜。

だから囃としてメンバーを残してきた。自分の方で本来の任務を遂行するために。

「あと一分」

任務はあくまでも標的ターゲットの捕獲。敵対勢力との交戦ではない。

だから無用な戦闘をしないためにも穏便に動いていた。

「あいつも飛んだお荷物だったわ。罰はしっかり受けてもらったことだし」

標的ターゲットとのファーストコンタクトが新米のメンバーだったことは不運だった。穏便に行動しなければ敵対勢力に見つかってしまう。現に少人数だが見つかったとも聞いている。

ミロリーのいる雑木林は焼け跡と化している。どう考えても穏便ではない。一番厄介な一般人の方でも公になってしまったために警察が動いている。

彼女たちの存在は表沙汰ではない。だから知られると面倒なことになる。

なのに今日も大事になってしまった。標的ターゲットを見逃してでも事態收拾に向かったことで、表沙汰にはばれなくて済んだ。だが、その時、敵対組織の一人と接触してしまった。彼は殲滅よりけが人の救護を優先したようだったが。

「来たわね」

もてれかかっていた木から離れる。

がさがさと雪を踏む音。

誰かがこちらに走っている。その足音は一人分。

「さあ、どちらがきたのかしら」

ミロリーは楽しくて仕方がなかった。

『異常』とは正常でないこと。つまり予測もできない未知なるもの。ありえないと思えることだって起こる。

だからこそ、楽しみなのであった。彼らがいったい何を見せてくれるのかを。

四章（2） 病室1

日付が変わった。

彩人とルネを先に帰してから六時間。その間、藍は一時も病室を離れることは無かった。

病室に置かれたデジタル時計を見て藍はそれを知る。

顔はまた病院のベッドの上に向く。そこには新代若葉が寝ている。寝ている。安らかに。寝息を立てながら。

意識は——ある。

意識不明の状況からは抜け出していた。それに体にあつた傷なども不自然に一つ残らず消えている。

「ふざけてるわ……」

若葉の体調に対する安堵とともに、呆れた感情がこみ上げる。

ここからは数時間前の話。

藍は若葉の傍にずっとついていた。

気分は奈落の底に落ちたように沈んでいる。何も考えたく無かった。考えれば悲しみも怒りも爆発しそうだったから。

病室は静かだ。電気もついていない。彼女の気分と同じように病室も暗い。

ここを見舞いに来るのは新代荘の面々。

明日は土曜日だから学校も休みなので、このことを若葉の友達を知るのは週明けになるだろう、と藍は思った。

だから、他に見舞いは来ない。はずだった。

ドアをノックする音が聞こえる。

「？」

藍は重く感じる頭を上げ、ドアの方を見る。

病室の外の廊下は電気がしっかりついている。だから暗い病室からドアの方を見れば磨りガラスの窓に人影が映る。

その人影を医者だろうか？　と思つて、どうぞ、と招き入れる。すると、音も無く滑るようにドアは横に移動する。

「……！」

藍は絶句した。

その人影の姿があらわになる。

その人は白衣に身を包んではいない。つまり医者ではない。しかし、見舞いに来る人などいないはずだった。

そこに立っている人物はどちらにも当てはまらない。

「やあ、久しぶり」

そのすらつと背の高い男性はさわやかな声で藍に言う。容姿も声に似て全体的にさわやかさを感じさせる。

「百緑……」

百緑。それがそのさわやか男の呼び名。

藍は鋭い眼孔で百緑を睨みつける。

一方、睨みつけられた百緑は藍の態度を全く気にすることなく。

「やっと名前を呼んでくれたね。電話の時は言ってくれなかったのに」

さわやかな笑みを浮かべながら言った。

「なんでここに來たの？」

「任務だよ」

「こんな綺麗な場所はあなたの仕事じゃないわよ」

百緑は困ったように頭を掻く。

「入っただい」

病室の外にはもう一人、彼と一緒に來た人が居た。彼はその人を病室に招き入れる。

入ってきたのは若葉と同一年ぐらいの女の子。目は眠そうに垂れ

ているため覇気が全く感じられない。服装は温かそうに身を包み込んでいる。

こちらは藍とは初対面だった。

「その子、誰？ というよりなにをしに来た？」

百緑は病室のドアを閉じその女の子を連れて藍の近くまで移動する。そして若葉の顔を見て視線を藍に向ける。

「この子は僕の助手の一人さ、そして僕がここにやってきたのは仕事」
アシスタント

「あなたがここで仕事？ なにを言ってるの？」

藍の態度はいまだ変わらず警戒心むき出しだった。

「若葉ちゃん、だったよね？」

「ええ」

百緑が隣に立つ眠そうな女の子に目で合図を送ると、彼女は若葉のベッドの近くへ寄って行く。

それを見た藍が俊敏に動き彼女の前に立ちはだかる。若葉に近くくことを許すまいといった感じで。

「どういうつもり？」

「治すのさ。若葉ちゃんを」

「言っている意味がわからないわ」

「怪我を治す。そして意識も取り戻させる」

「そういうことを言いたいんじゃないわ！ なんであんたが人を助けるような真似をするのかって聞いているのよ！」

「落ち着け。ここは病院だ。静かにしろ」

百緑の冷静な言葉に藍は口をつむぐ。

病院は他の病室でも寝ている人が居る。彼の言っていることは正論だった。

「仕事だ」

百緑は、藍が落ち着きを取り戻したところで話を切り出す。

「それは『OASP』の命令？ それともあなた個人の意思？」

「……。若葉ちゃんは改変者アルターにより被害を受けた。まあ完全に被害

者の立場にいるわけだ。それならば我々の手で治療してもおかしくはないだろう？」

彼は藍の様子を窺いつつ話を続ける。

「それに、その方が助かるよね？ 藍にとってもそれがいい。それでも断るなら俺たちは大人しく引き下がるが、まあ、若葉ちゃんが目を覚ますかどうかも確かじゃないけどな。それでもいいのだったら……」

「相変わらずね……八年も経ったのに少しも変わってないわ」

「褒め言葉か」

「皮肉よ」

「私はどうしたらいい？」

二人だけで勝手に無駄なことも混ぜながら話を進めているため、待ちきれなくなった女の子が話を折る。

「藍。答える」

「好きにして……」

藍がそう言うと、百緑が女の子に命令を飛ばす。

「フェルメール。始めろ」

藍は、フェルメールとは彼女の呼び名であろうと思った。本名ではないだろうが、とも。

フェルメールが若葉に手を翳すと、暗い部屋の中で薄い青色の光が若葉を包み込む。その光に包まれた若葉の火傷や切り傷は治っていく。

藍にはその青い光が放たれなくなった時から若葉が静かに寝息を立てているので、もう安心だとわかった。

「藍。戻ってくる気は無いのか？」

百緑は任務をやり遂げたのかまたさわやかな笑みを浮かべる。

「私はもう、関わらないと言ったはずよ」

「もう貯蓄が尽きるんだろう？ 三人もの子供の面倒をもつ何年もこっちの仕事の給料ならその子達も不自由なく暮らせると思うんだがな」

「……」

「藍。君の持っている^{アルター}改変者としての力はこっちの仕事でとても役に立つ……って言っても、それがわかった上でOASPを抜けたんだっただな。でもその子達はもう昔みたいに子供じゃないんだから、付きっ切りで世話はもう必要——」

「考えとくわ。礼は言っておく。ありがとう」

藍は百緑の一方的になっていた会話を断ち切る。

百緑は藍が帰れ、と目で訴えているので即座に退場することにした。

「この後、まだ仕事を控えていてね。そっちは……ちゃんとした任務さ。もっと汚い仕事のね」

百緑はそれだけ言ってフェルメールと病室を出て行った。戦場という名の彼らの本当の仕事場へ。

四章（3） 無力な者の悪あがき

午前零時。

「来たわね」

周囲で穏やかに燃えている炎が訪問者の顔を闇から浮かび上げさせる。

その顔をミロリーはまっすぐ目で見る。対する人物の方も同じく、まっすぐミロリーの顔を見ていたからであつた。

炎がパチパチと音を立てながら木々の粉塵と火花を飛ばす。周囲は煙の匂いが充満していて鼻をくすぐる。

「あなた、一人でいいのかしら？」

ミロリーの口元に思わず笑みがこぼれる。

彼女はこの状況を楽しんでいたからであつた。

おもしろい。

初めてだ。こんな馬鹿な奴がいるとは思わなかった。もし立場が入れ替わっていたら自分は決してこの場に現れないというのに。いや、自分だけではない。おそらく、こんな面白い奴はそうそういない。何せ自分から死ぬために行くようなことは自分だったらしない。そうミロリーは心の中で高揚を感じていた。

だから仕事を優先しないで、この少年とのお遊びにつきやってもいいと思つてしまつてゐる。

（この少年は何か面白いものを必ず見せてくれる！）

「ああ」

その少年——彩人は短く返答する。

真剣な眼差し。普段だつたらこのような姿は見せない。彩人は自分らしくもないな、と思う。

「交渉決裂」

「覚悟はできている。俺はお前達にルネは渡さない」

「約束は忘れていないわね。それを邪魔する者は排除する」

戦闘が始まる。

先手をとったのはミロリー。

拳銃をポケットから引き抜き、何の迷いもなく引き金を引く。

銃声音。

彩人は彼女が拳銃をポケットから取り出したタイミングに合わせて体をそらす。銃弾は闇の中へと消えていった。

「へえー」

彼女は彩人の咄嗟の動きに感心しつつも二発目を発射。

銃弾の軌道は彩人の頭に向かう。

彩人は走りながら体勢を低くする。二発目の銃弾は走ったときに逆立った髪の毛をかすめる。そしてミロリーの周囲を右回りに回る形で走る。

「逃げているだけじゃどうしようも無いわよ！」

ミロリーの方は攻撃の手を休めようとしなない。

三発目。

その引き金が引かれるのと同時に彩人は上着の内側に隠し持っていた物を手にとり、渾身の勢いで彼女目掛けて投げつける。

銃口から飛び出した銃弾は彩人が投げたそれに当たる。

当たった途端に空気が吹き出るような音、辺りには煙とはまた違う匂いが鼻をつく。次に起こるのは爆発。

（チャンスは一度だけ！）

彩人は急いで距離をとる。日曜日の経験でどのくらいが安全圏かはだいたい掴むことができていた。

「これは……」

ミロリーがガスのおいに気づく。そしてその場からとっさに離れようとする。

しかし、引火していくスピードは人間の足の速さよりはるかに早い。

燃えている木から炎が空気中のガスに引火。引火時に炎は強い赤い輝きを放って大きさを増す。そして伸びていく。連鎖から連鎖。連鎖がいくつも起こって、それは膨張するように次々と一瞬のうちに広がる。

ミロリーへ迫っていく炎。

止まらない。

勢いは増すばかり。

（決まるか……？）

炎は全てのガスへと移った。

彩人の目の前は炎で一面となる。

「まったく、学校でこういうことしちやいけないと先生から習わなかったの？」

炎が消え去ってからミロリーの姿が現れる。

（無傷か！）

「まるで子供のおもちゃよね」

ミロリーは何事もなかったかのように立っている。

（はずした……）

火炎攻撃は彩人にとって強力な攻撃手段だった。だがそれも不発。「これで最初は逃げ切ったそうね。でも、同じ手は二度通用しないわよ」

ミロリーは銃弾が彩人の投げたガスボンベ当たった時点で後ろに大きく跳び、爆発の火が届かないと予想した距離まで離れる。

彩人の攻撃は難なくかわされてしまった。

（仕方ない……）

彼はポケットに入った包丁に手を伸ばす。ここに来る前に藍の部屋へ入って勝手に拝借してきたものだ。

「さあ、次は何を見せてくれるの？」

「くっ……」

彩人自身も包丁で立ち向かえるとは思っていない。相手はナイフ、それに拳銃を持っている。武器だけですでに差が圧倒的だ。

だが、戦うしかない。

「それは包丁？ ふふふ、おもしろいわ。本当に」

「俺は守らなくちゃならないんだ！ なんと少しでも」

彩人の声は震えていた。

恐怖の表れ。

この場面が恐くないわけがなかった。それでもどうにかしなければいけなかった。どのみちルネは連れて行かれる。ならば、戦わずにルネを引き渡すよりも、それでも戦ったほうがましだと思ったからここに彩人はいる。

「じゃあハンをあげましょう」

そう言ってミロリーは武器を仕舞った。

「どういう……つもりだ？」

「あら不満？ 坊やにとってはうれしことだと思っただけど」

ミロリーは楽しんでいる。彩人をからかいながら。

「私はね、楽しいのよ」

「？」

「一応言っておくけど私は素人じゃないのよ？ ただこんなこと初めてで、坊やが本当におもしろいのよ。一般人でありながら^{アルター}改変者^{リバイス}や修正者に関わって。私たちが狙っている標的^{ターゲット}についても、あなたは守ろうとした。逃げないでね」

「だってルネは家族だから」

ルネは家族であり、守らなければならない人だということに基づいて彩人はこの場に赴き、命がけで戦っている。

「それは今の話でしょう？」

「？」

「ルネ……と呼んでいたわね、坊や^{ターゲット}は標的のことを。まあいいわ、私も標的という枠から外して話しましょうか。坊やは数日前のこと彼女とは始めて出会って、巻き込まれた。まあ違いはないわね？」

「ああ……」

細道でルネとすれ違い、そして事件に巻き込まれた。

「なぜ逃げなかったの？ 坊やが何も知らない女の子を助けて、そして命の危機にさらされた。その時までには赤の他人だったというのに。一人で逃げればよかったのに」

「……」

もしもあの時、ルネがただ通り過ぎ去っていたら、すれ違いだけだったなら、彩人はこんなことになってはいないだろう。

「普通なら逃げていたはずよ」

「わからない。俺は——」

（——どうしてルネを助けようと思ったんだ？）

「興味が湧いたの。坊やに。これは私の勘だけど、坊やには何かがあると察したわ。だからいつもだったなら真面目にしている仕事を放り投げている」

「俺はそんなたいした人間じゃない」

そうだ、と彩人は思う。

自分が記憶喪失になって、新代荘に行つて、そこでただ過ごした。夢なんてない。どうでもよくなっていた。成り行きに任せていた。高校に行つたのも、幸祐と若葉の二人についていただけ。自分で何をしようとも思わなかった。

だが、それは今週の初めで変わった。

自分でやりたいと思ったことをしたのだ。

彩人はルネを守ろうと思った。

それは紛れもなく自分の意思。誰かにそうしろと言われたのではない。流れに身をゆだねたのでもない。

逃げるか、守るか。

公平な二つの選択肢。

そこで取ったのは、『守る』という選択。

「さあ、見せてみなさい！ そして楽しませて私を！」

「守る……」

もう選択は終えた。もう後戻りはできない。

「俺はルネを守るって決めた！」

彩人は包丁を右手にミロリーへと一気に飛び込んでいき切りかかる。

ミロリーは左側に華麗に避け反撃。

「がッ！」

膝蹴りを彩人の腹部へ叩き込む。

（痛い。苦しい。でも……）

渾身の力で地をしつかりと踏む。

「そう、そうよ！ 意地を見せてみなさい！ そして坊やが持つている『異常』を見せなさい！！」

「うおおおおおおおおおおお！！」

切りかかる。

避ける。

反撃。

何度繰り返しても彩人は諦めずに立ち上がる。蹴られ殴られたりして、服を脱いだらあざだらけになっていることだろう。

（ただ闇雲に突っ込んでも意味が無い……。何かいい方法は無いのか？）

「もう体力切れ？ 若いくせに。来ないならこっちから行くわよ」

ミロリーはハンドと言ってから拳銃もナイフも使っていない。ただ肉弾戦。俊敏な動きで華麗に避けては打撃で攻撃。

今度は彼女から彩人に突っ込んでいく。

彩人は包丁を構えて防御体制。

「意味無いわよ。そんなもの」

ミロリーは生身の人間である。切り付ければダメージはある。最初に右足を振り回してきたのを、彩人は包丁の刃で防ごうとする。だが。

突然ミロリーの体勢が低くなる。蹴りは彩人の脛のところへ。バランスを崩したところへ二撃目。

今度は左足を腹部へ。この蹴りは今までの蹴りとは威力が違った。
「——ッ」

蹴りの衝撃から彩人は声が出ず、息だけが漏れる。そしてそのまま蹴り飛ばされた。空中を舞った彼の体は地面に叩きつけられる。そして彼は雪の積もる地面にうつ伏せになったままだった。

「なによ……」

ミロリーはゆっくり近づいてくる。

「その程度……なの？ 私が坊やに感じた『異常』さは一体なんだったというの？ つまらないわ。期待はずれだわ。まだ立てる？ 立てないなら私は今ここで坊やの頭部に弾丸を撃ち込むわよ」

ミロリーの脅迫的な言葉。彩人には聞こえていたが、すぐに立つことができそうもない。

（くそッ……立てない……）

銃口は彼の脳天に向けられる。そして。

「さようなら」

雑木林に一発の銃声が響いた。

四章（４） 彼らを繋ぐもの

電気はついていない。

明るい部屋にいたい気分ではなかったのでもとは点いていたが、ルネが自分で後から消した。

彼女が顔を押し付けている枕は濡れている。

たびたび嗚咽が漏れる。

彩人は記憶が無くなってしまった原因は自分の持つ『異常』な力だと言った。記憶はその力を使うためのエネルギーとして消費されたのだ。そのようなことも知らず自分は大切な思い出を無くした。

ただ出かけただけ。

最後は喧嘩をしたようになってしまった。でも彼女は大事にしていた、その思い出を。新代荘に来るまでの記憶は正直もう思い出すことはないだろうと何となくわかってしまっていた。だからもう諦めていた。

でもその後から失った思い出は違う。失いたくなかった。新しい自分の思い出を積み重ねていこうと決意した矢先の出来事なのだった。

だからといって力を使わざるを得なかった。

そうでもしなければ自分の大切な人が死んでしまっていたから。死んでしまったらもう一緒に思い出を作ることとは出来なくなってしまう。それは嫌だ。だからこの結果は正しかったのでは、とも思えた。

後悔はない。

絶対はない。

目から流れ出すものが止まらない。鼻もすすらないと垂れてくる。

「うっ……」

寝てしまったら楽になるだろうか。

忘れることができるだろうか。

忘れるのは今このつらい気持ちだけでいい、大切な思い出は忘れたくない。

でも寝付けない。

目をつぶってもつらいことから逃れられなかった。いつまでも頭の中でつらいことが残り続ける。

胸が苦しい。

彩人にたくさん迷惑をかけてしまったのではないだろうか。

「彩人……」

彼は泣きじゃくるルネをここまで連れてきて藍に任されていたことも彼が代わりにやった。

ルネは迷惑をかけたのに礼を言っていなかった。

「謝らないと……」

目を服の袖で拭って立ち上がる。暗い部屋にずっと居続けたせいか暗闇でも少し目が見える。電気を点けずにそのまま自分の部屋を出て、彩人の部屋に行く。

彩人の部屋は鍵が掛かっていた。

ルネは、夜は鍵を閉めなさい、と藍に注意されていた。しかし、彩人がそこにいないということがわかる。

「彩人……どこ？」

夕方、攻撃してきたミロリーが言い残した言葉を思い出す。

「ぞうき……ばやし？」

彼女は日曜日にその場にいたのだが、その時の記憶はもう失ってしまったため、どこかさっぱり知らない。

「だめ、彩人が、彩人が……」

自分が行かなければ彩人がどうなるかわからない。へたしたら死んでしまうかもしれない。

ぐずぐずしている暇は無かった。

ルネは彩人の元へと走る。

「彩人」

彼女は何となくだが、わかる気がしていた。彩人がどこにいるの

かを。

その手がかりを証明する方法はあるのかどうかはわからない。

ただ当てにならない理由を一つ述べるならば、彼らはあの時から切れることの無い『何か』で繋がれているのかもしれない。

四章（5） 白色だからこそ

彩人は心の中で思った。

終わった。

ごめん、ルネ。

藍さん、幸祐、若葉。ごめん。

やっぱり俺は似合わないことをしたんだろうな。いつものんびり生きている俺にとってはこんなスリリングでデンジャラスな日々合わないって……。

結局、短い人生だったな。

生きているのは十七年。でも、その約半分は何があつたのかちつとも憶えていないや。

実質、八年か。

八歳までと変わらないんじゃないか？ あ、でも一歳とか二歳とかの記憶って何かは誰でも思い出せないか。

となると……まあどっちにしても短いことに変わりないな、うん。いやー、天国は昼寝が気持ちいいかな？

最近は、寒くて、寒くて、昼寝も散歩もどっちもする気になれないからちょうどいいかな。

そうだと、いいな。

「彩人」

あれ？ ルネの声だ。

ルネはどうなってしまっただろうか。無事に生きられるといいが

そこで、彩人の思考は途切れた。

「痛いっ！」

そう彩人の思考は確かに途切れた。

小さな手で顔を思いつきりビンタされたからであった。

「よかった……」

彩人が目を開けると目の前にはルネの顔が頬には雫が流れた跡がある。夢でも見ているのではないだろうか、と思った。

しかし、これは現実だった。

「やつぱり来たわね。標的^{ターゲット}がわざわざ出てきてくれたのは助かったわ……」

ミロリーが舞った雪の中から姿を見せる。右手にあったはずの拳銃は凍り付いていた。

「許さない」

ルネが気色ばんで彼女を睨みつけた。

「……。許される覚えもないわ。さあ、本来の任務に戻りましょうか。もうそろそろ時間もなくなってきた頃だろうし」

「おい、これはどうなってる……んだ？」

彩人はミロリーに一方的に殴っては蹴られていた。そして拳銃を向けられて彩人はもう終わりだと思った。だが気付けばそこには新代荘にいるはずのルネがいて、自分は生きていて。わけがわからなかった。

「バカな彩人を助けに来た」

ルネは言う。

ミロリーはルネに牙を剥く。拳銃を覆っていた氷は蒸発するかのように消え、ナイフを左手に持ってそのままルネの真正面に突進していく。

「彩人は隠れて。ここからは私が――」

「ふざけるな！ お前が力を使ったら――」

会話するなど滅相も無い。そのような暇があるわけではないので、彩人の言葉を聞く前にルネはこの世界の『異常』の力を使った。

氷の連山を形成していく。地面から生えた角のようだ。

「それは通用しない……!」
ミロリーが空中へと飛ぶ。

それはアメンドを纏ったナイフによってあっさりと両断されるが、ルネは別のルートを辿るように地面から氷の角で攻撃を仕掛けていた。

そこへミロリーは弾丸を撃ち込む。すると氷は内部が爆発したように崩壊し、やがて消滅する。そしてもう片方の手に持ったナイフで、空中にいながらも彼女は攻撃の構えをしている。

「ルネッ！ 手を俺に伸ばせ！」

彩人は痛みを堪えながらも必死で腹から声を出す。

ルネは言われるがまま彩人の言うとおりに左手を差し伸べると、彩人の手がその手を握る。

（また頭に流れこんでくる。頭？ いや体にも。これは一体なんだ？ いや、何だった？）

彼が彼女の手を引つ張ったことで、ミロリーが攻撃を外す。

「坊や、まだ動けたじゃない。でもさっきまでお遊びはおしまい。だつて標的ターゲットが出てきてしまったもの」

しかしこの時、彩人はミロリーの話聞いていなかった。自分の身に何が起こっているのかを気にせずにはいらなかった。

「彩人？ どうしたの？」

ルネが彼に尋ねる。

（なんだ……これは……『力』が―――）

彩人は立ち上がり、そしてルネの手を放す。

（使い方……）

わかる。イメージは『結合』。

―――繋げ。

「？」

ミロリーも彩人の様子に違和感を覚える。

彩人はルネと手を繋いでいなかった方の手——握られていたその手をゆつくりと開く。

「こいつは……」

自分では何の力も発揮できない、役立たずで、無力な白色の少年のためにある力。

白色は何の鮮やかさもない空虚な色。

しかし、白色にしかできないことはある。

空虚であるがゆえのその性質。

『何色でも上から塗り重ねることができる色』。

そして彼の白いキャンバスは彩られる。

白色は美しき光沢を帯びた銀色へ——

開いたそこには結晶化した氷の塊があった。

ここにいる三人ともそれを見たことがある。ルネが生み出したそれと実に似ているものだった。

「あつはははは、そうか、ふふ、これは実に面白い！ 坊や！ それを待っていた！」

ミロリーが吹っ切れたように高らかと笑い声を上げる。この状況で笑い出すなど不気味で極まりなかった。

「つまり坊やも改変者^{アルター}だった、ということね！ それも彼女と同じような力を持っていると。やっぱり勘は当たっていたようわ！」

「俺が改変者^{アルター}だって？」

彩人は信じられなかった。ただルネから自分に流れ込んでくるそれに従っただけだった。

だが以前から予兆はあった。

一度目は炎を操ることができる男に迫られ打つ手も無い絶体絶命な状況でルネの手を引いた時。二度目は昼にミロリーと出会い自分

に宿る『異常』の存在を知らされ、その夜自分が皆と一緒に居ると迷惑をかけることになると言って新代荘から出て行ったルネを連れ戻した時。三度目はルネと二回目の目的の無い散歩のようなお出かけをし、しまいに炎を操る男が店の中で襲撃してきた事態から逃げる時。そして、最後。ミロリーに攻撃されそうになったルネの手を引いた時。

そのどの時も彩人はルネの体と接触した時だった。

ただし、彩人が感じ取った『それ』が起きたのはある条件を満たしていた時だけ。

その条件は——ルネが『フレイタス異常』という力を使った直後に接触すること。

その現象が彩人に起きた時、頭か体かに、何かの情報が流れ込んでくるように感じ取った。

自分の意思ではない。

自然に。本能的にそれを受け入れようと。

その頭に流れ込んでくる『それ』の源は——ルネ。

（最初はなにがなんだか、わからなかった。だけどこれで）

「これで戦えるッ！」

今の彩人は力を手にした。無力ではなくなった。

「ルネ。お前はもう力を使うな。代わりに俺が戦う！」

（力の使い方がなんとなくわかる。簡単に言えば繋げるイメージか。それに体は痛むがまだ動ける！）

木々が焼け熱気に満ちたこの場所を再び冷気が冬の空気を本来の姿に戻す。空気中の水蒸気は凍結し細かな氷の粒を作り出す。

彩人はありったけの力を振り絞り手に握ったものを振り下ろす。

世界の『異常』によって構築された氷の剣を。

「——！」

ミロリーは、先ほどまで彩人の何も握られていなかった右手に氷

の剣が握られているのは視界に入ると、反撃のために構えたナイフを即座に防御の体制に持っていく。

しかし、戦いは一瞬が命取り。

彼女は最初の判断が遅れた。だから行動に移ろうとすれば必ず動きに遅れが出てしまうのが必然だ。

氷の剣とナイフとが交錯する。

キン、とナイフの方が刃音を立てた。氷の剣に亀裂が入る。

「それは……」

ミロリーが地にしっかりと踏ん張り、彩人の一太刀を受け止める。だが彩人の攻撃は終わらない。さらに新たな一手を仕掛ける。

「まだだ！」

周囲の冷気がさらに強まる。

すると氷の剣から衝撃波のように氷が飛び出す。氷はルネが出現させた氷の連山のように先端が尖った状態で、氷の破片を撒き散らしながら氷の相手を押し飛ばす。

「くっ！」

氷がガラスの破片のように鋭く、ミロリーの体を襲う。彼女は後ろへと止む終えず飛びのいた。

ミロリーを吹き飛ばした時にまた剣に亀裂が入り、あっという間にばらばらと崩れ去ってしまった。

（なんで……。いやそうか。『アメント』とかいう力は弱める効果があったんだ！）

しかし、壊れた氷の剣に気を配っている余裕は無い。相手は戦闘に手馴れた物騒な人物だ。だから彩人の頭には、油断したら負けると刻み付け、相手に反撃を与えようとしなない。

「いくぞ！」

彩人は倒れたミロリーに向かって新たな攻撃を仕掛ける。

「彩人！ 待って！」

ルネはミロリーへと向かっていく彩人に叫ぶ。しかし彼女の言葉

は彼の耳に届かない。自分が無力でないこと。彼はそのことに心が浮かっていた。

次はルネが使っていた氷の連山を出現させた攻撃で仕掛ける。彩人はあの時のルネのモーションを思い出し真似するように雪の積もった地に手を付き、力を発動させる。

（あの時の迫力を。衝撃を。再現するんだ！）

頭の中に力の使い方は情報としてインプットされているような感覚で、それに従い力を振るう。一体どういう原理なのかはさっぱりわからないが、それを読み取る。

動けなくしてしまえば勝利だと思った彩人は彼女へのダメージより拘束を狙う。

雪の面を這うように凍り付いていき、ミロリーの手前で四つに分かれてそれぞれが彼女の四肢に伸びる。

だが、そうもうまくはいかない。

ミロリーはナイフを逆手に持ち替え左腕に迫る氷を二つに切り裂くのと動作を連続させて、そのまま左足に迫る氷も二つに切り裂く切裂かれた氷はささくれのようにあらぬ方向へと伸びる。さらに右手の拳銃が放った銃弾が右腕に迫る氷を打ち抜くと、打ち抜かれた氷は内部で爆発でも起こったかのように砕け散る。

「うっ……」

防ぎきれなかった右足に攻撃が当たる。当たった氷は右足と地面をまとめて張り付くみたいに覆いかぶさって、それらを繋ぎ止める。それでもすぐにナイフで張りついた氷を引き剥がす。

彩人はこの攻撃が決まると踏んでいたためミロリーの素早い動きに一瞬手を止めてしまった。

もちろん、たとえ一瞬でも隙ができれば、それは隙である。

ミロリーは拳銃を彩人に向けた。

彩人は防御として氷の壁を作る。

銃声が鳴り、氷の壁によって彩人は自分の体を守ったと思ったの

だが――

「がっ……あああ！」

銃弾は氷の壁を突き抜けて彩人の左肩に当たった。当たった箇所からは痛みと血がにじみ出てくる。

「彩人！」

ルネが叫ぶ。

彩人は左肩を押さながら悲痛な叫びをあげる。よろよろと左肩を押さえながら後ずさりしてミロリーから距離をとる。

弾を撃ったミロリーはゆっくりと立ち上がる。右足の立ち方に少し違和感がある。彼女の方は右足を負傷したようだった。

ルネが彩人とミロリーの間に立つ。

ミロリーにすぐに彩人を襲ってくる様子はない。

「だ、大丈夫だ……。それよりどうだ……。はっ、なかなかうまく使えてただろ？ ルネに借りたこの力。お前達の言う『異常』フラヴィタスってものをさ」

彩人は自慢げに離すが表情は苦しみを隠しきれていない。

「借りた？ それは一体、どういうこと？」

ミロリーは攻撃の手を休めて話を始める。

「坊や、その力は坊やのものじゃないのか？」

話をしなければいけないほど彼女には納得のいかないことがあった。

「彩人、本当に大丈夫なの？」

「痛い……。けど、まだいける」

彩人がこれまでに味わったことのないほどの痛みだった。だが強気を見せる。華奢な少女になど負けてはいられない。

「こちらの質問に正確に答えろ！ その力は坊やの『異常』フラヴィタスか？」

ミロリーの態度が迫力のあるものに変わった。

それに彩人もルネはやや気圧される。

「……さあな。ルネから俺に力が流れ込んできたっていうか」「それは本当か？！」

もう今のミロリーには戦闘に集中することよりも、彩人の異常に
対する興味が上回っていた。

「あ、……ああ」

今まで見ないミロリーの態度に彩人とルネは不気味さを感じる。

「そうか。そうか！　そうか！　それが本当ならばこれはすごい！
！」

ミロリーが徐々に狂っていく。

「異常のある個体から別の固体への移動は通常不可能とされている」
しかし、と続ける。

「例外として、ある種の『異常』を使えば不可能ではないとされる
……。あれを持つ^{アルター}改変者はほとんど判明されていないというのに……
坊や、その『異常』は坊やの物ではないのだな？」

いつ相手が攻撃してくるか警戒を解かない彩人。だがまだこの状態では自分から攻撃することはできない。それに会話を長引かせれば回復にも使える。

「ああ、借りてる感じだな」

彩人がそう言う——

「あっははははは、そうか、ふふ、これは面白い！！」

ミロリーがまた高らかと笑い声を放つ。

「どうやらあの伝説級の異常でないとしても、素晴らしい！　まさかこんなところで出会えるとは！　OASPでも世界で『マスター』

の改変者はわずかしか確認できていないというのに！　間違いない
！　君は世界を変えることができる可能性を秘めた異常を持つ改変^{アルター}
者だ！」

「なにを言っているんだ……」

ルネが記憶を失くす前なら知っていたかもしれないが、二人とも業界用語な言葉ばかりを並べるミロリーが何を言っているのか理解できなかった。彩人はそれでも自分の持つ異常がすごいもの、とだけ
はわかった。

「いいわよ、もうこんな機会は二度と訪れることは無いほどのこと

だから。その坊やに免じて教えてあげるわ。確か少し話したわよね」

そしてミロリーはこの世界の『異常』について語り始める。

四章（5） 白色だからこそ（後書き）

とうとう彩人の異常が^{フミウイタス}覚醒しました！ これから展開をお楽しみ
ください！

四章（6） 不安定な世界

世界の異常。

この世界は、元々は正常だった。そんなものは存在していなかった。だが現在は『ブラヴィタス異常』が存在することによって不安定な状態となつてしまっている。

元々無かったものが存在するということは外部から持ち込まれたということだ。

こことは違う別の世界から。

その世界では異常が存在した。ブラヴィタスだが、そちらの世界にとっては異常とは見なされなることはない。存在していることこそが通常なのだから。

そして異常をこの世界に持ち込んだことで、この世界をこのような状態にしてしまった存在は神とも称され、この世界を訪れた最初の『ヒジタイ訪問者』。

この世界は改変される。想像だけでしか起こりえないことが起こる世界へと変貌してしまう。

この世界は正常だ。だから、その神なる存在はこの世界にとって凄まじく強大な『ブラヴィタス危険因子』となる。その結果、この世界である新たな異常がを生み出されるという現象が起きる。その際に生まれた『異常』こそが――

アmend。世界をもとあるべき姿へと修正する力。

それを身に宿した修正者。リバイスこの世界に新しく生み出されたアmendというものは神のような存在が持ちこんだ異常とは違った。ブラヴィタスアmendの存在理由はただ一つ。

フラヴィタス

他の『異常』を打ち消し、消滅させる。つまり外部から持ち込まれたものを消して元に戻そうとする世界の機能。

彩人は神話じみた話を聞かされてもいまいち掴めない。

ミロリーはそれを人体に置き換えて説明する。

この世界を、人体。

フラヴィタス

異世界から持ち込まれた異常を、体の外から入ってきたウイルス。アメントを、白血球などの体を守るためのもの。

するとわかるだろうか。人体へ侵入したウイルスを白血球は消そうとする。この世界もそれと同じだ。世界を外部から侵入してきた存在から守ろうとする。

フラヴィタス

しかし、アメントも万能ではなかった。『究極の異常』を持つ神のような存在はこの世界によって消滅させられたが、その代わりに持ち込まれた無数もの『異常』がこの世界に散らばった。

フラヴィタス

フラヴィタス

究極の異常とは、全ての異常を意のまま操ることができ、一つに束ねることができる力。世界を自由自在に変えることができ、世界の創造さえできる可能性を秘めている。

だからこそ、神と呼ばれるのだ。

アルター

リバイス

だが、あくまでもこれらは全て、
長く、語り継がれてきているものだ。真実かどうかはわからない。

本題はここから、とミロリーは続ける。

現在の話。

フラヴィタス

この世界には異常を削除、または一般に被害が及ばないように活動する組織が存在する。

その名はOASP。正式名称は『Organization Anti Supernatural Phenomenon』

世界規模の組織で何十年、何百年、起源は不明。ただ昔から存在していた。

その組織は異常がプリウイタスこの世界に及ぼす『影響度』によって等級ランクを決めた。それは上から順にAからEまでの五段階と定めた。Eはほとんど影響を及ぼすことはなく、他人に害を与えたりはほぼできないと言っているだろう。しかし、Aともなれば話は別。規模はとてつもない大きさになるり、大災害に匹敵するほどの影響力を持っている。

そして、何事にも例外はつき物だ。

彩人の持つのはAからEの五段階には含まれない。含まれないものとして、『アmend』もそうなのだがこれはその存在意義から、世界に与える影響力は無い。

もう一つは、最も世界を改変しうる異常。プリウイタスそれは『マスター』と呼ばれ、S等級と定められている。先ほどの神なる存在の持つのもこれに含まれる。

マスターはある特有の性質がある。それは他の異常への干渉。プリウイタス異常をさらに異常なものへと変えさせることも意味している。だからこそOASPはこれを特別視し、また最も危険な存在と見なした。

この世界は改変と修正、二つが同時に行われるからこそ不安定なのだ。どちらかに傾かない限りそれは続く。そして改変者アルターと修正者リバイス、どちらかがこの世界からいなくなつたその時、この世界は安定を成す。

四章（7） 複製ヘルミナティオ（前書き）

狩獵者^{ハンター}のリーダー、ミロリーとの対決。その結末はいかに。

四章（7） 複製ヘルミナティオ

「そしてS等級である坊やの持つそれは『複製』^{ルミナティオ}。干渉し、異常を^{ブラウヴィタス}複製する」

言うなれば他の『異常』の模造品を作る。

ミロリーは話すことは全部言い切ったように滑らかだった口が閉じる。

彩人もそれがわかると再び気を引き締める。

「講習会はこれでおしまい。さあ、休憩も十分できたでしょうから

——存分にその力で私を楽しませなさい！」

「ルネは離れているよ！」

「彩人……」

ミロリーが休戦状態を止め、足を動かす。だが、左足の負傷が効いているのか足取りは最初よりやや遅い。

彩人も右手に水蒸気と雪が凝結していき氷の剣が構築される。拳銃に撃たれた左肩は動かそうとするとひどい痛みが体に走るのので左腕は使い物にならなかった。まだ利き腕でない方が打たれたのが幸いである。

（さっきの銃弾はあっけなく氷の壁を突き抜けやがった……アメン
ドを纏った銃弾だったってことか）

それは氷壁が防御手段として意味を成さなくなったということの意味する。今の彼には銃弾から身を守るすべが無い。

だがアメントとは世界への影響力が無の力。たとえ持っていたとしても、修正者^{リバイス}は超人になれるわけではないのだ。
だから改変者^{アルター}という超人の彩人は勝機があると確信する。

（まずはあの拳銃どうにかしないと）

彩人は拳銃が握られたミロリーの右手に的を集中させる。彩人は足元に積もっている雪を蹴り飛ばした。蹴り飛ばされた雪は空気中を浮遊する間に氷の散弾へと形を変えて、下方向からの攻撃が彼女

の懷へと飛んでいく。

しかし、ミロリーがナイフを起用に操ることで、氷の散弾はいとも簡単に打ち落とされた。

そうなることは彩人も予想通りだった。その散弾も彼女の動きを惑わすための罠にすぎない。

本当の狙いは左手。氷の剣をそこに向けて一太刀を浴びせようとする。

彩人が自身で今使っているルネの異常についてわかっていることは二つ。フラウイタス

一つは凍結させることができるものが無ければ力を発揮できないということ。だから彩人は空気中の水蒸気及足元と空から舞い降りてくる雪を用いることでその条件を満たしていた。地の利は彼の方にあるようなものだ。

そしてもう一つ。凍結が始まる地点は必ず自分の身体に接する距離だということ。直接遠くにあるものを凍りつかせることは不可能だ。しかし、水面を波が伝わっていくように、凍結を次から次の地点へ途切れさせること無く連鎖させるようにすると遠距離まで攻撃範囲を広げることがわかっていた。

（少しずつこの——ルネの力がわかってきたな）

凍結の連鎖反応は氷の剣からでも可能である。その刀が触れた箇所であれば、その場で空気中の水蒸気を凍結させることでその触れた箇所を氷で包み込むことができる。

だから、彩人は氷の剣が拳銃、またはミロリーの左手にさえ触れてしまえば一気に凍結させ、氷でどちらかを使えないようにしようと考えた。

「中々、鋭いところをついてくるじゃない」

ミロリーは彩人の行動を読んでいたが、もう避けようにも時間が足りない。

刃は彼女の左手目掛けて空気を裂きながら襲い掛かる。

彼女は左手に攻撃してくるとわかっていながら、庇おうとはしな

かった。

そうではない。

庇う必要なんてなかったからだ。

ミロリーは氷の剣に立ち向かうように拳銃の側面を氷の刃に叩きつける。

バリッ、と砕け散る音がする。

氷の剣と拳銃がぶつかり合って砕かれたのは氷の剣のほうだった。いや、ぶつかり合う直前にもう氷の剣の方が綻び始めていたのだった。

「な……！」

「私はアメンドの扱い方を一言も話した覚えはないわよ！」

一瞬の駆け引き。

氷の剣が砕け散った。

とれる行動は二つ。防御に回るか、それとも――

「意地でも、攻撃を食らわせる！」

氷の剣は狙いの拳銃を持った左手の目と鼻の先にある。

彩人はこのまま空气中を伝って凍結させようとする、が。

「うそ……」

氷はミロリーの左手はおろか拳銃に届くことさえなかった。届く前に氷が見えない何かに消滅させられたからだ。

彩人は左肩を負傷し左腕は動かすことができない。右腕は攻撃に失敗してしまったので防御に回せない。

つまり。

今の彩人は無防備そのもの。

「甘いわ」

（しまっ……）

ミロリーの右手に握られたナイフが炎の赤い光を反射して輝き、鋭い刃が彩人の腹部を切り裂いた。

腹部が熱くなった。激しい刺激が体を蝕むようにじわじわと広がる。
「うっ……ぐっ……」

「彩人！ だめ！」

彩人はよろよると腹部を押さえながら後ろへ体が下がっていき、最後には膝を突く。

「私がアメンドをナイフと銃弾だけに纏わせていると思って油断したわね。言っておくけど、アメンドはもともオーラのようなもので視認はできないの。人にはよるけれど、武器に纏わせたり、人体にも纏わせたりできる。そして濃度も違う。私は濃度が高いほうなのよ。だから消滅速度が速いってわけ」

ミロリーは冷めた目をしながら屈んでいる彩人を見下すように言う。

「ちくしょ……う」

腹部を深く切りつけられたわけではないが着ている服が血の色に染まる。

彩人は悔しさに満ちた目で睨みつける。

「さあ、もうチェックメイトかしら？ それともまだ頑張ろうとする？ そのお嬢さんに助けを求める？」

銃口は彩人に向けられた。

（負けるわけにはいかない……。なんとしても、だ。ルネにだって力を使わせるわけにもいかない。一か八かやってみるか成功する保証は無い）

彩人は悪あがきとも言える最後の一手にかける。

（でもやるしかないんだ。俺には地の利がある。この場所で凍らせられない場所はほとんど無い。それら全部を凍らせてやる！）

「まだだ！」

（俺の力を搾り出す！）

これまでに無い最も強い冷気が彩人の体を包み込んだ。

「無駄よ。私の弾丸はあなたでは防げない」

ミロリーはその言葉とともに引き金を引いた。

（俺はあきらめない！）

空気中も。

地面も。

全てを凍結させる。

氷の厚い膜が彩人の正面をカバーする。何十にも積み重なった層は氷の割れ易さという欠点を補う。

「アメンドを纏った弾丸で碎けない?!」

弾丸は氷の壁に埋まって彩人の体には到達しなかった。

（行け！ このまま全部、凍らせてやる！）

奥底から渾身の力をくみ上げる。

そして――

「終わり……?」

刹那。

いろいろな場所で氷の碎ける音が放たれる。

全ての氷は一瞬のうちにして儚くも消え去った。

ミロリーは先ほどの弾丸を撃った体勢から動いていなかった。
すなわち。

「……どういう、ことだ?」

この現象を引き起こしたのは彼女ではなかった。

彼女はというと、弾丸が防がれたことに面食らって、もう反撃を受けて終わりだとすら思っていた。

彩人は狼狽する。瞳孔が震えている。汗が額を伝う。

（力が……使えなくなった?）

いくら力を使おうとしても何も起こらない。というより、力の使い方そのものがわからなくなってしまった。

（なぜ? 一体何が起きたんだ? どうして使えなくなった?!）

事態の収集が追いつかない。

ルミナディオ
「複製……」

ミロリーがぼそつと呟く。

彩人はもともとルネの持つ『ブラヴィタス異常』の力を借りることで戦ってい

た。

元はルネの持つ力。

所詮その複製でしかない。

彩人の力ではない。

「完全なコピー」とまではいかないようなね。あくまでサンプルを作る
って程度かしら」

（限界。複製された力に限界が来たって……ことなのか？）

彩人はもう銃を向けられても身を絶対に守れない。

成すすべなし。

（終わりだ。もう……どうしようも、ない）

「終わりね」

ミロリーが銃口を向けるが、すぐにそれを止めてその場を離れた。
氷が迫ってきたからだ。

「ルネ！ 力を使うな！」

「バカ！」

ルネが彩人の叫びをはるかに上回る声で叫んだ。

「彩人のバカ。バカ。バカ」

「おい……ルネ」

ルネは彩人の前からどうこうとしない。戦う決意の表れだった。

「参戦かしら？」

「うん！ もう彩人なんかの言う事は聞かない！」

「おい、ルネ！ お前は力を使ったらまた……また忘れちゃうかも
しれないんだぞ！ それでもいいのかよ！」

「いいわけない！ でもそれは彩人だって一緒のはずでしょ？ 彩
人もルネと同じ力を使っているなら、彩人だって忘れちゃう」

彩人の力は『複製』<sup>ルミナティオ
ブラヴィタス</sup>。ルネの異常をもとに複製したならば代価の
条件も複製される。

「お前は一週間しか記憶がないじゃないか！」

ルネは日曜日に記憶を失った。記憶があるのはそれからの新代荘で過ごしたたったわずか五日間。

「そんなの俺たちと過ごしたこともすぐに忘れる！俺は八年前からの記憶しかないけど、それでも年単位もあるんだ」

（それに、その記憶も忘れたって……）

「忘れたっていいわけじゃないじゃん！」

ルネが彩人を怒鳴りつけた。思わず彩人も勢いを失くしてしまう。

「そ、それは……」

「藍も、若葉も、幸祐も。彩人言ったよね？家族だって。だってその家族と過ごした時間も思い出もどうでもいいの？」

ルネの言葉で気付かされる。

どうでもいい？

そんなわけがなかった。

毎日、同じような日々。何かを成し遂げようとも思わず、ただただ何もせず過ごしてきた日々。それでも彩人にとって彼らと一緒にいた時間は無駄ではなかった。

（記憶を失った俺を受け入れてくれて……一緒に過ごした。今思えば、一緒に中学校も行った。高校にも行っている。金がないからあまり行けなかったけどお出かけだって行った）

彩人は痛みを堪えて立ち上がる。

「ルネ……手っ取り早く早く終わらせよう。労力は少なめに」

「うん。わかった」

二人はミロリーに目を向ける。

「どうやら話の収集が着いたようね。二対一だけでもあいいわ。相手してあげる。ただ全力で行くわ。そして二人とも捕獲する」

「させない」

「ああ」

二人は手を繋ぐ。彩人の力——複製。これで準備は完了。そして再び戦いは始まる。

彩人が最初に踏み出した。

「ルネは援護を頼む」

「わかった」

彩人が地面に右手を擦りつけながら走る。擦られた部分は結晶化して『氷の剣』を作り出す。その剣で切りかかる。

（アメントに触れた剣はすぐに砕けてしまう。だが！）

ミロリーがナイフで防御。

「どうやら……本当にS等級ランクのようね……。そしてまた再び複製を行えば力を使えるようになると。とんだ力だわ……」

でもね、と言ってミロリーは続けた。

「私がアメントだけに頼っているとは思わないでほしいわね」

蹴りで彩人を吹き飛ばす。

彩人は痛みが体中に走り身動きがとれないため、ルネが前に出て氷壁で防御、そしてそこから『氷の角』を生やすことで攻撃をも同時にこなしてみせた。

「同じことを」

ミロリーは氷壁に対してはナイフを氷角に対しては拳銃を使って抗戦。

アメントを纏ったそれらは氷をなんなく切り裂き、砕き、そして消滅させる。

その間に地に着いた彩人が再び氷角を作り始める。

ミロリーが使えるのは近接用のナイフ。それと拳銃のみ。

（攻撃回数としては奴の方が少ない！）

彩人とルネは氷を広げていけば一回の攻撃で広範囲を攻撃できる。それを利用して、枝分かれしていく木のようにつくもの『氷の枝』として、ルネを避けつつミロリーを集中的に狙う。これが一本でもミロリーに当たれば、そこからさらに氷を広げることができる。

ルネの防御とミロリーへの攻撃。

だが。

「無駄ね」

ミロリーは現在持っているたった一つの武器をダーツのように投

げた。ナイフは『氷の枝』の間をすり抜けていき彩人が氷を生み出している手元近くへ刺さる。

ナイフが刺さった所から凍り全体に亀裂が走る。氷壁も氷角も全が一続きになっていることで同時に扱うことができる。

一本の大木があるでしょう。大木は天へと高く伸びながら無数の枝を生やし、さらにその枝からまた枝が、といったように次々と広がっていく。いくつもの枝は全て一本の根本から一続きになっている。もし、大木の根本を切断してしまったらそれらの枝はどうなるか。言うまでも無く、まとめて切り落とされたということだ。

だから、彩人やルネの氷も同じ。根本を破壊されれば、そこから派生した氷も同時に破壊される。

それが弱点だった。

ミロリーはそれを利用し、手元にある唯一の近接用武器を捨てても彩人の攻撃と防御を打ち破った。彼女は武器となるものを何も持っていないとも攻撃を仕掛けるのをやめない。

ルネが再び防御の体制に入ろうとするが、ミロリーの攻撃が先に行く。

「ルネ！」

鋭く放たれた右足蹴りがルネのわき腹をなぎ払う。

「つぐ……！」

ルネの華奢な体は蹴られた方向へと吹き飛ぶ。

そのまま一本の木の幹に多叩きつけられる。叩きつけられた彼女はぐったりと首がだれる。意識を飛ばされてしまったようだった。

「これはあなた達には真似できないでしょうね。さあ、次は坊やの番」

彩人は足に力を入れる。傷の部位が悲鳴を上げる。

（くそっ、この程度の痛み……立つんだ。こんなことで……くたばってたまるか！）

「頑張るわね。それでこそ、よ」

「ルネをよくも……」

「ふふ、坊やに何ができるの？　いくら彼女の異常を複製したって言っても所詮は偽物でしかないわ。本物には劣る。本物の力で私を倒せなかったら、複製が私を倒せるわけがない」

「うるさいっ！　それでも俺がやらなくちゃいけない。俺以外にルネを守る奴がいらないんだから」

彩人は足元にあるミロリーのナイフに気付く。今ミロリーの手元には拳銃しかない。つまり近接戦では打撃攻撃しかできない。

（そうか……）

彩人は氷剣を作り、切っ先をミロリーに向ける。

「わからない子」

ミロリーは彩人たちを手玉に取っている。

「もうその手は通用しないわ。あなたが作り出したものはたいてい私のアメントによって一撃で破壊できる。耐久性の無いそんな武器では私の体まで届かないわよ」

「あきらめないさ」

「そろそろ終わりみたいね。弾の残量もあとわずかになってしまったわ」

彼女は次で決着を着けようとする。彼女には肉弾戦がある。武器を失った時点で彩人の負けは決まってしまう。

（ああ、これで決める）

ミロリーは拳銃をかざす。

そして一弾目が放たれた。

彩人はタイミングが少し読めるようになっていたため、一段目は交わすことに成功。

だが、二弾目、三弾目が待っている。

（間合いを詰めるんだ）

彼は氷剣を握っていない方の手で氷角をミロリーに向かわせる。

弾道はそちらに向けられた。その間に彩人は前へ。

「近接戦に挑もうと。いいわ。ただどさっきも言った通り。その剣はアメントを帯びた拳銃の外枠であっても破壊できたことを忘れて

切りつける。

（左手！）

切りつける。

計三回。

ミロリーはその場に蹲る。彩人が切り付けた箇所からは赤い液体が流れたす。

「はあ……はあ……」

呼吸が荒い。心臓が強く鼓動を打つ。それは自分のしたことへの恐怖。

「考えた……わ……ね」

ミロリーはしゃがむ体勢になる。だが腹部を切り付けられたことで派手に肉弾戦はもうできない。そして両手を切りつけられてナイフも拳銃も握ることができなくなっていた。

「ああ。雪球の中に石とかつめて投げたりすると本当に危ないよな。とっても悪質なことだ。俺が氷の中に『ナイフ』を仕込んだこともそれと全く同じことだけだな」

「ほんと……まったく子供の考えることばかり……」

ミロリーはもう戦闘の意思を見せない。

「俺はまだガキだよ」

「そうね……坊やだったわね。よく頑張りましたって褒めてあげるわ。もうあなたの勝ちでいいわ」

その方が後々この『世界』がおもしろいことになりそうだから、とは思っても口には出さなかった。

「たとえ私が勝っていても連中がもうすぐ来る。ここに一人で来た時点ですでに終わりなのよ。どのみち私はいずれ捕まるわ」

彼女は座り込んだ。その時が来るまでここで待ち続けるつもりなのだ。

「OASPだったか」

世界を守る組織。

その組織が彼女を捕まえに来る。

「坊やもあの子を連れてさっさと行きなさい。彼らが来る前に。一般人といえども二人とも事件に深く関わり、そして戦闘をした。同じ対象になるかもしれないわ。それに最後にいいものを見せてもらったことに感謝するわ」

「あんた悪者かよ」

悪者よ、少なくとも坊やたちにはね。と、ミロリーは力の失った声で返す。

これで終わった。

「放置でいいんだな？　また現れたりしないよな？」

「しないわよ。もう終わりだもの」

ミロリーがそう言ったその時だった――

「いいや。まだ終わってはいないよ」

四章（7） 複製ヘルミナティオ（後書き）

彼らの前に現れたのは……。銀世界での物語はまだまだ終わらない
っ！

四章（8） 病室2

「ん……」

藍は病院の一室で目を覚ます。

時刻は午前零時三十分。

日付が変わってから三十分が過ぎていた。

若葉の容体が回復したため、緊張の糸が切れたのか寝てしまっていた。頭を預けていたベッドから離すと、今でも若葉は寝息を立てているのが確認できた。

「今回はあいつに感謝すべきなのか……」

いやいやそんなことはない、と気分を変えるために窓の傍に行き、カーテンを開けて遠くを見る。この病室からは新代荘がある方向が見える。

「あれは……」

もう深夜だ。普通の人だったら暗闇になった町が見えるだけだろう。

しかし、藍には別のものが見えている。

彼女の『異常』な目だからこそ見える。

それは新代荘から少し行ったところにある火災の起こった雑木林の地点。

暗闇の中、ゆらゆらと揺れる白銀の帯のようなもの――

藍がオーラと呼んでいるものだった。

藍の目には異常がオーラとなって見えるのだ。修正者のアメンドリバイスさえ除けばどの異常も見ることができ、またその人物が改変者であるかを判別することができる。

そしてかつての仕事に役立てていた彼女の目に写っているのだ。今。

しかも雑木林から病院まではかなり距離があるというのに見えるほどの大きさ。改変者アルターが力を大きく使っているときにはこのように

オーラは大きくなる。

（あれは……まさか！）

彼女には見覚えがある。

なんといつても今見えているオーラは、藍が毎日見ているのだから判別はほぼ当たっているといつてもいい。だがそれには混ざっているのだ。一つは白色。もう一つは銀色。

「あの子達……まさか！」

藍は若葉の様子を見る。

可愛らしい寝息を立てて眠っている若葉の頬を優しくなでる。

「若葉ごめんね。ちよつと行ってくるわ」

藍は眠っている若葉にそう声を掛け、病室を飛び出す。

（私はなんて馬鹿なことを！ 目先の悲劇に捕らわれてそれ以外に目が行き届いていなかった！ 何のためにあの世界と縁を切ったの？ 私は！ 結局また、私はあの子達を巻き込んだだけじゃない！）

八年前の出来事を繰り返さないで、と藍は願った。それを起こさせないために彼女は彼らの元へと急ぐ。

四章（8） 病室2（後書き）

話ごとにむらがありすぎてすみません。場面ごとに分けようとする
とついこうなってしまう。ちなみに次話は長いです。

四章（9） 彼らはこの世界で生きられない

「いやー、これは……」

その者は、ぱち、ぱち、と拍手をする。そして一本の木から飛び降りてきた。

「お前は……」

彩人も見たことがある人物。

日曜日の夜。

炎使いの男の後から現れた三人組。その中でも一人だけ黒服に身を包んでいなかった、まさにその人物だった。

突然の乱入者はピアス、ブレスレット、ネックレス、リングなどアクセサリーで飾られていて派手な格好をしている若者。街中をうるつについていそうな彼はこのような雑木林——この日常から

外れたこの空間には不似合いな、来てはいけない人物だった。

「お見事！」

「OASPか。やはり来たな……」

「こいつが……」

どう見たって見た目は一般人そのもの。だがそれは彩人やルネだつて同じことだ。たとえ普通の格好をしていても、その人物が普通でないとは決め付けられない。

「はい、そうですよー。オレはOASP色見支部第六行動部隊所属、隊長の木賊だ。任務遂行のためここにやってまいりましたー」

木賊はにこやかな表情をつくる。

（ミロリーをこの人に引き渡せばいいのか？）

彩人は彼の態度に戸惑つてどうしていいかわからない。

「ああ、その狩獵者は回収するからそのまま。おい、これをさつさとどつかに持っていけ」

命令を受け彼の黒服に身を包んだ部下が影から二名現れる。

木賊の様子は今も普通の若者と変わらない。

だから気付くのが遅くなる。

（違う！ こいつは俺たちの味方なんかじゃない！）

彼は思い出したのだ。あの夜にこの男が自分たちを認識しどう対処しようとしたかを。

「おやおや。顔つきが急に恐くなつたね。そこの^{アルター}改变者の少年。女の子のほうはと……ああ、まだ伸びてるみたいだ」

彩人は後ずさりする。ルネを見るとまだ木の根本に倒れている。

（逃げないと……早く、早く）

「ああ、そここの少年には手を出すなよお前ら。そいつだけ連れて行け」

部下二名が「了解」とだけ返す。二人は彩人とミロリーがいるところ
に近づいていく。

「まあ、そう焦るなよ、君。そいつら俺の命令に絶対だから、安心しな。感謝しているんだよ、オレは。だってそいつ^{リバイス}修正者じゃん。

まあオレも^{リバイス}修正者なんだけどー。さて問題です。^{リバイス}修正者どうしのバトルってどんなのでしょうか？ はい、^{アルター}改变者の少年君。答えてみて」

^{リバイス}修正者とはアmendを使える者のことを言う。そのアmendというのは他の『^{リバイス}異常』を消滅させようとする働きがあるだけで他に効果は無い。

つまり、^{フラヴィタス}異常を持たない者には無害。

アmendは他の^{フラヴィタス}異常と区別される。よって^{リバイス}修正者もその中に入れることができる。

「もう、遅いよー。こういうのはパツパと答えるのがいいんだから。正解は『ただの人間と人間の殺し合い』になっちゃうでした」

木賊はそう言うのだ。戦闘が当たり前の行為だと言うように。

「だめなんだよ。それじゃあさ、つまらないんだよ。だから君が代わりにやってくれたおかげで、雑用をせずに済んだってこと」

「雑用……」

彩人はこの一週間色々な人と接触することになったがその中でも

木賊は。

（危険すぎる！）

「そそ雑用。今回の仕事で雑用だけってつまんねーとか思ってたんだよ。あの時だって、炎使ってた奴に逃げられるし。最悪だと思わない？」

「坊や、ルネっていう子を連れて早く――」

ミロリーが彩人にだけ聞こえるように小声で何かを言おうとしたが。言う前に力尽きてしまった。

その彼女は二名がかりで黒服の者達に運ばれていく。

「はい、さつさと持って行っちゃって」

彩人はそれをただ見ていることしかできない。逃げようとするれば何をされるかわからない。それに逃げるにはルネを連れて行く必要がある。

やがてミロリーは闇の名へ消えていった。

「あいつは……これからどうなるんだ？」

恐る恐る訊いてみる。

「OASPがそれ相応の処置をとることになるだろうな」

この場に残ったのは彩人と木賊、それに横たわっているルネ。

「お前は、これからどうするつもりだ……？」

黒服の二人は去った。だが木賊だけがこの場に残っている。

「今回、俺たちに与えられた任務は狩^{ハンター}獵者の確保。まあそれだけだったんだけどね。でもね。事情が変わっちゃったのさ」

今すぐにも逃げなければならぬと、彩人の直感は告げている。だがこの場を一度で脱出することは不可能だとも告げる。

「見つけちゃったんだよ！ オレは修正者^{リバイス}を狩るのは嫌いなんだけどさあ！」

なぜだ。

彩人は齒噛みする。

彼はルネを捕らえようとしていた者と命がけで戦闘をし、そしてようやく勝利した。

それで全てが終わるはずだった。

ルネを連れて新代荘に帰る。それでこの一連の出来事は終止符が打たれるはずだったのに。

（どうしてまた）

「アルター 改变者を狩るのは大好きなんだよ！」

（俺たちを邪魔するんだ！）

「例えば、君みたいにね！」

そして新たな戦いの火蓋が切って落とされる。

言葉を言い終えるのと同時に木賊が地を思い切り蹴る。

（早い！）

彩人は距離をとろうとする。だがそうしようとするものならば、木賊の方はその倍以上の速さで一気に詰め寄ってきた。

後ろ跳びをしながら透かさず手だけを地面にすらせる。そこから氷を生やして氷壁と氷角を作る。

すでにいくつもの傷を負っている彩人は早くにも決着を付けたかった。ミロリーに左肩を銃で撃たれて左側はほとんど使い物にならなくなっている。できることと言ったら、雪に触れてさらに氷結させることだけで、派手に振り回すことはできない。これが右肩だったら氷剣ももう使えなくなっていたことだろう。それに浅かったが腹部にも切り付けられた傷跡が響いている。

（どうやって仕掛けて来るんだ？）

木賊と遭遇したのはこれで二回目となるが、彩人はまだ彼がどういう手段で攻撃をするのかをまだ見ていない。よって様子を見るしかなかった。

「いいぞ！ 獲物らしく逃げ回れ！」

木賊は氷角と氷壁があるにも関わらずそのまま突撃しそうな勢い

で速度を緩めようとは全くしない。このまま突き進めば氷角に串刺しにわざわざ自分からなりに行くようなもの。

彩人はそこから判断する。ミロリーがアメンドをナイフに纏わせて氷壁を、布を切り裂くようにまたそれを切り裂いて見せた。つまり何かしらのアメンドを纏った接近戦用の武器を持っていると予測した。

壁を何重にも作ることで、一撃で防御壁が崩れ去ることを防ごうとする。

「意味ねえよ」

木賊がそう言った瞬間。

バリント。

予測によって対策した何重にもはられたはずの氷壁が、窓ガラスが割れた時のごとく破片を散らして全て粉々になった。

「な……っ！」

その氷の破片が飛び散る中を木賊は突進してくる。一度も彼は足を止めていない。あっけなく防御壁を突破された彩人と木賊の距離はあっという間に三メートル。

いきなり距離を詰められたことよりも彩人には恐怖したことがあった。

笑っている。

木賊が笑っている。

楽しそうに。ミロリーも楽しんでいた戦いを。

（違う！ こいつはミロリーとは違う！）

彼の表情は実に狂気染みている。ミロリーのは希少な彩人の異常に興味を持ったからだ。だが彼はそれとは別の楽しみを感じている。彼にとっては殺しとは遊びと等号で結べるほどに、快樂なのだった。
「さあ！」

今の二人の距離では近距離の武器がぎりぎり届く範囲ではない。

（こいつ……どうやって破壊した?!）

彩人にはまだ木賊の攻撃手段がわからない。氷壁は何重にも張られていた。普通ならば手前の方からしかできないはずだった。ミロリーに対して使用していたときも、弾丸もナイフも壁の所でぶつかって、壁が犠牲になるだけだった。

だが先ほどの破壊され方は違う。

（内側の壁も同時にそれも複数個所から亀裂が入った?）

明らかに不自然だった。

木賊は片方の手を上着のポケットに突っ込んだままであることに気付く。

（何かをしかけてくる?!）

木賊の方も彩人がそのことに気づいたのがわかったようで、そのポケットに突っ込んだ手を引き抜く。

その手は何も握られていなかった。

（?）

引き抜いた手は左手でその手を右前へスライドさせるように動かす。

「一撃目」

木賊の行動の意図が全く読めない彩人だが変化があったことにはすぐに気付いた。

腹部にまるで刃物で切られたような痛みが走る。もともと傷を負っていたところの上からのさらなる一撃。

「ッ!」

何がなんだか全くわからない彩人をよそに、そのままつと彩人の前に立つくらい距離まで接近。

「二撃目」

今度は彩人にも攻撃がわかった。木賊の先ほどとは反対の手。右手には明らかに人を傷つけるためにあるような武器が握られていた。しかし、それがわかったとしてももう遅い。彼はその攻撃を避けられる距離をもうすでに詰められている。

木賊は右手に持ったそれで彩人に一撃を加えそのまま吹き飛ばした。

「あつ……！」

飛ばされた彩人は地面に転がる。

痛。

彼が感じることをするのはそれだけだ。襲ったのは胸が焼けるように熱い痛み。

彩人は手で胸の辺りを掴みながら声を漏らしてもだえ苦しむ。

「どうかな？」

木賊は攻撃を終えた地点で立ち止まっている。それは彩人を一息に殺そうとしているのではない。彩人が苦しんでいるのを眺めているのだ。

「あ……あ……う……」

彩人は言葉を返すこともできない。そもそも耳に他の情報が入ってくるのを聞くこともできなかった。彼を襲った痛みは、一度目が胸部を切り裂かれたことによるもの。二度目は切り裂かれたものではなかった。言うなれば皮膚の表面を削り取られた感触。

「……あ、あ……」

彩人は地面にへばりついた状態で頭だけを彼に向ける。自分を傷つけた武器の正体を彩人は見た。

見た目は警棒に近いだろうか。だが長さは一メートルで、それ以外にも確実に似つかない部分がある。それは表面にある無数の尖った棘。それが叩きつけたりした時に相手の体に削る。

今、棘は赤く染まっている。彩人の血。

これを彩人は胸元に思いつき叩きつけられたのだった。

スパイククラブ

「棘棍棒。これって伸縮自在でさあ、使う時には伸ばして。こうして使わないときには縮めてコンパクトに」

彩人に見せ付けるように木賊はその武器を伸び縮みさせる。

「ね、便利でしょ？　これならどこにでも隠し持つておけるってわけ。でもそれより俺が気に入っている点は、人体に叩き込んで皮膚から削^{えぐ}つて抉^{えぐ}ること。ほら、楽しいとは思わないか？！　一撃で仕留めるのではなく、徐々に痛めつけていく快感をさあ！」

彼は彩人が立ち上がるのを待つている。

だが傷つけられた胸の皮膚とぼろぼろになった服とがこすれあつてさらに痛みを生み、なかなか動くことができない。

「チツ……。狩がない奴だなー。お前の等級^{ランク}ってなんだったか。この狩^{ハンター}者の目による判断だとSだつて？　笑わせんなよ！　こういうのってさあ、普通強いはずじゃねえの？　だつてS等級^{ランク}を狩れるってことはよー。超レアな怪物をさ、もうそんなボス級の奴をかれるって言うんだぜ。なのにこんなあっけなく終わらせてたまるかよ」

木賊は倒れている彩人をもう一度、その棘棍棒^{スパインクラブ}で叩きつける。

「ぐっ……」

棘が彩人の体をえぐる。

「どうした？　起きろよ」

足元に倒れている彩人を見下す。　そしてもう一度。

「起きろ」

もう一度。

「起きろつて」

続く。

「起きろつて言つてんだろぅが！」

何度でも。

「さつさと起きろこの野郎……」

彩人が起き上がろうとするまでその手を止めない。

だが何度も棘棍棒で叩いても彩人が起き上がらないので、木賊は手を止めた。

「なんだ終わりか……」

それは諦めたからではない。

もつと卑劣なやり方を思いついてしまったからだった。

そして、笑みを浮かべる。

彼は言った。

「じゃあ、しょうがないなあ。あそこの『女の子』を先に殺しちゃおっか？」

彩人の背筋が凍る。

（やめ、ろ……）

手を伸ばし木賊の足を掴む。彼女の元へは行かせないために。だがその手は簡単に振りほどかれてしまう。

「いいね。いいね。いいね！」

木賊は嘲笑う。

「ずたずたにしてやる。とことんやってやろうじゃねえか。どうせ、てめえらはこの世界にとって異常な存在。必要ねえんだよ！ お前は！ この世界にな！ さっきの狩獵者^{ハンター}から聞いたんだろ修正者^{リバイス}の存在意義を！」

木賊はここに^{アルター}いる改変者である彩人とルネ、いやそれ以外の改変者^{アル}に対しても、見下し、侮辱し、罵倒を浴びせる。

「『消去^{デリート}』だよ！ 改変者^{アルター}はこの世界を元あるべき姿へと『修正』するための役割、すなわち！ 俺らは改変者^{アルター}を消し去るこの世界の救世主だ！ 正義だ！ てめえらこの世界の害は消えちまえばいいんだよ！ あそこにいるのはお前の大切な人か？ はっ。あれはもう人じゃねえだろ」

ルネを侮辱されて彩人は倒れたまま堪えきれない悔しさがあふれ出る。

「『化け物』だ」

彩人も一度それを自分の口から言ってしまったことがある。彼は

炎を操っていた男にむかつてその台詞を言ったのだ。

「あの子に居場所なんてないよ。まあ君もだけど。いい加減わかれよ」

そして止めには。

「お前達がいられる世界はここには無い」

血は今も彩人の服を赤色に染め上げていく。

（ルネ……）

彼女の名前を呼ぼうと思ってももう声を出す力も無い。

「んー、これでも起きあがらないか。じゃあしょうがないな」

言った通りに木賊は彩人の近くから離れていく。

止めなければ。

足を掴んであつちには行かせてはいけない。

その方向には彼の守りたいものがある。

（やめろよ……）

彼はゆっくりとした足取りで行く。

意識を失っているルネの元へ――

「やめろ！」

木賊は足を止めるように叫んできた物のほうを振り返る。

「はあ、はあ……」

彩人は立ち上がる。痛みは決して引いていない。痛みは全身へと衝撃をあたえるように響きつづける。

ルネを傷付けさせない。その一心で彼は立っている。

「いいね。いいね！ いいね！」

木賊はまた彩人に狙いを定める。

「さあ、早く再開しようぜ！ この殺し合い、いや……狩りを楽しもうじゃねえか！」

木賊は棘だらけの武器を構えて走り出した。

（冷静に……冷静にだ……考える、どうしてさっきの防御を突破してきたんだ？）

木賊の右手に持っている棘のついた棒状の武器。

彩人にはそれで破壊されたとは到底思えなかった。

（別に何かある）

だが、やはりわからない。

「さあ守ってみろよ！ 逃げてみるよ！」

木賊の動きから目を離さない。

彩人は地に手を付く。また同じ手で防御に徹するしかなかった。

『氷壁』と『氷角』を生成しようとする。

（？）

スパインクラブ

その時、わずかに棘棍棒を持っていない方の手が瞬時に動いたのを見た。よく見るとそれは光をわずかに反射している粉上のものである。

彩人の氷壁と氷角はそれを含みながら生成された。

「だから無駄だって言ってたんだろ！」

結果は同じだった。

彩人の生成した氷は全てばらばらに崩れ去る。防御壁を突破した

スパインクラブ

木賊は彩人へと棘棍棒が振りかざされる。

（早く何かで、何かで防御を！）

彩人がしたのは闇雲な行為だった。

木賊は鼻で笑った。それがあまりにもひどすぎる行動であり、も

う面白みすらも薄れ、呆れたのだった。

掴んだものはただの焼けてもろくなった木。

耐久性などは全く無い。普通の棒で叩いただけでも簡単に折れてしまうような軟弱な彩人の防具だった。

もう完全に打つ手を失った者が取った見苦しい悪あがき。

だが。

「なにっ！」

その悪あがきは無駄ではなかった。

木賊の持った棘棍棒スパインクラブが彩人のもつそれによつてはじかれたのだ。

「こ……これは……」

自らに危機が迫ったことにより咄嗟に『異常』の力を使った彩人、それがこのような結果になることを初めから知っていたわけではない。

偶然にもそれは起こった。

彩人の持っていた黒く焦げた木の棒は、今はその姿を留めていない。

それはもつと耐久性を備えた、美しい光沢を放つものへ。

「ダイヤモンドか！」

木炭とダイヤモンド。見た目の美しさは天と地ほどの差があるにしても、それを構成している物質は変わらない。

炭素。

同じものからできていても硬度も全く違う。ダイヤモンドとは究極の硬度を誇っているだから。

予想をしていなかった天界に木賊が一瞬たじろぐ。はじかれた棘棍棒インクラブを上にあげた彼の正面はがらあきだ。

起死回生のチャンスが訪れた。

「うおおおおおおおおおつ！」

彩人の持つ今ではダイヤモンドとなったそれは、折れた木の棒の形を留めたままである。折れた部分は最高の硬度を得て、鋭利な先端を作っていた。

彩人は全身を走る痛みを耐えて、渾身の力でその武器を木賊の腹へと付きたてる。

「ぐっ……この……クソがッ！」

木賊は『ダイヤモンドの槍』と化した武器を突き刺された直後、彩人を蹴り飛ばして払いのける。

「ぐおっ！」

傷口の上から蹴り飛ばされた彩人は血に転がる。

「ぐっ……この野郎……やりやがったな……」

（駄目だ……早くしないとまたあいつが……）

木賊へ初めて大きな傷を負わせたと言っても、彩人が今まで受けた積み重ねの方がはるかに上だ。彩人の立て直しよりも木賊の反撃の方が早い。

痛みに苦しんでいてはすぐに反撃が襲いかかってくる。

（どうしたらいい……）

問題が二つ。

一つ目は、木賊が最初に放った一撃目。その時、二人の距離は開いていたはずなのに手の動きと連動したように彩人の体を斜めに切り裂いた。方法は不明。

二つ目は、氷の結晶を防いだと思われる何らかの粉上のもの。

（あの粉が舞っていたのにダイヤモンドへの結晶化はできたのか……。結晶化？ 待てよ……。この力は氷以外にも使うことができたのか……。なら！）

アメンドを帯びた武器にふれてもダイヤモンドとなった木の棒は一撃では破壊されなかった。これで アメンドが触れれば一撃で破壊されるわけではなく、硬度が関係していたことが証明された。

「殺す。殺してやるッ！」

今まで殺しを楽しんでいた木賊が、怒り狂い出す。一心不乱に彩人を目掛けて駆け出した。彼の目からわかることには、もう本気で彩人を殺す気だ。

彩人も両手に焼け焦げた木の棒を掴み、『異常』の力を発動。形の良さは承知できないが『ダイヤモンドの槍』となる。

（このルネから借りた力もいつまでもつかわからない。早々に決着をつけるしかない！）

ミロリーとの戦闘中に突然、彩人自身の『異常』の力で複製したルネの『異常』の力を失われた。それは何の前触れもなく起こった。彩人のそれは不完全な力。他の『異常』の力を借りなければならぬ力。

だからこそ彩人は危機感を持つ。

た奇声へと変わり果てる。

「キヤハハハッハハハハッハハハ！」

体を宙に浮かせるほどの暴風が彩人を吹き飛ばす。

（なにがどうなって……）

彩人の体が地面につく前に次の攻撃は始まっていた。

スパインクラフ
棘棍棒が思いつきり彩人の背中に叩きつけられる。

「ぐあゝ あああつ！」

落下とともにそのまま地面に叩きつける。

木賊は奇怪な笑い声を漏らしている。

「キハハアー。 お前が粉についてに気付いたまでは良かったなあ！

もっとうせ関係ないからネタバラしだあ！」

スパインクラフ
棘棍棒の先端をうつ伏せに倒れた彩人の背中に突きたてる。 木賊はそれに徐々に力を加えていく。

「があああああああッ！」

それに従い、棘の餌食となった背中にさらなる追い討ちをかける。

「この粉にはオレのアmendが纏っているんだよ！ だからお前が氷の結晶化をしようとしても！ 空气中に漂ったそれらが結晶中に入り込み内部から結晶を崩して粉々にしていたんだよ！ それにこちらの方は気付いてなかったただけだな。 特別に教えてやるよ！ オレがアmendを使えるのは右手だけだ！ それによってオレの左手にはアmendの効果を全く受けないのさ！ だからオレはこの左手にはめているブレスレットの持つ『異常』ブラヴィタスをアmendの抵抗を受けずにそのまま発動することができるんだよッ！」

スパインクラフ
木賊は棘棍棒にもっと力を加える。

「ぐう ああつあつ！」

スパインクラフ
背中に棘棍棒を突きつけられた彩人は声が枯れてしまうくらい悲鳴をあげる。

「お前はどうかやら新しい知恵をつけたようだな！ 自分の血を結晶化することで傷口を塞ぐなんてよお！ お前がオレにつけた傷は塞がっていいねんだぞ！ オイ！」

スパインクラブ

棘棍棒を捻り、何度も何度も突き刺すように背中を突く。

彩人はルネの持つ『結合』^{ネクサス}の力が氷の結晶化というわけではないことに気が付いた。それを応用して、血液も凍らせることで傷口からの出血を抑えたまではよかったのだが……。

「がああうああっ！」

「苦しめ！ 苦しめ！ 二度もオレに傷を付けやがって！」

木賊はひたすら彩人を痛めつけることだけに夢中になっている。自身を傷つけられた憎悪を彩人が悲痛な叫び声をあげるのを聞いて快楽で彼に償わせる。

想像を絶する痛みによってもう彩人は何を考えることもこの状況から逃れることさえできない。

彼の叫び声はこの雑木林で響き渡る。この場にいるもう一人の人物の耳にもそれは届いていた。

「彩人！」

木賊が彩人を痛めつけることを中断する。そして、ニヤツと笑った。

「おやおや、起こしちゃったかー」

「早く彩人から離れて！」

ルネは自分が気を失っている間に彩人が見ていることも辛くなってくるような姿をしていることを、ようやく知った。

（ルネ……なのか？）

彩人はおぼろげになった意識の中でルネの声を聞いた。

（駄目だ……こっちへ来るな……）

彼は心の中で思うのが精一杯だった。声は出ない。ルネのほうをかろうじて見ることができた。

「ねえ？ 君の目の前であの子が今の君みたいな状態になったらさあ！ 君はどんな気持ちになるんだろうねえ？！」

木賊がこれほどにまで楽しいことは無いという提案を出した。

（やめる……よ）

「ルネが相手する。だから彩人から早く離れて！」

「あの子の頼みとなつちやしょうがないなあー」

スパインクラフ
棘棍棒が彩人の背からどけられる。

（おい……やめる！ ルネ！）

「いいよ。代わりにお嬢ちゃんて遊んであげるよ！ さあ！ 始めようじゃないか！」

木賊が高らかに笑い、狂気に満ち溢れた彼の目はルネの方に。

（ルネ！）

ルネは氷壁と氷角を生成しようと、体勢を低くして雪の積もった地面に手を付ける。

（それは……駄目だ！）

彩人の心の声はルネに届かない。

「さあ、血祭りだああああ！」

木賊はアメントを纏う粉を撒き散らす。

結果は目に見えている。アメントを纏った粉を氷の結晶中に含んでしまえば、たちまち生成した氷の結晶は形を留めることができずに崩壊する。

彩人はそのことに気付いている。

だが今まで気を失っていたルネはそのことを知らない。

木賊はそれがわかっていて、スパインクラフ
棘棍棒を大きく振りかぶる。

あれが体に当たればどうなるかを彩人は身をもって知らされた。今も早く気を失ってしまいたいと思うほどの激しい痛みに襲われている。

（やめろ おおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおオオオオオオオ
オッ！）

ルネの前に生成された氷は外れることの無い完全な予測通りに無残にもばらばらに破片を飛び散らして砕け散った。

木賊の持つ棘棍棒スパインクラブはルネの華奢な体を横からなぎ払った。

「キャハハッハハハッハハハッハハハッ！ おもしろー！ おもしろーよ！ おもしろーぞ！ こんなにも愉快なのは久しぶりだああああ！」

なぎ払われた音もなく雪の積もった地面へ横たわった。

彼女の美しい銀髪は乱れて雪のように地面にふわりと舞い降り、白い体は赤く染め上げられていく。

（ルネ！ くそッ！ 何でこの体は動かないんだ！ 動けよ！ 動けよ！ ルネが倒れているっていうのに！）

「どうだあ？ 感想は？ いい気分にはなれたか、その少年よう。ハハッ。ちゃんと見ていたよなあ？」

（動けよ！）

木賊はまたルネの元へ近づいていく。

「言っておくがこれが終わりだと思っなよ？ オレは一発で終わらせるなんて一言も言ってないからなあ！ お前みたいに赤く染め上げてやるよ！ 息が止まるくらいに！」

惨劇は止まらない。

（ルネ逃げろ！）

ルネは意識はあるようだが倒れたまま動かない。彩人と同じ状態なのだ。全身を巡る痛みがほかの事をしようとするのを妨げる。

（なんで！ なんだだ！ 早く！ 俺はルネの元に行かなくちゃいけないんだ！ それなのに―――）

白が。

（クソッ……）

銀が。

（駄目だ……）

視界が

（まだ……）

黒く。

（俺……は……）

変わり。

（行か……な……きゃ）

底のない。

（ル……）

深淵の。

（……ネ……）

闇へと。

誘われた。

四章（10） その少年と彼女の名は――

勝てない……。

諦めたい。

いや、そんなバカなことがあるわけが無い！

痛み負けそうになり、そんな情けない感情が生まれる。そのよう
うなことを思ってしまう自分が憎たらしい。

体に力が入らない。体中が痛い。

負けたくない。ルネを守りたい。なのに……。

このまま諦めてしまうような自分が許せない。

彼女の名前を叫んでも届くことは無い。

このままではルネが死ぬ。

いやだ！

そんなことさせてたまるか！

だけどそれができない！

体が言うことを聞いてくれない。

ルネが殺される。

ルネが殺されれば次は俺の番だ。

結局、俺も殺されることになる。

もう。

どうしていいかわからない。

俺は無力だ。

それは元からわかりきっていたことだ。

どうすることもできない。

ちっぽけな一人の少年。

真っ白で何も持っていないただの少年。

俺は頑張ったんじゃないか？

いいじゃないか、これが俺なんだよ。

もう、いいじゃないか、どうだって。

闇に引き釣り込まれていく。
止まらない。

このまま行けば楽になれる。
現実から目を離す。

満たされる、白とは違う黒い無に。

「彩人」

しかし、ある少年の名を呼ぶ声によって暗くなっていく世界は突然明るくなった。

そしてそこは銀色の世界に。

（なんだ？）

誰かが彩人の名前を呼んだ。彼はなぜだか懐かしさを感じる。どこから聞こえたのかはわからない。まだ幼い、少女の声だ。

（誰だろうか？）

今、彼が見ているのはある一つの物語。

その物語にはまだ幼い、白色の少年と銀色の少女が登場する。

「るねあーじえ……」

少年は困った表情で少女と向かい合う。

「ちがう、ちがう」

少女は少年を注意する。

もう一回言うよ、と言って年下の子に何かを教えるような口ぶり
で。

「ルネ・アージェント・ネージュ」

美しい銀色の髪をした少女はそう言った。

「おれ、バカだからさ。そんなに長い名前は覚えられないよ」

少年は情け無い声を漏らす。

すると少女は少し考えて。

「じゃあ、『ルネ』。ルネって呼んで」

彼女は自分の名前をそのように呼んだ。

（これは一体……それにこの女の子は）

彩人の知っている銀色の少女よりずっと幼く見えるその女の子は、とても美しい雪のような白い肌をしている。彼の知っている人とはよく似ている。

（まさか……ルネ？）

「わかったよ。じゃあルネって呼ぶことにする。それなら俺も覚えられるよ」

少年は少女に背顔を見せる。

（それにこっちの少年はまさか……）

「ルネはあなたのことを――」

彩人。

「――って呼ぶね」

少女も一緒に笑った。

（どうということなんだ……これは……！）

彩人にはさっぱりわからない。

今見ているこの光景が一体なんなのかわからない。

白色の少年は銀色の少女のことを『ルネ』と呼んだ。
対して。

銀色の少女は白色の少年のことを『彩人』と呼んだ。

（これは……俺なのか？）

その少年はまだ幼い。おそらく小学生ぐらいだ。

（おかしい。だって俺は――記憶が無いんだぞ？）

八年前に白色に囲まれた病院の一室で目を覚ましたのが最も古い記憶だ。

それに彼はこの少女と似た少女に、ついこの前会ったのが初めてだったはず。

（まさかこれは……）

八年前の記憶。

違う場面へと移る。

「諦めない」

少年が言う。

諦めない。その言葉が今の彩人の胸に突き刺さる。

「でも……ルネのことは……」

少女は少年を止めようとしている。

「俺にはその力がある」

彩人には少年が今から何をしようとしているのかはわからないが、これだけはわかる。

少年は少女を守ろうとしている。

（力？）

彼は少年の台詞に似たようなことを最近聞いていた。

（そうだ……）

その言葉を彩人に教えてあげたのは————日曜日。彼が出会った銀色の少女。

「たぶん『今』の彩人にはわからないと思うからさ、ルネが変なことと言っているように聞こえると思うけど聞いてくれたらうれしい」

（そうか……）

「また巻き込んだじゃって、ごめん。たぶんルネも次に目が覚めたら『今』のルネではなくなると思うから」

（だからあの時……）

「それと、彩人には『世界を変える力』がある」

（教えてくれたんだ）

「だから諦めちゃ駄目だよ」

（会っていたんだ。俺たちは八年前に一度。そしてあの時、俺たちは再会したんだ）

八年前の記憶喪失。

ほとんど無に等しい記憶の残滓。

そしてそれらを繋ぐもの、『結合』^{ネクサス}。

今までばらばらだったそれらが一つ一つのパズルのピースのように繋がっていくことでわずかながらの記憶を紡ぎだす。

（ルネ）

彩人は銀色の少女の名前を呼ぶ。

（俺が記憶を無くしたわけもそういうことだったってわけか……）

残滓を寄せ集めてできた記憶の『結晶』はほんのわずかなものでしかない。残りはこれで最後となる。

「だったらその力を俺は使う」

少年の意志は強い。

「この世界がルネを邪魔者なんかにするようなら、何を犠牲にしてもおれは―――」

白色の少年はここに告げる。

「世界を変える」

そこで場面は終わった。

（そうだ……）

なにを俺は諦めているんだ、と彩人は自分に怒鳴りつけた。

『やっと変わった？ その心』

幼い一人の少年の声がはつきりと聞こえる。彩人に語りかけているようだ。

「ああ、変わった」

彩人はいつしか白一色に染まった空間にいた。そこにいるのは、彩人と一人の少年。彼らはお互いの目を見て向かい合っている。

『それは君自身がやりたいと思ったこと、だね？』

少年は彩人の心を読んでいるように話す。

「そうだ。俺はルネを守りたい」

『ならこの力、アルタリテイオ「世界を変える力」を君に託すよ』

少年は言う。

変化とは、元ある状態から別の状態へと変えること。それは、必ずしも改善を意味するのではない。変える、ということは異常化させることだ。変化の末に訪れるのは全ての崩壊だつてあり得ないことではない。

『だから、この力がもたらす物は、君にとって良い物でもあり、悪い物でもある。そして全ては、君がこれをどう使うにかかっている。かつて、おれは失敗した。世界を変えることができなかったんだ』

少年は小さな握りこぶしを彩人の前に出す。

『君もまたあの時のおれと同じような状況にいる。君の望む世界のためにこの力を託したい。だから受け取ってくれ！ 君がこの世界の改変を望むなら！ 誰にも予想できない、全ての法則から外れたこの『異常』を。そして自分の大切な人を守るために世界を変える！』

彩人は迷わない。少年の小さな握りこぶしに彼も握りこぶしを当てる。

すると、白い閃光が迸る。

それは『異常』が起こした短い奇跡に終わりを告げるものだった。

「おれがあの時できなかったことをやってくれ」

少年は笑顔で彩人を見送る。

『俺^{あやし}よ』

四章（１１） 世界を変える力へアルタラティオ

「お前……」

ルネに歩み寄ろうとしていた木賊が後ろを向く。彼は彩人に何らかの変化があつたのを感じる。それは凄まじいもの。

この世界の『異常』な存在。

「……木賊って言ったな……」

「フツ……キヤハハハハツハ！ そうか！ まだ立てたか！ お前は本当の化け物だ！ だが残念だ、これでこの女の子が赤く染まつていくのを見せることができると思つたのによう！」

彩人は木賊をまっすぐ見据える。

「この世界に居場所は無いって言つたよな？ アルター 改变者はこの世界にとつて消されなければいけない存在だと！」

ああん？ と木賊は首をかしげ、彩人の言っていることを理解すると。

「ああ！ アルター お前ら改变者がこの世界にとっては必要の無い存在で、存在することすらおかしいって話のことか？ ようやく理解できたか？ そうだよ、お前達はこの世界では生きられない。生きてはいけないんだよ！ ここに転がっているこのお前の大切にしている奴もなあ！ いられる世界なんてのはどこにもねえんだよ！」

「そうか……」

彩人は一歩一歩と進み始める。

「お前らがそう言うように本当にいられる世界がないんだつたとして……」

（ルネは俺に言った。そして俺もあいつ言った。俺にはその力があると！）

そして彩人は告げる。

白色の少年——白上彩人がかつてそう告げたように。

「だったら俺がこの世界を変えてやる！ たとえ俺が他に大切なものを失くしてしまったとしても！ ルネも俺も！ 存在することが許される、俺たちの世界にな！」

彩人はこの世界の『異常』を発動する。空中を舞う雪を結合して『氷の剣』を右手に。彼の傷口から流れ出す血液も結晶化。
「行くぞ！」

彩人の右手に『氷の剣』を携える。
「ハッ、バカじゃねえのか？ なにをほざくかと思えばそんなことか？！ そういうのはオレを倒してからにしやがれ！」

木賊が彩人の元へと走り出す。

「それにお前の使う氷の結晶化はオレにはもう通用しねえってわかってんだろが！ いいさ！ これで終わりにしてやる！ お前の最後だ！」

『異常』が作り出した『氷の剣』とアメンドを纏った棘棍棒^{スパインクラブ}。
アルター^{リバイス} 改変者と修正者。

『世界を変える存在』と『世界を修復する存在』。

二つの存在がぶつかり合う。

「ネタがばれてても『こいつ』の対処法は無い！」

木賊はアメンドの纏った粉を撒き散らす。

「ルネ……」

今から彩人がしようとしていることは、かつての自分が八年前に使った『異常』^{フラウイタス}を発動すること。それは彩人の中に眠る『世界を変える力』。今まで眠っていたその力を、枷を外して解放する。

（お前はあの時、俺を守って俺のことを忘れた。そして『前』のルネは消えたんだ。『前』の白上彩人のことはもう憶えていない。もう決して思い出すことは無いんだ。）

彩人は内なる力に代価を注ぎ込む。

（俺はルネ…… お前のことをまだわずかながら覚えていた。やっと…… やっと思ひ出したんだ。でも俺はお前のことを忘れなくてはな

らない)

今使っている力はルネの持つ『結合』ネクスス。

それを使用するということは代償を伴うということだ。より大きな力を引き出せば引き出すほど代償は膨れ上がることになって構わない。

(もう俺は『前』の白上彩人じゃない。お前がその時の記憶を失つてでも俺を守ったって言うなら、次は俺が。俺が、たとえこの記憶を犠牲にしても、『今』のルネを守ってやる！)

彩人はかつての銀色の少女に別れを告げる。

そして彼の持つ『世界を変える力』アルタラティオがこの世界に『異常』を引き起こす。

「なぜだ！ なぜアメンドの効果が働かない！」

木賊がその時起こった『異常』に呆然とした。空気中には舞ったアメンドの粉があるにもかかわらず、彩人の周囲で『結晶化』が巻き起こる。

彩人の複製は完全なものではない。

だがしかし、それは決して劣っているという意味ではないのである。

『異常』がさらに『異常』と化したもの。

その現象は世界の常識も法則も覆す。だからこそ、それは『異常』なのだ。

彩人の持つその『世界を変える力』はルネの持つ『異常』ブラウイタスをさらに『異常』へと進化させる。

「アルタラティオ
変化！」

彩人は自分のうちに秘めたその力を氷剣に注ぎ込む。
変える。

銀へ。

白へ。

白銀の剣。

彩人の持つ氷剣は、透明の氷という物質の枠組みから外れ、全く別の物質へと豹変する。その物質はこの世界には存在しないもの。元々この世界に無かった存在。

だからこそ。

それを。

この世界の者達はそれが何なのか説明できない。だから『フラウヴィタス異常』と呼ぶしかないのだ。

『元』氷剣だったそれは一撃では壊れない。

普通ではありえない、考えられないこと。

だがそれはダイヤモンドよりも固く、鋭く、美しく、白銀の輝きを放つ――

「うおおおおおおお！」

白銀の剣を見た目だけで説明しようならば、光沢を帯びた鋼のようなもの。刃渡りは氷剣の長さを上回り、彩人の体の半分はある。

そして、厚さ、大きさもそれに応じて増している。

だが、彩人の支えることのできる重量。

全ては彩人の力によって変えられたもの。それは自然と彼に適應するように変化をし続ける。

「――ッ！」

白銀の剣は空气中に自由落下していく雪を引き寄せる。それらは白銀の剣と同じ物質と思われる光沢を纏った帯状となる。さらに帯状を形成したそれらは白銀の剣を取り纏い始める。

――放つ――

白銀の帯は斬撃と化す。

「ぐっ……」

木賊は斬撃を棘棍棒スパインクラブで受け止めようとするが、ずりずりと後ろへ追いやられる。アメンドを纏っているはずなのに、相殺させることができない。

いや、相殺は確かにしているのだ。

ただその速度があまりにも追いついていないから。その異常と渡り合えるほどの力を木賊は出せていないのだ。

「クソがッ！」

木賊は棘棍棒スパインクラブを斜めに傾けることで白銀の帯による斬撃を何とか横に受け流す。横に反れた斬撃はあつという間に雲散霧消した。

彼は倒れ掛かりそうになった体を棘棍棒スパインクラブを地面に突きたてることで支える。

対する彩人は白銀の剣を構えなおす。

左肩を打たれているため左腕は使えない。だから右手一本で振るっているのだが、苦は無く振ることができる。

「これが……変化……」

アルタラティオ
ブラウイタス
この世界の異常。

ルミナティオ

『複製』

ネクサス

『結合』

アルタラティオ

『変化』

ブラウイタス

三つの異常が統合され、さらに異常と化して創造されたその剣。迂闊に触ってもいいものはわからないが、彼は剣を撫でてみようとしたところ……。

バチッ。

白銀の剣は彩人の手を弾いた。彼は電流が走ったような痛みを感じる。

剣は絶えず変化し続けている。一目では判断しづらいが、よく見

ると形を一定に保っていないのが確認できる。

「それが……ランクS等級か……。最も世界を変えうる力、納得だ……。こんなものがこの世界に存在していたら、なにが起こるか検討がつかない。まさしくこの世界から消さなければいけない存在だ」

木賊は鼻を鳴らして笑う。

「ようやくラスボスつぼくなってきたなあ！ 少年よお！ これで殺しがいが増したってわけだ。そして俺も本気を出せるってことだからな」

彼は立ち上がって左手に通したブレスレットを彩人に見せ付ける。
「リバイス ブラウイタス修正者は異常をこの世界から消滅させるといふ世界からの使命を受けた者だ。だがな、そんなものを素直に受け入れているのは神話的な物語の信者どもだけ。たとえアルター改变者であっても、リバイス修正者であっても二大勢力としてきっちり分けられちゃいねえんだよ。OASPの中にだって二つの存在がともに活動している。狩ハンター獵者どもも同じだ」

つまり、と。

「リバイス アルター修正者だからリバイス改变者の力を使つてはいけなんなんて決まりはない。オレは特別一部だけがリバイス修正者の力を持っている。そのおかげで物に宿^{ブラウイタス}った異常なら右手で自由に操れる」

木賊のブレスレットが^{ブラウイタス}異常を発動する。

それは周囲に風を巻き起こす。

「こいつがオレの専売特許だ。さあ始めようか？」

ああ、と彩人は短く答えて。

「いつでも準備はできているさ」

剣の切っ先を木賊に向ける。

「行くぞ！！」

彩人は白銀の剣を振り下ろす。そして斬撃を生む。

木賊はそれをさきほど同じようにア^{スパインクラフ}メンドを纏った棘棍棒で受け

流しながら一気に彩人の懐へ入ろうとする。

（これが一撃目に使った異常か！）
ブラヴィタス

スパイククラブ
棘棍棒を持っていない手は風を渦として生み出す。その風は蜜での濃い、触れれば切り裂かれる風。

彩人は足で地を蹴って横に避ける。

「甘いなあ」

「ッ——！」

突如、風も彩人が避けて方向に横へ伸びた。本来形としては現れないはずの風が、一定の形を成そうとして密になっている。

彩人は慌てて白銀の剣を自分の前へ持つてくる。

だが風に固定された形はない。

突風で彩人の足はふわりと浮き、剣を避けて彼にいくつもの切り傷を作る。

この間にも木賊は迫り来る。

木賊は再び左手を振りかざし、そして剣を振り下ろすようにまたその手も振り下ろされた。

風による斬撃。

彩人も白銀の斬撃を放って迎え撃つ。

二つの斬撃の衝突。

「チツ……」

風の斬撃は白銀の斬撃に勝らなかった。衝突の末に打ち勝った銀色の斬撃が木賊へと向かっていく。

左手から生み出した風を推進力として利用して斬撃を交わす。すぐさま次の攻撃へ移る。木賊の動きは彩人の動きとは別物だ。やはり元々の個体としてのステータスがここに響いてくる。

彩人が逃げようとしても、木賊は追いつくのは確実だった。

「お前、片腕しか使えないんだろ？」

スパイククラブ
棘棍棒と白銀の剣が羽音を鳴らして衝突する。

これで彩人はもう防御を取れない。そこへ容赦なく攻撃を叩き込もうとする。

だが。

その前に白銀の剣が棘棍棒スパインクラブを真二つに切断した。

やむを得ず木賊は左手を使って白銀の剣を防ごうとする。木賊のブレスレット持つ異常の力を全開にして。

二つの異常フラヴィタスの激突。

「くっ……」

「……」

お互いに後方へ飛ばされた。またも二人の間に空間ができる。

彩人が体勢を立て直そうとしたその時――

消える。

白銀の剣が消滅していく。

（ここで限界だつて?!）

彩人の持つ『複製』ルミナティオ 完全に相手の異常を完璧に複製できるわけではない。いつかは限界が来て、消滅してしまう。

まずい。

彩人は焦る。このまま消えてしまえば彩人は力を失う。元々は無力なただの少年。だが他人の力を借りることで、初めて戦うことが可能になるのだ。

それを失ってしまえばまた無力になる。すなはち、木賊の攻撃から身を守る術を失くすということ。

「おやおや?」

木賊はそのことに気付いてしまった。

「そうか。そうだったな。ルミナティオ複製には限界があっただったな。そいつが消えてしまえばお前も終わりだ」

どうする。

彩人は必死で思考を巡らせる。このままではいけない。また使えるようにするにはルネの手助けがいる。

（待てよ……奴の使っている異常は複製できないのか？）
フラウイタス

今、木賊が使っているのは異常だ。フラウイタスアメンドの力は複製できなくとも、そちらの方だったら可能性は十分ある。

しかし、それは誤りだ。

彩人が複製を行う時、彼はルネの手を触って複製を発動した。ルミナティオ現在、木賊の左手は風を纏ったままだ。そこへむやみに触れようとするならば、逆に手を切り落とされるのが落ちだ。

やはりルネの力を借りるしかない。

そう思った彩人は視線だけを移動させてルネの位置を確認しようとする。

（——— な！）

彩人の右方。彼が見たのは、ゆっくりと体を起こそうとするルネの姿だった。

両手を地に着き、のっそりと立ち上がる。

「さあ、もう終わりかな？」

幸い木賊はまだそのことに気付いていない。ルネに再び襲い掛かるということは起こらない。

（今すぐルネの元へ行かないと！）

もう一回だけ持つてくれ、と願い消えかかっている白銀の剣を持つて木賊へと走り出す。

斬撃を放つ。

木賊はもちろんそれを防ごうとした。

その間に彩人はルネの元へ一気に駆け寄る。

「——— 起きていやがったのかッ！」

彩人が斬撃を放った後、次なる攻撃放たずに違う方向に走り出したのに、木賊が気付いた時にはもう彼はルネの手を取っていた。

「ルネ、大丈夫か」

た後には、風を纏った手も使って白銀の剣を押さえ込もうとする。

とある少年はかつて失敗した。

大切な人を守りきることができなかった。

もうその少年はこの世界にはいない。

そして、その少年が守りたかった大切な人ももうこの世界にはいない。

彼らは二人ともいなくなったのだ、この世界から。

だが、彼らは生まれ変わった。

『次』の自分たちとして。

彼らは『前』の自分たちのことを知らない。憶えていない。

それを思い出すことはもう二度と叶わないだろう。

彼らはそれでも『今』を生きる。

しかし世界はそれを拒もうと、彼らを排除しようとした。

彼らはこの世界で生きられない。

ならば、どうすればいいか？

そのようなことはもう既に——— 決まっ
てい
る。

「——— この世界を変えてやるッ！」

世界は。

変わる。

白色と銀色が混ざった。

白銀の世界に。

四章（11） 世界を変える力へアルタラティオ（後書き）

四章終了です！

終章（１） 異常ヘブラヴィタス

雑木林が静寂に包まれる。もはやこの場所は一週間前とは、全くの別物となってしまうている。

木々は焼かれ。

地面は氷が覆い。

暴風により、あらゆるものがなぎ倒されては、飛ばされて。

この地を踏み荒らした者達によって、雑木林にぽっかりと大きな傷跡を残した。

その中心でたたずむ一人の少年——白上彩人。

「終わったのか……？」

白銀の剣を地面に突き刺してバランスを保つ。今にも膝から崩れ落ちて倒れそうだった。

木賊は倒れている。

「S等級^{ランク}か……」

歯を食いしばって起きようとするが、体が地面から離れない。もう腕も足も体重を支えるだけの力が残されていなかった。

「チッ……こんなことで終わるのかよ……」

意地でも起き上がろうとしても無理だった。

さらにもう彼は異常^{ヘブラヴィタス}の力を失ったため、風を巻き起こすことはできない。

彼の左腕に通っていたブレスレットは雪の積もった地面に落ちている。今は輪の形ではない。白銀の剣がこの異常^{ヘブラヴィタス}を宿したブレスレットを破壊したのだ。

彼に残された力は右腕のアメント。

しかし、アメントは相手を攻撃することも、自分の傷を癒すこともできない。それは世界の異常^{ヘブラヴィタス}を消滅させる存在。世界への影響力は無として生み出された力。

木賊は動けない。攻撃も行えない。

つまり。

「終わったんだ……。これで……終わったんだ」

ミロリーとの待ち合わせの時刻からは一時間経っているか経っていないかぐらいだろう。それでも彩人にはとても長い時間を感じた。

「彩人やったね……」

ルネは後ろで尻について座り込んでいた。彼女も棘棍棒スパインクラブによる深手を負っている。

「ああ。やったんだ。俺たちはやったんだ！ この異常で！」
ブラウイタス

彩人は白銀の剣を突き上げて、見上げる。

光り輝く。

美しき。

剣。

だがそれはこの世界の『異常』なのだ。

「――！」

だから、なにが起こるかなど誰にもわからない。

「お……い」

白銀の剣は突然その輝きを強め始めた。そしてその剣を掲げた彩人を中心にして光の円は広がる。

光は天へと垂直に伸びてサーチライトのごとく夜の天を照らす。

「どう……なつてんだ？」

白銀の剣から発せられる光はただの光とはまた異なる。光が意味するのは異常ブラウイタスの発動状態。

「駄目だ……このままじゃ」

現在使っている彩人の異常は、ブラウイタス『複製』ルミナティオ『結合』ネクス『変化』アルタフティオの三つ

が合わさったもの。その中でも白銀の剣の基礎を作っているのは、ネクスルネから借りている『結合』ネクス。

結合には使用者にある代償を伴わせる。

「くっ……頭が……」

頭が割れるような痛みが彩人を襲う。彼は今、フラウイタス異常によって頭の中を強制的にいじられている状態なのだ。

「あ、彩人?!」

ルネが突然に彩人の身に起こった出来事に戸惑う。

このままではいけない。

彼女はそう思って傷だらけの体を前へ前へと運んでいき、彩人の元へと近づこうとする。

「来るな……」

しかし彩人はルネの動きを静止させようとする。
だめなのだ。

このままルネが近づいてくれば。

「お前も巻き込まれる……」

彩人は必死にその異常の発動を解除しようと試みるが、全くもって使用者の言う事を聞かない。

（なんで離れないんだ、この剣は……!）

発動が止められないならば、剣を手放してしまえばいいとは、彩人も思った。けれどもそれさえも不可能なのだつた。

剣が手から離れない。というよりは手が剣を放そうとしない。

まるで勝手に自身の体が動かされているように。

フラウイタス体が異常に乗っ取られてしまったかのように。

人知を超えた力はその使用者の意思に背く。

暴走。

元々力も持たない彩人が『ルミナティオ複製』によって他人の力を自身の体に
取り組む。さらに『アルタラフティオ変化』を使ったことにより、その力は複製を対
象とした使用者の持つ本来の姿、性質を変化させた。

オリジナル本物から作られた偽物。レプリカそれに独自の改変を加えたものは元々の
所有者のものでは決して同一ではない。

変化とは修理、改善だけを意味するのではない。

時にはそれをさらに改悪させてしまうことだってあるのだ。その末に起こる現象が『異常』。

「止まれ、よ……、ちくしょ……う」

彩人は銃弾で撃たれている左肩を無理やり持ち上げて、左の手で白銀の剣を押さえ込もうとするが容易く弾かれてしまう。体力に限界が来ている彼は剣を地面に突き刺す。異常の発動は続いている。

（このままじゃ……まずい）

頭をトンカチで叩かれているような痛みが、ガンガン、と響く。その痛みはやがて彩人の意識をまた闇へと沈み込ませようとしている。

そしてこの間にも力の代償は払われ続けている。

（駄目だ……まったく言うことを聞かねえ……）

成すべがない。

初めからだ。

元々この力の完全な制御方法など、どこにもありはしなかったのだ。

そんな危険な力を使ってまでも彩人は守りたいもののために世界を変えようとした。現に、ミロリーと木賊を倒し、ルネを狙う者達から守った。

だがその結果、ルネの代わりに彩人が災厄を負うことになる。

（俺は守れたのかな？）

彼は自身の身に降りかかった災厄を仕方がない、と受け入れようとしていた。

なぜなら彼は元は空虚でちっぽけな白色な少年だったから。

（はは……、俺は自分のやりたいと思ったことができたのかな……）

？ たとえこのまま俺が異常に飲み込まれてどうなるかはわからないけど。それでも、何か。何かを俺は……）

朦朧としてきた意識の中、彼はむしろ幸せだった。
だってそれは。

（やり遂げた気がするんだ。俺の人生が真っ白になって以来、何をしようとも、何かをやり遂げようともしなかった俺が、やり遂げたんだ）

さらにそれは他人の為にやったことだ。

自分が大切だと思った者を守ったこと。彼にとってはとても大きな出来事なのだった。

だからこそ。

もし、このまま人生がここで終わっただとしても。

悔いは……ない。

「彩人！ ルネ！」

なぜだか遠くのほうで彼らを呼ぶ声が聞こえたような気がした。

（……藍さん？）

彩人が記憶を無くしてから、八年間ずっと彼の面倒を見続けてきてくれた人。あの場所は何よりの救いだった。同じ年が二人もいて仲良くできて。彼らも自分と似たもの同士で。

あそこが自分たちの——居場所。

「帰りたい」

彩人の切なる願い。彼らのことを思い出すとやはりあの場所に帰りたくなってしまった。新しく加わったルネも連れて一緒に。そのために戦った。こんな危険な力まで使って居場所を守りたかった。

けれども彩人にはどうすることもできない。
フラウイタス
彼には異常の暴走は止められない。

「だいじょうぶだよ」

安らかな声が彼に安堵を与える。

そして彼はもう一度、だいじょうぶ、と耳元で囁かれた。彼は朦朧とした意識の中でそのささやきをわずかに聞く。

その声の主は雪のようにやわらかく彩人をそっと抱きしめる。だが雪のようでも冷たさはまるで感じられない。

とても温かい。

その温もりは彩人の不安も悲しみも、異常も全てを鎮めてくれたのだった。



「百緑！ 早くこの子達に治療を！」

藍が倒れている彩人とルネに駆け寄る。彼らの姿はとても悲惨だった。服はぼろぼろに引き裂かれて、そこからむき出しになった血まみれの皮膚が見える。とにかく体中が傷だらけのとんでもない外傷だった。それを見た藍は焦り狂い、すぐさま百緑に助けを求める。「そう焦るな。フェルメール。今すぐこの二人に治療を。できるだけ外傷の大きい白上彩人を優先しろ。治療能力は最大で構わない」（誰だろう？）

彩人にとって聞き慣れない人の声が藍の声と混じっていることに気付く。

「藍さん、この人たちは……」

「——っ！ 目が覚めたの？ しゃべらなくていいわ、いから安静にしている。すぐに治療してもらうから」

藍は彩人の血まみれの手を握る。その手はひどく冷たかった。

「あつたかい……」

藍の手の暖かさが彩人へと伝わる。

フェルメールが彩人の元に来るとしゃがみこんで彼女の異常による治療を行う。青い光が彩人の全身を包む。すると傷口が少しずつだが塞がっていくのが見てわかる。

「とりあえず応急処置程度まで済んだら彼女の治癒も並行で行え。

あともう少しで仕事も終わる。もう少しの辛抱だ」

百緑がそう言うフェルメールは無言で頷いた。フェルメールの
瞼が幾度も落ちかける。だがそれを彼女は必死に閉じそうになっ
てもまた開くという繰り返しをしながら治療をし続ける。

そして百緑は別の人物にも用があり、そちらの元へと行く。

「ひどい様だな」

「百緑、か……」

彼の顔見た木賊が消えかかっているろうそくのような声で言った。
「第六行動部隊隊長、木賊。お前のやったことは任務の範疇をはる
かに超えている。さらには一般人への危害と来た。もちろん覚悟は
できているのだろうな？」

「覚悟、か。ハッ、十分楽しんだよ、だが……まだこいつらを殺す
までは――……」

木賊はそこで意識を失う。

百緑は細目でその様子を上から眺める。

「君の役割は終わったよ……」

気を失っている彼に告げて、手持ちの鎖で体を拘束した。念には
念を、と木賊を完全に動けない状態にしてから彩人とルネの治療が
行われている位置に戻る。

「彩人……大丈夫？」

先ほどまで彩人と一緒に気を失っていたルネも、同じく意識を取
り戻し隣に寝そべって治療を受けている彩人に話しかける。

「ああ、大丈夫……」

彩人は片手でひらひらと振ってみせる。

「彩人のバカ。大丈夫なはずがないよ……バカ」

「二回も言うたって……」

軽い傷は治ってきたがまだ肩と腹と背の傷が深く治療にかなり時
間がかかる。

「フェルメール、まだいけるか？」

「はい……」

彩人は気になっていることが山ほどあった。それを察したのか、彩人が話さないように百緑のほうから話し始めた。

「最初に言っておこう。僕たちはOASPだ。おそらくもうそれでわかってしまっただろうからな」

「な——」

OASPとはさつきまで彩人とルネを殺そうとしていた木賊が所属する団体である。この世界の異常による問題を解決する組織。彼らが木賊と同じ団体だと知り、彩人に緊張が走る。

「そう固くならないでくれると助かるかな。僕たちには本来狩獵者ハンターの確保・拘束・連行という任務が任されていた。あそこにいる色見支部第六行動部隊隊長である木賊は、その任務の範疇を超えた行為に及び、さらに一般人に危害を与えるという罪を犯した。それ相應の処罰が下されることになるだろう。君たちに危害が及んだことについては深く謝罪したい」

百緑が頭を下げる。ついでにフェルメールもわずかに頭を下げた。

「彩人。とりあえず、もう安心していいのよ。もうあなた達を傷つける者はどこのもない」

藍が彩人とルネに語りかける。

「って……どうして藍さんがここにいるの?! ——っ痛い……」

大声を出そうとしたために傷口が悲鳴を上げる。止む終えず黙り込んでしまう。

「まあ……それにはちよつと、いろいろと話さなくちゃならないことがあるのよ……。つまりは隠しごとをしていた、ということになるわね……」

申し訳なさそうな顔をして彩人とルネの手を握り、ごめんね、と謝った。

「あなたたちは十分頑張ったのよ、本当に。二人とももう寝なさい。私たちが新代荘まで運んでおくから。それで起きたら話をしましょう」

彩人もルネも頷く。

（本当に全てが終わったんだな……）

狩獵者^{ハンター}による襲撃と木賊の奇行によるこの一連の出来事は、ようやく終わりを告げたのだ。

だからもう安心して休んでもいい。

二人とも安心してしまふと急に疲れが出てきたのか、自然と眠気に誘われていく。

（やったな、ルネ。帰れるな、二人で俺たちのいられる世界に）

彼らはそのまま半日寝続けたのだった。

終章（2） 一部の者達が知る結末

『それでどうするかは決まったんだね？』

「ええ……」

藍は電話の向こうの優しい声に答える。通話の相手はOASPの百緑だった。

「もう家計も本当にやばくなって来たのよ……まったく……。だから収入のいいそっちの仕事に戻るしかないのよ、やっぱり」

『君は、三人もの子供を高校生になるまで母親の代わりをしてきたわけだからしょうがないさ。それにこれからはもう一人増えるしね』
「ルネはこちらで預かっていいのね？」

『ああ構わないよ』

「色々と問題があるんじゃないの？ 来訪者^{ビシター}を匿うということになるわよ。組織的にはかなりヤバイと思うんだけど……」

『はあ……。そういうことは言うてはだめだよ。組織としてはそのことについては秘密にしてあるんだから。八年前から引き続き彩人くんの方もね。まあ、シエンナにはさすがに伝えただけ』
「彼女はあなたと違って信用があるから何の問題もないわよ」

『ひどいなー。今回って僕はかなり「正義」っぽく動いたつもりなんだけど』

「そのことについては……ちつ……感謝するわ……。たぶん彩人だけじゃない。幸祐や若葉にとってもその方がよかったと思っているから。それから若葉のことについても感謝しとくわ」

『若葉ちゃんは無事に退院できたかな？』

「おかげさまで。今日皆で若葉を迎えに行ってきたところよ。医者
の反応もすごかったわ。奇跡でも起こったんじゃないか、なんて言
っていたわよ。奇跡ではないのだけれど」

『それはよかったね。フェルメールも相当頑張ってくれたからなあ
……もう帰ってから今でもずっと寝っぱなしだよ』

「あの子はどういう子なの？」

アシスタント

「一言で言っちゃえば僕の助手だね。そりやもう完全な治療専門の。あの子は異常を使うと同時に睡眠を取る必要があつてね。転換系だコンバートから。あの子はかなり頑張ってくれたよ、本当に。あの子も「元」僕たちの家で君が預かる？」

「もう勘弁して……それにその子はあなたが預かっているんじゃないの？」

「ああ、大変だよ。君は四人も育てるなんて本当に感心する。それでなんて説明したんだ？ 彼らに君のことを」

「ある程度のことは仕方なく話したわ。できれば関わって欲しくなかったのに。彩人にもルネにも、この事件のこととか異常のこととかは、忘れたことにしといてもらったわ。それにもう関わらないようにって念も押しておいた。それでいいかしら？」

「この事件についてのことだね？ ああいいよ。話せるところまでだけ」

「今回の事件は一体なんだったの？」

ハンター

「今回の事件を引き起こしたのは狩猟者で、彼らの目的は彼女の捕獲で間違いないようだ。それ以外の目的があつたという線はないと考えてよさそうだよ」

「それで？」

ハンター

「狩猟者を裏で引いていた人物もしくは組織は判明していない。ミロリーという狩猟者はあれからいつこうに口を割らない、というよりは知らないと答えていると言ったほうがいいかな」

「知らない？」

藍は繭を纏める。

ハンター

「狩猟者というのは本来、誰かが雇うことによって動く人物もしくは組織のことである。まれに雇われずに自身で動くこともあるのだが、あくまでも希でしかない。実際は雇われるのが普通だ。そして依頼人が不明というのはいささかおかしい話である。」

「OASPの方では調査を続けるつもりだ。それに今回動いていた

狩獵者はそのグループだけではなかった。今はそいつらの残党狩りでまだ仕事は続いているよ」

「この色見地域に他にもいたってどういうの？」

「ああ、君の住んでいる付近にはそのグループだけだったが色見市全体で見ると他にも確認できたグループだけで九つ。僕たちの到着が遅れたのもそっちの対処に手間を取らされていたせいだ。まるOASPの目を欺くための囲みたいに思えるけど、あれは果たしてただの広範囲搜索だったのか、そうでないのか」

「あなたは裏があると考えているのね？」

「まあね。ともあれ事件は平和的に治まったと思うよ？ 彼らも再会を果たせたことだし。まあ彼らはそれが再会だということもわからないだろうけど」

「あの子達にとって憶えていた方が幸せか、それとも忘れて新しくやり直す方が幸せか。だけど選択肢はもうないのよね」

これで話も終わりだろう、と藍は思ったのだがそこへ百緑があることを持ち出してきたせいで、話は終わらなかった。

「あともう一つ気になったことがあるんだよね。君も気付いたかな？」

「なにがよ？」

聞き返しに百緑が答えるまでにわずかだが間が生じた。

「ルネ・アージェント・ネージュが身に宿している異常についてだよ」

「『結合』のこと？」

「君はあの等級をどう見る？」

「どう……って、狩獵者たちの目ではB等級だったんでしょ？ —

——まさか……」

「そうそのまさかじゃないかと僕は思ってたね。あの時、白上彩人は確かにまた異常を暴走させていたはずだ。そしてその結末にまた同

じ結末を呼ぶものだと思つていたのに、違つているだろう?」

「彩人が『あれ』を生み出さずに、記憶を全て失うこともなかったということ?」

「ああそつだ。あの時の暴走を止めたのは間違いなく彼自身ではないようにしか見えなかった。暴走が止まったのは光の柱の中にルネ・アージエント・ネージュが入つていつた直後だ。つまり、暴走を止めたのがもし彼女なのだったとしたら……」

「他の異常^{フラウイタス}への干渉、つて言いたいのか?」

「……。そつだとしたら今回のことも、八年前のことも一大事だよね。一点にS等級^{ランク}が揃うなんて、ただごとじゃないよ。もしかしたら彼らはいずれ改変者^{アルター}として……」

「させないわよ」

百緑の言葉を遮るように言う。

「ふつ、言つと思つた。光が消えてからは、彼らは仲良く抱き合つている状態だったけどね。若いつていいなあ。あの頃に戻りたいよ」
「変な言い方をしないで! あの子達は命がけだったのよ。それにあのまま二人とも倒れたのだし」

「ともあれ今回の出来事はそういうことだ。それで君については助^{アシス}手^{タント}という扱いで働くことになるだろうが、単独の仕事もできるかもしれない。君の意思はシェンナに直接しておくとして、他に何かあるかい?」

「もういいわ。明日の準備をしなくちゃいけないし」

「ふーん。何か楽しいことをやるみたいだね。じゃあ来週中には一度支部の方に顔を出すように」

「わかつた」

「久しぶりに会えてうれしかったよ」

「私は最悪だったわ」

二人はそこで受話器を置いた。

終章（3） 銀色の少女の歓迎会

週末がやってきて今日は日曜日。

只今の時刻は午後七時。

場所は『〇〇一号室』。

新代荘の面々は一つの丸テーブルを囲っている。

今日の日中では、藍は朝から買い物が忙しそうにしていた。若葉と幸祐はゆつくりと部屋で休み、彩人はというとルネとまた町に出かけていた。

また新代荘の一室に全員が集合して前々から予定されていた催し物がようやくここにて開催される。

「じゃあ、これから『ルネ歓迎会』をはじめます！」

新代荘家主の藍が代表として高らかに声をあげた。彩人、幸祐、若葉も「おめでとう」「改めてよろしく」などと言い、盛大な拍手をルネに送る。

「えっ?! えっ?!」

ルネが慌てた様子でキョロキョロと皆の顔を見る。

「歓迎会っていうのはこういうものなんだよ」

「そうそう、めっちゃくちや盛り上げなくちゃね。だって歓迎会は一度しかできないんだし！」

「ほら、ルネ」

彩人が、状況にどう対応すればいいのか困惑しているルネにそつと耳打ちをして教えてあげる。

「え、えっと……きよれからよろしくお願いしましゅー！」

あつ、とルネが声を漏らすと顔が赤くなっていく。

「噛んだな」

「きゃー、かわいいー」

「ま、これもこれで」

「さあ、乾杯行くわよー！」

八畳間に気持ちのいいガラスのぶつかる音が響いた。

今日の夕飯はいつもと一味違う。

——
なんと言っても

「……肉うううううううう……」

乾杯という食事開始の合図により、彩人と幸祐と若葉は丸机のフライドチンを狙う獰猛な獣と化していた。

「わわっ！」

ルネはその迫力に仰け反る。

「はい、ストップ！ ストップ！」

藍がその争いを止めに入った時にはもう二本が皿の上から消失していた。

「ちよつと……あんた達はもう……ほんと。少しは遠慮つてものを知りなさい……今日はルネのための歓迎会なんだから」

呆れかえった調子で三人の様子を眺める。

「だって……肉……なんて……めつたに……食卓に……並ば……ない、からさ……それに、まだまだ……あるし」

モグモグと口を動かす若葉。

「そうそう」

「ん。うめえ」

彩人と幸祐も同様。

「あんた達、食べながらしゃべるの止めなさい！ ルネ、あなたも食べなさい。そうじゃないと……この獣たちが全て食い尽くしてしまっわ……」

「う、うん……」

丸机の上の中央には足つきのフライドチンが十本あった。だが次々と獣たちの胃の中へ運ばれて減っていく。今はもう半分しか残っていない。

「言っておくけど一人二本までだから。三本目はないわよ」

「……はい……」

高校生三人が子供のように返事をする。

「で、ちよつとさつきから気になるんだけど……」

若葉が一本目を全て居の中に納めた際に言った。

「なんで、でかでかと豆腐が大皿に乗ってるの？」

「ああ、俺も気になってた」

「浮いている感があるが……」

異国の料理に囲まれた中で一際浮いている白い直方体が。

大きさは一般のスーパーマーケットで売られているものを八丁分、いやそれ以上のものを積み上げたようなぐらいであった。まさに超重量級。特別版。

「これは子のリクエスト。わざわざ豆腐屋まで行つて頼んでみたら、その店主も『そんな豆腐好きがいるならやってやらー！』って言うて作ってくれたわ」

「ルネが？」

「そう。この子の好物は豆腐よ」

「豆腐はおいしい」

「えー知らなかったー」

「意外だな……でもルネの好みでさっぱりした味っていうのには当てはまるな」

ルネが巨大豆腐の乗った皿を自分の前へと引き寄せる。スプーンを使ってデザートでも食べるかのように滑らかに掬い口の中へ運ぶ。
「おいしい？」

こくこく、と二回もルネは頷いた。『ほっぺたが落ちそう！』と心の中で叫んでいると思えるほどに実に幸せそうな顔をしている。
「先週、鍋やつたじゃない？ あれ鍋をルネのために残しておいたの憶えてる？」

「ああそうだったような……」

「あつたけ？」

「あつたよ」

ルネが新代荘にやってくる前、元々その日は鍋にするはずだったが材料はあるのに火が使えなく、さらにガスボンベも使えないと

なったことで彩人は買いに行かされることとなった。

もしもその時に彩人が買いに行かされていなかったとしたら、もしかすると今この場には新代荘の新しい家族が増えていなかったかもしれない。

「でね？ ルネが起きた後に食べさせたのよ。その時ルネはまあ……ちよっと様子が暗かったのだけれど、豆腐を食べたときだけ違ったのよ」

藍がこのように話している間にもルネは豆腐にがつつき続けている。

「まさにこんな感じだったわ。とてもおいしそうに食べていたのよ。それで私もピン！ と来たわ」

そして予想は的中してルネは現在、大満足している。

「そういえばルネはおいしそうに味噌汁食べてたな。そういうことだったのか」

「ということは……ルネちゃんの好物！」

やがて皿の上はすっきりとして、代わりに彼らのお腹も心もいっぱいになり、これで幕引きとなる。

『ルネ歓迎会』は成功に終わった。

食べ終えた彩人が立ち上がるとルネのほうを向いて言った。

「ルネ。この後で雪だるま作ろうぜ」

「雪だるま？」

ルネが小首を傾げる。

「あ、私も行くー」

若葉も手を上げて参加を志望。

「俺も付き合ってやるか。誰が一番大きいのを作れるか勝負でもするか？」

幸祐も後に続く。

「ルネはともかく。あんた達は明日、学校の試験でしょ？ 歓迎会も終わったんだから。素直に自分の部屋に帰りなさい！ ……ってあんた達、聞いているの？ ちよっとー！」

藍の言葉も届かず、子供組の四人は一緒に藍の部屋からぞろぞろと出て行く。

「ああもう！ 私も行くわよ！」

「えー、母さん来るの？」

「まあいいんじゃない？ 五人で競争で」

「なにかわからないけど、ルネも頑張る！」

「おお、ルネ気合入ってんなー。俺も負けないぞ！」

新代荘。ここは彼らのための居場所。小さな世界。
そして扉を開ければそこには――

銀色の世界が広がっている。

終章（3） 銀色の少女の歓迎会（後書き）

これで『silver編』は完結となります。次はこの話の四章で描写されなかったもう一つの話となります。ここまで読んでくださった方にはとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8448y/>

Pravitas World——《異常世界》——

2011年12月19日18時53分発行